研究紀要22

－創立25周年記念論文集－

2004

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要 22

－創立25周年記念論文集－

2004

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

当事業団は、昭和53年に群馬県内の埋蔵文化財の調査・研究を目的として設立され、この度25周年の節目を迎えることができました。当事業団発足当初から平成14年度までに手がけた埋蔵文化財の発掘調査件数は767件にも達し、その成果であります記録類や出土遺物についても、膨大な数量にのぼっております。

これらの貴重な資料は318冊の発掘調査報告書として公けにされ、できる限り多くの方々に活用していただけるよう努力してまいりました。その中には、古墳時代の豪族居館として注目を集めた三ツ寺遺跡や、当時の生活そのものを明らかにする火山灰下の遺跡などの調査成果が含まれており、日本の歴史を解明するうえで大きく寄与したものと自負しております。

こうした中で、先年、日本考古学界の信頼を大きく揺るがせることになった「旧石器捏造事件」が発覚し、自省はもとより各方面から多くの批判と弾劾をうけたことで、直接の当事者だけでなく、私たち埋蔵文化財の調査研究に携わる全ての者が、真摯なる反省と二度と同じ過ちをおこさないための新たな決意が強く求められています。埋蔵文化財保護行政の一翼を担う立場の当事業団においても、このことを厳粛に受け止め、より一層の厳格で綿密な発掘調査を目指してたゆまぬ努力を続けていく所存であります。

発掘調査の成果は、国民共有の物的及び知的財産として、できる限り多くの方々に還元することも当事業団の大切な仕事であることは言うまでもありません。発掘調査によって判明した遺跡や出土遺物を正当に評価し、歴史を物語る貴重な証言者としての位置づけを与えることで、はじめてその価値が発現すると考えています。創立25周年を記念してここに刊行します記念論文集は、当事業団に関わる職員がこれまで従事してきた発掘調査や整理作業によって得られた知見をもとに、日頃の地道な研究活動の成果を広く世に問うものであります。この地に埋もれた真実の歴史を解明し、またこれからの埋蔵文化財の在り方を問うための一助となれば、幸いこれに過ぎるものはありません。

当事業団は四半世紀の節目をひとつの道標として、今後もより充実した埋蔵文化財保護を目指して、調査・研究に精励する所存であります。その糧とするためにも、この記念論文集に対して、皆様方のご批判・ご指導をいただきたくお願い致しますとともに、これまでにもましてご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年３月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小　野　宇三郎

目　　次

序
群馬県における研究の動向……1
旧石器時代（麻生敏隆）　縄文時代（藤巻幸男）　弥生時代（大木紳一郎）
古墳時代（右島和夫）　古　代（飯田陽一）　中・近世（飯森康広・黒澤照弘）
Review of Archaeological Research in Gunma Prefecture
1. Palaeolithic (ASOU, Toshitaka), 2. Jomon (FUJIMAKI, Yukio), 3. Yayoi (OOKI, Shinichiro), 4. Kofun (MIGISHIMA, Kazuo), 5. Ancient (IIDA, Yoichi), 6. Medieval & Modern (IIMORI, Yasuhiro & KUROSAWA, Teruhiro)

論　文 (Article)

津島秀章・井上昌美　信濃川中流域の黒色安山岩原産地試料
－新潟・長野県境周辺に産する石器石材の流通について－……21
TSUSHIMA, Hideaki・INOUE, Masami:
Black Andesite Provenance from the Middle Basin of the Shinano River
関口博幸　砂川期石器群における石器製作構造
－東長岡戸井口遺跡出土石器群の分析から－……35
SEKIGUCHI, Hiroyuki: Analysis of Stone Implements from Higashinagaokatoiguchi Site
石坂　茂　関東・中部地方の環状列石
－中期から後期への変容と地域的様相を探る－……51
ISIZAKA, Shigeru: Stone Circle of Kanto & Chubu Region in JAPAN
谷藤保彦　群馬県出土の神ノ木式土器……95
TANIFUJI, Yasuhiko: Kaminoki-Type Jomon Pottery from Gunma Prefecture
関根慎二　諸磯b式土器に付けられたイノシシ顔
－装飾の意味を考える－……109
SEKINE, Shinji: Wild Boar Face Ornament of Moroiso b-Type Jomon Pottery
松島榮治・福田貫之・山口逸弘　嬬恋村今井東平井遺跡の紹介
－1区縄文時代中期土器資料を主に－……125
MATSUSHIMA, Eiji・FUKUDA, Kanshi・YAMAGUCHI, Toshihiro:
Jomon Pottery from Imaihigashihirai Site at Tsumagoi, Gunma Prefecture
大木紳一郎　群馬北辺の弥生社会
－後期弥生集落の分析から－……149
OOKI, Shinichiro: Yayoi Community of Northern Part of Gunma Prefecture
小林　正　群馬県における弥生時代後期から古墳時代前期の木製品……185
KOBAYASHI, Masashi: Wooden Ware of Early Yayoi to Early Kofun from Gunma Prefecture
石田　真　群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって
－長野原町の事例を中心として－……203
ISHIDA, Makoto: On the Construction Time of Pitfall from Northwestern Part of Gunma Prefecture
中束耕志　古代群馬の粘土採掘坑
－波志江中宿遺跡をめぐって－……219
NAKAMARU, Koji: Clay Digging Hole of Ancient Gunma
友廣哲也　集落からみた古墳時代の社会背景……237
TOMOHIRO, Tetsuya: Social Background of Kofun Period Viewed from Settlement
飯島義雄　所謂「三和工業団地Ⅰ遺跡型」の「周溝をもつ建物」の構造……251
IIJIMA, Yoshio: Structure of Ditch Surrounding Settlement of So-Called Sanwa Industrial Area I Site Type
齊藤幸男　竪穴式小石槨の基礎的考察……269

SAITO, Yukio : Fundamental Consideration of Vertical Small Stone Chamber
坂井　隆　　馬生贄祭祀遺構と「捏造」問題 ……291
SAKAI, Takashi : Ceremonial Monuments of Horse Sacrifice and The 'Fake' Problem
神谷佳明　　古代上野における富豪層について ……313
KAMIYA, Yoshiaki : On the Wealthy Man of Ancient Kozuke (Gunma Prefecture)
高井佳弘　　上野国における一本造り軒丸瓦の導入と展開 ……333
TAKAI, Yoshihiro : Introduction and Development of Round Eave Tile in Kozuke (Gunma Prefecture)
高島英之　　群馬県多野郡吉井町大字神保字北高原出土の刻書紡錘車について ……353
TAKASHIMA, Hideyuki : On the Incribed Spindle Excavated from Kita-Takahara, Jinbo, Yoshii, Tano, Gunma Prefecture
斉藤和之　　「国生み神話」について
　　－「大八州」の島名比定を中心に－ ……363
SAITOU, Kazuyuki : On the Mythology of Kingdom Creation
石守　晃　　鎌倉時代那波郡のとある屋敷
　　－中内村前遺跡３区屋敷遺構を中心に－ ……379
ISHIMORI, Akira : Premises Remains in Nakauchimuramae Site of the Kamakura Period
森田真一　　尻高左京亮についての覚書
　　－関東管領上杉顕定と越後国上田荘との関わりをめぐって－ ……395
MORITA, Shinichi : A Memorandum of Mr. Sakyounosuke SHITTAKA
小野和之　　江戸時代天明三年の浅間山泥流に埋没した建物の調査から
　　－群馬県佐波郡玉村町上福島中町遺跡で発見された建物について－ ……401
ONO, Kazuyuki : Excavation of House Remains at Kamifukushima Site Buried by a Volcanic Mud Flow of Mt. Asama Eruption in 1783
黒澤照弘　　群馬県内出土の三田青磁 ……411
KUROSAWA, Teruhiro : Sanda Type Celadon from Gunma Prefecture
斎藤英敏　　犂と備中鍬
　　－耕起具評価の再構築をめざして－ ……419
SAITOU, Hidetoshi : Plow and Hoe
菊池　実　　陸軍前橋飛行場物語
　　－日米両軍の発掘史料から－ ……429
KIKUCHI, Minoru : A Story of Maebashi Army Airfield
原　雅信・桜岡正信　　磨製石斧の教育活用への試み
　　－発掘情報館における展示と体験学習の実践を通じて－ ……451
HARA, Masanobu・SAKURAOKA, Masanobu :
　　Hands-on Study by Polished Stoneware
井上昌美・坂口　一　　古墳時代馬の体高推定
　　－群馬県子持村・白井遺跡群出土のウマの蹄跡からの分析－ ……467
INOUE, Masami・SAKAGUCHI, Hajime :
　　Estimaiting the Withers Height of the Ancient Japanese Horse from Hoof Print
神保侑史　　上野国一之宮貫前神社式年遷宮考（二）
　　－造替の建物について－ ……492
JINBO, Yushi : A Study of Shikinen Sengu (Razer and Rebuilding of Shrine Building) of Kozuke (Gunma Prefecture) Ichinomiya Nukisaki Shinto Shrine

付　論

下城　正さんの逝去を悼んで ……493
OBITUARY : The late Mr. Masashi SHIMOJO
執筆者一覧 ……494

群馬県における研究の動向

1　旧石器時代

麻生敏隆

はじめに

当事業団創立十周年記念論集『群馬の考古学』では、1988年度までの動向を取り上げていた。そこで今回は、1988年以後の動向について記述することとする。

(1) 捏造事件関係

2000年11月の全国紙のスクープという形で明らかになった「旧石器捏造」事件がまず筆頭にあげられる。これは東北地方を中心に北は北海道から南は東京までの東日本一帯で、本物の石器を埋め込んで旧石器時代の遺跡を捏造したもので、その数は50ヶ所以上と言われており、その当事者が前期旧石器の年代を次々に遡らせてきた、「ゴッドハンド（神の手）」とも呼ばれる在野の研究者であったために、センセーショナルな話題として取り上げられた。彼は群馬県内でも1988年の勢多郡新里村の入ノ沢遺跡、1997年の北群馬郡子持村の加生西遺跡と吾妻郡高山村の中山峠遺跡、そしてまさに発覚した時点で発掘調査が進められていた沼田市の下川田入沢遺跡の４ヶ所の発見と、1996年の大間々町の桐原遺跡の発掘調査の協力を行っており、計５ヶ所に関係していたのである。こうした遺跡の大半は、次々に塗り替えられる年代や遺構の規模と内容が報道され続ける中で、充分な検討がなされたとは言えない状態であった。それらの大半が捏造と発覚した後、各遺跡の調査責任者らにより正式な報告がなされたが、そこに至るまでに検証作業が幾度となされた。だが、旧石器研究に対する不信感や、考古学界全体が受けたダメージの建て直しにはやや時間がかかると考えられている。特に、前期から中期にかけての旧石器については半世紀前に戻ったとも言われており、以前から古いと考えられていた武蔵野台地の東京都中山谷遺跡や西之台遺跡・武蔵台遺跡、長野県の石子原遺跡、長崎県の福井洞穴遺跡15層などの石器群が再び俎上に上がってきた。さらに最近では岩手県の金取遺跡、長野県の佐竹中原遺跡、長崎県の入口遺跡、熊本県の沈目遺跡や下横田遺跡、宮崎県の後牟田遺跡などが注目されてきている。県内でも伊勢崎市の権現山遺跡や不二山などの再検討をも促す結果となっている。だが、いずれも不明確な出土状態や石器群の貧弱さなどがネックでもある。特に、権現山は既に宅地開発により消滅していることから検討が難しく、不二山遺跡も近年の新里村教育委員会の発掘調査により、不二山本体が大規模な土砂災害により隆起した地膨れであることが判明していることから、実際には当初の想定ほど古くない可能性もある。

(2) 岩宿50周年

本来ならば筆頭にあげるべき事例として、相沢忠洋による岩宿遺跡発見50周年にあたる1999年に開催された様々な行事があげられる。まず、日本考古学協会の秋の地方大会が群馬県内での開催となり、初日の総会と記念講演の会場に岩宿遺跡が所在する笠懸町の文化ホールが、２日目の研究発表に前橋市の群馬大学があてられた。その岩宿遺跡に隣接した鹿の川沼の畔に日本の岩宿（旧石器）時代の情報発信の場として、1992年に町立の笠懸野岩宿文化資料館が開館し、初代館長に戸沢充則明治大学教授が、二代目館長には松沢亜生が就任した。子供からお年寄りまでが楽しく学べる開かれた施設を目指して、考古学をはじめとした関連分野の研究者らによる公開講座「岩宿大学」など様々な企画が展開されている。研究者への奨励を含めた岩宿文化賞の制定、岩宿フォーラムと題したシンポジウムが、環状ブロック群や石材、石器群変遷などのテーマで議論されている。さらに、岩宿遺跡や石器の説明と、石器群の変遷、下触牛伏遺跡に代表される「ムラ」の解明と、武井遺跡に代表される遺跡群の形成などを盛り込んだ1992年の常設展示解説書や、県内の石器群の変遷を概説した1993年の「群馬の岩宿時代」、岩宿遺跡発見50周年に関連する『岩宿時代を遡る一前・中期旧石器時代の探求―』、『日本史を書き換えた岩宿の発見』、それに『岩宿遺跡発掘50年の足跡』の３つの記念企画展示や、岩宿フォーラムでの『岩宿発掘50年の成果と今後の展望』、2001年の国民文化祭での記念シンポジウムなどが盛大に行われた。県外ながら、発掘調査を行った明治大学でも考古学博物館において『岩宿発掘五十年　旧石器時代研究の原点と足跡』が開催された。

(3) 発掘調査

依然として大規模開発が目白押しであり、それに関連して数多くの遺跡から旧石器時代に関しても様々な注目すべき成果があがっている。

まず、高崎から軽井沢に向けて様名山南西麓を横切る北陸新幹線の建設に伴い、群馬郡箕郷町和田山天神前遺跡や同町白川笠松遺跡、群馬郡榛名町白岩民部遺跡、同町三ッ子沢中遺跡でＡＴ下位の「環状ブロック群」が相次いで発掘調査された。北関東自動車道での伊勢崎市波志江西宿遺跡・伊勢山遺跡や同市波志江中宿遺跡、同市

岡星敷遺跡、同市舞台遺跡、同市書上遺跡、伊勢崎インターに隣接する三和工業団地Ⅰ遺跡からは、前記したAT下位の「環状ブロック群」を中心に、槍先形尖頭器、細石器を中心とするいくつもの時期の石器群が出土している。前橋市と赤堀町の境に位置する多田山丘陵の南側半分が北関東自動車道の土盛り部分の用土として掘削される関係で、今井見切塚遺跡と今井三騎堂遺跡の２遺跡が調査され、AT下位から旧石器時代終末期にかけての３～４時期の石器群が出土している。上武国道では、前橋市今井大日堂遺跡や萱野遺跡・上泉遺跡・亀泉坂上遺跡・荻窪南田遺跡などから、AT下位の石器群や槍先形尖頭器などの２～３時期の石器群が出土している。赤城山南麓の勢多郡富士見村の小原目遺跡や小暮東新山遺跡、宮城村の市之関前田遺跡や柏倉芳見沢遺跡、新里村の新宮Ⅰ遺跡や広間地西遺跡・十二社遺跡・山上城跡Ⅸ遺跡、梨ノ木Ⅰ遺跡・梨ノ木Ⅰ遺跡、大胡町の堀越甲真木Ｂ地点遺跡や日光道東遺跡、前橋市の内堀遺跡や熊の穴遺跡・鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡、北橋村の北町遺跡や箱田遺跡群上原遺跡でも、AT下位の石器群や槍先形尖頭器、細石器などのいくつかの石器群が出土している。さらに、鯉沢バイパス建設に関連して北群馬郡子持村の白井遺跡群の白井北中道遺跡では、縄文時代草創期の隆起線文土器と有舌尖頭器や片刃打製石斧などの石器群が出土している。東毛地域では、八王子丘陵の周辺の北関東自動車道の太田市八ヶ入遺跡や東長岡戸井口遺跡で槍先形尖頭器や細石器のいくつもの石器群が出土している。西毛地域では、藤岡丘陵での藤岡市北山Ｂ遺跡や、上信越自動車道建設に伴う甘楽郡甘楽町の白倉下原や天引向原遺跡・天引狐崎遺跡・多比良迫部野遺跡、吉井町の多湖蛇黒遺跡や折茂Ⅱ遺跡などでAT下位の「環状ブロック群」が相次いで発掘調査された。

(4) 編　年

数多くの発掘調査事例の増加を受けて、県内の変遷を組み立てる作業も行われつつある。まず、1989年に麻生敏隆と大工原豊は、北関東における尖頭器文化について論じ、県内の変遷を提示した。その後、1993年の岩宿フォーラムでは群馬編年をⅠ期からⅣ期までとし、AT下位をⅠ期（麻生・大工原）、Ⅱ期（小菅将夫）、槍先形尖頭器をⅢ期（中島誠・経部遣也）、細石器をⅣ期（桜井美枝）とした。小菅はさらに、Ⅰ期を分けてⅠ期とⅡ期、そして、Ⅱ期をⅢ期、Ⅲ期をⅣ期、Ⅳ期をⅤ期と再編成している。それぞれの詳細については石器組成などが関係するものの、いずれにしても編年の骨組みは固まりつつあり、全国との比較も比較的容易になりつつある。関矢晃もテフラを利用して段階設定している。

(5) 遺　構

群馬ではAT降灰以前の遺跡が多いことが特徴である。これは局部磨製石斧とナイフ形石器を石器組成とする岩宿遺跡のお膝元である群馬県ならではの事象でもあり、約20～50mの規模で中央部に空白地帯を持ちリング状に石器が分布する特異な遺物出土状況を示す「環状ブロック群」が検出されるのも特徴である。1993年の第１回岩宿フォーラムでは、全国規模での遺跡集成がなされその時点で実に県内の10遺跡11地点を含めた40ヶ所の遺跡がリストアップされ、その形成要因についても様々な説が提示された。岩崎泰一は自らが調査及び整理担当した下触牛伏遺跡の事例を中心に、遺跡構造について論じている。井上慎也も発掘調査事例が増加した鏑川流域でのAT降灰以前の石器群の遺跡の分析をしている。津島秀章もまた、自らが調査及び整理担当した三和工業団地Ⅰ遺跡での器種組成や石器分布、接合関係などの分析を通じて「環状ブロック群」の構造解析を行い、遺跡内での様相を論じている。また、黒曜石と黒色安山岩の産地同定の成果を利用して、遺跡内での分布域間での関係を推測している。小菅はその後も増え続ける資料の集成を行っており、2000年で63遺跡、2003年で70を超える遺跡数となっており、県内では20遺跡21地点である。また、槍先形尖頭器の遺跡で全国規模の規模を誇る武井遺跡は2002年に史跡公園として整備されたが、遺跡の形成に関しても様々な議論があり、数十万点にも及ぶ膨大な遺物を分析の成果の一部の発表が、1998年の第６回と2000年の第８回の岩宿フォーラムを通じて行われており、今後も継続される予定である。注目すべき遺構としては、槍先形尖頭器の時期である小暮東新山遺跡の竪穴住居が注目されているが、一方で住居跡かどうか疑問視する意見もある。

(6) 遺　物

槍先形尖頭器については、関口博幸らが技術形態学による変遷を論じている。細石刃の遺跡では、円柱系の市之関前田遺跡や柏倉芳見沢遺跡、北方系の上原遺跡や鳥取福蔵寺Ⅱ遺跡、大雄院前遺跡、八ヶ入遺跡など、関係する資料がここ数年で増加しており、北方系統の削片系の細石器を中心に研究している桜井が、細石刃文化の様相について論考している。萩谷千明もまた詳細な分析を通じて、石器群の様相とその編年の問題を論じている。石材の流通については、前記した岩宿フォーラムで２回にわたり、県内で主に多用される黒曜石・硬質頁岩・黒色頁岩・黒色安山岩の４種類の石材を中心に議論された。特に、利根川上流域などに原産地を求めることが出来る黒色安山岩や黒色頁岩などの在地系統の石材と、県内で産出しないことから遠距離の産出地から搬入される黒曜石や硬質頁岩などの石材選択とその流通を通じて、交易

を含めた集団活動の様相を解明しようとする方向性で研究が進められている。また、桜井や津島、井上昌美らにより、石材原産地そのものの詳細な様子を解明するために、鏑川流域などでの黒色安山岩と、利根川上流域での黒色頁岩の分布状況などの地道な分析を続けられている。遺物の自然科学分析では、黒曜石や黒色安山岩について従来のフィッショントラック法や水和層年代測定とは別に、非破壊による蛍光X線分析がここ数年増加している。この方法では遺物の破壊を免れることから、これまで分析事例が少なかった群馬県内でも黒曜石の分析事例が徐々に増えてきており、今後の石材流通の研究の上で主体を占めると考えられる。

参考文献は、スペースの関係で文章中で述べた主要なものだけに留め、発掘調査報告書類は除く。

註

麻生敏隆　1991「群馬県における細石器文化の様相」『中ヶ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ

麻生敏隆　1992「後田遺跡の再検討―石材と遺物分布からみた人間と物の移動―」『人間・遺跡・遺物―わが考古学論集2―』発掘者談話会

麻生敏隆・大工原豊　1989「北関東における尖頭器文化の様相」『長野県考古学会誌』59・60　長野県考古学会

井上慎也　1996「後期旧石器時代前半期における石器製作技術の様相―群馬県鏑川流域の石器群を中心として―」『法政考古学』21　法政考古学会

井上慎也　1996「後期旧石器時代の石材分布と石器群の検討―群馬県における石材研究―」『法政史学』47　法政大学史学会

岩崎泰一　1992「後期旧石器時代に於ける集落・集団研究の現状認識」『研究紀要』9　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩宿フォーラム実行委員会編　第1回～第11回　1993～2003　笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会

小菅将夫　2000「環状ブロック群の構造」『考古学ジャーナル』465　ニュー・サイエンス社

小菅将夫　2002「周辺地域の様相―群馬県―」『茨城県における旧石器時代研究の到達点―その現状と課題―』ひたちなか市教育委員会・茨城県考古学協会

小菅将夫　2003「環状ブロック群研究の現状と課題」『旧石器人たちの活動をさぐる―日本と韓国の旧石器研究から―』講演会・シンポジウム予稿集　大阪市学芸員共同研究「朝鮮半島総合学術調査団」旧石器シンポジウム実行委員会

小菅将夫　2003「北関東地方との対比」『第15回長野県旧石器文化研究交流会　シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」―発表要旨―』長野県旧石器文化研究交流会

桜井美枝　1991「北方系細石刃文化の南下」『考古学ジャーナル』341　ニュー・サイエンス社

桜井美枝　1993「北関東の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開』佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ

関矢　晃　1997「火山灰層と旧石器出土層位―関東地方を中心として―」『大平台史叢』　史叢会

大工原豊　1990・1991「AT下位の石器群の遺跡構造分析に関する一試論(1)・(2)」『旧石器考古学』41・42　旧石器文化談話会

津島秀章　1999「遺跡構造に関する一考察―後期旧石器時代・環状ブロック群の中央域について」『研究紀要』16　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

津島秀章　2000「石器石材と遺跡構造―石器石材から見る環状ブロック群の構造―」『研究紀要』17　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

蒜谷千明　2003「北関東の細石刃文化」『シンポジウム　日本の細石刃文化Ⅰ―日本列島における細石刃文化―』八ヶ岳旧石器研究グループ

2　縄文時代

藤巻幸男

1．集　落

集落論の停滞が指摘されて久しいが、全国各地で縄文時代集落遺跡の調査事例は急増しており、2001年12月に縄文時代文化研究会の第1回研究集会でも「縄文時代集落研究の現段階」が開催された[1]。集落を主題とする全国規模の検討会としては久々の開催である。まず、各地の最新資料を含めた現状報告が行われ、次いで3つのテーマに沿った基調報告と総合討論が行われた。

テーマ1　環状集落論をめぐって
　　―環状集落論と横切りの集落論―
テーマ2　非環状集落をめぐって
テーマ3　定住論、移動論をめぐって

「環状集落論」は、集落を構成する遺構が当初から決められた空間規制に従って構築されたとするもので、その共通意識こそが集落分析のカギだと考える。これに対して「横切りの集落論」は、長期利用の結果として環状になったのであり、ワンモーメントの集落は小規模集落と変わらないとする立場をとる。討論の結果は今回も平行線で終わったが、集落の構造と形成過程を可能な限り詳細に検討する立場では一致できるであろう。

近年、谷口康宏氏は環状集落を分析した一連の論考のなかで、環状集落に認められる二つの重要な構造として「重帯構造」と「分節構造」の存在を指摘し、「重帯構造は広場を中心として各種の建物や施設を同心円上の所定の圏内に配置するもの」で、「環状集落の長期的な計画性をよく表すもの」とし、「分節構造は、環状集落の内部を区分する構造」で、「住居群や墓群を大きく二分する二大群の構造が最もはっきりしている」ことを実例をあげて示し、「環状集落の分節構造の意味や性格を端的に表しているのは、墓群の分節である。死者が埋葬される場所に厳格な区分がある。しかもそれが非常に長い間踏襲されている事実は、『分節』が血筋・系譜の区別に基づくものであることを、強く示唆している。」「世代を超えて明確に系統を受け継ぎ、祖先を祭祀する血縁集団として最も考えられるのは、一般的に氏族・系族などの名で呼ばれる単系出自集団である。」としたうえで、「環状集落の背景に単系出自集団が組織化された要因は、経済的利権を確保する必要性が第一であろう。つまり定住が出現し、人口密度が高まる状況下で、領域や資源に対する利権の問題が発生し、それを安全に継承し、あるいは集団関係を円滑に調整するための社会構造が、現実的に必要になってきたことが最も重要ではないか」と指摘している[2]。

山本輝久氏は、それが最終的な姿であったにせよ、東日本の前期以降の大規模集落の多くは環状構造を基本としており、なぜ環状集落が形成されるに至ったかを解明することこそ必要であるとし、谷口の論考を引用したうえで、それは単に縄文時代集落観にとどまらず、縄文時代社会をどう捉えるかの根幹に係わる問題に直結していると指摘する。

テーマ2の非環状集落については、遺構が列状に分布する集落形態を中心に討議され、地形的制約によるものではないことが確認された。この集落形態は、東北地方の円筒土器分布圏の事例がよく知られているが、群馬県も含めて全国的に認められることが確認された。

テーマ3は、大規模集落が通年で定住していると考えるか、回帰性をもった移動が行われていたとの前提に立つかについてである。末木健氏は以前「移動としての吹上パターン」のなかで、廃絶された住居床面上に認められる自然堆積の無遺物層と、その上から出土する多量の土器の存在から、無遺物層堆積の期間は他所に移動していたと考えた。これに対し、山本輝久氏は無遺物層を人為的な埋土と見る。また、櫛原功一氏は、竪穴住居は冬仕様の土葺きなので、第一次埋役は廃絶と同時に形成される。中期初頭までは移動的であるが、前半には住居がしっかりしてくるので定住性が高まり、中期末には敷石住居が出現して通年定住となるとの見解を示した。相原淳一氏は交易活動が盛んであることから、定住が前提と考える立場を表明した。

なお、総合討論では時間的制約から扱われなかったが、「環状貝塚・環状盛土遺構」について江原英氏は、阿部芳郎氏の研究に注目しながら、大量の遺物を用いた人々の居住場所は「高まり部分」であるとの推定が最も整合性があると指摘し、環状盛土遺構を後期後半以降の大規模集落の一形態と考えて今後も検討を加えていく考えを表明している。

一方、県内では大工原豊氏の一連の取り組みがある[3]。その実践例である中野谷松原遺跡では、前期後半の大規模集落の構造と変遷を跡づけ、墓域に対する遺物の集積が単なる不要物の捨て場ではなく、生活用具に対する「物送り」的な意味合いで機能していた可能性や、高年齢層への副葬品埋納の想定、中央広場を囲うマーカーポール（大形木柱）の想定、石器石材入手からみた活動領域（テリトリー）の分析、黒曜石をめぐる交易関係など、示唆に富む内容となっている。

大規模集落の調査は様々な点で多くの困難を伴うが、一方では情報の宝庫でもある。そのなかで、可能な限りの詳細なデータを客観的に積み上げ、前期後半の大規模集落の構造と性格を追求した仕事は、十分に評価されなければならない。当遺跡の報告書を紐解くと、遺跡の隅々にまで調査担当の目が配られており、選択された調査メニューを貫徹するための様々な工夫が施されていること

に気付く。膨大な情報が重畳する大規模集落では、厳選された調査項目の徹底と調査担当の適切な判断が必要であり、中野谷松原遺跡で得られた成果と視点は今後の発掘調査に生かされ、検証されなければならない。

また、最近になって石坂茂氏が中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現について論考を提出している[41]。これは、縄文時代の大きな転換期にほぼ軌を一にして起こる現象に着目し、県内資料の分析からその社会的背景に迫ろうとするものである。分析のなかで石坂は、いずれも居住を前提とする拠点集落であることを確認した上で、中期の環状集落と環状列石集落が共存する事例がないこと、中期終末の環状列石集落は短期で終焉し、後期には弧状列石を伴う核家屋を中心とする集落が出現することを指摘し、その変遷から各時期の統合原理や価値観の変化を読みとろうとする。また、環状・弧状列石の構造分析から、中期末葉の環状列石には内部に配石や立石を伴うが墓は認められず、列石配置内部に施設や遺物が認められないことから、その性格を祭祀施設と想定し、後期後半の弧状列石の出現をもって墓を伴うようになることを指摘した。

2．墓制研究

内陸に位置する群馬県では、焼骨や特殊環境以外では骨が残らないこともあって、墓制に取り組んだ事例は少ないが、縄文時代の集落や社会を考えるうえで重要な要素でもあり、県内の事例を中心に振り返っておきたい。

下城正氏は、月夜野町深沢遺跡の集落構造と配石墓の変遷について、類似点の多い榛東村下新井遺跡との比較を通して分析し、配石墓群を中核に土坑群・方形柱穴列・敷石遺構などの墓や祭祀の場が位置し、それを溝あるいは窪地で区画された外側に居住空間が形成される集落構造を想定した[42]。

その後、深沢遺跡に隣接して矢瀬遺跡が発見され、墓域と集落との関係がより具体的に検討できるようになった。矢瀬遺跡の正式報告が待たれる。

大工原氏と林氏は、安中市天神原遺跡の調査結果から、後期後半期の配石墓群の形成から晩期前半期の環状列石の構築に至るまでの詳細な経過を跡付け、特定層の集団墓である配石墓群が放棄されずに再整備され、祭祀の場へと昇華・継承されることから、居住集団の継続性と社会的体制・原理の継承を暗示しているとした。また、天神原遺跡の構造と変遷に照らして深沢・押手・下新井各遺跡を分析し、大筋では共通していることから、群馬県地域の集団が保持した精神文化の社会的連続性を指摘し、さらに関東西部から甲信越地域に見られる配石墓と東北地方北部の配石墓との関連を指摘した[43]。

町田市田端遺跡の調査でも指摘されてはいたが、配石墓とその上部に形成された環状列石（配石）に不連続があり、時期と性格が異なることを明確にしたことは重要であり、その後の配石墓研究に与えた影響は大きい。

石坂は、中期終末の環状・弧状列石が短期で終焉した後、後期堀之内１式段階から新たに認められる弧状列石のなかには、列石に付随して配石のほかに、集団墓的な土坑墓や配石墓伴うものがあることを指摘する[9]。

前期や中期の墓は上部配石を伴わないものも多いことから、墓としての認定に苦慮するが、その形態的特徴や群在する傾向などを勘案・吟味した上で、積極的に認定に取り組むべきだろう。「墓は墓として断定することにより次ぎの研究段階へ進むべき」とする斉藤忠氏の言葉に従いたい。後期配石墓では、墓を中心とする下部構造と様々な配石・施設等で構成される上部構造は必ずしも対応する関係ではなく、注意を要する。また、配石墓の内部や周囲から獣骨を中心とする焼骨が出土する例も数多く知られており、葬送儀礼との関係が考えられている。配石墓の分類、分布と系統、葬法の実態、集落との関係などについて、今後も積極的な取り組みが必要である。

3．土器型式

発掘調査の増大は、集落を構成する各種遺構の多様性のみならず、土器資料においても格段の増加をもたらしている。各地の土器型式も一旦は安定したように見えたが、資料の増大、特にこれまで考古学資料が少なかった地域での新資料の追加により、これまでの型式概念では説明しきれない多様な姿が判明しつつある。これは、ある意味では縄文土器のもつ本来の姿が、より実態に近づいてきたことを示しており、その意味では歓迎すべきであろう。

以上のような状況のなかで、最近の土器型式研究は、土器の系統と型式あるいは土器群相互の関係に主眼を置いた検討が中心であり、広域的視点での土器群の構図的すり合わせが各地で盛んに行われている。本県でも、縄文セミナーの会が主催する年１回の検討会が続けられており、これに触発されて設定された新型式もある。

谷井彪氏は従来の型式定義と実態とのずれが生じていることを指摘し、「これらの混乱の状況に広域的視点による土器分析が加わって従来の内在的発展段階に基づく編年に対する補正手段が加わることで、理論的整合性を求めるさらなる議論を進める前提が揃いつつある。現在は固定的構図から多層多角的構図へシフトする時期がきているように思われる」とし、土器分析の視点として、

1．縄文社会観、土器制作の基本理念
2．認識可能なものとしての相対的時間軸による編年
3．個人差、地域差、組み合わせの偶然性、統計処理の誤差を超えた差異の抽出
4．広域比較による連動と譜要素の整合性

の４項目をあげたうえで、「地域とは黒積した文化的営為

と情報の多層的重なり、すなわち、文化要素の多層的、相互に交差した複合体とみることができる。構成員も共同幻想の枠内に存在し、土器作りにあたってもこの枠に規定されている。』と指摘し、「土器の研究は地域そのものを関係の鎖の輪の中で浮かび上がらせることにあるだろう。」「地域に生まれ、地域で生きた縄文人の多様性と生き生きとしたダイナミズム、交通の鎖の輪の復元はこの課程を通してはじめて可能となるであろう」との見通しを示し、実践を試みている[8]。

一方、鈴木徳雄氏は縄文時代後期の土器に認められる、深鉢を中心とする「類型」による系譜的関係性の表現から、多様な「器種」に基づく役割的な行為相互の関係性の表現への変換に着目し、浅鉢形土器の扱われ方から縄文時代の文化的体系の一部である行為の変化を分析することで、土器から見た社会的関係とその変化の過程に接近しようとする、新たな試みをはじめている[9]。

また、山口逸弘氏は中期の土坑出土土器の選択性の分析から、異系統の土器が意図的に選択された可能性を主張し、縄文時代中期を「異系統土器群共存社会」と仮称したうえで、中期集落内に複数の型式群が存在するのは、個人と集団の関係を維持するための「緊張緩和策」であった可能性を指摘する[10]。

いずれも、土器の分析から縄文時代の社会の実像にまで迫ろうとする意欲的な取り組みであり、今後の進展を期待したい。

4．石器研究

縄文時代の実用石器の研究は、土器に比べて大きく後れているのが現状である。大規模集落の調査では膨大な数の石鏃・剥片類が出土するが、それを正面から取り組んだ報告例は少ない。しかし、集落遺跡の認定や比較をする場合、その遺跡の生業活動や集落生活、あるいは活動領域の問題や交易活動の実態を理解するうえで、利器としての石器の組成と量比の把握は避けて通れないのが現実であろう。

そのなかで、大工原氏が中野谷松原遺跡で実施した取り組みは出色と言える[11]。氏は同遺跡から出土した20,000点を超える石器を相手に、土器との共伴関係から帰属時期を抽出し、さらに型式学的方法論に基づいて石器群を体系的に分類したうえで、石器の組成(系列組成・器種組成・石材個数組成・石材重量組成）を算出して、石器群の変化の全体像を明らかにし、石材入手場所を推定して、居住集団の行動領域の推定と石材入手に係わる仕事量を算出している。まさに体系的な石器群研究を実践した好例であり、今後の発掘調査において十分に模範となるであろう。

また、氏はここでの成果をもとに、広域に流通・分布している黒曜石の焦点をあて、その交換・交易の問題についてダイナミズムな自説を展開している[12]。

ここでは石器の個別研究については触れないが、縄文時代遺跡の報告において、石器の器種組成・石材個数組成・石材重量組成、および剥片類の石材個数組成・石材重量組成を含めた、石器類の総量データの提示を提案したい。発掘調査報告書に掲載される遺物は調査担当が任意で選択しているのが現状であり、土器等も含めた遺跡の総量が把握できるデータは、遺跡の性格、活動領域、交易活動の実態などを検討するうえで、今後益々必要になると考える。

註

1）縄文時代文化研究会　2001 「第１回研究集会発表要旨　縄文時代集落研究の現段階」「第１回研究集会基礎資料集　列島における縄文時代集落の諸様相」
2）谷口康宏　1999 「環状集落から探る縄文社会の構造と進化」「最新縄文学の世界」朝日新聞社
3）大工原豊他　1998 「「中野谷松原遺跡」群馬県安中市教育委員会
4）石坂　茂　2002 「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現―各時期における拠点的集落形成を視点とした地域的分析―」「研究紀要20」財群馬県埋蔵文化財調査事業団
5）下城正他　1989 「縄文時代後期における配石墓の構造―深沢遺跡の形成過程を中心として―」「研究紀要」6　財群馬県埋蔵文化財調査事業団
6）大工原豊・林　克彦　1994 「配石墓について」「中野谷地区遺跡群」安中市教育委員会
　大工原豊・林　克彦　1995 「配石墓と環状列石―群馬県天神原遺跡を中心として―」「信濃」第47巻第４号
7）同４）
8）谷井　彪・細田　勝　1997 「水窪遺跡の研究―加曽利Ｅ式土器の編年と曽利式の関係から見た地域性―」「研究紀要」第13号　財埼玉県埋蔵文化財調査事業団
　谷井　彪　2001 「中部地方中期後半土器群と加曽利Ｅ式土器」「長野県考古学会誌」97　長野県考古学会
9）鈴木徳雄　2000 「縄紋後期浅鉢形土器の意義―器種と土器行為の変化―」「縄文時代」11　縄文時代文化研究会
10）山口逸弘　1999 「「土坑出土土器の選択性―中期土坑の２個体の共伴例から―」「縄文土器論集―縄文セミナー10周年記念論文集―」縄文セミナーの会
11）同３）
12）大工原豊　2002 「黒曜石の流通をめぐる社会」「縄文社会論（上）」同成社

3　弥生時代

大木紳一郎

はじめに

昭和40年代後半から始まる大型開発プロジェクトによって、埋蔵文化財の発掘調査がそれまでにない大がかりな調査体制でもって進められることとなった。発掘調査数は急激な増加を続け、また広大な面積を対象とした全面調査によって、考古資料はそれまでとは比較にならないほど膨大な蓄積をみた。また県内全域に広がる調査地域の拡大は、「文化の地域性」についての検討を可能にした。ここで得られた新たな知見や研究対象の拡充は、弥生文化の具体相を解明する上でも大きく寄与したといえる。その成果については、『群馬県史　通史編１』(柿沼ほか 1990)や、北関東弥生文化を特集した『駿台史学』84号 (1992)、そして土器中心の論考を掲載した『群馬の考古学－創立十周年記念論集－』(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988)にまとめられている。本稿ではこれらの論考を基点として、その後の研究展開に焦点をしぼってみることにする。

(1)　土器編年の再検討

これまで広く行われてきた前期・中期・後期の三大時期区分にとらわれることなく、型式間の併行関係を重視して東日本全体を視野に入れた広域編年の再検討が進められている (石川 1996)。そこでは新たな土器型式の設定や枠組みの見直し、従来型式の時期及び地域細分などがその俎上にのぼることとなった。

群馬県では、最古の在地弥生土器として岩櫃山式が位置づけられていたが、藤岡市沖Ⅱ遺跡の発掘調査によって、前期にまで遡る在地系土器群の存在が明らかにされた。在地の晩期縄文土器の流れをくみ、東海地方の条痕文系土器の影響によって成立したと考えられる土器群は「沖Ⅱ式」(鈴木 1987)、「沖式」(設楽 1991) と呼ばれる。氷Ⅰ式や千網式からの系統的整理や時期細分、条痕文系土器や遠賀川系土器との併行関係など、主に編年上の位置づけが当面の議論になるが、現在のところ水神平式に併行する前期新段階との評価にほぼ落ち着いている。また、更に古い土器群も知られるが、在地型式認定の根拠となった「在地型突帯文壺」の出現が不明瞭 (小出 2003)で、晩期浮線文土器から沖Ⅱ式へ変遷する過渡期と位置づけられている (若狭 1996)。

土器編年研究のうち、近年で最も大きな見直しが迫られたのは中期の編年だ。岩櫃山式一須和田式一竜見町式とした従来の大まかな三期区分を、新たな型式の設定や細分によって再編成が進められることとなった。具体的には、従来の「須和田式」を「平沢式」と「出流原式」に分割し、さらに熊谷市池上遺跡出土土器によって設定された「池上式」が新しい段階に位置づけられた。また、「野沢Ⅰ」と捉えられていた (柿沼 1990) 磨消し縄文系土器群のうち、県南西部の鏑川流域に分布する土器群が「神保富士塚式」として新たに設定された (鈴木 2002ｂ、石川 2003)。これは、筒形土器と浅鉢の高い組成率、充填手法による磨消し縄文の広範な採用、異器種・異系統間での文様や属性の共有互換などを特徴とし (石川 2003)、中期前葉に位置づけられた。石川氏はさらにその後続型式として甘楽町長根安坪遺跡出土土器を掲げた。また、これまで東北地方南部の土器 (南御山式の一部) と理解された筒形土器について、北関東ではすでに中期初頭から出現し、また胴部が無文であるとの特徴から、独自の型式として存在していたことを強調している。なお、この筒形土器については、文様帯に注目することで時期細分や系統差の抽出を試みる分析も始められている (鈴木 1992ａ、宅間 1993)。神保富士塚式の設定や筒形土器の型式学的再検討は、編年観の見直しだけでなく、群馬県の弥生土器成立過程とその意義を再認識するきっかけを与えてくれたといえる。鈴木氏が指摘するように (鈴木 1992ａ)、弥生中期について蓄積されていた古い発見資料を含めて、地元研究者の取り組みが消極的だったことは認めざるを得ない。その反省も込めて、県内各地の蓄積資料について再評価を行い、あらためてその位置づけを図るべき研究段階にあるといえようか。

中期後半の「竜見町式」は、長野県の百瀬式とほぼ同一の特徴をもつとの指摘 (設楽 1986) をうけて以来、栗林式に含まれるべき「小様式」であるとの暗黙の了解のうちに扱われてきた感がある。青木和明氏は、壺形式の特徴と変遷過程の共通性から、栗林式と竜見町式が「同一様式」に属することを実証しようとした (青木 1992)。だがそれを継承した具体的検証はこれまで十分に行われてきたとは言い難い。筆者も「竜見町式」として分離するだけの特徴が見いだせないとの理由から、「栗林式」と呼称すべきと述べたことがある (大木 2003)。ただし、それは具体的な型式学的検討という手続きを経たうえで改称すべきであって、同一との思いこみに過ぎないのではなかったかと自戒している。栗林式や北島式 (吉田 2003)、また県東部に分布する「荒口前原遺跡土器群」(井上・柿沼 1977) などとの型式的連鎖や編年での併行関係を明確にするためにも、急務の課題と位置づけられよう。該期の高崎市の豊富な出土資料が公表 (柿沼・神戸 1999) されたことは、その好機を与えてくれたといえそうだ。

後期の土器としては、中部高地型櫛描文の定着した樽式が位置づけられる。時期細分は早くから着手され、現状では三期区分 (佐藤 1988ａ・ｂ、飯島・若狭 1988) が概ね容認されている。四期区分 (三宅・相京 1982) も提唱されたが、古墳時代への移行期を第４期として認める以外は、それ以前の三段階の捉え方はほぼ同じと考え

られる。明瞭な型式差としては、この三期区分に落ち着くのだが、第3期は比較的長い時間幅をもっていたことが推測されるため、厳密な同時性や連続性の検討を要する集落分析などには十分ではない。富岡市中高瀬観音山遺跡や同市南蛇井増光寺遺跡では、第3期の住居同士が数棟に及んで重複する状況が知られ、3～4期細分することも可能だ（大木 1997）。その際に小地域色と時期差を誤認するおそれがあるため、対象を地域毎に絞った検討を積み上げていくしかない。

さて、県内弥生土器の編年見直しを進める中で、若狭氏は前期から後期までについて5大別11細分を行い、従来の前期を1期、中期を2・3・4期、後期を5期にあてる編年案を示した（若狭 1996）。型式認定や複数系統の整理などに課題を残すが、基本的な時間軸としてはほぼ変更の余地はないと考えられ、広域編年における他地域との対応関係もより明解になったといえる。あとは時期細分を進めるだけであろう。ただし、弥生地域社会を構成する集団単位を把握する手だてとして、鏃祭する型式を解きほぐす作業は欠かせないはずである。今後の土器研究における最優先課題として位置づけられよう。

⑵ 集落論

県内で特に注目された集落遺跡としては、富岡市中高瀬観音山遺跡、沼田市日影平遺跡、高崎市高崎城遺跡をあげることができる。中高瀬観音山遺跡は防御的性格を帯びた「高地性集落」として注目を集めたが、保存措置が検討される過程で、「北関東における弥生時代の集落構造と社会状況を知るうえで貴重な遺跡」と位置づけられた（井上 2000）。「戦闘的（防御的）」な性格付けに偏らないよう、慎重に配慮した結果と推察する。だがその一方で、比高50mの丘陵上における狭小な場所に占地して、150棟をこえる住居群が密集する状況、高い鉄鏃の出土比率など、県内での一般的な後期集落とは異なる特殊性を忘れないでおく必要がある。150年近くは継続したと推測されることから、緊急避難的な性格は考えにくい。ならば、なぜこのような密集する居住地に固執したのか。中高瀬観音山遺跡だけを子細に検討しても答えは出まい。西毛地域の後期集落群の動勢を視野に入れた、地域弥生社会の枠組みのなかでの位置づけが必要だ。日影平遺跡は待望久しい報告書が刊行され、後期環濠集落の全貌が明らかにされた（小池 2003）。弧形のV字環濠で囲まれた住居30棟（うち2棟が濠外）で構成される居住区である。その性格について、本論文集所収の論考では「沼田弥生社会の防御的拠点」と想定したが、どうであろうか。高崎城遺跡は、中期後半の環濠がめぐり、その中央部に方形周溝墓と住居跡各1基が検出された（中村 1994、柿沼・神戸 1999）。県内最古例となる方形周溝墓は単独で中央に位置し、全体の約1/2しか判明していないとはいえ、住居が1棟しか確認できないことから、「居住域」との認定に躊躇する。むしろ、集落一般構成員の居住域は他地点にあり、これは特定被葬者のための墓域ではないだろうか。その場合には隣接する竪穴住居も特別な意味を帯びてこよう。継続的に調査が行われている安中市注連引原Ⅱ遺跡は、前期集落の実態を知りうる唯一例であり、これまでに5棟ほどの住居跡が検出された。短期間で終息し、一定期間を空けて再び集落が形成されることや、壺棺再葬墓及び土壙墓と思われる遺構の存在が判明している（小林・大工原・井上 2003）。今後のさらなる調査成果に期待したい。

県内における集落研究が低調ななか、若狭氏は榛名山南麓の井野川流域における後期集落の分布動向から、遺跡群の動態を把握し、地域における弥生社会の変遷の様相を明らかにした。いったん集中する傾向から、やがて台地・丘陵地域へ拡散すること（若狭 1989）、また古墳時代初頭期には、赤城山南麓地域への移住した可能性が高いことについても言及している（若狭 1998）。農耕集落であっても、けっして同一地点に定着・発展するだけでなく、実態としては遺跡群そのものの移動も想定しなければならないことを示した点で重要だ。開村→定着→拡大→拡散といった発展史観だけでは歴史的事実を理解し得ないのだ。問題となるのは、集団移動背景の解釈であり、若狭氏は西方からの外来集団の移入といった外因を想定している（若狭 1998）。これについては反対意見もあるが（友廣 2003ａ・ｂなど）、分析対象とする外来系土器の認識に双方ですれがあり、議論がうまくかみ合っていないとの印象を受ける。なお、若狭氏は中期後半の集落についても粟林式文化圏からの移住を想定する発言を行っており（若狭 2003）、その実態はこれからの課題とはいえ、群馬県における本格的農耕文化の定着過程を理解する上で、非常に興味深い。

⑶ 生業と生産用具の問題

水稲栽培がいつ頃から主生業の座を占め、社会の在り方をどのように変えていったのかという問題は、弥生文化研究の当初から大きな命題であった。石器組成や立地景観、縄文文化の伝統の濃淡などの相違から、生業形態やその成熟過程にも地域色が顕在することが判明してきている。中期後半～後期には低湿地に面した立地条件と多数の水稲耕作用農具の出土から、水田耕作を行っていたことは確かだが、一方では打製石鏃・弓・石鏃・獣骨類の出土から、畠作や狩猟といった水田以外の生業の占める比率が高いとの論考も多い。特に石器組成に占める石鏃の多さから、生業における畠作の割合を高く評価する傾向が強い（熊野 1992、石川 1992、麻生 1990）。ただし、「畠優位論」が多く喧伝されるわりには、打製石鏃が畠耕作用に限定できる、との基本的前提となる機能・用途論については充分な実証がされているとは思えない。使用痕の観察から、従来の「鏃」以外に直柄装着の

「縦斧」の使用法も想定されており（池谷・馬場 2003）、その実態解明にはまだ多くの議論を要する。また打製石鏃が減少あるいは消滅する現象についても、生業形態の変化とのみ直結させるのは早計ではないか。石器生産・供給システムや木製農具普及の条件等の、地域弥生社会の構造や動向を視野に入れた「石器農具論」の展開を望みたい。一方で、遺跡立地傾向の観点から生業の在り方を把握しようとの試みも行われている。能登・小島氏らは前期相当の遺跡立地を分析し、群馬県でもすでに前期段階から水稲栽培を目指していたことを説く（能登・小島 1989）。地理的条件を綿密に検討した上での彼らの分布論の研究は、当時の人間が何を目的として「そこに存在したのか」という問いかけに対するひとつのアプローチとして、一定の成果をあげてきた。ただし、前期については集落をはじめとした発掘調査データに恵まれないことから、水田指向という結論を導き出せても、水田存在の実証に至るには、他の生業関連の遺物等による検証を要する。県内唯一の前期集落跡である注連引原Ⅱ遺跡については、「畠作遺存型」との異なる見解（小林・大工原・井上 2003）もだされている。また、東海西部を除く中部地方ではイネの存在が縄文晩期に遡ることが判明していても、「水稲農耕」の定着は中期半ば以降と捉える考え方（外山・中山 2001）も根強い。縄文社会から弥生社会形成への転換期において、生業実態の解明が最大論点であることは間違いないが、その実態に迫るにはまだ多くの実証的研究を積み上げる必要があろう。

生業以外の生産用具としては、日影平遺跡から出土した小型の磨き石が注目される。これを土器研磨用と考えれば、樽式土器製作の一端を読み解く貴重な資料となる。土器地域色の分布傾向と考え合わせ、基本的には自給生産と把握される樽式土器について、その供給範囲がどの程度なのかを推測することも可能だろう。

(4) その他

墓制や遺物の個別研究に関しては、平成12年段階での研究動向として扱ったことがあり（大木 2000）、こちらを参考にして頂きたい。ここではそれ以降の研究動向と新知見についての紹介に留めることにする。

墓制では、再葬墓を扱った宮崎・外山・飯島氏らの研究（1989、1995、1996）、有馬遺跡の礫床墓群の分析（田口 1996、飯島 1997）、方形周溝墓研究の総括（相京 1996）、壺棺墓群の発見（入澤 1999）がなされて以降、目立った研究の進展はみられない。方形周溝墓に関しては、周囲に溝をめぐらす住居跡との判別（飯島 2003）を通じて、改めて盛土の有無や規模、溝の形状、その意義などを再検討する必要に迫られているといえよう。また、渦巻文把手付鉄剣の発見で話題を呼んだ、長野県木島平村根塚遺跡での墳丘墓の存在は、共通する土器文化圏であることを重視すれば、群馬県でも同様の墓が存在した可能性を示唆するものとして注目しておきたい。副葬品に関して田口氏は、有馬遺跡礫床（木棺）墓の鉄剣やガラス及び水晶小玉から、丹後地域との交流を強調した（田口 2002）。先進的な文物の伝播や搬入に関しては、漠然と“西方から”とすることの多かった従来の認識から、具体的な地域とルートを示すことで、遠隔地を含めた地域社会間の実証的な交流論・伝播論を志向するものとして高く評価できよう。

個別の弥生遺物については、石器・鉄器・木器・骨角製品などに関する結論があげられる。

石器については、大塚昌彦氏が県内の環状石器を集成しその時期と分布傾向について言及した（大塚 1995、1996、1998）。また環状石器については、岡本孝之氏によって、縄文時代以来の伝統的石器であり、「橋場型石器」と改称すべきとの意見が述べられた（岡本 2000）。一方、大陸系磨製石斧の研究について、県内での集成作業（平野・相京 1992）以降は進展が見られないが、長野市榎田遺跡の分析（町田 1999）から提唱された「榎田型磨製石斧」（馬場 2001）に県内出土例の大半が該当しており、長野県北部との直接的な流通形態を解明する大きな手がかりを得たといえよう。磨製石鏃について関東一円の出土例を総括した及川良彦氏は、武器としてより狩猟・漁労具の可能性を求めた（及川 2002）。群馬県では確かに急増現象や重量化などの変化は今のところ見られず、「戦争」を背景とした武器説は考えにくい。ただし実際の使用に際して狩猟・漁労具と武器の違いがどれだけ意識されていたかを想定するのは難しい。狩猟・漁労具ならば打製から磨製への転換の背景が気になるところだ。鉄器に関しては、出土例が少ないことも災いして研究の進展はあまり見られない。後期に石器から鉄器への転換が行われたのは、後期遺跡における磨製石器の減少と鉄器出土例から明らかだ。鉄製利器が後期後半（2～3世紀）ですでに広く普及していたことは、樽式分布圏のなかで最北辺にあたる白沢村寺谷遺跡住居跡出土の板状鉄斧例や、県内各地に見られる鉄鏃出土例からも窺うことができる。長谷川福次氏は、特定地域集中の鉄剣、河川流域散在の鉄鏃と、鉄器種と分布傾向の違いを指摘した（長谷川 1997）。前者は墓副葬品、後者は集落跡という遺存形態に左右された可能性も考えられ、本来の所有傾向と異なることも推測されるが、判明している鉄鏃出土例が河川流域でも樽式圏周縁に目立つことは、当時の社会情勢と関連づけて検討すべきかも知れない。木器では樋上昇氏による「東海系曲柄鍬」に関する分析が注目される（樋上 2000a・b）。氏によれば、新保・日高遺跡出土の曲柄鍬のうち、弥生Ⅴ期（樽式に相当か）では在地系、廻間Ⅱ式併行期から東海系に変質するという。東海系土器の東方波及とリンクさせた議論が予想されるが、それだけに在地系曲柄鍬の分析が今後の重要な課題

となろう。新保遺跡・新保田中遺跡は木製品以外にも、多くの骨角製品が出土したことで知られる。石守見氏は弓頭状有棘骨角製品を取り上げ、形態分類や系統について再検討を行い、その用途については薬器の原点ともいえる「音器」としての性格を与えた（石守 1994）。最後になったが東日本出土の銅鈴・鉄鈴について、野澤誠一氏は西日本とは異なる独自の装飾具と解すべきであり、その生成と波及と長野県千曲川流域の弥生社会が主体的な役割を果たしたと結論付けている（野澤 2002）。後進的であるとして過小評価されることの多かった東日本の金属器について、弥生文化の地域性を解明する独自の研究対象となりうることを示した点、大いに評価できよう。

参考文献

相京建史　1996 「群馬県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』山岸良二編

青木利明　1992 「土器様式の構造からみた中部高地と北関東」『駿台史学』84

麻生敏隆　1990 「弥生時代の石製農具」『研究紀要』7　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒巻　実・若狭　徹ほか　1986 「C11神Ⅱ遺跡」藤岡市教育委員会

飯島克巳・若狭　徹　1988 「樽式土器編年の再構成」『信濃』40－9

飯島義雄　1997 「墓が壊されることの意味」『群馬県立歴史博物館紀要』18

飯島義雄　2003 「大間々扇状地の扇端低地に立地する唐橋田遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『利根川』24・25

池谷勝典・馬場伸一郎　2003 「弥生時代阪田盆地における打製石鍬の用途について」『中部弥生時代研究会第6回例会発表要旨集　生業』

石川日出志　1985 「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本原史』

石川日出志　1992 「関東台地の鳥絵集落」『新版古代の日本8 関東』

石川日出志　1996 「東日本弥生中期広域編年の概略」『YAY！』弥生土器を語る会

石川日出志　2003 「神保富士塚式土器の提唱と弥生中期土器研究の意義」『土器考古』26

石守　晃　1994 「弓頭状有棘骨角製品について」『群馬考古学手帳』4

井上唯雄・赤沼忠介　1977 「入門講座　弥生土器―北関東２―」『考古学ジャーナル』141

井上　太　2009 「弥生時代遺跡の整備　群馬県中高瀬観音山遺跡」『考古学ジャーナル』458

入澤雅裕　1997 「土器棺墓群について」『小八木志志貝戸遺跡群Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

及川良彦　2002 「有孔磨製小赤尖頭器」『研究論集』XIX　東京都埋蔵文化財センター

大木紳一郎　1997 「まとめ　弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井墳先寺遺跡Ⅴ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

大木紳一郎　2003 「群馬県における弥生中期後半の遺跡」『埼玉考古別冊７　埼玉考古学会シンポジウム　北高式土器とその時代』

大塚昌彦　1995 「弥生時代のおとしもの」『群馬考古学手帳』5

大塚昌彦　1996 「群馬県の環状石斧」『群馬考古学手帳』6

大塚昌彦　1998 「群馬県の環状石斧（補）」『群馬考古学手帳』8

岡本孝之　2000 「関東の環状石斧」『西相模考古』9

桜沼恵介　1990 「弥生文化の伝播と展開」『群馬県史　通史編１』

桜沼恵介・神戸聖徳ほか　1999 「新編　高崎市史　資料編１」

熊野正也　1992 「北関東地方西部弥生時代における山高地遺跡と石器」『駿台史学』84

小池雅典　2003 「日影平遺跡」沼田市教育委員会

小林青樹　1998 「弥生文化成立期の西と東」『永道跡発掘調査資料図譜』

小林青樹・大工原　豊・井上慎也　2003 「群馬県安中市注連引原遺跡群における弥生中期前期第器の研究」日本考古学協会第69回総会研究発表要旨

小出輝雄　2003 「関東初期弥生土器の一様相」『埼玉考古』38

佐藤明人　1988ａ 「出土弥生土器について」「新保遺跡Ⅱ」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

佐藤明人　1988ｂ 「樽式土器の様式推移と地域色」『創立十周年記念論集　群馬の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

設楽博巳　1986 「竜見町式土器について」「第７回三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器」

設楽博巳　1991 「関東地方の遠賀川系土器」「見晴隆人先生喜寿記念論集古文化論叢」

鈴木正博　1987 「「流れ」流れて北東「遠賀川系土器」」『利根川』8

鈴木正博　2002ａ 「「口倉」と「関所寛」の簡形土器に観る型式学的引力」『群馬考古学手帳』12

鈴木正博　2002ｂ 「関東弥生式中期中葉の突起文と鬚形土器の型式学」「日本考古学協会第68回総会研究発表要旨」

関　義則　1983 「須和田式土器の再検討」「埼玉県立博物館紀要」10

大工原豊・若狭　徹他　1988 「注連引原Ⅱ遺跡」安中市教育委員会

田口一郎　1996 「樽式期の墓制」『群馬考古学手帳』6

田口一郎　2002 「金鶏郭・玉鶏原厚の北関東弥生墳墓」『考古学ジャーナル』491

友廣哲也　2003ａ 「北関東古墳時代前期土師器の様相から見た古墳時代社会の成立」『古代』112

友廣哲也　2003ｂ 「古墳社会の成立」『日本考古学』16

外山秀一・中山誠二　2001 「プラント・オパール土器胎土分析からみた中部日本の稲作農耕の開始と遺跡の立地」

中村　茂　1994 「高崎城三ノ丸遺跡」高崎市教育委員会

野澤誠一2002 「銅鈴・鉄鈴からみた東日本の弥生社会」「長野県立歴史館研究紀要」8

能登　健・小島敦子　1989 「関東地方における弥生時代前期集落の遷地について」「研究紀要」6　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

長谷川福次　1997 「北関東弥生時代の鉄器文化」「土器考古」21

馬場伸一郎　2001 「南関東弥生中期の地域社会（上）（下）」「古代文化」53－5・6

樋上　昇　2000ａ 「東海系曲柄鋤再論」『考古学フォーラム』12

樋上　昇　2000ｂ 「３～５世紀の地域間交流」「日本考古学」10

平野進一・相京建史　1992 「群馬県出土の弥生時代鍛製石斧」「群馬県歴史博物館紀要」3

町田勝則　1999 「考察」「榎田遺跡」長野県埋蔵文化財センター

三宅敦気・相京建史　1982 「樽式土器の分類―修名山東南麓を中心として」「第３回三県シンポジウム　弥生終末期の土器　四世紀の土器」

宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄　1989 「再葬墓における穿孔人骨骨の意味」「群馬県立歴史博物館研究紀要」10

宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄　1995 「弥生時代後期の葬制における再葬墓の伝統」「群馬県立歴史博物館研究紀要」16

宮崎重雄・外山和夫・飯島義雄　1996 「岩櫛山岩陰遺跡群の再検討」「群馬県立歴史博物館研究紀要」17

吉田　稔　2003 「北高式の提唱」「埼玉考古別冊　7　埼玉考古学会シンポジウム　北高式土器とその時代」

若狭　徹　1989 「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220

若狭　徹　1992 「北西関東における弥生土器の形成と展開」『駿台史学』84

若狭　徹　1996 「各地期の編年　群馬県地域」「YAY！」弥生土器を語る会

若狭　徹　1998 「群馬の弥生土器が終わるとき」「第２回特別展　人が動く・土器も動く」かみつけの里博物館

若狭　徹　2003 「第三章　弥生時代」「安中市史　第二巻　通史編」

4　古墳時代　―古墳を中心にして―

右島和夫

はじめに

ここでは近年の群馬県地域における顕著な古墳時代の考古資料状況及び研究動向について概述し、特に古墳の調査・研究の成果を中心に、折に触れてそれ以外の同時代の資料等にも言及したい。筆者のこれまでの主たる関心対象が古墳そのものにあったためであり、御容赦願いたい。また、紙数の関係もあり、そのすべての研究成果に触れられなかった点もお断りしておく。その欠については、毎年『日本考古学年報』、『考古学ジャーナル』、『信濃』誌上等で前年度の当地域の古墳時代の研究動向が、また『群馬文化』誌上で５年ごとにその間の研究動向が詳細に総括されているので、これらを参照されたい。

注目された古墳の調査

古墳の発掘調査は、もともと各古墳が視認できることもあって、近年は開発計画が、事前に古墳を避けるように計画されることが大半である。そのため、従来のような調査は減少している。一方、開発規模自体は大きくなってきているため、その存在が事前に想定されていなかった大規模古墳群が、調査の結果確認される事例は多くに上っている。これらは、いわゆる「初期群集墳」と呼称されており、群を構成する個々墳が低墳在であるため、現地表面上に墳丘が突出することがほとんどなかったからである。世良田諏訪下遺跡（以下、そのうちの古墳群のみについて「世良田諏訪下古墳群」と呼称する）、高崎市情報団地遺跡（同「情報団地古墳群」）、同剣崎長瀞西遺跡（同「剣崎長瀞西古墳群」）等が代表的である。

一方、事前に視認できるような高墳丘の有力古墳についても発掘調査される機会があった。その多くの場合は、史跡整備や史跡指定を視野に入れた重要遺跡の範囲確認調査等の基礎調査であり、そのことによって基準となるような主要古墳の基礎的データが集積された。その主なものとしては、前橋市大室古墳群（前二子・中二子・後二子・小二子古墳からなる）、群馬町保渡田古墳群（二子山・八幡塚・薬師塚古墳からなる）、高崎市山名古墳群等がある。また、安中市の簗瀬二子塚古墳もこのような方向性も踏まえた調査が実施された。

(1)　古墳群の調査

初期群集墳の調査が活発に行われたことにより、その具体相が明らかになり、成立背景の検討が可能になってきた。初期群集墳の埋葬施設は、主として人体ぎりぎりが納まる空間のみの竪穴式小石槨であり、五世紀後半から六世紀前半にかけて形成される特徴を有している。ところで、同じ六世紀初頭の時期は、一方で横穴式石室が新たな主体部形式として登場する。その場合、群馬県の中・西部地域は、この流れに沿った主体部形式の転換が見られるのに対し、東部地域では六世紀後半にならないと横穴式石室は登場しない。それでは、前者の地域では、手のひらを返すように主体部形式が竪穴式から横穴式に替わったのかというと、実際は非常に複雑な様相を示している。そのことをよく示しているのが、初期群集墳の調査成果であり、地域により、古墳の規模（被葬者の階層）により多様である点が明らかになってきた。

具体的には、群馬県の中・西部では前方後円墳、帆立貝式古墳、比較的大型の円墳に採用されても、群集墳を構成する小型円墳は依然として竪穴式小石槨を採用。群集墳を構成する小型円墳にも広く採用。前方後円墳以下群集墳まで不採用等のいくつかの導入形態が見られることが明らかになってきた。その背景には、地域共同体の中で、群集墳造営のシステムの転換がどのようになされていったのかが密接に関係していることは明らかである。今後も初期群集墳の発見と調査が県内各地で事例を増すことは明らかであり、５世紀後半から６世紀前半の地域動態解明の大きなカギを握っていると言えよう。

高崎市剣崎長瀞西古墳群の調査で発見された方墳・方形積石墓（古墳の一形態として位置づけられる積石塚から区別するため「積石墓」と呼称した）は、主として５世紀後半の当地域への渡来系集団の移動の問題を大きくクローズアップさせた点で重要であった。古墳群の一角から発見された馬葬土壙は、渡来系集団の移動背景の一端を示唆している。併せてその周辺で発見されている集落跡からは、初期カマドや半島系軟質土器が多く確認されており、集団の系譜の具体的検討に道を開いている。

子持村伊熊有瀬遺跡は、昭和２、30年代の調査で、６世紀中葉降下の榛名山二ツ岳軽石層(FP)に直接厚く覆われた小型円墳伊熊古墳、有瀬１・２号古墳が確認されており、その遺存状況のよさが注目されてきた。子持村教育委員会による周辺一帯の地下レーダー探査によると既調査の３古墳以外の円墳が複数基確認されている。

伊熊・有瀬古墳群以外でも子持村域には、軽石層によって全体がパックされている古墳が分散しており、中ノ峯古墳、田尻遺跡、浅田遺跡等の調査が行われている。その中には、噴火直前よりきかのぼる時期に築造された古墳も含まれるが、築造後の破壊はほとんど被っていないので、降下直前築造のものと同様遺存状況のよさは特別である。集落研究の中で黒井峯遺跡が基準資料として重視されているのと同様に古墳研究の中で重視していく必要があるし、発掘調査の方法如何で解明できる要素は無尽蔵である。今後に期待したい。

伊熊・有瀬古墳群とは利根川を挟んだ対岸をしばらく上流へ行ったところで発見された昭和村岩下清水古墳群の３基の小型古墳は、いずれも榛名山二ツ岳軽石層に直

接覆われており、そのあり方が極めて興味深いものであった。うち1・2号墳の2基は、一辺が約5mの小型方墳で、墳丘が石のみで構成されている積石塚だった。この時期の群集墳の墳丘形式としては極めて類例が少ないことと、隣接する円墳の3号墳の方が、墳丘・石室において明らかに優勢であることから、両者の背後に社会構成上の特別な関係が反映されている可能性が強い。その場合、剣崎長瀞西古墳群、箕郷町下芝谷ツ古墳、渋川市東町古墳等の5世紀後半の方墳が渡来系集団に関係する出自背景が墳丘形式に反映していると考えられることから、そのような出自表示の方法が、岩下清水古墳群の段階まで継続していた可能性が考えられるところである。

利根川上流域では、昭和村川額軍原1遺跡、沼田市奈良古墳群、川場村生品古墳群等、7世紀を中心とした群集墳の本格的調査が続いた。これらの古墳群に共通するのは、馬具・武器類の充実した副葬品である。古墳群の性格理解やこの時期を前後して活発となる東北地方へのヤマト政権の軍事的進出との関係に興味が持たれる。

赤堀町多田山古墳群の調査も興味深い話題を提供している。古墳群は、広大な多田山丘陵の中に各時期の古墳群が場所を変えて築造されており、丹念な調査によって多大な成果を上げている。最も古いのは、いわゆる初期群集墳に属する一群であり、墳形・同規模・主体部形式・埴輪等の比較検討から、群構造の具体的検討を可能にしている。横穴式古墳については、6世紀後半、7世紀の群集墳が場所を変えて形成されており、個々墳の構造的特徴の把握に意が注がれた。また、頂上部寄りを中心にした一角には、群集墳から明確に区分された截石切組積石室を有する円墳3基が確認された。そのうちの1基の前庭部から唐三彩陶枕が発見され、話題を呼んだ。極めて希有な資料であるだけに、その入手経路・背景に興味が持たれるところである。

調査担当者が慎重に検討している「モガリ状遺構」は、遺構に伴う情報が豊富であることから、今後この種の遺構の研究で基準資料となることは間違いない。

⑵ 有力古墳の調査

前方後円墳を中心にした有力古墳の発掘調査が活発に行われている。その背景として、市町村教育委員会による史跡整備計画が、古墳を対象に策定される機会が多くに上っていることがある。早くには藤岡市白石古墳群、群馬町保渡田古墳群、太田天神山・女体山古墳が、埴輪公園整備構想の3本柱として俎上にのぼり、それぞれ整備のための基礎調査が実施されてきた。

とりわけ保渡田古墳群、とりわけ八幡塚古墳については、具体的な整備構想の策定を視野に意欲的な調査が実施され、全国的に見ても範となるような調査研究に結実している。それは墳丘及び外部施設の完全復元を目指したため、その細部に至るまでの必要な基礎的データが採取された。このことは、古墳そのものについての考古学的理解につながったことは言うまでもないところであり、今後該期の前方後円墳の基準資料となっていくことは十分予測されるところである。

前橋市大室古墳群の基礎的調査も長期に亘って組織的・計画的に実施され、古墳群理解を一段と深めることができた。本来的には、史跡整備のための基礎的調査に主眼がおかれていたわけであるが、実際の調査を主導する市教育委員会事務局に対して、調査行程の節目節目の都度頻繁に、整備委員会に関わる考古学のメンバーが現地で確認し、調査の評価、その後の調査方針を検討していくという調査体制が取られた点は特筆されてよいであろう。各古墳についての調査報告書は順次刊行され、基本文献として活用されている。今後、古墳群全体に対する総括的な報告書作成が期待される。

一方、関東地方最古の横穴式石室を有する前方後円墳である安中市簗瀬二子塚古墳については、市史編纂事業及び史跡整備を視野に入れての基礎調査、市道改良工事に伴う事前調査等が実施され、墳丘及び外部施設、横穴式石室、出土遺物等についての基礎的データが集積された。古墳が築造された6世紀初頭を前後する時期は、当地域の中・西部地域の有力古墳が一斉に横穴式石室を採用する時期である。古代史上では、ほぼ継体朝の時期に当たっており、ヤマト政権が大きく転換していく画期の中にあることが知られている。その意味からも、調査により当古墳の基礎的データが集積された意義は研究上からも極めて大きい。

完成する大冊の調査報告書

近年、いくつかの大冊の調査報告書が刊行された。このことの背景には、調査の規模が大きくなり、群集墳のほぼ全域が調査された世良田諏訪下古墳群、情報団地古墳群、古海松塚古墳群、箕郷町和田山古墳群、多田山古墳群等がある。これらについては、対象となる古墳群の全域が調査されたことも一因であるが、と同時に古墳群自体の規模も極めて大きかった点が上げられる。このような古墳群を構成する1基1基に対して慎重な調査を実施した担当者の方々の労をねぎらうとともに、膨大な資料を整理し報告書刊行にこぎつけたことに対しても敬意を表したい。これら全体像が把握できる群集墳の資料の集積を基礎にして、当地域の群集墳研究がさらに活発に展開されるであろう。

なお、高崎市の倉賀野東古墳群（大道南古墳群）は、総数100基以上からなる後期大型群集墳で、そのうちの18基が昭和42年に発掘調査されたが、未整理・未報告のままに今日に至っていた。近年、高崎市史編纂事業の一環として調査資料の基礎整理が実施され、『高崎市史研究』

の三つの号を割いて、その報告に当てた。大冊の報告書に匹敵する成果である。

長い間、正式の報告書刊行が待ち望まれてきた綿貫観音山古墳の膨大な調査資料が整理され、正しく大冊の報告書２冊に結実したことは、学界から大いに注目された。墳丘・石室については、かって刊行された史跡整備報告書の中で、詳細に報告されたところであるが、出土資料については、今回はじめて基礎的整理がほぼすべてに及ぼされた。客観性を極めて重視し、確実性を越えることを抑制した方針が垣間見え、報告書の内容の信頼度を高めている。今後、本古墳研究の基本文献として広く活用されることは間違いない。

保渡田古墳群の史跡整備に伴う報告書も大冊のものとして完成した。あくまでも、史跡整備を前提とした調査・報告書作成ではあるが、その根底に考古学的検討の徹底がいかに必要かを雄弁に物語っている。古墳調査の成果に周辺の関係遺跡（三ツ寺Ⅰ遺跡、その他の集落遺跡、生産遺跡等）の構造的理解を史跡整備・博物館建設に繋げている点も示唆的である。なお、最近三ツ寺Ⅰ遺跡に若干後出する時期に造営された、ほぼ同一企画・規模の北谷遺跡が約３㎞東方で発見され、現在基礎調査が続けられている。この遺跡の位置づけについても多角的なアプローチと根底的な検討がなされていくと期待される。

活発な市町村史（誌）編纂

『群馬県史』編纂事業の完成によって、群馬県地域の考古学的地域研究の基礎が築かれたことについては、異論を挟む余地はないだろう。県内の市町村で遺跡調査が本格的に進行したのは、この編纂事業の中途から終了以降にかけてのことである。そのため、県史には反映されなかった基礎的データが各市町村、埋文事業団で大量に集積されていった。これらの膨大な資料を吸収するかたちで、各地で市町村史（誌）の編纂事業が始動していったことが顧著な動きとして特筆される。ここでは、特に古墳時代資料との関係で注目される動向について触れてみることにしよう。

代表的な例として、『高崎市史』、『太田市史』、『渋川市誌』、『藤岡市史』、『沼田市史』、『安中市史』、『群馬町誌』等が上げられる。この他、県史編纂事業と相前後して進行した市町村史（誌）編纂事業もある。

これらの中で、埋蔵文化財調査の成果を集約するだけにとどまらず、積極的に編纂事業を展開したものとして『高崎市史』、『沼田市史』、『安中市史』等がある。

『高崎市史』を例に取ると、今完成間近であるが、古墳時代に関しては、『原始古代資料編Ⅰ』縄文・弥生・古墳（古墳）、『同Ⅱ』古墳（集落・生産）・古代、及び『通史編Ⅰ』原始古代の大冊３冊となる。内容で特筆されるのは、古墳の悉皆分布調査を実施し、『上毛古墳綜覧』の高崎市域の改訂版を詳細分布地図とともに作成したことである。また、これまで良好な測量図のないものや重要古墳について改めてその作成及び一部発掘調査を実施した点である。主なものとしては、普賢寺裏古墳、八幡二子塚古墳、観音塚古墳、漆山古墳、蟹沢古墳、高崎１号墳、大山古墳、安楽寺古墳がある。また、市教育委員会によって調査は実施されたが、その後出土遺物等の基礎整理がなされていなかった古墳のほぼすべてについて資料化をはかっている。主なものとしては、若宮八幡北古墳、八幡原古墳群、倉賀野東古墳群（大道南）等の膨大な資料がある。一方、高崎市域出土が伝えられ、県外に所蔵されている資料の基礎調査も特筆される。その主なものは、東京国立博物館に所蔵されている大量の遺物であるが、そのほぼすべてについて資料化を行っている。その作業は、宮内庁書陵部、天理参考館、伊勢神宮徴古館等にも及んでいる。

編纂のための基礎調査に長期間の歳月と予算がつぎ込まれたことが裏付けになっている。

参考文献

群馬県　『群馬県史』資料編３・通史編１　1981・91

尾島町教育委員会　『世良田諏訪下遺跡』1998

高崎市教育委員会　『高崎情報団地遺跡』・『岡Ⅱ遺跡』1997・2002

高崎市教育委員会　『剣崎長瀞西遺跡１』2002

専修大学文学部考古学研究室　『剣崎長瀞西５・27・35号墳』2003

前橋市教育委員会　『前二子古墳』・『中二子古墳』・『後二子古墳』・『小二子古墳』1993・95・92・97

群馬町教育委員会　『保渡田Ⅷ遺跡』・『保渡田古墳群』1990・2000

石井克己　『火山爆発による軽石堆積の方形周溝墓と古墳群調査について』『月刊文化財』平成13年３月号　2001

昭和村教育委員会　『岩下清水古墳群』2003

昭和村教育委員会　『川額軍原Ⅰ遺跡』1996・1

沼田市教育委員会　『奈良古墳群』2001

群馬県埋蔵文化財調査事業団　『多田山古墳群』2004

安中市　『安中市史』資料編・通史編・原始古代中世　2002・2003

柳沢一男・能江秀夫・南雲芳昭ほか　『倉賀野東古墳群大道南群調査報告（上）（中）（下）』『高崎市史研究』15・16・17号　2001・2003

群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団　『綿貫観音山古墳Ⅰ墳丘墓輪編』・『岡Ⅱ石室遺物編』1998・99

高崎市　『高崎市史資料編』原始古代Ⅰ・Ⅱ、『同通史編』原始古代　1999・2000・2004

太田市　『太田市史』通史編原始古代　1996

渋川市　『渋川市誌』第２巻　通史編　原始～近世　1993

藤岡市　『藤岡市史』資料編　原始古代中世・『同』通史編　原始古代中世　1993・2000

沼田市　『沼田市史』資料編・通史編　原始古代中世　1995・2000

群馬町　『群馬町誌』資料編・通史編　原始古代中世　1998・2001

5 古　代

飯田陽一

はじめに

「古代」と括られる範囲には、多様な遺構と遺物が含まれている。それらを網羅すれば膨大な調査成果や考察があるが、ここでは古墳を除く7世紀後半から11世紀末頃までを対象とした。また、この10年間、主に1995年以降に発表された考古資料や論考を扱った。文献資料に基づく論考も割愛した。

現在、古代の遺構・遺物を扱う全国規模の研究会には「古代の土器研究会」「地方官衙研究会」「古代交通研究会」「窯跡研究会」などがあり、東日本各地で行なわれる「古代城柵官衙遺跡検討会」「関東古瓦研究会」などがある。また広範な時代を扱うが「埋蔵文化財研究集会」や「東日本埋蔵文化財研究会」が作成する豊富な資料には研究の助となるものが多い。

群馬近県の考古学会でも古代の土器・官衙研究など活発な活動が見られるが、群馬県内にあっては、このように全県をあげて研究者が集うような企画は見られない。

1　官衙　1995年の日本考古学協会・茨城大会で地方官衙がテーマとして取り扱われたこともあり、官衙や居宅は最も活発に検討が加えられている分野のひとつである。この大会で群馬県の事例は木津博明がまとめている[1]。大会以降、さらに資料の増加もあって、近県では博物館の企画展・地域のシンポジウム等で扱われることも多くなっている[2]。

安中市地尻植松遺跡で発見された「評」と刻書された須恵器[3]が注目される。限られた調査範囲ではあるが、大形掘立柱建物群が確認され、碓氷郡衙かそれに先行する評家の可能性が指摘されている。周辺は以前より東山道野尻駅家の推定地域でもあった。評家については前橋市山王廃寺に先行する評家の想定もある[4]。

ところで、かつて群馬を代表する官衙として境町十三宝塚遺跡が佐位郡衙跡と位置付けられていたが、その後、同遺跡の調査報告書[5]で佐位郡衙に付随する寺院と位置付けられた。また、勢多郡衙政庁の可能性を期待された前橋市上西原遺跡方形区画も同様に郡衙に伴う寺院と報告された[6]。関東地方では郡衙の発見が相次いでいるが、群馬県内でこれらに匹敵する典型的な施設が未だに報告されていない。コの字状やL字状の建物配置の政庁、および築地塀で囲まれた区画内に多数の殺倉をもつような正倉院を伴う典型的な郡衙ではなく、群馬独特の郡衙の存在を想定しながらこれまでの発掘事例を再検討する必要があるのではなかろうか。

このような中で継続的に調査されている新田町天良七堂遺跡・同町入谷遺跡や境ケ谷戸遺跡の調査成果の蓄積は期待されるものが大きい[7]。

今後は、古代史からは否定的な見解をよせられることの多い官衙的な役割を担う郷家の存在についても考古学側からのアプローチが必要と思われる。郡衙・居宅などと確定することはできないが、官衙的な色彩の強い遺構・遺物はかなりの数にのぼってきている。

なお、近年は冒及される機会の減った国府についても、若干の考察がある[8]。

2　東山道駅路　従前より、坂爪久純によって精力的に研究されてきている分野である。2000年に群馬県立歴史博物館で東山道の企画展[9]が行なわれたほか、栃木県でも同様の企画[10]が催されるなど、発掘資料の増加に伴う再検討が行なわれ、関心の高い分野である。また、東山道を南へ分岐して武蔵国府へ向う武蔵路の実態が東京・埼玉で明らかになってきているが、群馬県内での調査例はまだない。

発掘調査でもこれまでいわれてきた上野国府を通過する国府ルートと、南側を直線的に横切る牛堀・矢の原ルートの存在が明らかになり、南側のルートが国府ルートに先行すると提唱されている。しかしながら、規模・規格性の具備をもって東山道駅路とすることに慎重な指摘[11]もある。国府と東山道駅路の関係をより具体的に説明する必要が感じられる。駅家自体も確実なものが確認されていない。これは群馬県内だけでなく、関東全域で見ても確実な駅と呼べる遺構はまだ調査されていないのではなかろうか。山陽道や北陸道に見られる、外国からの使節に対応した典型例施設を東国の駅家に求めることに原因があるように思われる。東山道の駅家には内部に宿泊施設を伴うのか、馬屋を併設しているのか、近隣の郡衙や居宅との連携があるのか、など基本的な問題が未だに判っていない。

3　寺院と遺物　埋蔵文化財研究集会では1998年に古代寺院の出現とその背景をテーマとしている[12]。関東古瓦研究会はこれまでの成果をまとめ、上野国分寺については木津博明が担当している[13]。上野国分寺に関連した施設については、桜岡正信・関口功一によって再検討が加え続けている[14]。発掘調査では、山王廃寺から多量の塑像片の出土があり、同寺の特殊性がさらに際立ってきている(15前)。また赤城村諏訪上遺跡の山岳寺院と瓦塔[15]が注目された。

瓦の研究については資料が多いが[17]、本紀要中には高井佳弘の詳細な記載があるので、参照して頂きたい。

4　集落　研究の停滞している分野である。関口功一の検討[18]、や緑釉陶器検討から古代の集落の成立時期や背景に言及した神谷佳明[19]が注目される。

官衙と一般集落の間にある居宅についても取り扱われる機会が増えてきている。律令期の居宅として高崎市小八木志志貝戸遺跡[20]などで可能性が指摘されている。

また、近年関東各地で活発に検討される村落内寺院については、村落内寺院という名称についても疑義が出されるという研究の進捗の中で、群馬県内では検討される機会が少ない。かつて、かつて鳥羽遺跡で注目された神社遺構を含め、集落と宗教の係わりについての問題を整理する必要があろう。

その他に竪穴住居についての分析として、竪穴住居内での電の位置移動についての再検討[21]や、復元竪穴住居の焼失実験報告[22]・掘削方法の検討[23]など、論考が多い。

5　水田・畠　火山堆積物下の水田確認は飛躍的に進歩している。昭和50年代はじめ、関越自動車道や上越新幹線などの発掘調査では台地上面のみで調査が行われていたのに対し、北関東自動車道の調査では河川跡を除くほぼ全域で低地部分から水田が見つかっている。火山灰直下の状況が判るという環境に恵まれた群馬は、古代の水田調査データが最も豊富といえよう。

条里期水田に先行する古墳時代の小区画水田に対する論考は多く、坂口一の畦畔に対する考証、斉藤英敏の東アジアにまで視野を広げた大胆な検討などがある[24]。また深澤敦仁の水田出土遺物の検討もある[25]。

天仁元（1108）年As-B下水田に対する検討の資料の蓄積は膨大なものになっている。能登健・小島敦子による水田・畠集成作業[26]で扱われた486遺跡中、As-B直下の水田は不確実なものを含むと333遺跡におよんでいる。あわせて、弘仁九（818）年の地震を原因とする泥流下の水田遺構の確認は、条里期水田の検討に大きな成果を期待させるものとなるのみでなく、洪水下の遺構に対しより精度の高い調査を喚起した。赤城山南麓から前橋台地の遺跡のみならず、洪水堆積物は前橋台地西隅の高崎市内でも注意をはらわれるようになってきている。加えて数次の洪水に対する可能性も示唆されるようになっている。北関東自動車道などの調査報告書が刊行される中、前橋・伊勢崎台地の広大な条里期水田の資料が整理されつつあり、検討が加えられる機会が増えてきている[27]。従来から調査例の多い高崎市・群馬町の水田を加えて全国的にも希有な規模で条里期水田の分析が可能となり、最も期待される分野のひとつと言えよう。

畠については2000年の日本考古学協会鹿児島大会で能登健・小島敦子が発表している[28]。水田イメージが先行していた群馬の農耕遺跡に２本柱をアピールした。

農業用水についての飯島義男の継続的な取り組み[29]なども注目されよう。これまでに集積された史料再検討の必要性を喚起している。

6　その他の遺構　これまで最も考古学的なアプローチが遅れていた分野のひとつである古代の牧について、問題提起がされるようになってきた[30]。牧を想定するには土塁・柵・堀などの発見の他に、広大な遺構のない面を確認するという、他の遺構確認とは正反対の、困難で息の長い作業が必要である。地域の歴史解明に固執する市町村担当者の努力なしでは解明できないテーマであろう。加えて牧を確定するための確実な遺構・遺物に対する共通認識を求めたい。埋蔵文化財研究集会で集成された地震の痕跡について、群馬の資料については関晴彦がまとめている[31]。

7　土器　昭和50年代、活発に行なわれた全県下の編年作業により、土器の示す相対的な先後関係は確立されてきた。これを受けて地域ごとの編年作業の必要性が唱えられたが、この作業には進捗が見られない。かつて、他地域からの土器年代観の援用が、その地域での見直しの波を受けることを繰り返し経験しながら、地域ごとの着実な編年作業の必要性が叫ばれた。先後関係を測る物差しとしての土器編年は完成し、絶対年代により近い、細かく正確な年代を測る物差し、地域性を計る物差しとしての土器研究が必要となっている。羽釜に対し、吉井型・月夜野型の分類がおこなわれたのもこの時期である。その中で個別の土器種を中心にした分析作業が行なわれている。暗文土器の検討、群馬独特の須恵器有蓋短径壺の検討、個別の土器や土器種の生産や流通にいたる検討など、地域を計る物差しを完成させるためのステップが着実に蹴まれている[32]。

須恵器窯では光仙房遺跡須恵器窯跡の報告書[33]が刊行されている。舞台遺跡や三和工業団地遺跡の窯跡資料とともに、消費地に隣接した“黒の須恵器”を焼成する須恵器窯と、その製品の流通範囲を検討することが可能となった。周知の窯業製品とを対比し、新たな須恵器研究の端緒となろう。なお、窯跡研究会が行なった８世紀の須恵器窯集成で、群馬の資料は渡辺一がまとめている[34]。

8　その他遺物　紡錘車の研究、刻書紡錘車に着目した論考も、発火具についての地道な集成作業などがある[35]。文字資料については次々と論考が発表されている。群馬県出土の文字集成作業が第３集[36]として久々に刊行されている。また高島英之の全国規模での文字資料について考究した労作が刊行されている[37]。私印についての検討が活発に行われている。坂詰久純の用水開削者と銅印とを結ぶ分析を表し、高島英之は私印の概説を表す他、焼印について所有機能以外にも検討が必要なことを提起している[38]。

遺跡出土の文字資料に対して祭祀的側面を重視する高島英之の論考が目立つが、別の観点を持つ研究者との検討を期待したい。

終わりに　項目毎に分けて研究例を紹介したため、本来つながりのある内容、いくつもの項目にまたがる検討を寸断して記すことになってしまった。遺構だけを取っても官道と条里、居宅と集落、寺院と瓦窯のように多様である。これに遺物の検討を組み合わせればとても分類し

きれるものではない。この頃で紹介した報告者の意を表しきれず、片手落ちの紹介になってしまったことをお詫びします。

註

1）木津博明　1995「シンポジウム３　群馬県下の官衙とその周辺」日本考古学協会茨城大会

2）『東国の国府』2000　上田市立信濃国分寺資料館
「板東の古代官衙と人々の交流」2002　埼玉考古学会

3）井上慎也　2002「植松地尻遺跡で発見された古代建物群と刻書土器」『群馬文化271』

4）田中広明　2002「古代地方官衙の初現と終焉」埼玉考古学会

5）大江正行　1992「史跡十三宝塚遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　調査報告書134集

6）松田　猛　1999「上西原遺跡」群馬県教育委員会

7）小宮俊久　1999「新田町内遺跡Ⅰ」など　新田町教育委員会

8）木津博明　1998「東国の国府 in Wayo」

9）「古代のみち－たんけん！東山道駅路」2000　群馬県立歴史博物館

10）「東山道」2002　栃木県立女子風土記の丘資料館

11）松田　猛　2000「群馬県地方史研究の動向」『信濃52巻６』

12）第42回埋蔵文化財研究集会　1997「古代寺院の出現とその背景」群馬県の資料は高井佳弘が分担

13）木津博明　1998「上野国分寺」『聖武天皇と国分寺』関東古瓦研究会　雄山閣

14）板岡正信・関口功一　2001「古代寺院の付属施設に関する一考察」群馬考古学手帳11
板岡正信・関口功一　2003「上野国分寺「東院」について」群馬考古学手帳13

15）前原　豊　2000「山王廃寺Ⅴ」前橋市教育委員会

16）池田敏宏「三原田遺跡上遺跡瓦塔の編年的系譜的位置付け」赤城村歴史資料館紀要　第４号

17）松田　猛　1997「上野国分寺文字瓦の再検討」ぐんま史料研究第９号
高井佳弘　2002「一本作り軒丸瓦における布と模骨」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　研究紀要20
滝沢　匡・小泉範明　2003「同笵軒平瓦の一例」東国史論。
栗原和彦　2003「多野郡吉井町に太宰府の軒丸瓦があった」『群馬文化276』

18）関口功一　2000「「古代集落遺跡の地域史的意義」岩田書院

19）神谷佳明　2001「緑釉陶器と古代上野国」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要19

20）「小八木志良戸遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　調査報告書

21）外山政子　1998「関東北西部の平安時代住居とカマド」『法政考古第24集』

22）石守　晃　1995「復元住居を用いた焼失実験の成果について」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　研究紀要14

23）大塚昌彦　1997「竪穴式住居復原考」『群馬考古学手帳７』

24）坂口一　1999「古墳時代水田における畦つくり過程の復元」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要16
斉藤英敏　2001「「小区画水田・極小区画水田の構造」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要19

25）深澤敦仁　1999「水田祭祀跡に関する覚書」「考古学に学ぶ－遺構と遺物－」同志社大学
「古墳時代水田から出土する遺物についての覚書」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要16

26）能登　健・小島敦子　1997「群馬県の水田・畠調査遺跡集成」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要14

27）新井　仁　2001「群馬県における平安時代の水田開発について」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要19
田中　雄　2002「群馬県内来里制研究資料の収集と解題」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要20

28）能登　健　2000「関東地方の畠」「畠の考古学」日本考古学協会
小島敦子　2000「洪水災害を受けた平安時代畠」「畠の考古学」前に同じ

29）飯島義男　2002「古代の灌漑用水遺構・牛堀の再検討」ぐんま史料研究第20号

30）大塚昌彦・石井克己・井上唯雄　1996「古代の牧と考古学調査」群馬文化245

31）「発掘された地調痕跡」1996　埋蔵文化財研究会

32）桜岡正信・神谷佳明　1998「金属器模倣と金属器指向」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要15。
桜岡正信　2003「武蔵型甕について」高崎市史研究17　など

33）2003『光仙所遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　調査報告書338集

34）「須恵器窯構造資料集１」1999　窯跡研究会

35）中沢　悟　1996「鈴鹿峠の基礎研究Ⅱ」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要13
高島英之・宮瀧交二　「群馬県出土の刻書紡錘車についての基礎研究」群馬県立歴史博物館紀要第23号
小林大吾　「群馬県出土の発火具について」群馬考古学手帳13

36）井上唯雄・松田　猛　1999「群馬県出土の墨書・刻書土器集成(3)」群馬県教育委員会

37）高島英之　2000『古代出土文字資料の研究』東京堂出版

38）坂詰久純　1998「群馬県境町保泉・丸山遺跡出土の銅印」国立歴史民俗博物館研究報告79
高島英之　1998「古代の私印について」前に同じ
高島英之　2001「群馬県榛名町高浜広神遺跡出土の平安時代焼印について」青山考古第18号

6　中世・近世

飯森康広・黒澤照弘

中　世

(1)　全国的な研究動向に即して

花の御所体制　地方の有力国人（武士）が館を造営する形態として、小島道裕が近年提唱しており、14世紀末に足利義満が作った花の御所を模倣して、地方の館を造営したことを指す（小島 2002）。公的な表空間である主殿と公的な奥空間である会所、当主の日常生活の場である常の御殿などを備えた建物様式である。岐阜県神岡町の江馬氏館や長野県中野市の高梨氏館などの発掘調査成果を具体例とする。こうした屋敷形態の受容は室町将軍が行う儀礼的な側面を生活様式として受容した結果である。この館空間の分析は、小野正敏による福井県の一乗谷朝倉氏館の分析（小野 1997）を発展的に継承した成果であるが、東国武士の館についても、早くから寝殿造りの系譜を引かない簡素な形態として対置されてきた。昨今、花の御所体制が幕府権力への憧憬に基づいた特異形態であることが再認識されることによって、むしろ在地レベルで発展してきた館形態の解明が重要さを増してきている。高崎市の矢島遺跡はそうした館の代表例と評価される。果たして東国の館形態はどのように存在するのか。系統立てた検討が当面の課題と考えられる。

掘立柱建物の研究　1998・1999年に奈良国立文化財研究所が行ったシンポジウム「掘立柱建物はいつまで残ったか」の成果が『埋もれた中近世の住まい』という報告であり、全国的な視野で中近世の掘立柱建物の構造変化や礎石建物への変換を扱った本格的な論集として、現在の到達点を知ることができる。こうした成果を受けてか、近年掘立柱建物跡に関する研究会が続いている。福島県考古学会中近世部会では「東北地方南部における中近世集落の諸問題　―掘立柱建物跡を中心として―」と題した研究大会が2000年に開催され、調査成果の地域的な集約が図られた。2001年の東北中世考古学会第７回研究大会「掘立と竪穴　一中世遺構論の課題―」では、掘立柱建物調査における根本的な問題提起として、調査における方法論と報告方法が問われた。中でも佐々木浩一が「図面に書いたものが柱穴である限り、全部の柱穴を使い切る覚悟・気合が必要」と述べたことに代表されるとおり、掘立柱建物跡に対する遺構論が熱く語られている。近年のこうした動向は、調査事例の蓄積を踏まえ、研究成果を再点検し今後の課題を方向づける作業として、新たな研究段階に入ったことを意味している。

(2)　中世の様相を探る

城館・屋敷　城郭の整備発掘調査が増加しており、新知見が得られている。太田市の金山城では地盤の金山石（凝灰岩）を使用した石垣があり、「顎止め石」技法が確認された。箕郷町の箕輪城では技法の異なる石垣が二時期存在し、古い段階のものは後北条氏に関係する鉢形城（埼玉県寄居町）の石垣に近似することが判明している。その他、平井金山城（藤岡市）や名胡桃城（月夜野町）などで縄張期以前の石垣の調査事例が増加している。織豊期城郭の発掘調査では、沼田城調査によって金箔瓦が発見され、豊臣政権の徳川包囲網の存在が想定されている。

屋敷調査では、前橋市の中内村前遺跡で12世紀まで遡る屋敷跡が発見された。遺構年代の比定にAMS法による放射性炭素年代測定が傍証となったことも注目される。建物からは17期の変遷が想定されており、屋敷構造を知る好資料となる。この他、高崎市南部から前橋市南部・伊勢崎市に至る北関東自動車道用地の調査では、百メートルを越えない規模を持つ大小様々な環濠屋敷が見つかっている。これらの違いは時期差や階層差も想定されるが、隣接する場合屋敷が集合する集落形態であると見なされるなど、今後の検討課題は多い。

集落　伊勢崎市の下植木窓町田遺跡では、一辺約37m規模の堀に囲まれた中世後期の屋敷遺構と堀外に広がる建物群が見つかった。飯森康広は全体を集落としてとらえるとともに、一町規模を指向する形態とそれを細分する意識を見いだした（飯森 2000）。

竪穴建物は階層差や職制差を示す建物として注目されるが、富岡市の一ノ宮本宿・郷土遺跡Ⅱは、竪穴住居（竪穴建物）24軒と掘立柱建物３棟で構成される集落遺跡である。こうした集落形態は想定されていたが、実際の事例がどのような要件を持つものか検討課題は多い。

建物　大江正行は県内の調査事例を集約、建物構造の時代変化を想定した。屋根構造の変化では15世紀前半以前に叉首組が多用され、15～16世紀までは垂木構造の切妻屋根、17世紀に至って民家建築で叉首組の小屋組が多用される。礎石使用は18世紀頃から徐々に使用されたとする（大江 1994）。

近年の調査成果で注目されるものとして、安中市の中宿在家遺跡・中宿在家Ⅱ遺跡は出土遺物も少ないが、12世紀以降存続した屋敷遺構と考えられている。主要建物を含む大部分の建物が総柱建物である点で注目される。中世後期の調査事例では、吉井町の神保植松遺跡で、戦国期国人領主の本拠城郭における建築の到達点を見ることができる。曲屋的な形態に複数の居室を造りだしている。掘立柱構造から礎石構造への変化に関して、玉村町の上福島中町遺跡では天明３年（1783）に浅間山噴火によって被災した集落が調査され、主屋は全て礎石建物へと移行していることが確認された。今後とも同時期の建物調査事例は増加するものと言え、地域差などを含め礎石建物の分布状況が注目される。

墓制・信仰　高崎市の小八木志志貝戸遺跡では、総数85

基という大規模な中世墓地が調査され、坂井隆によって墓域の性別や年齢差による分布や構成、使用石材や副葬品の差異、火葬や土葬の比率など多岐にわたる検討がなされた（坂井 2001）。被葬者の階層差は乏しく、大部分が土葬であることなど地域的な傾向がとらえられた。今後は他地域との比較研究が期待される。

藤岡市の上栗須寺前遺跡では、銅製の香炉・花瓶と舶載陶磁碗・皿が一括埋納される土坑が発見された。坂井隆は密教法具と三具足が混在し、陶磁器が転用されていることなどに着目し、全国的な埋納遺跡の傾向のなかで位置付けを行った（坂井 1997）。希少な事例ではあるが、当時の宗教的な習俗を知る貴重な成果である。

大量出土銭に関して、古くから出土例はあるものの、本格的な研究は立ち後れていた観がある。近年、山下歳信による上大屋中組遺跡（大胡町）ほかの詳細報告により、ようやく本格的な研究成果が見られるようになった（山下 1999）。

遺物　安中市の清水遺跡Ⅱ区では、15世紀後半に比定される土師質土器皿や内耳土鍋を生産した窯体３基が調査された。土師質土器皿の出土数は1000点を超える。大中小３種の規格が認められる。内耳鍋も口径約30cmを中心に大中小３種の規格が存在することが判明した。

土器の編年研究では、高崎市周辺資料を中心とする「新編高崎市史」の成果がある。星野守弘は内耳土鍋をⅠ～Ⅴ'期に、鉢をⅠ～Ⅵ期に編年した。志田登は土師質土器皿をⅠ～Ⅶ期に編年している（星野他 2001）。

前橋市の小島田八日市遺跡では15・16世紀の多量な土器に混じって、五輪塔部材・石鉢・鞍石・茶臼の未製品、五輪塔の石鉢転用加工途中品が出土した。遺構は不明瞭だが粗粒安山岩を主材料とする加工場の一部又は周辺と考えられている。近くには「あずま道」の推定ルートもあり、石材加工の拠点的な活動地と推定される。

交通と流通　中近世の幹線道とされる「あずま道」の調査例が増加している。前橋市の今井道下道上遺跡や高崎市の小八木志志貝戸遺跡などがある。坂井隆によれば、道幅は約２m前後で、原則両側側溝であるという（坂井 1999）。前橋市の小島田八日市遺跡では石造物加工との関連も窺える。「あずま道」に関しては文献史料が少なく、当面は考古資料からの解明が先行するだろう。

石造物石材の流通に関しては、笠懸町の天神山石材供給圏を追跡した国井洋子の業績（国井 1997）や、利根川流域の流通石材の分布と時代変化を網羅的に研究した秋池武の業績がある（秋池 1998）。谷藤保彦・山下歳信・水谷貴之は、県内出土の茶臼を集成し、形態的特徴や使用石材、用途などの分析を行なった（谷藤他 2003）。遺跡からの石造物出土例は多く集積しており、その統計的な解明が今後とも主流となっていくだろう。

（飯森康広）

近　世

(1)　全国的な研究動向に即して

近世遺跡の代表例として挙げられる江戸遺跡では、開発に伴う発掘調査例の増加により、成果を基にした研究も深まりを見せている。しかし、近世遺跡の調査例は、城郭などの特殊な遺跡、大消費地である江戸、大生産地にある窯跡がその大半であり、発掘対象が限定されているのが現状である。都市生活や窯業についての調査、研究が深まりを見せている一方で、村落の遺跡調査例は少なく、資料集成も僅ならない状況にあると言える。

陶磁器は、近世遺物の中でも盛んに研究されている分野である。消費地調査例の増加に伴う、年代比定が可能な出土陶磁器も増え、より詳細な編年もなされている。九州近世陶磁学会では、2001・2002年に開催された「国内出土の肥前陶磁　―東日本の流通をさぐる―」・「同―西日本の流通をさぐる―」のシンポジウムの中で、過去に肥前陶磁器が出土した遺跡を網羅する試みがなされている（九州近世陶磁学会 2001・2002）。瀬戸市埋蔵文化財センターにおいても、瀬戸・美濃大窯製品の出土した遺跡を全国規模で扱い、中国陶磁器の模倣をも視点に入れたより大きな論議がなされている（瀬戸市埋文センター 2001）。各地域の様相を大枠としてまとめたこれらの成果は、陶磁器研究が一定の深まりを見せている結果と言えよう。一方、漆器や木製品、金属製品などその他の近世遺物については、出土量も少なく資料集成の段階であり、研究の充実には至っていない。

(2)　県内の様相を探る

近世遺跡　県内においても近世遺跡調査例は少ない。前橋城や高崎城などの近世城郭における調査は見られるが、複合遺跡の中で近世遺構が調査される例が大半である。しかし、県内の近世遺跡には、他の都道府県には無い特筆すべき大きな特徴がある。それが、天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う火山性堆積物に埋没した遺跡の発掘調査である。嬬恋村の旧鎌原村発掘調査を端緒に、渋川市中村遺跡では水田や畑跡が出土し、玉村町上福島中町遺跡・吾妻町上郷岡原遺跡では火山性堆積物に埋没した村落が確認され、当時の様相を知る大きな手掛りとなっている。特に上福島中町遺跡と上郷岡原遺跡は、村落の詳細な景観をも復元できるほど良好な状態で出土しており、特筆すべき遺跡と言えよう。上福島中町遺跡では、陶磁器の他にも豊富な種類の近世遺物が出土しており、実年代が明確で多様な近世遺物が出土したことも重要な成果と言える。これら、両遺跡の発掘成果は、今後の近世考古学研究に大きな影響を与えるものと期待される。

火山性堆積物により埋没した耕地や村落の、復旧状況を知ることができる遺跡調査例も増えてきている。谷藤保彦は、降下火山灰と泥流により被災した高崎市上滝地区がどのように復旧したか、文献も活用し紹介している。

高崎市上滝榎町北遺跡などの調査例で確認された耕作痕や土坑には、耕地復旧工事としての痕跡や灰掻き穴と思われる土坑があるとの指摘もしている（谷藤 2002）。

関俊明と諸田康成は、長野原町久々戸遺跡の発掘成果を活用し、同地域に浅間A軽石が降下した日時を考古学的に検証しようと試みている（関・諸田 1999）。

発掘成果を文献と比較しクロスチェックする同様な手法は、赤堀町五目牛南組遺跡でも取られており成果を挙げている。五目牛南組遺跡では、近世から近代頃の屋敷跡が3区画確認されている。江戸期の村絵図や文献、町内に残る墓地などを調べた成果を活用し、屋敷跡の住人を特定することのできた稀少な調査例である（坂井 1992）。

陶磁器　群馬県内においても、概して小規模ではあるが窯業が営まれていた。大泉町では「小泉焼」が農家の副業として営まれていた。焙烙やカワラケなどが生産されていたが、寛文年間（1661～1673）頃になると十能も生産されるようになった。この十能の製造法に、桟瓦の製造法を取り入れたのが「小泉瓦（十能瓦）」であると言われている。安くて軽い小泉瓦は、人気もあり需要も多かったが、軟弱であるため販路は狭かったようである（大泉町誌編集委員会 1983）。小泉焼については、太田市東長岡芦井口遺跡など出土例は散見できるが（岩崎・木津 1999）、文献も少なく実態は不明瞭な部分が多い。大脇潔は、小泉瓦が全国的に見ても非常に珍しい形状をしており、それまでの瓦製作の流れとは異なり忽然と現れる特異なものであると指摘している。小泉瓦の普及時期についても、関東の桟瓦の普及時期を考慮し、幕末から明治頃ではないかとの考察も加えている（大脇 2001）。

富士見村には「皆沢焼」が営まれ、磁器焼成も行われていた。僅かではあるが、月夜野町後田遺跡などで出土例が確認されている（大江 1988）。皆沢焼については、古くは村誌の中で尾崎喜左雄により概要の紹介がなされている（尾崎 1954）。1950年代頃は、大生産地でさえより古い窯跡や窯業の姿を追い求めていた時代である。この頃に、幕末期の窯業を紹介することは極めて珍しく、現在の研究動向を考えれば先見の明がある。仲野泰裕は、採集した陶器や磁器、窯道具などを掲載し、皆沢焼における瀬戸・美濃からの影響を、類例を挙げて紹介している（仲野 1984）。大西雅広は、出土陶磁器から操業時期を検討するなど、より考古学的視点から皆沢焼を検証している（大西 1998ａ）。

皆沢焼が焼かれた場所は前橋藩領内であることから、前橋城本丸脇、群馬県庁北側付近で営まれていた「高浜焼」（前橋市）と深い関連があると指摘されている。加部二生は、文献を参考に高浜焼の概要を紹介し、採集資料を掲載している（加部 1989）。

砥石　南牧村砥沢では、江戸の開発を背景に多くの砥石が生産された。江戸時代を通し御用砥として幕府の保護を受けていた「砥沢砥」が、県内のみならず県外にも流通していたことは、文献から知られていた（南牧村誌編さん委員会 1981）。長野県松本市松本城下町跡本町第4次調査では、36・38号土坑内より合計4,859点もの多量の砥石が未使用の状態で出土しており、文献と同様に発掘調査からも、県内外に多量の砥沢砥が流通していたことが伺える（竹内 1998）。

内田祐治は、東京都清瀬市下宿内山遺跡より出土した534点の砥石を、共伴した陶磁器により時期区分をしている。砥沢砥の特徴である文献に記されていた「莫蓬目」が、18世紀頃の砥石に見られる「櫛歯ダガネ痕」ではないかと考察するなど、製作工程時の痕跡で時期が比定できる可能性を指摘している（内田 1990）。

火打金　「吉井火打金」は江戸遺跡でも出土例があり、広範囲に流通していたことが知られている。小林克は、東京都文京区真砂遺跡出土の火打石とともに、吉井火打金についても触れており、茨城県山方町産の火打石と吉井町で製作された火打金が、火打道具一式として「吉井」の商標で売られていたことを紹介している。「吉井本家」の登録商標のもと、東京（もしくは江戸か）でも火打金が生産されていたことも指摘している（小林 1994）。

大西雅広は、文献を参考に吉井火打金の概要を紹介し（大西 1997）、「あかりの資料館」所蔵の資料を中心に考古学的な視点で考察を加え、吉井町と東京（もしくは江戸か）で生産された吉井火打金の差異を判断することは難しいことを指摘している。出土火打金から普及時期は18世紀末から19世紀前半頃との考察も加えている（大西 2000）。また、小林大悟は、古代から近世にかけての県内出土発火具の集成を試みている（小林 2003）。

銭貨　大西雅広は、天明三年の浅間山噴火に伴う火山性堆積物下より出土した中村遺跡の出土銭を分類し、天明三年当時の銭貨構成を明らかにしている。旧鎌原村出土銭では、寛永通貨真鍮製四文銭96枚を一緡とした完全な「緡」を紹介し、文献のみ知られていた事実を考古学の面からも明らかにしている。また、この緡の中には鉄銭が含まれていることも指摘している。

寛永通貨以外の銭貨に「寶永通貨」がある。寶永通貨は、宝永５年（1708）関正月に通用令が出され、翌６年正月には通用停止となった極めて短命な銭貨である。通用停止後に引き替えが行われたが、停止後もかなりの数が回収されずに残っていたいたようで、旧鎌原村より出土した緡の中から確認された鉄銭も、こうした資料のうちのひとつと指摘している（大西 1998）。（黒澤照弘）

参考文献

相京建史・斎藤英敏　2002　「上滝榎町北遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

秋池　武　1998　「利根川流域中世石造物石材の流通と変遷」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号

秋本太郎　2002　「史跡箕輪城跡II」箕郷町教育委員会

浅川滋男他　2001　「埋もれた中近世の住まい」

飯森康広　2000　「伊勢崎市下植木老町田遺跡にみる中世集落」『群馬文化』第264号

石守　晃　2002　「中内村前遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎泰一・木津博明　1999　「東長岡戸井口遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

内田拓治　1990　「下宿内山遺跡出土の砥石」『清瀬市郷土博物館紀要』

大泉町誌編集委員会　1983　「大泉町誌」

大江正行　1988　「後田遺跡」II　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

大江正行　1994　「中世上野における建築遺構の傾向　―発掘調査された建築遺構を中心に―」『群馬における地域性の変遷』群馬県地域文化研究協議会編

大脇　潔　2001　「十能瓦考　―瓦の伝播と自生―」『古代』第109号

尾崎喜左雄　1954　「皆沢の瀬戸場」『富士見村誌』

大西雅広　1997　「上州吉井の火打金と火打石」『考古学ジャーナル』No.417

大西雅広　1998ａ　「「皆沢焼物場所」出土の資料について」『群馬の考古学』

大西雅広　1998ｂ　「天明の浅間焼けに埋もれた近世鉄資」『近世の出土銭II一分類図版篇一』

大西雅広　2000　「民具資料からみた吉井火打ち金　―あかりの資料館所蔵資料を中心として―」『群馬考古学手帳』10

小野和之　2003　「上福島中町遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

小野正敏　1997　「戦国城下町の考古学　―発掘からのメッセージ」

加藤二生　1989　「前橋高浜窯について　―化政期における殖産興業政策の失敗―」『群馬文化』217

九州近世陶磁器学会　2001　「国内出土の肥前陶磁　―東日本の流通をさぐる―」

九州近世陶磁器学会　2002　「国内出土の肥前陶磁　―西日本の流通をさぐる―」

国井洋子　1997　「中世東国における造塔・造仏用石材の産地とその供給圏―上野国新田荘の天神山凝灰岩を中心に―」『歴史学研究』第702号

小島道裕　2002　「京都から江戸へ」『天下統一と城』

小林　克　1994　「江戸遺跡から出土する火打石の生産地等について」『江戸遺跡研究会第七回・発表要旨　江戸時代の生産遺跡』

小林大悟　2003　「群馬県出土の発火具について」『群馬考古学手帳』13

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002　「年報」21

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2001　「戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品　―東アジアの視野から―」

坂井　隆　1992　「五目牛南組遺跡　―歴史時代編―」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂井　隆　1997　「群馬県上栗須寺前遺跡の堀跡遺物について」『貿易陶磁研究』No.17

坂井　隆　1999　「あづま道、上野のポスト東山道」「発掘された中世古道パート　2」中世みち研究会

坂井　隆他　2001　「小八木志志貝戸遺跡群３」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

杉山秀宏　1994　「小島田八日市遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

関　俊明・諏田康成　1999　「天明三年浅間災害に関する地域史的研究―北東地域に降下した降灰A軽石の降下日時の考古学的検証―」『研究紀要』16　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

千田茂雄他　2000　「清水遺跡II区」「安中市史」第４巻

東北中世考古学会編　2001　「掘立と竪穴　―中世遺構論の課題―」

竹内靖長　1998　「松本城下町跡　本町３・４次　伊勢町14～17次試掘調査報告書」松本市教育委員会

谷藤保彦他　1997　「神保植松遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

谷藤保彦　2002　「天明三年浅間山噴火後の構地復旧について　―高崎市上滝榎周辺の遺跡調査から―」「研究紀要」20　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

谷藤保彦・山下歳信・水谷貴之　2003　「群馬県内出土の茶臼について」『研究紀要』21　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

友廣哲也　1997　「中宿在家遺跡・上豊岡一里塚遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

仲野泰裕　1984　「群馬県勝多郡富士見村皆沢焼について」「愛知県陶磁資料館研究紀要」3

増崎修一郎他　2003　「遺跡は今【上郷岡原遺跡の調査】」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

南牧村誌編さん委員会　1981　「南牧村誌」

福島県考古学会中近世部会　2000　平成12年度研究セミナー資料　「東北地方南部における中近世集落の諸問題」

星野守弘他　1996　「新編高崎市史」資料編３　高崎市史編さん委員会

松島榮治　1994　「埋没村落跡原村発掘調査概報　―よみがえる延命寺―」嬬恋村教育委員会

宮田　毅他　2001　「史跡金山城跡環境整備報告書発掘調査編」太田市教育委員会

山下歳信他　1999　「上大屋中組遺跡・上大屋下組遺跡・上大屋天王山遺跡」大胡町教育委員会

横沢克明他　1986　「中村遺跡」渋川市教育委員会

信濃川中流域の黒色安山岩原産地試料

―― 新潟・長野県境周辺に産する石器石材の流通について ――

津 島 秀 章・井 上 昌 美

1．はじめに
2．信濃川中流域の地質学的概要と分析試料
3．黒色安山岩の原産地試料
4．成果と問題点

―― 論 文 要 旨 ――

筆者らは、これまでの研究により、群馬県周辺の原産地において黒色安山岩試料を追求するとともに、実際に、旧石器時代の石器に対して原産地分析を試みてきた。それによると、赤城山南麓地域の石器群では、武尊山産の黒色安山岩が多用される一方で、原産地不明と判定される黒色安山岩製石器も比較的多く認めらた。これらの石器は、これまでに追求してきた群馬県周辺産のものではなく、より遠距離地域産の黒色安山岩の可能性がある。

本稿では、この原産地不明である石器が、一体どこの原産地からもたらされたものであるのか追求した。具体的には、信濃川中流域の新潟・長野県境地域に産出する黒色安山岩に焦点をあて、それが偏光顕微鏡下でどのような特徴を有するのか理解した。そのことによって、群馬の赤城山南麓地域で原産地不明とされた黒色安山岩製石器の中に、信濃川中流域に産するものが含まれるのかどうか検討した。

その結果、信濃川中流域産の黒色安山岩は、その特徴から4グループに分類された。そして、今井道上・道下遺跡出土の石器の中に、信濃川中流域産の黒色安山岩と類似する特徴を有するものが認められた。また、武尊山産の黒色安山岩の一部と、当該地域産のものとがきわめて類似した特徴を有することが明らかとなり、そのことによって、三和工業団地Ⅰ遺跡と今井道上・道下遺跡の石器の中に、武尊山産あるいは信濃川中流域産のどちらか一方に決定できない石器が存在することが判明した。

このように、信濃川中流域産の黒色安山岩が群馬方面に流入していることをうかがわせる現象も認められるが、本稿の分析によって、そのように断定するのは時期尚早であり、その判定には、さらなる論考を待たねばならない。

キーワード

対象時代　旧石器時代
対象地域　中部日本
研究対象　石器石材、黒色安山岩

1．はじめに

群馬県内の旧石器時代石器群では、黒色安山岩(中東・飯島 1984)が最も多用される石器石材である。群馬周辺では、武尊山、荒船山、八風山、武子川流域に黒色安山岩の原産地が存在する(図1)。筆者らは、それらの原産地において黒色安山岩試料を追求するとともに(津島・桜井・井上 2001、2002)、実際に、旧石器時代の石器に対して原産地分析を試みてきた(井上・桜井 1999、津島 2003)。

これまでの原産地調査によって、黒色安山岩の産出について次のような状況を確認してきた(津島・桜井・井上 2001)。武尊山では、無斑晶質安山岩グループ(山口 1981)の複数の溶岩に黒色安山岩の産出起源が求められる。荒船山では、荒船山溶岩(友野・曽我・荻須・河内 1997)に黒色安山岩が産出する。八風山周辺では、八風山溶岩(野村・小坂 1987、友野・曽我・荻須・河内 1997)、香坂礫岩層(小坂・鷹野・北爪 1991)、八重久保層上部層(小坂・鷹野・北爪 1991)といった複数の層準において黒色安山岩が産出する。また、武子川流域では、産出起源となる層準は不明であるが、現河床に黒色安山岩円礫が多く認められる。

筆者らは、特に赤城山南麓地域の旧石器時代石器群に着目し、黒色安山岩製石器に対する原産地分析を試みている。これまでの分析結果によると、群馬県伊勢崎市の三和工業団地Ⅰ遺跡では、武尊山のものが多用され、八風山溶岩起源のものも少量利用されていることが明らかになった(井上・桜井 1999)。分析点数22点中、武尊山産と判定された資料14点、八風山溶岩とされた資料1点であった。また、前橋市の今井道上・道下遺跡では、母岩別資料を単位として分析がおこなわれ、やはり、武尊山の黒色安山岩が多用されている結果をえた(津島 2003)。7つの母岩別資料中、5つの母岩が武尊山のものであった。

この両遺跡では、原産地不明の黒色安山岩も比較的多く認められた。三和工業団地Ⅰ遺跡では、分析資料22点中、原産地不明の資料は7点あり、今井道上・道下遺跡では7母岩中、2母岩が原産地不明の資料であった。これらの資料は、筆者らがこれまで観察してきた群馬周辺の供給源【武尊山(無斑晶質安山岩グループの溶岩)、荒船山(荒船山溶岩)、八風山(八風山溶岩・香坂礫岩層・八重久保層上部層)、武子川流域】とは異なる産地の石材であり、より遠方の原産地より搬入された可能性も考えられる。

これらのことから、旧石器時代の黒色安山岩の利用に関して、三和工業団地Ⅰ遺跡や今井道上・道下遺跡が立地する赤城山の南麓地域では、武尊山といった比較的近い産地の石材が多用される傾向にある、といった見通しをえた。しかし、八風山といった比較的遠距離に位置する産地の石材も少量利用され、そしてまた、原産地不明とされたより遠方地域原産と考えられる石材も少なから

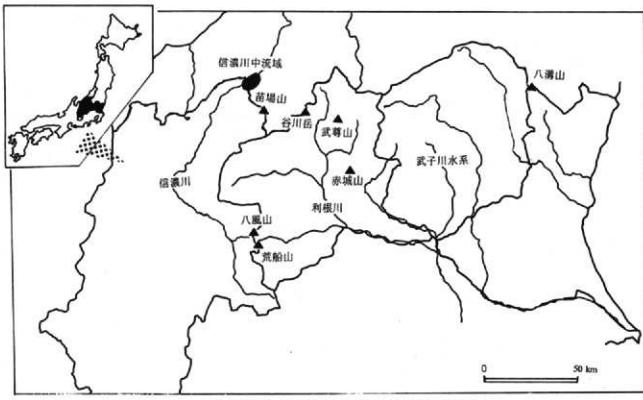


図1　群馬県周辺の黒色安山岩原産地、及び主要な河川と山

ず利用されることから、より広域から黒色安山岩が流入している可能性が高い。

以上のような、黒色安山岩製石器の原産地分析に関する研究動向を踏まえ、本稿では、前述したように原産地不明である石器が、一体どこの原産地からもたらされたものであるのか追求したい。具体的には、信濃川中流域の新潟・長野県境地域に産出する黒色安山岩に焦点をあて、それが偏光顕微鏡下でどのような特徴を有するのか理解したい。そのことによって、赤城山南麓地域で原産地不明とされた黒色安山岩製石器の中に、信濃川中流域に産するものが含まれるのかどうか検討したい。

2．信濃川中流域の地質学的概要と分析試料

信濃川中流域の新潟・長野県境地域で、石器石材として有用な黒色でガラス質の安山岩が産出することは、考古学的な立場から指摘されてきた（中村 1986、1995、山本 2000）。中村は、同地域に分布する魚沼層群に石器石材として有用な「黒色ガラス質安山岩」の産出起源があることを指摘した。また、山本は、信濃川支流の志久見川水系が黒色安山岩の主な産出地域であるとしている。ここでは、同地域に対する地質学的な理解をさらに深めることによって、黒色安山岩の供給起源となる層準について検討したい。

これまでの研究成果によって、当該地域の地質学的な様相が明らかにされている（島津・五十嵐・喜多・門馬・滝沢 1983、島津・五十嵐・高橋 1985、島津・立石 1993、志久見川団体研究グループ 1991、竹内・吉川・釜井 2000）。この中で、考古学的な石器石材（黒色安山岩）との関連が予想される部分をみると、志久見川団体研究グループによれば、新潟・長野県境付近の信濃川とその支流の流域に、「無斑晶質安山岩」または「ガラス質安山岩」の供給起源層が分布する（志久見川団体研究グループ 1991）（図２）。それらは、火山噴出物を主体とした魚沼層群とその基盤となる西田尻累層である。その中の複数の層準に「無斑晶質安山岩」または「ガラス質安山岩」との記載が見受けられる。地質学的な記載による岩石名称と、考古学サイドからの石材に対する認識が必ずしも一致するものでないことは経験的に明らかであるが、この「無斑晶質安山岩・ガラス質安山岩」という岩石名による限り、複数の層準に石器石材に適した黒色安山岩の産出起源が求められる可能性がある。表１に、魚沼層群と西田尻累層の中で、「無斑晶質安山岩」または「ガラス質安山岩」と記載のある層準を示した。対象となる層準は、２つの累層（東ノ沢累層・西田尻累層）と５つの部層（前子部層・極野部層・反里部層・小池川部層・中条川部層）、および貫入岩体であり、それらが信濃川の両岸地域といった広範囲に分布している。

原産地における黒色安山岩の岩石学的特徴を網羅的に理解するためには、その地域の地質学的な特質を理解した上で、供給起源となる層準から原産地試料を採取する必要がある（津島・桜井・井上 2001）。これまでの地質学的研究成果をみると、本地域の場合、地質学的な変遷過程が非常に複雑である。さらに、黒色安山岩産出の可能性のある層準、２つの累層と５つの部層および貫入岩体といったように複数層に及ぶ。現段階で、その中から黒色安山岩の産出起源となる単層を分別理解するのは困難であることから、それぞれの単層の露頭において、もれなく黒色安山岩試料を採取するのも事実上不可能である。このような理由から、今回の分析では、産出起源層の露頭に試料を求めることは断念し、現河床で試料を採取することとした。

しかし、起源層の露頭からの試料採取が困難である場合であっても、その地域における黒色安山岩の岩石学的特徴を把握するためには、少なくとも信濃川とその主要な支流において黒色安山岩試料を採取する必要があろう。このような考えから、信濃川とその主要な支流に河床礫調査地点を設定し、分析試料を採取することにした。

当該地域を概観すると、信濃川右岸に関しては、志久見川、中津川、清津川の３水系が信濃川に合流する状況が見受けられる（図３）。信濃川右岸側に産出する黒色安山岩を理解するためには、これら３水系の各流域に産出する黒色安山岩を網羅する必要があると考え、志久見川、中津川、清津川のそれぞれの最下流に試料採取地点を設定した（地点１・２・３）。一方、信濃川左岸をみると、

表１　無斑晶質安山岩・ガラス質安山岩と記載のある層準一覧　（志久見川団体研究グループ1991をもとに作成）

層準			層相	記載名	産出地域
前子部層	志久見川累層	魚沼層群	凝灰角礫岩・溶岩	無斑晶質安山岩	信濃川右岸
極野部層			火山礫・凝灰岩	ガラス質安山岩	
東ノ沢累層	―		凝灰角礫岩	無斑晶質安山岩	
西田尻累層	―	基盤層	火山砂岩岩	ガラス質安山岩	
反里部層	上郷累層	魚沼層群	凝灰角礫岩	無斑晶質安山岩	信濃川左岸
小池川部層			凝灰角礫岩	無斑晶質安山岩	
中条川部層	天水山累層		溶岩	無斑晶質安山岩	
その他			貫入岩体	無斑晶質安山岩	

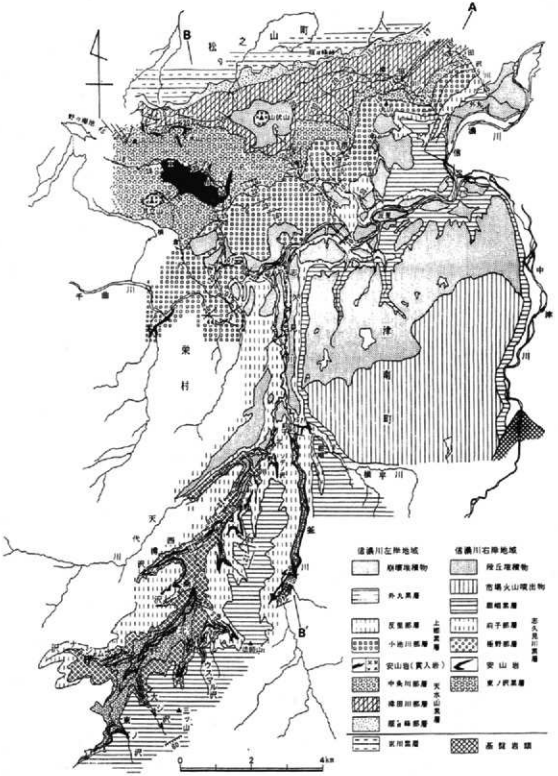


図2　信濃川中流域（新潟・長野県境地域）の地質図
（志久見川団体研究グループ1991より）

図3　黒色安山岩試料の採集地点

（国土地理院　5万分の1　「松之山温泉」「苗場山」使用）

地点1　志久見川最下流

地点2　中津川最下流

地点3　清津川最下流

地点4　中条川最下流

地点5　信濃川中流

右岸のような大きな水系は認められず、ごく小規模な河川がいくつも信濃川に流れ下る。このような状況から、左岸地域に関しては、「無斑晶質安山岩」を産出する層準の中で、反里部層を除く小池川部層・中条川部層・貫入岩体の分布地域内を流れる中条川を取り上げ、その最下流に試料採集地点を設けた(地点４)。また、本地域では、志久見川水系、中津川水系、清津川水系、中条川以外にも、いくつかの小支流が信濃川に合流しており、その流域に黒色安山岩が分布する可能性も否定できない。このような黒色安山岩を捕捉するために、全支流の信濃川合流点よりも下流側に位置する信濃川本流に試料採取地点を設定した(地点５)。

今回実施した各河川の河床礫調査結果をみると、本地域では、志久見川流域が主要な黒色安山岩原産地であると言え、山本の報告と矛盾はない。以下、各地点の調査結果と分析試料について記す。

地点１

長野県栄村、志久見川最下流の志久見橋付近の河原。比較的多くの黒色安山岩が存在する。１人あたり１時間で５個程度採取可能である。礫形状は亜角礫～亜円礫であり、長軸は約20cm以下のものがほとんどである。本地点で採取したものの中から、任意に５個体を抽出し分析試料とした(試料名：**志久見川最下流No.１～５**)。

地点２

新潟県津南町、中津川最下流の中津川橋付近の河原。黒色安山岩は、ごく少量認められる。１人あたり１時間で１個採取できるかどうかといった程度である。礫形状は亜円礫で、長軸約10cm以下である。また、灰～黒色でガラス光沢の劣る斑晶量の多い(1c㎡あたり10～20個程度)安山岩が少量見受けられる。これは、石器に利用されている石材と比較すると、質的にかなり劣るものであり、１人１時間あたり１～２個採取できる程度である。石器石材と同等の質を有するもので、本地点で採取できた１個体を分析試料とした(試料名：**中津川最下流No.１**)。

写真１　地点１　志久見川

写真２　地点２　中津川

地点３

新潟県中里村、清津川最下流の倉俣橋付近の河原。黒色安山岩を採取することはできなかった。灰～黒色の安山岩はごくわずか見受けられるものの(１人１時間で１個採取できるかどうかといった程度)、それらは石器に利用されている石材と比較して斑晶量が多く(１c㎡あたり10～20個程度)、ガラス光沢の劣るものである。岩石ハンマーで容易に打ち割ることができないほど堅硬である。

地点４

長野県栄村、中条川最下流の栄大橋付近の河原。黒色安山岩は、ごく少量認められる。１人あたり１時間で１個採取できるかどうかといった程度である。礫形状は亜円礫で、長軸約10cm以下である。また、灰～黒色でガラス光沢の劣る斑晶量の多い(１c㎡あたり10～20個程度)安山岩が少量見受けられる。これは、石器に利用されている石材と比較すると、質的にかなり劣るものであり、１人１時間あたり１～２個採取できる程度である。石器石材と同等の質を有するもので、本地点で採取できた２個体を分析試料とした(試料名：**中条川最下流No.１～２**)。

地点５

新潟県中里村、信濃川中流域の宮中橋付近の河原。黒色安山岩は、少量認められる。１人あたり１時間で１～２個採取できる程度である。礫形状は亜円礫～円礫で、長軸約10cm以下である。また、黒色でガラス光沢の劣る斑晶量の多い(１c㎡あたり10個程度)安山岩が少量見受けられる。これは、石器に利用されている石材と比較すると、質的に劣るものであり、１人１時間あたり１～２個採取できる程度である。石器石材と同等の質を有するもので、本地点で採取したものの中から任意に５個体を抽出し分析試料とした(試料名：**信濃川中流域No.１～５**)。

３．黒色安山岩の原産地試料

岩石薄片を作成するにあたっては、これまでの研究(井上・桜井 1999)から同一試料においても作成方向によりその特徴が異なる場合があることが確認されており、そ

の点が分類の基準になりうることもあるため、直交する二方向の薄片を作成した。本論では便宜的に片方をａ方向、もう一方をｂ方向と呼ぶこととする。

以下、各地点の黒色安山岩試料について記載する（表１、文末のカラー写真参照）。

(1) 志久見川

最下流No.１　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状で大きな斑晶は内部に汚れが目立つ。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石と斜方輝石を比べると、斜方輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。石基は細粒かつ粒状で鉄鉱物粒が目立つ。ガラス部分は少ないが淡い褐色を呈している。ａ方向の薄片では、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石が、方向性をもって配列している。ｂ方向ではこのような特徴はみられない。

最下流No.２　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状で大きな斑晶は内部に汚れが目立つ。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石は隅丸長方形、斜方輝石は短柱状で、両者を比べると単斜輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈し、鉄鉱物粒が目立つ。ガラス部分は少ないが淡い褐色を呈している。ａｂ両方向とも方向性のある配列は認められない。

最下流No.３　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状または正方形で大きな斑晶は内部に汚れがみられる。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石、斜方輝石は菱形や台形状で、両者を比べると単斜輝石がややを多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈し、鉄鉱物粒が目立つ。ガラス部分は少ないが淡い褐色を呈している。ａｂ両方向とも方向性のある配列は認められない。

最下流No.４　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状で大きな斑晶は内部に汚れがみられる。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石、斜方輝石は長柱状で、両者を比べると単斜輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈し、鉄鉱物粒が目立つ。ガラス部分は目立たない。ａ方向でわずかに方向性のある配列を示す部分があるが、全体的には認められない。

最下流No.５　斑晶量がかなり多い。斑晶の斜長石は長柱状で大きな斑晶は内部に汚れがみられる。また波動消光するものが多い。単斜輝石、斜方輝石は長柱状～隅丸方形である。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合し集斑状となるものが多い。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈し、鉄鉱物粒がやや目立つ。ガラス部分は目立たない。ａ方向の薄片では、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石が、方向性をもって配列している。ｂ方向ではこのような特徴はみられない。

(2) 中津川

最下流No.１　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状～短柱状で大きな斑晶は内部に汚れがみられる。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石、斜方輝石は長柱状～隅丸方形～円形で、両者を比べると単斜輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。また、斑晶と同程度の大きさの円形～不定形の空隙が多い。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈する。ガラス部分は少ないが淡い褐色を呈している。ａ方向の薄片では、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石があるが、ab両方向とも方向性のある配列は認められない。

(3) 中条川

最下流No.１　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状～短柱状で比較的大きな斑晶で方形や六角形に近い形状のものが多い。大きな斑晶は内部に汚れがみられる。単斜輝石、斜方輝石は柱状～隅丸方形で、両者を比べると斜方輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。また、斑晶と同程度の大きさの円形～不定形の空隙がやや多く存在する。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈する。ガラス部分は目立たず、鉄鉱物粒は少ない。ａ方向の薄片では、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石が、方向性をもって配列している。ｂ方向では、量的には多くないが同様な大きさの斜長石が長柱状を呈し、結晶の縁に細かな粒子が重なり石基部分との境界が不明瞭となる。方向性をもった配列はない。

最下流No.２　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状～方形で大きな斑晶は内部に汚れがみられる。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石、斜方輝石は柱状～楕円形で、両者を比べると斜方輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈する。ガラス部分は目立たない。ｂ方向の薄片では、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石が、方向性をもって配列している。ａ方向ではこのような特徴はみられない。

(4) 信濃川

中流域No.１　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状で比較的きれいである。単斜輝石、斜方輝石は柱状～円形で、両者を比べると単斜輝石がやや多い。また、斑晶と同程度の大きさの円形の空隙が少量みられる。石基は粗粒で、茶褐色の物質が隙間を埋める。ａ方向の薄片では、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石が、方

向性をもって配列している。また同様な大きさの円形の輝石が目立つ。b方向では斑晶と石基の中間的な大きさの斜長石が短柱状を呈し、結晶の縁に細かな粒子が重なり石基部分との境界が不明瞭となる。輝石は長柱状となる。いずれも方向性をもった配列はない。

中流域No.2　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状～短柱状で大きな斑晶は内部に汚れがみられる。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石、斜方輝石は柱状～円形で、両者を比べると斜方輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。また斑晶と同程度の大きさの円形の空隙が認められる。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈する。ガラス部分は目立たない。b方向の薄片では、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石が方向性をもって配列している。a方向では同様な大きさの斜長石が長柱状を呈し、結晶の縁に細かな粒子が重なり石基部分との境界が不明瞭となるものがある。

中流域No.3　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状～方形で斑晶内部に汚れはみられない。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石、斜方輝石は長柱状～円形で、両者を比べると単斜輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。また、斑晶と同程度の大きさの円形～楕円形の空隙が多い。石基はやや粗粒で斜長石は長柱状～針状を呈する。ガラス部分はあまり目立たないが黄褐色を呈する。a方向の薄片では、斜長石にやや方向性をもった配列が認められる。b方向ではこのような特徴はみられない。

中流域No.4　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は長柱状で斑晶内部に汚れはみられない。単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱物はわずかに見られる程度である。単斜輝石、斜方輝石は柱状～円形で、両者を比べると単斜輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在するものが多い。また、斑晶と同程度の大きさの円形の空隙がみられる。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈する。ガラス部分は目立たない。b方向の薄片では、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石が弱い方向性をもって配列している。a方向では同様な大きさの斜長石が柱状を呈し、結晶の縁に細かな粒子が重なり石基部分との境界が不明瞭となるものがある。

中流域No.5　斑晶量は少ない。斑晶の斜長石は柱状で斑晶内部に汚れはみられない。単斜輝石、斜方輝石はわずかに見られるが、鉄鉱物の斑晶は本試料中にはなかった。単斜輝石、斜方輝石は柱状～円形で、両者を比べると単斜輝石がやや多い。いずれの鉱物の斑晶も他のものと結合せずに単独で存在している。また、斑晶と同程度の大きさの円形の空隙がみられる。石基は細粒で斜長石は柱状～粒状を呈し、鉄鉱物粒が目立つ。ガラス部分は目立たない。a方向の薄片で、斑晶と石基の中間的な大きさで針状の斜長石と、柱状で結晶の縁に細かな粒子が重なり石基部分との境界が不明瞭となるものが共存する。a方向でわずかに方向性のある配列を示す部分があるが、全体的には認められない。

(5) 小　結

各地点の試料はその特徴から4タイプに分類することができる。Aタイプとしたものが最も多く、その中がさらに2つに分かれる。B、C、Dは各1点づつである。今回調査した信濃川の支流（志久見川・中津川・中条川）では試料の特徴が概ね類似し、河川によってタイプが異なることはなかった。しかし信濃川では今回調査した支流では得られなかったC・Dタイプの試料があり、他の

表2　試料観察表

	試料名	斑晶								石基				斑晶量 %	タイプ
		Pl	最大mm	Cpx	最大mm	Opx	最大mm	Mt	最大mm	組織	Pl	輝石	不透明	ガラス		
1	志久見川最下流No.1	○	0.9	△	0.2	△	0.3	△	0.1	Hp	◎	○	○	△	1.4	A
2	志久見川最下流No.2	○	0.8	△	0.4	△	0.5	△	0.2	Ig	◎	○	○	△	2.8	A'
3	志久見川最下流No.3	△	1.3	△	0.6	△	0.2	△	0.2	Ig	◎	○	○	△	0.8	A'
4	志久見川最下流No.4	○	0.8	△	1.0	△	0.2	△	0.2	Ig	◎	○	○	△	0.8	A'
5	志久見川最下流No.5	◎	1.0	○	0.8	○	0.8	○	0.3	Hp	◎	○	○	△	16.9	B
6	中津川最下流No.1	○	0.6	△	0.3	△	0.2	△	0.2	Ig	◎	○	○	△	3.8	A'
7	中条川最下流No.1	○	1.0	△	0.2	△	0.2	○	0.2	Hp	◎	○	△	△	3.0	A
8	中条川最下流No.2	○	0.9	△	0.4	△	0.5	△	0.2	Hp	◎	○	○	△	5.1	A
9	信濃川中流域No.1	○	1.0	△	0.8	△	0.2	○	0.2	Ig	◎	○	△	△	4.4	C
10	信濃川中流域No.2	○	0.7	△	0.2	△	0.4	△	0.2	Hp	◎	○	△	△	1.7	A
11	信濃川中流域No.3	○	0.5	△	0.4	△	0.2	△	0.1	Hp	◎	○	△	△	0.7	D
12	信濃川中流域No.4	○	0.8	△	0.2	△	0.1	△	0.1	Hp	◎	○	△	△	0.4	A
13	信濃川中流域No.5	○	0.7	△	0.2	△	0.2	－	－	Ig	◎	○	○	△	0.7	A'

Pl…斜長石　Cpx…単斜輝石 Opx…斜方輝石 Mt…鉄鉱物　Hp…ガラス基質晶質、Ig…間粒状

支流に産するものが流下しているものと考えられる。各タイプの特徴は以下の通りである。

Aタイプ（A一志久見川最下流№1、中条川最下流№1・2、信濃川中流域№2・4、A'一志久見川最下流№2・3・4、中津川最下流№1、信濃川中流域№5）石基は細粒で、単ニコルでの色調は灰色を呈する。薄片の作成方向によって斜長石が定向配列をするもの（A）と、両方向とも定向配列が認められないもの（A'）がある。斑晶は少なく、比較的きれいで、単独で産するものが多い。石基部分は、武尊山の水上高原スキー場上位溶岩、セビオス岳の極角礫、玉原スキー場溶岩下の極角礫（津島・桜井・井上 2001）と似る。

Bタイプ（志久見川最下流№5）　石基はAタイプに似るが、斑晶量が非常に多い。今回調査した他試料は単独斑晶が多いが、この試料は集斑状となる。

Cタイプ（信濃川中流域№1）　石基は粗く、単ニコルでの色調はうす茶色を呈し、ab 方向で見え方が全く異なる。斑晶は少ない。今井道上・道下遺跡の産地不明母岩4・7（津島 2003）と似る。

Dタイプ（信濃川中流域№3）　石基がやや粗く、単ニコルでの色調は黄色味がかった茶色である。斑晶は少ない。円形～楕円形の空隙が多い。

4．成果と問題点

偏光顕微鏡の通常観察により、分析試料は4タイプに分類された。その中でも、全分析試料13点中、10点がAタイプである。志久見川採取試料5点のうち4点がAタイプであり、中津川、中条川採集試料も全てこのタイプである。よって、当該地域にあっては、Aタイプが主要な黒色安山岩のタイプであると考えられる。しかしながら、それ以外のタイプの試料も、3点存在する。志久見川（地点1）では1点（Bタイプ）あり、信濃川（地点5）では2点（C・Dタイプ）認められた。このことから、Aタイプが主要なものであるが、それとは異なる特徴をもつ黒色安山岩が、低い割合であるが複数タイプ存在することになる。

本稿の主な目的は、赤城山南麓地域の三和工業団地Ⅰ石器群と今井道上・道下石器群において、原産地不明とされた黒色安山岩製石器の中に、信濃川中流域に産するものを含むかどうか検討することであった。三和工業団地Ⅰ石器群では、分析資料22点のうち7点の資料が原産地不明とされた（井上・桜井 1999）。また、今井道上・道下石器群では、7つの母岩別資料のうち2つの母岩別資料が原産地不明と判断されている（津島 2003）。

今回の偏光顕微鏡下の観察から、Cタイプと分類した試料1点（信濃川中流域№1）が、今井道上・道下石器群でCタイプと分類された石器2点（母岩4・接合1・№146、母岩7・接合外・№177）と類似した特徴を有する結果を得た。しかし、この今井道上・道下石器群の石器2点が、信濃川中流域産のものであるかどうかについては、慎重な態度が必要である。それは、今回、Cタイプと分類された試料は、全分析点数13点中の1点に過ぎず、信濃川中流域において主要なタイプとは言えないからである。僅かな数量しか存在しないと予想される石器石材が、信濃川中流域で偶然的に採取され、遠距離地域である群馬方面にもたらされたと考えるのは現段階では無理がある。今の段階では、今井道上・道下石器群のCタイプの黒色安山岩製石器2点に関しては、信濃川中流域に類似するものが存在する程度に止めるのが妥当であろう。この問題を解決するためには、信濃川中流域において河床礫調査や黒色安山岩の供給起源層調査をさらに積み重ね、Cタイプの動向を深めることと、群馬県下の他石器群におけるCタイプ石器の動向を追跡することを経て、再度、検討することが望まれる。

また、今回、Aタイプと分類された試料は、武尊山を原産地とする黒色安山岩の一部と きわめて類似した特徴を有する。筆者らがこれまで実施してきた原産地試料の分析から、武尊山に産する黒色安山岩は、少なくとも4つのタイプに分類されることが確認されている（津島・桜井・井上 2001）。その中で、「水上高原スキー場上位溶岩・セビオス岳の極角礫・玉原スキー場溶岩下の極角礫」として分類した一群が、今回のAタイプと類似した特徴を有する。この武尊山原産の黒色安山岩には、斑晶が集斑状を呈するものが認められるといったAタイプとの違いも観察される。しかし、石基部分に関しては、きわめて類似した特徴を示す。

一方、これまで遺物に対しておこなってきた原産地分析から、「水上高原スキー場上位溶岩・セビオス岳の極角礫・玉原スキー場溶岩下の極角礫」と同等の特徴を有することから、武尊山原産と判定された石器は以下のとおりである。

○三和工業団地Ⅰ遺跡出土石器の2点（井上・桜井 1999）
　№249　№362

○今井道上・道下遺跡出土石器の2点（津島 2003）
　母岩3・接合1・№129　母岩5・接合1・№171

今回Aタイプと分類された試料が、武尊山産の一部の試料と類似した特徴を示すことから、これらの過去の論考により武尊山産と同定された石器に関しては、武尊山産と信濃川中流域産とに分離される可能性がある。三和工業団地Ⅰ遺跡で武尊山産と判定された資料は14点あり（井上・桜井 1999）、そのうち武尊山産と信濃川中流域産のどちらとも判定不能な石器は、前述の2点含まれることになる。また、今井道上・道下遺跡では、武尊山産とされた資料は5つの母岩別資料であり（津島 2003）、そのうち信濃川中流域産とに分別不能なものは2つの母岩別資料となる。これらのことから、赤城山南麓地域に

あっては、旧石器時代には武尊山原産の黒色安山岩が多用される、というこれまでの見通しを変更する必要はないと考えられる。しかし、武尊山産または信濃川中流域産のどちらか一方に決定困難な石器が存在することになる。今後この問題の解決のためには、今回の分析で認識することができなかった偏光顕微鏡下における両産地石材の相違点を、さらに追求することが望まれる。

本稿の分析からは、信濃川中流域に産する黒色安山岩の群馬地域への流入に関しては、不確実な部分を残すこととなった。今回のCタイプと類似した石器が、今井道上・道下石器群で認められ、Aタイプと分類された試料が、武尊山産の一部の試料やこれまで武尊山産と同定された石器の一部ときわめて類似した特徴を有することが明らかとなった。信濃川中流域の石材を直線的なルートで群馬方面に搬入するためには、谷川岳をはじめとする2000m級の山々が連なる急峻な上信越山脈を越える必要がある。よって、同地域の黒色安山岩の群馬地域への流入に関しては、慎重な立場にならざるをえない[2]。しかし現段階で、今回の分析による限り、信濃川中流域産の黒色安山岩が赤城山南麓地域にまで流通している可能性を完全に否定することはできない。また一方で、新潟県六日町地域に産する黒色頁岩が、群馬に流通している可能性も指摘されていることから（飯島 2002）、そういった地形的要素とは無関係に、純粋に考古学的立場から石材の流入を論ずることも重要であろう。

そのためにも、今後、今回浮かび上がった問題点二点を解決する研究方向が望まれる。その第一に、信濃川中流域の河床礫調査や供給起源層調査を積み重ね、Cタイプ試料の動向を深めることと、群馬県下の他石器群におけるCタイプ石器の動向を追跡することが求められる。このことを経て、Cタイプ黒色安山岩の群馬地域への流入に関しては、より蓋然性の高い議論が可能であると考える。また第二に、Aタイプの黒色安山岩と武尊山産の一部が類似した特徴を有し、実際に、群馬において信濃川中流域産と武尊山産とに分別不可能な石器が認められることから、偏光顕微鏡下における両産地石材の相違点をさらに追求することが必要である。これによって、両産地の黒色安山岩を分別する道が開け、やはり、信濃川中流域産の黒色安山岩の流通について、蓋然性の高い議論ができよう。

謝辞　本稿を記すにあたり、飯島静男氏には、地質学的、岩石学的内容に関して様々ご教授頂いた。山村英一氏には、黒色安山岩の試料採取をご協力頂いた。紙上を借りて感謝いたします。

注

1）八風山溶岩を供給起源とする黒色安山岩は、群馬県側の諸岡川では採取することができず、長野県側の香坂川で採取可能であることが確認されている（桜井・井上・関口 1993）。また、八風山溶岩を起源とする黒色安山岩が、香坂川水系の上流域から中流域に採取可能地域が限られることも確認されている（津島・桜井・井上 2002）。

2）八風山溶岩に供給起源をもつ黒色安山岩が、赤城山南麓地域の下触牛伏遺跡（磯貝 1995）や三和工業団地Ⅰ遺跡（井上・桜井 1999）で石器石材として利用されていることから、長野方面より関東平野へ通じる群馬西域の峠越えルートは既に存在していたといえる。

仮に、信濃川中流域産の黒色安山岩が群馬方面にもたらされていたとすると、信濃川中流域から信濃川をさかのぼり野沢湖周辺を経由して、この群馬西域の峠ルートから搬入された可能性も指摘できよう。

引用文献

飯島静男　2002「谷川連峰の地形・地質」『みやま文庫168　谷川連峰の自然』14～56頁

磯貝基一　1995「群馬における石器石材」『第3回岩宿フォーラム/シンポジウム予稿集』7～12頁

小坂共栄・鷹野智由・北爪　牧　1991「関東山地北西部の第三系（その1）―長野県東部香坂川～内山川流域、特に駒込層の地質とその堆積学的意義について―」『地球科学』45-3、43-56頁

井上昌美・桜井美枝　1999「第4文化層出土黒色安山岩の分析」『三和工業団地Ⅰ遺跡(1)―旧石器時代編―群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第246集』222-225頁

桜井美枝・井上昌美・関口博幸　1993「群馬県における石器石材の研究(1)―綿川流域における石器石材の調査―」『財群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』11　1-14頁

志久見川団体研究グループ　1991「新潟―長野県境地域の魚沼層群の層序と火山活動」『地球科学』45-5、345-362頁

島津光夫・五十嵐聡・喜多孝行・門馬直一・滝沢松雄　1983「千曲川および中津川流域の鮮新―更新世火山岩類」『地団研専報』26　47-56頁

島津光夫・五十嵐聡・高橋尚晴　1985「北部フォッサマグナ、津南―志賀地域の新第三系の地質構造と解新―更新世火山」『新潟大・理・地鉱研究報告』5　79-90頁

島津光夫・立石雅昭　1993「地域地質研究報告・苗場山地域の地質」地質調査所

竹内圭史・吉川敏之・釜井俊孝　2000「地域地質研究報告・松之山温泉地域の地質」地質調査所

津島秀章・桜井美枝・井上昌美　2001「黒色安山岩の原産地試料―群馬周辺を中心として―」『財群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』19　139-156頁

津島秀章・桜井美枝・井上昌美　2002「黒色安山岩の採取可能地域―長野・香坂川流域を中心として―」『財群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』20　1-9頁

津島秀章　2003「石器石材の運用について―黒色安山岩製石器の原産地分析から―」『財群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』21　1-14頁

友野裕一・曽我部純・荻須友子・河内晋平　1997「関東山地北西部の鮮新世火山岩類」『信州大学教育学部付属志賀自然研究施設研究業績』341-349頁

中東耕志・飯島静男　1984「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材―黒色頁岩と黒色安山岩―」『群馬県立歴史博物館報』5　28-36頁

中村由克　1986「野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器石材」『信濃』38-4、1-16頁

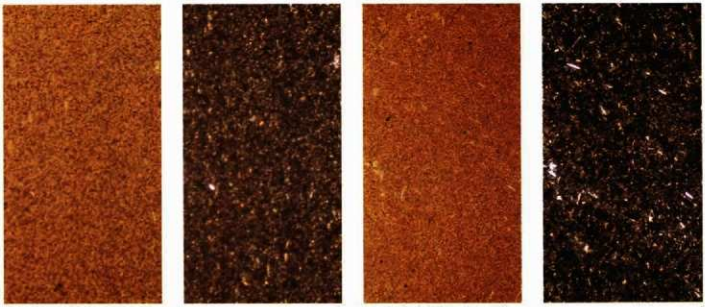
中村由克　1995「長野・新潟における石器石材について」『第3回岩宿フォーラム/シンポジウム予稿集』46-49頁

野村　哲・小板英栄　1987「群馬県南西部の新第三系の地質構造発達史」『群馬大学教養部紀要』21　51-68頁

山口義志　1981「武尊火山の地質」『地質学雑誌』87-12、823-832頁

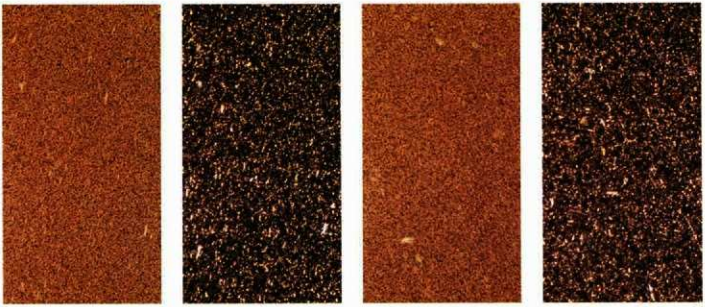
山本　克　2000「4．周辺の石材環境」『津南町文化財調査報告書　第32号　下モ原Ⅰ遺跡』25-30頁

志久見川最下流No.1(地点1) a　a′　b　b′
Aタイプ



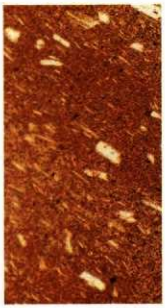
志久見川最下流No.2(地点1) a　a′
A′ タイプ

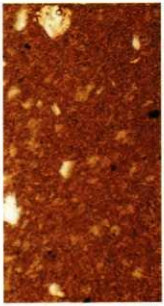
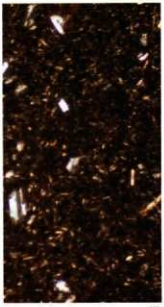
志久見川最下流No.3(地点1) a　a′
A′ タイプ



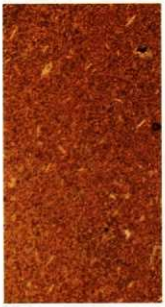
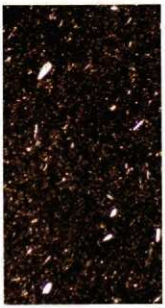
志久見川最下流No.4(地点1) a　a′　b　b′
A′ タイプ

黒色安山岩の薄片の偏光顕微鏡写真(1)　a,b　：平行ニコル　　a′,b′　：直交ニコル×50

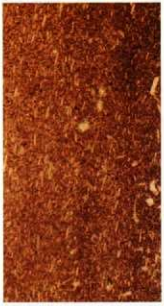


志久見川最下流No.5(地点1) a a′ b b′
Bタイプ

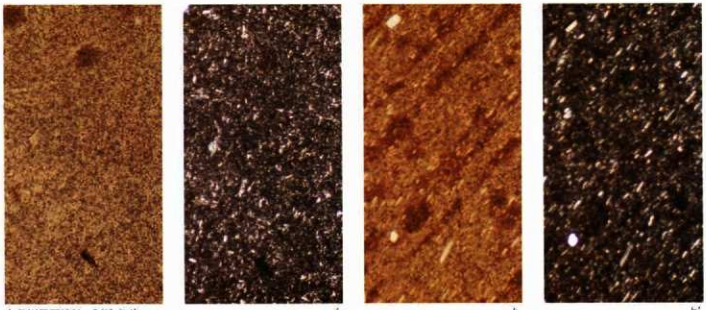



中津川最下流No.1(地点2) a a′ b b′
A′ タイプ

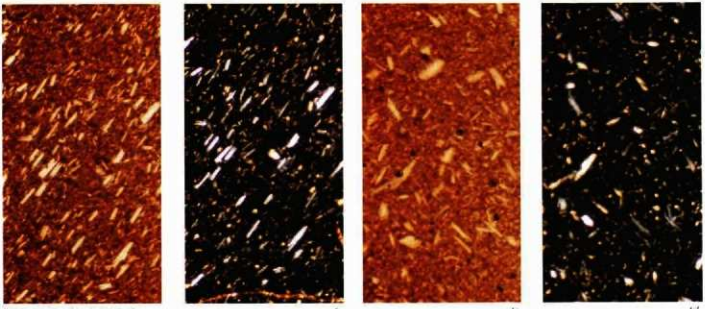


中条川最下流No.1(地点4) a a′ b b′
Aタイプ

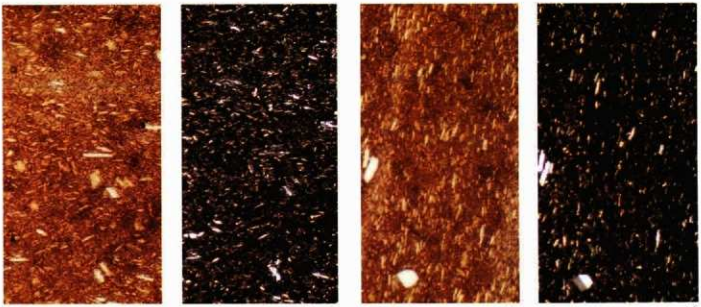
黒色安山岩の薄片の偏光顕微鏡写真(2) a,b ：平行ニコル　　a′,b′ ：直交ニコル×50



中条川最下流No.2(地点4)　a　a′　b　b′
Aタイプ

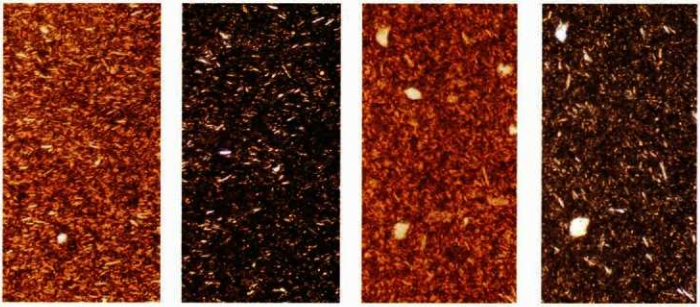


信濃川中流域No.1(地点5)　a　a′　b　b′
Cタイプ

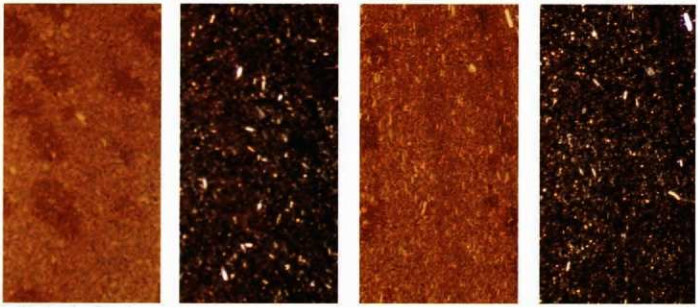


信濃川中流域No.2(地点5)　a　a′　b　b′
Aタイプ

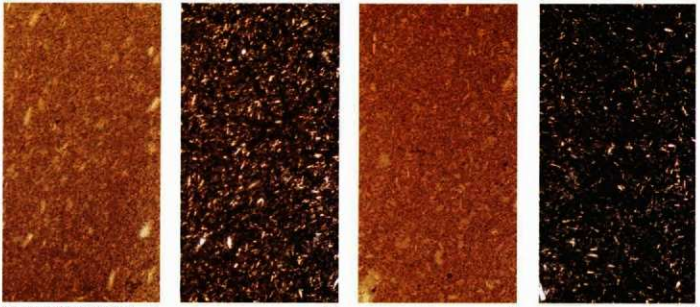
黒色安山岩の薄片の偏光顕微鏡写真(3)　a,b　：平行ニコル　　a′,b′　：直交ニコル×50



信濃川中流域No.3(地点5)　a　　a'　　b　　b'
Dタイプ



信濃川中流域No.4(地点5)　a　　a'　　b　　b'
Aタイプ



信濃川中流域No.5(地点5)　a　　a'　　b　　b'
A' タイプ

黒色安山岩の薄片の偏光顕微鏡写真(4)　a,b　：平行ニコル　　a',b'　：直交ニコル×50

砂川期石器群における石器製作構造

―― 東長岡戸井口遺跡出土石器群の分析から ――

関 口 博 幸

1．はじめに
2．東長岡戸井口遺跡の概要
3．石器群の分析
4．まとめ
5．おわりに

―― 論 文 要 旨 ――

関東平野北西部、群馬県における後期旧石器時代の遺跡数を層位的に概観すると、AT 下層の暗色帯の段階では遺跡数は多く、各地で遺跡が発見されている。しかし、浅間板鼻褐色軽石層群（As-BP 層群）より上層の段階になると遺跡数は減少し、特に砂川期の遺跡は極めて少なくなるのが現状である。遺跡数が減少するこの時期の様相は相模野台地や武蔵野台地など遺跡数が増加する関東平野南部の様相とは全く対照的である。

砂川期に典型的な石刃石器群を持つ遺跡が極端に少ない一方で、石刃石器群に共伴することの多い黒曜石製の男女倉型有樋尖頭器を持つ遺跡は北山Ｂ遺跡や神保富士塚遺跡など、県内に点々と残されている。また、有樋尖頭器と彫器などを組成する石器群が下触牛伏遺跡や今井三騎堂遺跡などで発見され、類例も増えつつある。これらの石器群と砂川期の石刃石器群との関係を追究することが、関東平野北西部を含めた関東平野一帯における砂川期の石器群全体の解明につながるものと判断し、そのためにはまず砂川期石器群の基本的な石器製作構造を理解することが必要であると考えた。

本論では、良好な石器組成や接合資料を持つ東長岡戸井口遺跡Ａ地点第１文化層の石器群を分析し、砂川期の石器製作構造がどのようなシステムから構成されているのかを確認することを目的とした。その結果、石刃生産システム、不定形剥片生産システム、槍先形尖頭器製作システムの三つのシステムから構成されることを確認し、槍先形尖頭器製作システムは石刃生産システムに併行するが、特定の遺跡に限定されて展開するものと捉えた。

キーワード

対象時代　旧石器時代
対象地域　群馬県
研究対象　石刃生産・不定形剥片生産・槍先形尖頭器製作

1．はじめに

後期旧石器時代、南関東で砂川期として編年区分される石器群に関する研究はここ数年で大きく進展している。それは次のような二つの研究の潮流による。

第一に、2000年に石器文化研究会によって「砂川―その石器群と地域性―」と題してシンポジウムが開催され、砂川期石器群研究の集大成といえる多角的な視点からの研究成果が発表されたことによる。その内容をいくつか例にとれば、関東地方（特に相模野台地と武蔵野台地）を中心として、砂川期の時間的な位置付けの整理（諏訪 間 2000）、空間的な地域細分と石材組成の特徴の抽出（西井 2000）、再度原点となる砂川遺跡におけるナイフ形石器の技術形態学的視点からの分析（勝山 2000）、石刃石器群とされるⅥ層段階と砂川期の石器組成・石材組成・ナイフ形石器の形態・剥片生産技術の比較分析を通した共通性と異質性の抽出（服部 2000）、台地外石材に着目した石材消費連鎖の分析よる集団領域の追究と行動論的理解によるナイフ形石器と槍先形尖頭器との製作・使用・再加工そして廃棄をめぐる運用体系に関する重要な提言（国武 2000）。これによって砂川期石器群については、相模野台地を例にすれば、層位的にはＬ２層からＢ１層にかけて出土すること（特にＢ１層下部に多い）、編年的位置付けはⅣ期前半（諏訪間・堤 1985）、段階Ⅵ（諏訪間 2003）に相当すること、石器組成は石刃と石刃素材の二側縁加工・部分加工のナイフ形石器を中心に彫器や削器、そして槍先形尖頭器（特に黒曜石製両面調整や男女盆型有樋尖頭器（堤 1988））を少量組成すること、剥片生産技術は石刃技法を多用することなど、基本的な共通理解がなされたといえる。

第二に、槍先形尖頭器に焦点を当てた研究の潮流である。その一つは平成13年千葉県立房総風土記の丘による『槍の身振り』と公開シンポジウム『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉』の開催、二つ目には田村隆氏による房総半島における尖頭器石器群の一連の研究よる。特にバイフェース・リダクション（第三項）による石材消費戦略により後期旧石器時代全般を貫く石器製作構造である二項的構造が解体・再編される「第三項効果」概念の提示は重要である（田村 2001、2002）。三つ目には堤隆氏による黒曜石製有樋尖頭器の製作・使用・運搬・再加工そして廃棄に至るライフヒストリーをめぐる遺跡間連鎖に基づく「男女盆効果」の提示（堤 2002）、四つ目には国武貞克氏による有樋尖頭器の地域的な運用体系と石刃石器群との関係の研究（国武 2001）と長沼正樹氏による両面調整石器の研究（長沼 2003）による。

このように砂川期石器群の研究が進む状況ではあるが、「砂川型刃器技法」（戸沢 1968）の設定基準が研究者間で異なり石器群の理解を複雑にしている[1]、細部にわたる詳細な石器群分析に進む一方で、砂川期石器群の石器製作構造がどのように成り立っているのか基本的な共通理解がなされていないこと、特に従来「構造外的存在」（宮塚他 1974）と評価されてきた槍先形尖頭器については、砂川期石器群に組成するという点で共通理解が図られる一方で、製作に関する言及がなく未だに「構造外的存在」としての評価しか与えられておらず、槍先形尖頭器の製作システムを砂川期の石刃石器群を中心にした石器群全体のなかにどのような位置付けるかが今後の課題として残ったように思われる[2]。

砂川期の石器群は、剥片生産技術が石刃技法に大きく偏り、石器組成も石刃及び石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器を主体にした石刃石器群で、これに槍先形尖頭器が極少量組成することを特徴とする。特に槍先形尖頭器は素材の獲得方法や製作技術（平坦調整による細部調整加工）、石材（黒曜石を多用）がナイフ形石器とは異質であること、遺跡内での製作痕跡を持たずに廃棄されることが特徴である。こうした当該期の石器群の石器製作構造について、かつて筆者は相模野台地における石器群の分析から、石刃技法によるナイフ形石器製作システムと平坦調整を採用した槍先形尖頭器製作システムの二つのシステムから石器製作構造は構成され、前者は個々の遺跡で発現されるに対して、後者は特に黒曜石原産地で局所的に発現されること、槍先形尖頭器は遺跡間を持ち運ばれながら、修正・再加工を繰り返して小型化し最終的に遺跡に廃棄される管理的道具であると述べたことがある（関口 1992）。

ところで、利根川中上流域の関東平野北西部（特に赤城山南麓地域）では砂川期の遺跡は非常に少なく[3]、当該期の遺跡が集中する相模野台地を中心とした関東平野南部の遺跡分布状況とは全く異なる。しかし、砂川期に典型的な石刃石器群は極めて少ないものの、黒曜石製の男女盆型有樋尖頭器を組成する遺跡は鏑川流域の北山Ｂ遺跡や神保富士塚遺跡[4]、赤城山南麓の岩宿遺跡のように点々と残されている[5]。また赤城山南麓地域には、左右非対称形の有樋尖頭器に彫器やナイフ形石器、石刃を組成する下触牛伏遺跡、黒曜石製の左右非対称形の有樋尖頭器や彫器を組成する今井三騎堂遺跡、左右非対称形の槍先形尖頭器に彫器を組成する光仙房遺跡のような石器群が存在する。これらの石器群は砂川期の石器群全体を理解する上で重要で、関東平野に展開する砂川期の石刃石器群及びそれに組成する有樋尖頭器を含めた槍先形尖頭器の様相を理解するためには、信州黒曜石原産地と関東平野南部とを結ぶ関東平野北西部におけるこれらの石器群の様相を追究することが必要と考えている。

本論では、関東平野北西部の砂川期石器群と槍先形尖頭器の理解に向けて、まずは砂川期の基本的な石器製作構造がどのように構成されているのかを確認することを目的とする。分析対象とする資料は、石器組成や接合資

料に良好な資料を持つ群馬県太田市所在の東長岡戸井口遺跡A地点第1文化層出土の石器群である。

2．東長岡戸井口遺跡の概要

(1) 概　観

東長岡戸井口遺跡は群馬県の南東部、太田市東長岡町に所在し、渡良瀬川右岸の台地上に立地する（図1）。まず関東地方という視点で俯瞰すれば、渡良瀬川流域と大間々扇状地を中心とする赤城山南麓地域一帯は関東平野の北西端部にあり、広大な平野部と赤城山や榛名山といった山地部との境界部に位置する。次に周辺の地形を概観すると、遺跡の東側は渡良瀬川が群馬・栃木県境を南東方向へと流れやがて利根川に合流する。渡良瀬川左岸の栃木県側は足尾山地となる。一方、遺跡の西側は標高223m程の金山丘陵と標高293m程の八王子丘陵が広がる。さらに丘陵の西側は、広大な裾野を持つ赤城山の南麓になり、旧渡良瀬川によって形成された大間々扇状地が広がっている。渡良瀬川は過去数万年の間、西から東へと流れを変えながら扇状地形を形成してきた。また、金山・八王子丘陵には足尾層群が見られることから、足尾山地と連続する一つの山地であったが、渡良瀬川の変流に伴って分断されたものと考えられている（山内1996）。

赤城山南麓及び大間々扇状地一帯では、研究史の中で重要な位置を占める岩宿遺跡や藪塚遺跡、武井遺跡、環状ブロック群の発見により旧石器時代の集落研究に画期を与えた下触牛伏遺跡や同じく環状ブロック群の発見された三和工業団地Ⅰ遺跡などこれまで多数の遺跡が発見

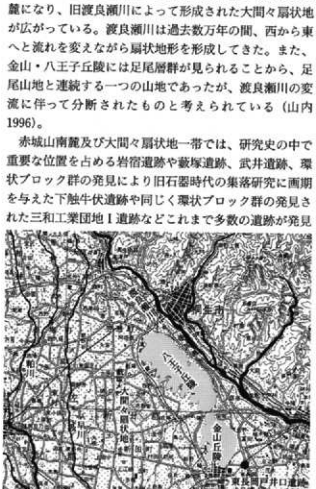


図1　遺跡位置図

されているが、渡良瀬川流域における旧石器時代遺跡の調査例はほとんどなく、本遺跡がはじめての本格的な調査例になるといってよい。

(2) 出土層位

遺跡の基本土層と火山灰との関係は次の通りである。Ⅲ層（暗褐色土層、縄文包含層）、Ⅳ層（黄褐色ローム層、As-YP 層準）、Ⅴ層（暗褐色軟質ローム層）、Ⅵ層（暗黄褐色軟質ローム層 As-Ok 1 層準）、Ⅶ層（黄褐色硬質ローム層）、Ⅷ層（暗黄褐色硬質ローム層 As-BP 層準）、Ⅸ層（明褐色軟質ローム層）、Ⅹ層（暗褐色軟質ローム層、暗色帯で上部が AT 層準）、Ⅺ層（暗褐色硬質ローム層）、Ⅻ層（暗褐色硬質粘質土層、Ag-KP を含む河川堆積物）。検出された石器群は3枚の文化層に分離される。第1文化層の石器群は、A・B・Cの3か所の地点から検出された。層位的には、Ⅳ層～Ⅶ層にかけて出土し、Ⅵ・Ⅶ層に最も多く出土している。礫群もⅦ層上面に安定して検出されている。第2文化層はⅤ層～Ⅷ層にかけて出土しており、As-BP 降下前後に比定される文化層である。第3文化層はⅩ層出土で AT 降下前後に比定されるが、点数は2点のみである。

本論で扱うA地点第1文化層の石器群は、層位的には AT 降下以後で As-Ok 1 降下前後に位置付けられる。

(3) 石器組成

A地点第1文化層からは、1,807点の石器と321点の礫が出土している。石器組成はナイフ形石器33点、槍先形尖頭器12点、彫器1点、削器3点、掻器3点、石核56点である。他に加工痕のある剥片や使用痕のある剥片が加わる。主体を占めるのは剥片・砕片類である。

(4) 石器石材と母岩別資料の構成

石器に利用される石材は、チャートが1474点と圧倒的に多く、全体の82%を占めている。次いで黒曜石が233点で13%を占めている。黒曜石は全体に占める割合自体は少ないものの点数的には比較的多いといえる。また、県内の旧石器時代の石器群（特に AT 下層）の石器石材として多用される黒色安山岩や黒色頁岩はそれぞれ10点（0.6%）、43点（2.4%）と全体に占める割合が少ないことが特徴である。

母岩別でみると石器群は94母岩に分類される。チャート46母岩、黒曜石17母岩、黒色頁岩13母岩、黒色安山岩7母岩でチャートが半数近くを占めている。チャートについては、報告者によって石質の違いに基づいて次のように分類されている。「チャートa類：油脂光沢の強い良質のチャート」、「チャートb類：a類に比べやや珪化が著しく厚い葉理（1～2㎜）が発達する」、「チャートc類：葉理が縦横に発達する」。さらに石質の違いによって剥片生産技術の用い方も違ってくるという指摘がある（岩崎 1999）。これらのチャートは遺跡近辺で採取されたものと考えられる。黒曜石は蛍光X線分析によって信

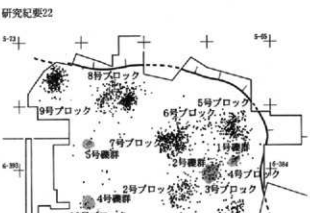


図2　石器分布図（岩崎1999より、一部改変）

州に原産地が推定されている（井上 1999）。

(5) 石器分布

検出された石器群と礫は11カ所の石器ブロックと5カ所の礫群を構成している（図2）。石器ブロックの分布状況を見ると、11カ所のブロックの内、5カ所のブロック（1・2・5・6・7号ブロック）が2カ所の小規模なブロック（3・4号ブロック）と2カ所の礫群（1・2号礫群）を中央部に取り囲むように環状に展開している。長径はおよそ20mである。この分布状況と規模は報告者も注意しているように（岩崎前掲）、後期旧石器時代前半期に典型的な環状ブロック群と非常に似ている。1～7号ブロックは平面的な分布状況と出土層位から同一の時間幅の中で残された石器群であるといえる。一方、8・9号ブロックはこのブロック群の北西側に隣接し、また小規模な10・11号ブロックは10mほどの距離を置いて西側に点在する。8～11号ブロックと3～5号礫群は出土層位が同一層準であること、ブロック間で石器の接合関係があることから同一の石器群と捉えた。

3．石器群の分析

(1) 編年的位置付けの確認

本論ではA地点第1文化層の石器群を砂川期として位置付けているが、分析に先立って編年的位置付けの確認を行っておきたい。

本文化層の石器群の編年的位置付けについて、最近の研究を見ると、小菅将夫氏は群馬県を中心に北関東の編年（Ⅰ～Ⅴ期）に構築する中で、Ⅳ期を二段階に区分し、Ⅳa期を「茂呂系ナイフ形石器が発達するが、南関東地方で砂川期といわれる時期を包括する時期」、Ⅳb期を「茂呂系を中心とするナイフ形石器が残存するものの、槍先形尖頭器が主体になっていく時期」と設定している。そして、東長岡戸井口遺跡の石器群については砂川期以後の「Ⅳb期」に位置付けている（小菅 2003）。

具体的な内容は本論で後述するが、東長岡戸井口遺跡A地点第1文化層の石器群は、層位的にはAT降下以後でAs-Ok 1降下前後に位置付けられること、剥片生産技術には不定形剥片生産が大規模に行われるものの、石刃技法を多用していること、砂川期に典型的な石刃素材の基部を尖鋭に作出した二側縁加工と部分加工のナイフ形石器を組成すること、槍先形尖頭器は数量的には多いものの組成の主体はナイフ形石器であること、このような理由からは本石器群は小菅氏の編年区分する「Ⅳa期」、すなわち砂川期に位置付ける。

(2) 各ブロックの石器製作

遺跡内で展開された石器製作の内容について、各ブロックごとに石刃生産と不定形剥片生産による剥片生産と槍先形尖頭器の製作を中心に分析していく。これによって遺跡全体の石器製作構造を見通すことができると考えている。扱う資料は基本的にナイフ形石器や槍先形尖頭器などの器種と石器製作の様相を把握できる接合資料である。

1号ブロック（図3）

総数176点で、槍先形尖頭器2点、石核8点が含まれるが、主体は剥片・砕片類である。ナイフ形石器は組成しない。石材はチャートが121点で69%と主体を占め、次いで黒曜石が37点で21%である。

槍先形尖頭器は黒曜石製の両面調整(1)とチャート製の両面調整(2)である。前者は丁寧な押圧剥離によって整形される。素材は調整加工が覆うため観定できない。長さが2.3cmと非常に小型で、遺跡内での製作痕跡を持たない搬入品と考えられる[6]。後者は報告書では未製品とされる。大型であること、厚みを持ち先端部の作出も顕著ではないこと、側縁も線状ではなくジグザグ状であること、平坦調整は概して粗く剥離面端部はステップフレイキングを起こしている部分が多いことなどが特徴としてあげられる。

接合資料63（チャート32）は接合資料64と同一母岩で、両面に側縁部から中心部に向かう剥離が見られることから槍先形尖頭器の製作の可能性もあるが断定は困難である。接合資料83は90°打面転移を行いながら幅広の縦長剥片を生産する。接合資料65（チャート33）は90°打面転移を行いながら、幅広で寸詰まりの不定形の縦長剥片を生産する。

接合資料64（チャート32）は前述した未製品とされる槍先形尖頭器に4点の調整剥片が接合する。接合状況や剥離面をみると、初期段階では裏面を打面として（調整なし）小型の縦長剥片を連続的に剥離した痕跡が認められることから（接合図右側縁部）、当初は石核として機能

していると考えられる。その後、表裏両面とも両側縁から中心部に向かって平坦な調整加工によって槍先形尖頭器に整形している。最大厚は器体中央部で、断面形も凸レンズ状を呈し、左右対称形状への整形も意識していることがわかる。素材は一部残る礫面や器体の大きさから、大型の分割剥片を利用していると考えられる。また接合状況から、遺跡内で素材の獲得から平坦調整による器体整形までの一連の製作工程を連続して行っているのではなく、遺跡外で素材生産とある程度の器体整形を経た段階で本遺跡に搬入し、接合資料に示されるような部分的な調整加工を行った後に廃棄したと考えられる。

1号ブロックで展開された石器製作は、不定形剥片生産と平坦調整による両面調整の槍先形尖頭器製作（部分的）である。不定形剥片生産では2母岩計857g、槍先形尖頭器では1母岩67gの石材がそれぞれ消費される。石刃生産は確認できない。

2号ブロック（図4）

総数128点でナイフ形石器3点（石刃素材の二側縁加工2点）、削器1点、掻器1点を含み主体は剥片・砕片類である。石材はチャートが115点、90%と圧倒的に主体を占め、他に黒曜石が7点、5.5%、黒色頁岩2点、1.6%を占める程度である。

接合資料32は単設打面石核から打面調整を施して石刃生産を行う。接合資料45と46は同一母岩（チャート15）で両設打面石核から180°打面転移を伴いながら石刃生産を行う。接合資料33（チャート6）はともに石刃素材のナイフ形石器の接合である（1点は9号ブロック出土）。接合資料73（チャート）は小型の石刃の接合である。

接合資料75（チャート39）は74と同一母岩で、幅広の縦長剥片を連続的に生産している。74はその後半段階を示す。打面を固定して幅広の不定形剥片を生産し、いずれの剥片も打面を大きく残している。

2号ブロックで展開された石器製作は、石刃生産と石刃を素材としたナイフ形石器の製作、不定形剥片生産である。石刃生産では6母岩計53.4g、不定形剥片生産では1母岩213gの石材が消費される。

3号ブロック（図5）

総数22点で使用痕のある剥片2点、小型の石刃が2点の他は剥片・砕片類が主体である。石材はチャートが15点で68%を占める。他に黒曜石、粗粒安山岩などがある。

接合資料41（チャート13）は打面を小さく残す小型の石刃どうしの接合で、単設打面石核から生産されている。

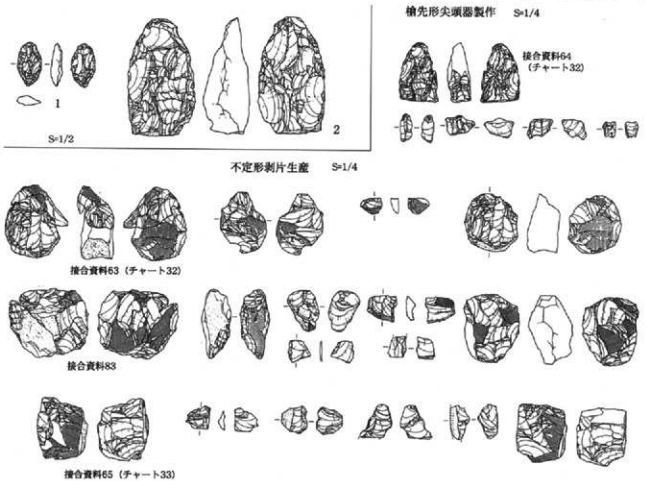


図3　1号ブロック

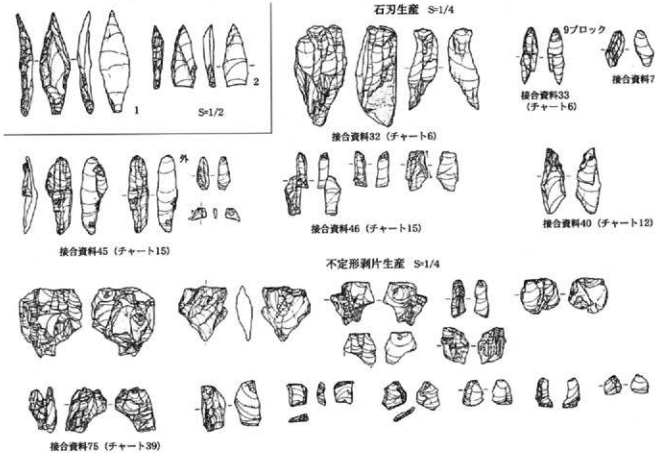


図4　2号ブロック

図5　3号ブロック

図6　4号ブロック

石材消費量は2.9gと少量である。

3号ブロックでは、小規模ながらも石刃技法によって石刃生産が行われている。また、9号ブロックに主体を持つ石刃生産の接合資料が一部分布している。不定形剥片生産は確認できない。

4号ブロック（図6）

総数16点で、彫器1点、使用痕のある剥片1点の他は剥片・砕片類が主体を占める。石材はチャートが15点、94%で他に黒曜石が1点ある。

彫器(1)は両面調整の槍先形尖頭器を再加工したもので、彫刻刀面は器体中央部の両側縁に折断面を打面にして作出される。折断前の槍先形尖頭器には樋状剥離面の作出はない。槍先形尖頭器は両面とも入念な押圧剥離によって細身の左右対称形状に整形される。先端部の作出も顕著である。

接合資料55（チャート24）は扁平な礫を石核素材とし

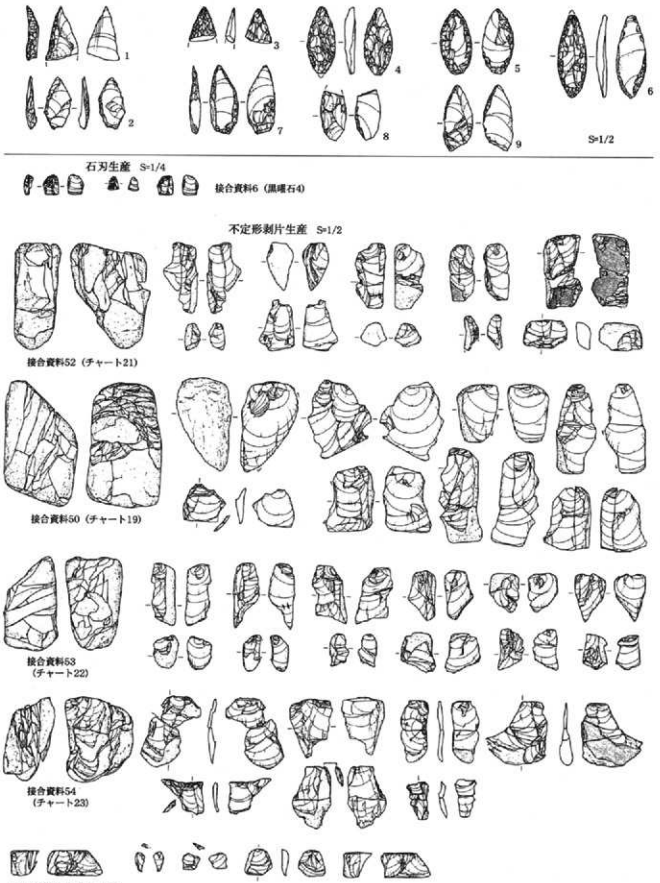

1
2
3
4
5
6
7
8
9
S=1/2
石刃生産 S=1/4
接合資料6（黒曜石4）
不定形剥片生産 S=1/2
接合資料52（チャート21）
接合資料50（チャート19）
接合資料53
（チャート22）
接合資料54
（チャート23）
接合資料36（チャート9）

図7　5号ブロック

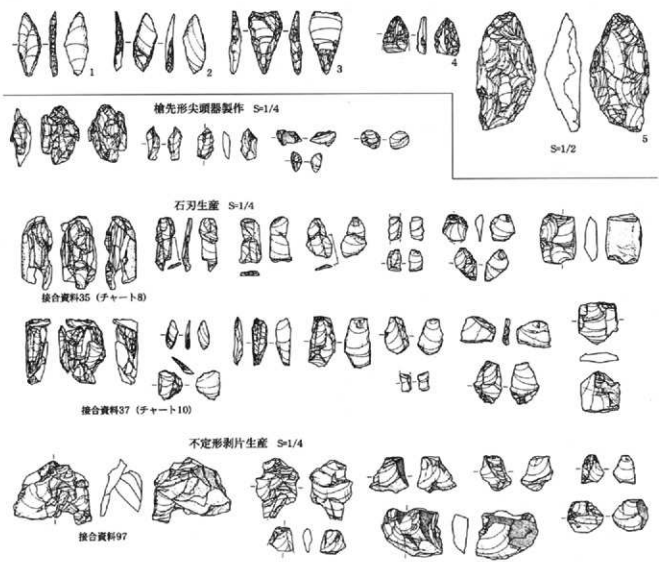


図8　7号ブロック

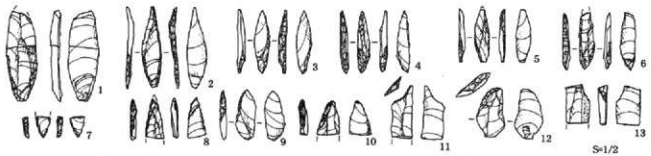
図9　8号ブロック

て、比較的小型の幅広剥片や寸詰まりの縦長剥片など不定形剥片を生産している。

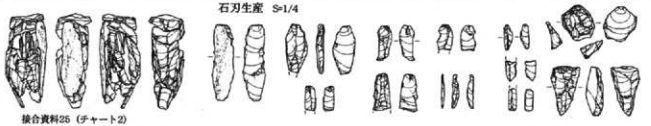
4号ブロックで展開された石器製作は不定形剥片生産で（1母岩168gの石材を消費）、そこに槍先形尖頭器を再加工した彫器の廃棄が重なる。石刃生産は確認できない。

5号ブロック（図7）

総数229点でナイフ形石器3点、槍先形尖頭器7点、削

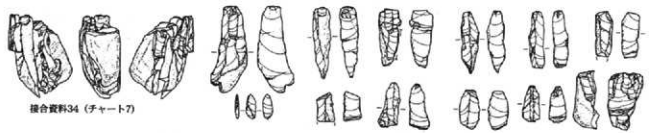


石刃生産 S=1/4



接合資料25（チャート2）

接合資料29（チャート4）　接合資料30（チャート4）



接合資料34（チャート7）

接合資料43（チャート14）

接合資料42（チャート14）

接合資料154（黒色頁岩1）

図10　9号ブロック(1)

図11　9号ブロック(2)

1 S=1/2　図12　10号ブロック

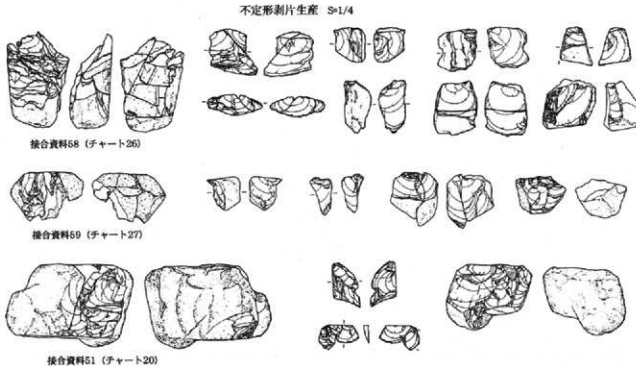


図13　11号ブロック

器1点、使用痕のある剥片15点、加工痕のある剥片7点、石核8点で他は剥片・砕片類が主体を占める。他のブロックに比べて槍先形尖頭器と使用痕のある剥片が多いことが特徴である。ナイフ形石器については、1は黒曜石製で石刃を素材とする。2は横長剥片を素材としているものの、背面構成から石刃生産に伴って生産された剥片を素材にしていると判断される。槍先形尖頭器は両面調整2点（3、4）、片面調整1点（6）、周辺調整4点（5、7～9）である。3～6は入念な押圧剥離による平坦調整を施して整形している。7はナイフ形石器のブランティングと同じ急斜度調整加工、8・9は縁辺を潰すような微細な調整加工である。素材は、両面調整については二次調整加工面が覆うため限定できないが、それ以外については比較的薄手の縦長剥片を用いている。5・6は同一母岩で、6は背面構成と主要剥離面に両設打面石核から剥離された180°加撃方向の異なる剥離面が一部残存すること、5も主要剥離面と同一加撃方向の背面を持つこと、比較的薄手であることから石刃を素材とする可能性もある。また、他に同一母岩別資料はないようで、遺跡内での製作痕跡を持たない搬入品と考えられる。両面調整2点も搬入品の可能性が大きい。素材生産の方法については判然としないものの、多様な素材を利用していることは間違いない。このように、槍先形尖頭器は調整加工部位や調整加工技術、素材が多様であることが特色である。

次に剥片生産について示す。まず、接合資料6（黒曜

石４）は２点のみの小規模な接合資料であるが、背面構成から石刃生産を示す重要な資料と考えられる。

接合資料52（チャート21）は大型の扁平な礫を素材として、不定形な縦長剥片を連続して生産する。いずれも打面を大きく残置する。打面は固定されるものの、打面調整はなく礫面をそのまま打面とする。大型剥片は石核として転用され、さらにそこから小型剥片を生産している。原石への接合復元率が高いこと、接合関係がブロック内で収束すること、不定形剥片を素材とした器種製作が見られないことが特徴である。接合資料50（チャート19）は一部６号ブロックにも分布する。大型の角柱状の礫を用い、前半段階では打面調整を行うことなく礫面をそのまま打面として固定し、作業面を後退させるように縦長剥片を連続して剥離する。後半段階では90°打面転移しながら剥片生産を行う。剥片は幅広で不定形なものや打面を大きく残すものが多く、大きさも一定ではなく多様である。接合資料52と同様に、原石への復元率が高いこと、接合関係は隣接する６号ブロックに及ぶが比較的狭い範囲内の中に収束すること、不定形剥片を素材とした器種製作も見られないことが特徴である。接合資料53（チャート22）は角柱状の礫を素材とする。打面調整を行うことなく、礫面をそのまま打面にして剥片生産を行う。石刃状の縦長剥片が一部あるものの、基本的には幅広・寸詰まりの縦長剥片や小型剥片など大きさの多様な不定形剥片が主体で、いずれも打面を大きく残置する。本資料も原石への復元率が高くブロック内で接合関係が収束し、不定形剥片を素材とした器種製作も確認できない。接合資料54（チャート23）は扁平な円礫を素材とする。礫面を打面として幅広で打面を大きく残置した不定形の縦長剥片を連続的に剥離する。原石への復元率が高く、ブロック内で接合関係が収束する。

５号ブロックで展開された石器製作は、チャート製の大型原石を用いた大規模な不定形剥片生産とそれに併行する黒曜石を用いた小規模な石刃生産である。不定形剥片生産に伴う石材消費量は５母岩計2279.4ｇにも及び（他に一部６号ブロックにも分布）、いずれの母岩も大型の原石をブロック内に持ち込み、石核調整や打面調整など各種調整を伴うことなく不定形剥片生産が集中的に行われる。また、不定形剥片を素材とするナイフ形石器や槍先形尖頭器などの器種製作は確認できない。従って、不定形剥片生産は器種製作に必要な素材を提供するための石器製作工程の一部ではなく、形状や大きさは重視せずにより多くの剥片刃部を獲得することを目的とした石器製作であると考えられる。しかも、いずれの接合資料も原石への復元率が高いこと、多量に石材が消費されること、接合関係がブロック内という限定された範囲内で収束することから、本ブロックで必要とされる機能に応じて集中的に生産されたものであり、生産から廃棄までのライフヒストリーがブロック内で完結する臨機的な石器製作と考えられる。

一方、小規模ではあるが黒曜石に石刃生産が展開された痕跡も認められる。その石材消費量はわずかに６ｇで、チャートによる不定形剥片生産の大規模な消費量とは対照的である。５号ブロックの石器製作は、大規模な不定形剥片生産（臨機的な生産・廃棄）、小規模な石刃生産（黒曜石の少量石材消費）で構成される。この石器製作に搬入されてきた槍先形尖頭器の廃棄が重なる

６号ブロック

総数26点で剥片・砕片類が主体である。５号ブロックに分布する不定形剥片生産を示す接合資料50（チャート19）が分布している。

７号ブロック（図８）

総数337点で、ナイフ形石器３点、槍先形尖頭器２点、石核10点で他は剥片・砕片類が主体である。ナイフ形石器については、１は黒色頁岩製の二側縁加工で石刃素材、２はチャート製の二側縁加工で石刃素材、３は黒曜石製で基部を先鋭にするように二側縁と裏面に調整が施され、素材は石刃の可能性が大きい。槍先形尖頭器については、４は黒曜石製の両面調整で一部欠損するものの１号ブロックの１と同様に小型で、細部にわたる入念な押圧剥離による平坦調整によって整形される。素材は調整加工が覆う剥片である。５はチャート製の両面調整で未製品とされる。厚みがあること、先端部の作出が顕著ではないこと、側縁が緩状ではなくジグザグ状を呈すること、形状は左右非対称形であること、などが特徴としてあげられる。素材は調整が進むため限定できないが、厚みがあり節理面が一部残ることを考慮すると大型の剥片や分割礫の可能性がある。

石器組成での特徴は、石刃および石刃素材のナイフ形石器と両面調整の槍先形尖頭器が共伴することである。槍先形尖頭器については、１号・７号ブロック間で次のような共通点が見られる。いずれも黒曜石製両面調整の小型の槍先形尖頭器を組成すること、チャート製の未製品の槍先形尖頭器を組成すること、ある程度調整加工を経た段階でブロックに搬入して再加工が施された後に廃棄されること。

剥片生産については、石刃生産を示す良好な接合資料、不定形剥片の生産を示す接合資料、両面調整の槍先形尖頭器の製作を示す接合資料がある。

はじめに石刃生産の資料であるが、接合資料35（チャート８）は、角柱状の原石を用いて、両設打面石核から途中に打面再生や180°打面転移を伴いながら、作業面を後退させるように打点を左右に振り分けて石刃生産を行う。石核の最終剥離面をみると横長剥片や寸詰まりの縦長剥片を剥離した剥離面があり、石刃生産後に不定形剥片を生産している。接合資料37（チャート10）は、大型

の盤状剝片を素材とする。両設打面石核から、途中に打面再生や180°打面転移を行いながら作業面を後退させるように石刃生産を行う。2のナイフ形石器が接合する。

次に不定形剝片生産を示す接合資料であるが、接合資料97は、チャート製の比較的厚みのある分割礫を素材とし、石核の表裏面で180°打面を転移してチョッピングトゥール状に幅広の縦長剝片を生産している。

そして両面調整の槍先形尖頭器の製作を示す接合資料である。接合資料89は、先述した未製品とされるチャート製の槍先形尖頭器に5点の調整剝片が接合する。表裏面とも両側縁から中心部に向かって、器体の厚みを減ずるように平坦調整加工によって整形されるが、粗い調整で、特に表面ではステップフレイキングが著しい。最大厚は中央部、断面形は凸レンズ状になる。母岩別資料の詳細は不明であるが、接合状況から考えて素材獲得から整形までの一連の工程をブロック内で連続して行っているのではなく、ある程度器体を整形した後に本ブロックに持ち込んで再加工を施して整形し、そして最終的に廃棄したものと考えられる。このように1号ブロックの接合資料64と比較しても、製作工程が遺跡間で連続すること、遺跡内での再加工が部分的で最終的に未製品とされる形状で廃棄されること、などに共通点がある。

7号ブロックで展開された石器製作は、石刃技法による石刃生産と石刃を素材としたナイフ形石器の製作、不定形剝片生産、平坦剝離よる両面調整の槍先形尖頭器製作である。石材消費量は石刃生産で3母岩計145.8g、不定形剝片生産で2母岩162g（ただし1母岩は1号ブロック主体）、槍先形尖頭器製作で1母岩47.3gである。本ブロックではこれら三つの石器製作が一体化して現れ、さらに黒曜石製両面調整の槍先形尖頭器の廃棄が重なっており、砂川期の石器製作構造を理解する上で重要なブロックと考えられる。

8号ブロック（図9）

総数377点でナイフ形石器6点、石核10点の他は剝片・砕片類が主体である。1～4は黒曜石製の石刃素材のナイフ形石器で、2は両設打面石核から生産された石刃を素材とするが、基部は尖端ではなく平坦で打面を残置している。石材は黒曜石の占める割合が他のブロックに比べて高い点が特徴である。

接合資料1（黒曜石1）は小型の石刃とナイフ形石器の接合で、背面構成から小型の石刃を連続的に剝離していることがわかる。接合資料3・5（黒曜石3）は接合資料1と同様に小型の石刃生産を示す。接合資料47（チャート16）は両設打面石核から生産された石刃どうし接合である。石材消費量は34gである。

8号ブロックで展開された石器製作は石刃技法による石刃生産である。黒曜石では小型の石刃が生産され、石材消費量も8.5gと小規模である。

9号ブロック（図10・11）

総数240点でナイフ形石器15点、掻器1点、石核5点、縦長剝片（石刃含む）42点で他は剝片・砕片類が主体である。ナイフ形石器は二側縁加工のものと部分加工のものがある。素材はすべて石刃である。石材はチャートが圧倒的に主体を占め、黒曜石はナイフ形石器の1点のみである。

本ブロックには石刃生産を示す良好な接合資料が複数と不定形剝片の生産を示す資料が存在する。はじめに石刃生産に関連する資料について。接合資料25（チャート2）は角柱状の礫を素材とし、上下両設打面から180°打面転移と打面再生を複数回行いながら、作業面を後退させるように石刃生産を行う。剝離初期の打面には打面調整が顕著に残っている。接合資料29（チャート4）は上下両設打面石核から180°打面転移や打面再生を伴いながら石刃生産を行う。石刃の打面は小さく残る。接合資料30（チャート4）は石刃3点の接合資料である。接合状況から見る限り、単設打面で作業面を後退させるように石刃生産を行う。途中打面再生も行われる。接合資料34（チャート7）は角柱状の原石を素材とする。単設打面石核で、作業面を後退させるように石刃生産を行う。途中に打面再生も行われる。石刃の打面は小さく残る程度である。9のナイフ形石器が接合する。接合資料43（チャート14）は扁平な角柱状の礫を素材とする。上下両設打面から作業面を後退させるように石刃生産を行う。小型の不定形剝片類は石核調整に伴うもので、稜付き石刃の剝離や石核調整剝片の存在等を考えると石刃生産の初期を示す接合資料である。4のナイフ形石器と掻器が接合する。接合資料42（チャート14）は接合資料43と同一母岩で、43の後半段階を示す。打面を上下両設に作業面を表裏面にそれぞれ設定して、途中に打面再生や180°打面転移を行いながら石刃生産が行われる。石刃の打面は小さく残る程度である。接合資料154（黒色頁岩1）は上下両設打面石核から打面再生や180°打面転移を行いながら石刃生産を行う。下設打面では頭部調整が顕著である。石刃の打面は小さく残る程度である。石核は確認されていない。

次に不定形剝片生産に関連する資料である。接合資料56（チャート25）は盤状の扁平な原石を素材とする。90°打面転移を行いながら横長剝片、幅広・寸詰まりの縦長剝片といった不定形剝片を生産している。

9号ブロックで展開された石器製作は、石刃技法による集中的な石刃生産と石刃を素材としたナイフ形石器の製作が主体で、複数の8母岩で確認された（ただしブロック間を含む）。一方、90°打面転移による不定形剝片生産も行われている。石材消費量も石刃生産で8母岩計600.3g、不定形剝片生産で289.5gであり、石刃生産に伴う石材消費が主体である。

10号ブロック（図12）

総数4点の小規模なブロックでチャート製の石刃素材のナイフ形石器が1点含まれる。石器製作の痕跡は確認できない。

11号ブロック（図13）

総数60点で、石核5点の他は剥片・砕片類が主体を占める。接合資料58（チャート26）は角柱状の礫を素材とする。頻繁に90°打面転移を行いながら、横長剥片や幅広の縦長剥片などの不定形剥片生産を行う。接合資料59（チャート27）はやや扁平な礫を素地として、厚みのある幅広の縦長剥片を生産する。接合資料51（チャート20）は非常に大型で角柱状の礫を素材として分割するように大型剥片を剝離した後、横長剥片を生産する。石核は生産途中の大型の状態で廃棄される。このため点数的には少ないが、重量は1364.5gにも及ぶ。

11号ブロックで展開された石器製作は不定形剥片生産である。石材消費量は4母岩計3119.9gである。

(2) 小　結

石器製作の内容について、剥片生産では石刃生産と不定形剥片生産、器種製作では槍先形尖頭器製作を中心にしてブロックごとに分析してきたが、その内容と特徴を次のようにまとめておく（図14）。

1号ブロック	不定形剥片生産＋槍先形尖頭器製作・廃棄
2号ブロック	石刃生産・石刃素材のナイフ形石器＋不定形剥片生産
3号ブロック	小規模な石刃生産
4号ブロック	不定形剥片生産＋彫器の廃棄
5号ブロック	大規模な不定形剥片生産＋小規模な石刃生産（黒曜石）＋槍先形尖頭器の廃棄
6号ブロック	不定形剥片生産
7号ブロック	石刃生産＋不定形剥片生産＋槍先形尖頭器製作・廃棄
8号ブロック	石刃生産（チャート・黒曜石）
9号ブロック	大規模な石刃生産（チャート主体他に黒色頁岩）・石刃のナイフ形石器製作＋不定形剥片生産
10号ブロック	石器製作の痕跡なし
11号ブロック	大規模な不定形剥片生産

各石器製作も各ブロック間で均質に展開されている訳ではなく、石刃生産に集中する9号ブロック、不定形剥片生産に集中する5号ブロック、石刃生産・不定形剥片生産・槍先形尖頭器製作及び廃棄が一体となる7号ブロックのように、ブロック間でその内容にも偏りがある。

4．まとめ

以上のことから、東長岡戸井口遺跡A地点第1文化層の石器群の石器製作構造は、石刃技法による石刃生産と石刃を素材としたナイフ形石器製作（他に少量の掻器製作）、90°打面転移技術や180°打面転移技術などの各種の剝離技術を駆使して多様な形状・大きさの剥片を生産する不定形剥片生産、平坦調整や急斜度調整、微細調整などの各種の調整加工技術を採用した槍先形尖頭器製作から構成される。これら三者は石刃生産システム、不定形剥片生産システム、槍先形尖頭器製作システムとして体系的にまとめられる。

本石器群に見られた石刃技法による石刃生産システムは砂川期の石器群においては一般的な姿である。それに、大規模な不定形剥片生産システムと槍先形尖頭器製作システムが加わる。しかもこれらのシステムは、石刃生産が大規模に展開されるブロック（9号ブロック）では不定形剥片生産が小規模、不定形剥片生産が大規模に展開されるブロック（5号ブロック）では石刃生産が小規模になるように、ブロック間で変異幅を持ちながら展開されている。

次に本石器群で確認されたそれぞれのシステムの特徴についてまとめておく。

(1) 石刃生産システム

石刃技法による石刃を獲得するためのシステムで、石刃は主にナイフ形石器の素材として利用される。ナイフ形石器の製作と強固に結びつくシステムであるが、槍先形尖頭器の製作とは結びつきを持っていない。本石器群

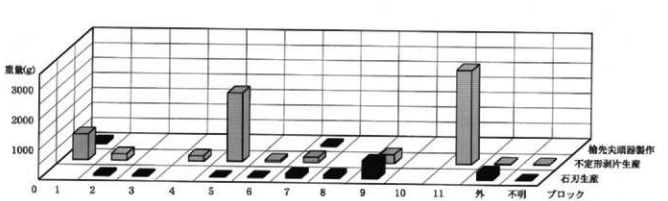


図14　ブロック別石材消費量

の石刃技法には稜形成の石核調整や打面調整、頭部調整、打面再生、180°打面転移など各種の石核調整を伴う。

本遺跡の場合、生産された石刃の多くが遺跡内に廃棄され、しかも接合関係を持つことを考えると、石刃を生産し使用することが主な目的で、ナイフ形石器の製作は選択的であると考えられる。ナイフ形石器以外に掻器も石刃を素材として製作されるが、非常に少ない。ブロックで見ると、2・3・5・7・8・9号ブロックで展開されるが、9号ブロックで大規模に、5号ブロックでは小規模に展開される。

石材はチャートが多く利用され、緻密で節理や脈をほとんど含まない良質ものである。石刃生産に伴ってチャートの石材消費が活発に行われているが、黒曜石の消費量は小規模で、生産される石刃の大きさもチャート製に比べ非常に小さい。

また、一部石核を欠く接合資料があるが、チャートの場合にはほとんどの資料が石核を持つ。接合関係もブロック間にわたる資料が数例あるものの、多くの場合ブロック内で収束することから、生産工程もブロック内で完結する。ただし、黒曜石の場合には石核を持たないことから、遺跡間に連鎖するものと考えられる。在地石材であるチャートと遠隔地石材である黒曜石では石材消費の方法に違いがあり、黒曜石はあたかも遺跡間を少量ずつ計画的に消費しているようでもある。

(2) 不定形剥片生産システム

剥片生産技術は打面を固定して縦長剥片を連続的に生産するもの、90°打面転移を伴うもの、180°打面転移してチョッピングトゥール状に剥離するものなど多様である。生産された不定形剥片の形状も大型の幅広縦長剥片や横長剥片、小型の幅広縦長剥片、厚みがあるもの、打面を大きく残すものなど多様である。

大型の原石を用いて多量の不定形剥片が生産されていたにもかかわらず、これらを素材としたナイフ形石器や槍先形尖頭器などの器種製作は確認できない。このことから、不定形剥片生産システムは器種製作に必要な素材を獲得するためではなく、形状や大きさ・厚さ・重量などに関係なく、より多くの剥片刃部を獲得することに目的がある石器製作システムといえる。

また、原石への接合復元率が高く、しかもブロック内で接合関係が収束することから、不定形剥片生産システムは生産から使用・廃棄までの石器のライフヒストリーがその生産の場で完結する臨機的な石器製作といえる。

石材はチャートに偏り、石刃生産に利用される石材に比べて節理が多く原石も大型で重量がある。このような原石を原料として移動に伴って遺跡間を携行・運搬するには不利であり、不定形剥片生産に用いられた石材の大部分が遺跡近在で採取された現地調達の原料と考えられる。

本石器群では、不定形剥片生産システムが大規模に展開されるが、それはチャートが容易かつ豊富に採取できる石材環境にあったという条件によると考えられる[7]。

(3) 槍先形尖頭器製作システム

槍先形尖頭器は、調整加工部位では両面調整や周辺調整、片面調整、調整加工技術も押圧剥離と考えられる入念な平坦調整加工、ステップフレイキングを起こす粗い平坦調整加工、ブランティングと同様の急斜度調整加工、縁辺部を潰す微細な調整加工など多様性に富む。また、大きさも黒曜石製の小型品やチャート製の中型品や未製品のようにバラエティーに富む。素材は、片面調整と周辺調整ではナイフ形石器と同じように薄手の縦長剥片を利用している。石刃の可能性があるが、これが石刃技法によって生産された石刃であるのかは接合資料がないため断定できない。両面調整については大型剥片を利用していると考えられる。いずれにしても、多様な素材を利用している。また、接合資料64のように石核として利用した後に槍先形尖頭器の製作に転用しているものが確認できた点は、砂川期の槍先形尖頭器製作システムと両面調整石器としての連動を捉える上で重要である。このように、槍先形尖頭器は調整加工部位や調整加工技術、素材が多様化している点が特色である。ナイフ形石器が素材を石刃に限定し、形態も二側縁加工に規格化されていることと対称的である。素材生産の方法については未だ不明な点を残してはいるものの、石刃生産システムのなかに槍先形尖頭器の素材生産は組み込まれておらず、石刃生産システムと槍先形尖頭器製作システムはそれぞれ分立した石器製作システムとなっている。

砂川期の石器群に伴う槍先形尖頭器は黒曜石製の男女倉型有樋尖頭器であることが多い。男女倉型有樋尖頭器は確認できなかったものの、両面調整の槍先形尖頭器は2点あり、砂川期の槍先形尖頭器の一般的な組成といえる。また、両面調整の槍先形尖頭器を彫器に再加工したものが存在することは、有樋尖頭器の機能を理解する上で重要と考える。

槍先形尖頭器のライフヒストリーは、原料の確保→素材生産→調整加工という製作工程を経た後に、使用→廃

石器製作構造

石刃生産システム
- 石刃技法 —— 石刃 —— 器種製作（ナイフ形石器主）
- 石刃

不定形剥片生産システム
- 多様な生産技術 —— 不定形剥片 —— 剥片刃部の獲得
- ・ブロック内で工程が完結

槍先形尖頭器製作システム
- 素材生産 —— 各種調整加工 —— 槍先形尖頭器
- ・特定の遺跡で展開、遺跡間に製品・ブランクを携行

業（途中に再加工）というプロセスをたどるが、本遺跡の槍先形尖頭器に確認できたのは、最終段階の再加工と廃棄である。比較的多くの槍先形尖頭器が廃棄されていたにもかかわらず、遺跡内で素材の生産から細部調整加工まで連続する一連の製作工程を示すものはない。未製品とされる槍先形尖頭器は遺跡内で再加工が施された後に廃棄されるが、素材生産とある程度の整形は別遺跡で行っており、製作工程は遺跡間で連鎖する。

このような状況から、槍先形尖頭器の製作は、別地点（遺跡）で行われているものと考えられる。しかも、比較的多くの槍先形尖頭器が廃棄されていることから、槍先形尖頭器の製作は特定の遺跡で集中的に行われ、量産された槍先形尖頭器の製品やブランクを遺跡間にわたって携行し、廃棄していたものと考えられる。黒曜石製の両面調整槍先形尖頭器は出土した2点とも[6]、非常に小型である。これは遺跡間を運搬されながら極限まで再加工が施されて小型化し最終的に機能を終了して廃棄されたもので、ライフヒストリーが複数遺跡間で連鎖する管理的石器であることを示している。

また、両面調整槍先形尖頭器は平坦調整によって素材の形状を大きく変形させながら製作されるものであるから、当然器体を相当に上回る大きさの素材が必要となる。しかも製作の際にはその素材となる原料の調達が安定していなければならない。つまり、槍先形尖頭器製作システムの展開は原料の安定入手という石材環境と関わりがあるものと想定される。先述したように、本遺跡周辺はチャートが豊富に採取できる石材環境にある。槍先形尖頭器製作システムの展開は確認できなかったものの、これは、石材が豊富であっても、槍先形尖頭器製作システムが展開される遺跡は局地的に限定されると考えられる。本石器群で確認された槍先形尖頭器の多くがチャートを利用していることは、本遺跡周辺で槍先形尖頭器が製作されていたことを示唆している。

以上のように、砂川期の段階では平坦調整を重視した槍先形尖頭器製作システムは、石刃生産システムと不定形剥片生産システムに併行するように石器製作構造全体の中に組み込まれている。それは移動する遺跡で点々と展開されるのではなく、石材環境に影響されるように特定の遺跡に限定され（ただし本石器群のように槍先形尖頭器の石材がチャートと黒曜石に集中する点には注意が必要である）、そこで製作された製品やブランクは石刃生産の原料とともに遺跡間にわたって携行され、最終的には石刃石器群に伴って遺跡に廃棄されると考えられる。従って、個々の遺跡内での廃棄パターンは製作痕跡を持たない搬入品として表現されるので、石刃生産システムとは関わりを持たない存在として現れる。

以上、東長岡戸井口遺跡A地点第1文化層の石器群の分析から、石器製作構造は石刃生産システム、不定形剥片生産システム、槍先形尖頭器製作システムから構成されることを確認した。これまで検出されている多くの砂川期の石器群のあり方から、石刃生産システムが基本となって個々の遺跡で展開され、不定形剥片生産システムと槍先形尖頭器製作システムは石材環境に影響されながら、個々の遺跡で変異幅を持ちながら展開しているものと考えられる。特に槍先形尖頭器製作システムは、移動生活の中で潜伏するように存在し、極めて限定的に展開されるものと考えられる。

5．おわりに

砂川期の石器群全体を理解するためにはまだ次のような課題が残されている。第一に、槍先形尖頭器に焦点を当てて、槍先形尖頭器製作システムの展開がどのような機会にどのような遺跡でなされるのかを追究することである。第二に、赤城山南麓を中心とした利根川中上流域の関東平野北西部と相模野台地や武蔵野台地などの関東平野南部との比較検討である。先述したように、群馬県内では黒曜石製の男女倉型有樋尖頭器を組成する遺跡は数カ所の遺跡で点々と残されているものの、砂川期の石刃石器群を残す遺跡がほとんどなく、関東平野南部の様相とは対照的である。一方で、赤城山南麓地域には有樋尖頭器・槍先形尖頭器とともに彫器を伴う遺跡が確認され少しずつ類例を増やしつつある。先述した下触牛伏遺跡の左右非対称形の有樋尖頭器と彫器やナイフ形石器、石刃を組成する石器群、今井三騎堂遺跡の左右非対称形で黒曜石製の有樋尖頭器と彫器を組成する石器群、光仙房遺跡の左右非対称形の槍先形尖頭器に彫器を組成する石器群がそれに相当する。今後、錯綜するこれらの石器群について時間軸の中に単に解消させてしまうのではなく、石器製作構造と砂川期の石刃石器群とそれに少量伴う有樋尖頭器や槍先形尖頭器との関係を追究していくことが必要である。

本論の執筆に際し、岩崎泰一、後藤佳一、桜岡正信、勢籐力、角田芳昭、檜崎修一郎の各氏から多くの御教示、御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

註

1）この点については佐藤良二氏によって問題点がまとめられている（佐藤 2001）。

2）ただしシンポジウムへのコメントとして、白石浩之氏はナイフ形石器を主体とする剥片剥離作業のなかに石槍の素材を剥離するシステムは組み込まれていないと指摘している（白石 2001）。

3）群馬県内での旧石器時代遺跡の変化を層位的に見ると、AT下層では非常に多いが、その上層のAs-BP層準からAs-Ok 1層準にかけての遺跡数は少なく（小菅 1994）、その中でも特に砂川期の遺跡は極めて少ない。

4）このようなあり方について大工原豊氏は中継地的遺跡と評価している（大工原 1998）。

5）また、岩宿遺跡に隣接する岩宿II遺跡では黒曜石製の男女倉型有樋

尖頭器が石刃や石刃素材のナイフ形石器と共伴して出土している（小菅 2003）。

6）単独母岩とされるが、1号ブロックには37点の黒曜石製の母岩分類が別個な剥片・砕片類がある。これらが確実に槍先形尖頭器とは別母岩であるとの保証はなく、再加工を示す資料の可能性もある。

7）山内秀夫氏によれば、金山・八王子丘陵の足尾層群中にみられる岩石は「褐色の砂岩、乳灰～暗灰色の層状チャート、暗灰色の粘板岩、黄褐色の泥岩」で、「足尾山地に大量に分布するチャートは孤立丘の丸山と八王子丘陵の東側及び西側に断片的に分布する」（山内 1996）ということである。チャートについては、筆者も実際に金山丘陵北端の吉沢地区や八王子丘陵の大覚地区などの基盤礫層からの採取を行った。採取したチャートの特徴は、やや赤味を帯びる茶褐色で乳白色の脈をもつもの（いわゆる赤チャート）とやや緑色を帯びる青灰色で乳白色の脈をもつものが主体で、大きさも握り拳大～約15cm大までであった。形状は亜角礫から亜円礫である。石刃生産には節理が多く不適であるが、不定形剥片生産には十分との印象を持った。このようなチャートは本論で扱った不定形剥片生産の接合資料にも確認できる。東長岡戸井口遺跡周辺は、石刃生産に利用する良質のチャートの入手はなかなか困難であるが、渡良瀬川岡床や圧陵基盤礫層などチャートが豊富な石材環境にあるといえる。

8）なお、小型の黒曜石製槍先形尖頭器は2点とも、原産地は蛍光X線分析によって信州和田峠系と推定されている（井上 1999）。

引用参考文献

阿子島香　1989　『石器の使用痕』

新井正夫　1993　「上州の火山噴火の歴史」『火山灰考古学』

安斎正人　1996　『現代考古学』

安蒜政雄　1983　「縦長ナイフ形石器の製作」『季刊考古学』4

飯島静男・吉川和男　1994　「藤塚遺跡の孤泉地質」『学術調査研究調査報告』

五十嵐彰　2000　「接合」『用語解説現代考古学の方法と理論』II

五十嵐彰　2002　「旧石器資料関係論」『研究紀要』XIV

稲田孝司　1969　「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』15-3

井上　巌　1999　「科学的分析　黒曜石の産地分析」『東長岡戸井口遺跡　第4分冊　旧石器時代編』

岩崎泰一　1999　『東長岡戸井口遺跡　第4分冊　旧石器時代編』

勝山百合　2000　「砂川遺跡からみた『砂川期』のナイフ形石器」『石器文化研究』9

国武貞克　2000 a　「槍先形尖頭器をめぐる行動論―石器製作システムの変換点―」『考古学ジャーナル』465

国武貞克　2000 b　「石材消費から見た領域」『石器文化研究』9

国武貞克　2001　「武蔵野台地・相模野台地の面取り尖頭器」『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉　予稿集』

国武貞克　2003　「両面体調整石器群の由来」『考古学』I

小菅将夫　1994　「II期―BP 降下期の石器群―」『第2回岩宿フォーラム/シンポジウム　群馬の岩宿時代の変遷と特色　予稿集』

小菅将夫　2003　「北関東地方との対比」『第15回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」発表資料』

佐藤宏之　1995　「技術的組織・変形論・石材受給―下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察―」『考古学研究』42-1

佐藤良二　2001　「"砂川型刃器技法に"ついて」『石器文化研究』10

島田和高　1998　「中部日本南部における旧石器地域社会の一様相―砂川期における地域の成り立ちと地域の構造―」『歴台史学』102

白石浩之　1993　「いわゆる砂川期の再検討」『国学院大学考古学資料館紀要』第9輯

白石浩之　2001　「茂呂系ナイフ形石器砂川期の諸問題」『石器文化研究』10

鈴木美保　2000　「後期旧石器時代後半期の行動論的理解に向けて―ナイフ形石器文化の中の『砂川』―」『石器文化研究』9

諏訪間順　2000　「『砂川』の時間的枠組みと前後の変遷」『石器文化研究』9

諏訪間順　2003　「南関東地方における旧石器編年」『第15回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム「野尻湖遺跡群の旧石器時代編年」―発表資料―』

関口博幸　1992　「槍先形尖頭器の変容過程―相模野台地における槍先形尖頭器の製作と廃棄プロセス―」『研究紀要』10

勢藤　力・後藤佳一・関口博幸　2003　「群馬における槍先形尖頭器の技術形態学的検討」『第11回岩宿フォーラム/シンポジウム　刺突具の系譜　予稿集』

早田　勉　1990　「第1章群馬県の自然と風土」『群馬県史』通史編1原始古代1

田中英司　1984　「砂川型式期石器群の研究」『考古学雑誌』69-4

田村　隆　1992　「遠い山・黒い石―武蔵野II期石器群の社会生態学的一考察―」『先史考古学論集』2

田村　隆　2001　「I概説」平成13年度企画展図録「槍の身振り」

田村　隆　2002　「尖頭器石器群の石材消費戦略」『研究紀要』22

田村　隆　2003　「林小原子台再調―東部関東における長者久保―神子柴石器群―」『考古学』I

大工原豊　1998　「武井遺跡の槍先形尖頭器石器群の行動型―武井II前後の石器群との比較から想定される行動型―」『第6回岩宿フォーラム/シンポジウム武井遺跡と北関東の槍先形尖頭器文化　予稿集』

堤　隆　1988　「横状剥離を有する石器の再認識（上）」『信濃』40-4

堤　隆　1989　「横状剥離を有する石器の再認識（下）」『信濃』41-5

堤　隆　2002　「信州黒曜石原産地をめぐる資源開発と資源供給―後期旧石器時代を中心として―」『国學院大學考古学資料館紀要』第18輯

戸沢充則　1968　「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1

長崎潤一　2000　「リダクション」『用語解説現代考古学の方法と理論』III

長沼正樹　2002　「両面調整石器群研究序説―更新世終末期石器群理解の枠組み構築に向けて―」『考古学研究』49-3

長沼正樹　2003　「両面調整石器の問題―予備的な一考察―」『日本の細石刃文化』II

西井幸雄　2000　「砂川の空間的枠組みをめぐって」『石器文化研究』9

西井幸雄　2002　「砂川期の基礎的研究II―大宮大地、武蔵野台地、相模野台地を中心として―」『研究紀要』第17号

堀面陵博　2000　「VI層段階石器群と砂川段階石器群の共通性と異質性」『石器文化研究』9

宮塚義人・矢島国雄・鈴木次郎　1974　「神奈川県本郷川遺跡の石器群について」『史館』3

山内秀夫　1996　「第五節太田市の地質」『太田市史』通史編自然

関東・中部地方の環状列石

── 中期から後期への変容と地域的様相を探る ──

石坂　茂

1．はじめに
2．列石遺構の分類
3．各地域における中期の列石遺構の様相
4．各地域における後期前半の列石遺構の様相
5．列石遺構の地域的様相と中期から後期への変容
6．おわりに

── 論文要旨 ──

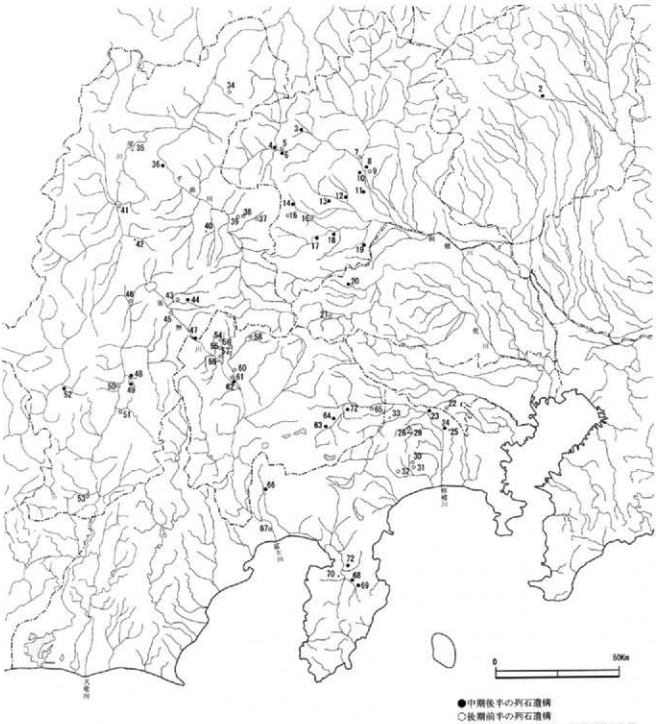
関東・中部・東海地方においては、大規模な環状・弧状の形態を呈し、かつ列状構造を有する列石遺構は縄文時代中期末葉段階に出現し、そして後期前半まで継続することなく中期末葉という短期間で終焉することが確認できる。また、それら列石遺構の下部や区画内部には、埋葬施設が構築されることはなく、直接的に墓とは関係しない遺構であったことも確実である。そして、こうした列石遺構には大規模環状列石を頂点にした祭祀の階層的様相が認められ、特定集落の柄鏡形敷石住居群との関係において存在していたと考えられる。

後期前半の堀之内１式期においては、「核家屋」の顕在化とその主体部外縁を囲繞する周堤礫に象徴される加飾傾向の中から、張出基部に連接する弧状列石が派生し、さらに堀之内２式期にはその下部に配石墓や石棺墓などの集団墓を組み込むという、特定住居＋列石遺構＋墓の関係が明瞭化するようになる。しかし、加曽利Ｂ１式期には特定住居との融合関係も崩壊の兆しを見せ始め、後期後半以降には列石遺構＋墓に分離されると共にその構築が居住域から分立する傾向が認められるようになる。

このような当該域における中期末葉から後期前半にかけた列石遺構の動向は、詳細に見れば各地域毎に若干の差異を見出すこともできるが、その差は僅少であり、ほぼ斉一的な文化的様相が存在していたと考えられる。また、そこには大規模環状列石による祭儀を統括・執行する特定集落の居住者群から、祖先祭祀を含む葬祭儀礼を統括・執行する特定住居＝「核家屋」の居住者への移行という、階層的な社会構造の深化する過程を窺うことができる。

キーワード

対象時代　縄文時代
対象地域　関東・中部・東海地方
研究対象　環状・弧状列石



1.真子　2.佐貫　3.久森　4.坪井　5.長野原一本松　6.横壁中村　7.渋田　8.三原田　9.前中後　10.空沢　11.長久保大畑　12.白川傘松　13.野村　14.坂本北裏　15.暮井　16.行田梅木平　17.下鍛田　18.田端中原　19.東平井寺西　20.塚越向山　21.入波沢西　22.田端　23.川尻中村 24.当麻　25.稲荷林　26.北原No9　27.北原No11　28.馬場No6　29.表の屋敷　30.下北原　31.三ノ宮・下谷戸　32.曽谷吹上　33.青梨馬渡　34.伊勢宮　35.下中牧　36.円光房　37.茂沢南石堂　38.三田原　39.岩下　40.平石　41.北村　42.林山瀬　43.塩野目尻　44.尖石　45.勝山　46.羽場崎　47.曽利　48.小林　49.的場・門前　50.堂前　51.前田　52.大野　53.根吹　54.姥神　55.金生　56.青木　57.川又　58.大柴　59.宮久保　60.屋敷添　61.中田中学校　62.後田　63.牛石　64.中谷　65.塩瀬下原　66.千居　67.破魔射場　68.年川前田　69.上白岩　70.大塚　71.公魔免　72.大月

図1　関東・中部・東海地方における縄文時代中期後半～後期前半の列石遺構の分布

1．はじめに

縄文時代の環状列石は、北海道忍路遺跡や秋田県大湯遺跡などの大戦前後に発見された著名な事例だけでなく、最近の調査によっても青森県小牧野遺跡や秋田県伊勢堂岱遺跡をはじめとしたその周辺域で新たな発見がもたらされている。また、関東地方や中部地方においても、近年の発掘調査により、大規模な環状列石や弧状列石の存在が明らかとなってきており、両者の地域を中心にした分布動向が窺える。

近年、こうした事例増加に比例して、環状列石を主体とした配石遺構の祭祀構造や社会構造への論究と共に、天体運行や特定山岳との関連性追究なども行われ、活況を呈している。しかし、その一方で出現時期や系譜、機能・性格、地域的差異といった基本的課題について、解明されているとは言い難く、むしろそうした問題を深化させないまま論議が進行しているのが現状であろう。換言すれば、「まず、いままでの報告例の地域的・時間的な系統化が必要である。雑多の性格を示すかに見えるこれらが、何を基本に変遷するかを見出さねばならない」(阿部 1968) という指針を踏まえるべき研究段階にある。

筆者は前稿において、群馬県域における環状列石の初現が中期末葉段階にあることや、それが柄鏡形敷石住居の出現及び拠点的な環状集落の消滅と軌を一にしていること、そして後期前半には「核家屋」に連接する弧状列石へと変化していることなどを明らかにした。また、それらの構造分析を通じて、中期末葉の環状列石が墓を伴わない祭祀的施設であり、後期前半段階の「核家屋」による葬送・祭祀儀礼の統合を契機として、列石下部に墓域が取り込まれてゆく過程を明確にするとともに、環状集落崩壊後の新たな拠点的集落の形成という観点から分析を試みた（石坂 2002）。先の指針に則れば、こうした文化的動向が、群馬県域に限定されるいわば地域的なものなのか、あるいは柄鏡形敷石住居や配石遺構が顕著に存在する関東地方西南部域や中部地方という広域を包摂する斉一的なものなのかが問題となろう。

本稿では、関東・中部地方に東海地方を加えた地域内で検出されている環状列石について、その出現期と消長、墓との関連、機能・性格、地域的差異と時期的な変容といった基本的な課題について、個別資料や各研究者の認識に検討を加えながら、その様相を探ってみたい。

尚、本文中に掲載した遺構図は、原典からの転載に当たって時期・時代の異なる遺構やグリッド線など不要なものについては削除したり、逆に無記名の遺構に名称を附加するなどの編集を行っている。また、本文中においては、研究者諸氏の敬称は省略させて頂いており、併せてご了承願う次第である。

2．列石遺構の分類

a．形態の分類

「環状列石」の呼称については、極めて曖昧かつ無原則に用いられており、個別資料の検討を行う前に、先ずその内容定義をする必要がある。本来ならば、明治期からの研究史を逐一踏まえて再定義すべきであろうが、それをなし得る紙幅の余裕はなく、ここでは便宜的かつ限定的に環状列石を以下の①の内容を持つ遺構として認定しておきたい。また、②の弧状列石と併せて「列石遺構」と呼称し、後段の記述の中で使用する。さらに、環状列石を分析する上で併存する他の配石遺構の分類も必要であり、これについては以下の③～⑤に分類しておく。

①環状列石＝個々の石材が相互に連接して配列され、明確な列状構造を有する。また直径や長径が10mを超え、列石の両端が連結して明確な円環状の形態を呈する。
②弧状列石＝環状列石と同様に明確な列状構造を有し、両端が開放して主に弧状形態を呈するもの。
③組石状配石＝立石や丸石を中心にして径１～２ｍの方・円形状に石組みや配列をするもの。
④定形状配石＝列状構造を有する点で①に類似するが、直径や長径が５ｍ未満の方・円形状に配石するもの。
⑤不定形状配石＝石材の配置が前記のいずれにも該当せず、散在的かつ不定形なもの。

上記の分類を若干補足すれば、①②には崩落したり、その構築が一定期間継続して最終的に積み石状を呈するものも多々存在するが、その場合でも最下部の列石をベースに積み石された状態が看取され、列状構造を持つと認定される。また、後世の攪乱等によりその一部の配列が欠落している場合でも、点在する石材の配置から認定を行っている。②の弧状列石に近似して、直線状形態のものも僅かながら認められるが、これは弧状列石に含めて把握・分類している。尚、本稿で扱っている列石遺構は、管見に触れたもののみであり、少なからず遺漏もあろうが、明らかに敷石住居・集石土坑等を誤認しているケースや、組石状配石・定形状配石・不定形状配石が単独で存在する事例については扱っていない。また、当然の事ながら明瞭な列状構造を持たないにもかかわらず、「環状列石」に認定されている場合も同様に除外した。

b．配列・構築方法の分類

列石遺構の構築方法に関しては、以下の３つに分類したが、用いる石材が亜角礫あるいは河床礫なのかによって異なる場面がある。例えば、亜角礫の場合には河床礫のように広口・横口・小口といった各部位面を呼び分けることが難しいため、その全てを乱石配列として分類している。河床礫の場合には、どの平坦面を天地置きするか、またその長・短径のどちらを連接するのかにより、幾つかのバリエーションがあるが、主体的に認められるのは下記の３つの方法である。

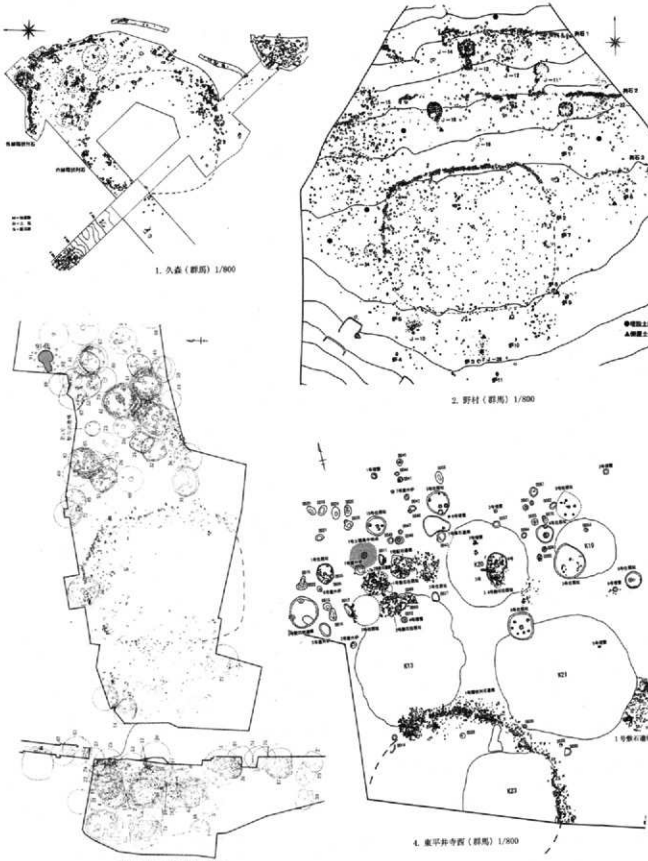


図２　関東地方の中期後半の列石遺構(1)

①乱石配列＝石材の長・短軸を一定の方向にそろえずに、ランダムに配置する。扁平・棒状化していない亜角礫を用材とする場合や、給石が継続した最終段階の列石に多見される。

②広口縦列＝主に河床の扁平礫を用材として、その広口面を天地・長軸方向に置いて相互に連接配置する。これを複数段に積み上げた場合には、「横口積み（平積み）」となる。

③小牧野式＝青森県小牧野遺跡や秋田県伊勢堂岱遺跡に特徴的な配列方法であり、②の「横口積み」と小口面を天地置きした立石状配置とが交互に繰り返される。

c．規模の分類

環状列石には、直径が30mを超えるものと10m前後の２つのタイプが存在するが、前者を「大規模環状列石」、後者を「小規模環状列石」に分類する。

弧状列石については、延長が20mを超えるものを「大規模弧状列石」、それ以下のもの（大半は10m以下）を「小規模弧状列石」に分類する。

３．各地域における中期の列石遺構の様相

(1) 関東地方

a．環状列石の様相

大規模環状列石　全体の規模や形態が確認されている大規模環状列石の事例は僅少であり、群馬県久森（丸山・他 1985）・野村（千田 2003）・東平井寺西（軽部・他 2001）、栃木県佐賀環状列石（辰巳 1976）、神奈川県川尻中村（天野・他 2002）を合わせた５遺跡を数えるのみである。久森・野村（図２－１・２）の状況については、前稿（石坂 2002）にて取り上げているので詳細はそちらを参照願い、その概略を記せば以下のようになる。

①基本的な形態は隅丸方形を呈し、長辺30～40m×短辺25～30mの規模を持つ。

②径30～50cm前後の礫を主要な石材として広口縦列配置による列状構造を持ち、その列石中に立石や単位的な組石状配石が挟在する。

③列石の下部やその区画内部には、住居・土坑等の遺構が存在せずに出土遺物も僅少だが、外縁部に焼土痕の存在や石材の一部に被熱痕を持つものが認められる。

④環状列石外縁の斜面上位に、１～２基の弧状列石を同心円的に配置する重層構造を持ち、同期の柄鏡形敷石住居群がともに占地する。

⑤上記の②④の構築方法に関連して、野村遺跡では斜面地を掘削・盛土により平易し、その盛土や掘削法面端部に少なくとも列石を３～４段に石積みしている。この石積みは強度に優れた小口積みではなく、広口縦列配置を基本に積み上げるいわば横口積みの方法をとっており、単に法面の崩落防止を目的としたものではなく、「小牧野式」石積みに見られるような正面観を意識した装飾的効果をねらっているとも考えられる。

久森・野村の両遺跡以外については、詳しく触れる必要があろう。先ず、東平井寺西遺跡（図２－４）は加曽利Ｅ３式旧期～Ｅ４式を主体とした集落で、竪穴住居11棟、柄鏡形敷石住居６棟、環状列石１基、集石土坑８基、土坑65基などを検出したが、後期の遺構は皆無である。この環状列石は、古墳時代の墳墓構築による攪乱や全体の約1/2が調査対象地外のため、その形状・規模を明確には把握できない。しかし、南側へもその延長が確認されることや残存部の列石に直線的配列と90度に近い屈曲部が存在することを考慮すれば、長辺が約40mの隅丸方形状の環状列石と認定できる。河床礫を広口縦列に配置し、部分的に複列の配置も認められる。列石の下位や区画内部には、埋設土器や土坑等を含め何ら遺構は存在しない。また時期を明示する伴出土器はないが、後期の土器をほとんど混在しない状況から、柄鏡形敷石住居に併行する加曽利Ｅ３式末～Ｅ４式段階と推定される。また、この列石の北東20mにＫ21号古墳との重複によりその一部を残す「１号散石遺構」が存在するが、これについては久森・野村の遺跡例のように、環状列石外縁に構築される弧状列石の可能性もある。集落内での配置関係は、環状列石の外縁上位の北側20mに柄鏡形敷石住居群が存在し、その周辺に被熱した集石土坑が散在する。

栃木県の佐賀環状列石は、長径47m×短径37mの矩形状を呈し、50～70cm大の河床礫を主要な用材として構築されている。掲載写真で見る限り、列状構造や２～３列の複列配置される箇所が認められ、その幅も0.4～２m程の広がりを持つとされているが、列石下部や区画内での他遺構の状況を含めた詳細は不明である。

川尻中村遺跡（図２－３）は、道路幅約30mの部分的調査により確認された中期中葉～末葉の拠点的な環状集落であり、竪穴住居90棟、柄鏡形敷石住居１棟、環状列石１基、集石土坑10基、埋設土器10基、土坑310基、ピット854基、焼土址３基などを検出。住居帯の内側に同時期の土坑・ピット群が配置される重層的構造を持つが、環状列石はさらにその内側に構築されるという状況にある。この環状列石はやや残存不良であるが、北・東側を中心にして30～50cm大の扁平または楕円形状の河床礫を広口縦列配置した列状構造が認められる。また、それらの延長上に点在する同様の河床礫を連結すると、図２－３に示したような長径約35m×短径28mの隅丸方形状の環状列石が想定できる。この環状列石の西側外縁には、かなり多量の河床礫が散在し、特にM-４・５グリッドでは密集した状況も認められることから、何らかの配石遺構の存在が推定されるが、これが久森・野村のような、環状列石外縁部の重層的な弧状列石か否かは不明である。環状列石の石材の一部に長径１m弱の立石を思わせる棒状礫が認められ、これを中心とした組石状配石の存

在も窺える。詳述されていないが、列石下部や区画内部に他遺構は存在しないようである。環状列石の時期を明示する伴出土器はないものの、集落の継続自体が加曽利E４式期で途絶えていることから、それを下らないことはほぼ確実である。さらに環状列石本体と住居との重複関係でみると、北辺側で勝坂式期の86号住居の上位部での構築が確認でき、当期を遡ることはない。また、前述のM-４・５グリッドに存在する配石遺構がこの環状列石と相関性を持つとすれば、同配石遺構は加曽利E３式期後半の９号住居の上位に存在しており、これらの点を考慮すれば環状列石の構築は加曽利E３式後半～同E４式期ということになる。しかし、柄鏡形敷石住居の形成が加曽利E３式期には見あたらず、加曽利E４式期であることを重視すれば、その構築時期は同E４式期の可能性が高い。また、当該期の柄鏡形敷石住居の検出数が１棟（91号）のみという僅少さは、未調査区域に他の同期住居が存在する可能性を否定できないものの、その住居帯構成が環状を呈する可能性は低い。環状列石と集落との関係については、「環状に配された住居跡群の内側に環状列石が位置し、その内側に土坑群が形成されている」と見ている（天野・他 2002）。前述したように、この環状列石は加曽利E４式期に構築された可能性が高く、当該期には前段階までの環状住居帯配置は既に崩壊しており、環状列石の配置を環状集落と直接関連付けることは意味を持たない。しかし、前段階の環状集落跡地の中心部に環状列石を構築することが、環状原理や集落構成という側面で系統性を持つのか否かは重要な問題であろう。これらの点に関しては、後段にてあらためて触れることにしたい。ところで、当遺跡では加曽利E４式期にほぼ確実に比定される遺構として、91号住居の他に環状列石の区画内側に近接する130・229号土坑の２基がある。ともに長径約１m×短径0.8m×深さ0.5m前後の楕円形状を呈し、坑底付近から鉢被り葬を思わせる逆位の深鉢土器１点が出土するなど、墓坑と推定される。他にも列石の下部や区画内部に時期の確定できない土坑が存在するが、この２例のようなものは見あたらず、少なくとも当該部位に墓坑群が集中する可能性は低い。

小規模環状列石　直径が10m前後の環状列石は、群馬県の三原田（赤山・他 1980）と坂本北裏（金子・他 1990）の２遺跡例がある。両例とも広口縦列配置を基本に配列され、列石下部や区画内部には他の遺構を伴わない。三原田遺跡１区75号配石（図３－９）は、長径約５mの楕円形状を呈し、規模的には「定形的配石」に分類すべきものであるが、他に類例がないのでここで扱っておく。部分的ながら径50cm前後の河床礫を広口縦列に配置し、長径１mの立石と思われる棒状礫が列石内に組み込まれている。時期は、加曽利E３式後半期の１区75号住居の上位に構築されることから当該期以降の所産と言えるが、伴出土器はなく下限を決められない。仮に、中期末葉期とすれば、併行期の柄鏡形敷石住居と共に前段階の環状集落の中心部から大きく外れて北端側に偏在する状況となり、環状集落のような重層的な配置関係にはならない。

坂本北裏遺跡の環状配石遺構１（図３－８）は径10mの円形状を呈し、北側の列石内側に連接して一辺1.5mの方形組石状配石や複数の立石など が存在する。内容的には、大規模環状列石の縮小版的な様相を呈している。環状列石の用石内には、加曽利E３式後半～堀之内１式期の土器が混在し、時期を確定できない。また、周辺には加曽利E３式末の柄鏡形敷石住居１棟や丸石を囲繞する方形組石状配石や不定形状配石も存在するが、部分的調査のために集落内での配置関係は判然としない。

b．弧状列石の様相

大規模弧状列石　群馬県横壁中村（藤巻 2000）・空沢（大塚 1993）・田篠中原（菊池・他 1990）、埼玉県塚越向山（小林・他 1995）など４遺跡例があり、田篠中原・塚越向山の２遺跡例は「環状列石」と報告されているが、実際の形態は環状ではなく、弧状列石に比定される[1]。

田篠中原遺跡（図３－５）は、加曽利E３式後半～同E４式期の竪穴住居２棟、柄鏡形敷石住居17棟、弧状列石１基、配石遺構30基、埋設土器12基、土坑22基などを検出した。弧状列石は径30～60cm大の河床礫を広口縦列に配置し、延長約30mを測る。列石の下部には遺構が随伴せず、区画内側の列石と近接した位置に加曽利E３式末の埋設土器３基が存在するのみである。構築の初現・終焉期は、列石に近接する柄鏡形敷石住居や埋設土器などから、加曽利E３式末～同E４式期と想定される。集落内での構築位置は、その中心部に占地し、列石外縁部の上方には柄鏡形敷石住居群が配置されている。

塚越向山遺跡（図３－７）は、幅30mほどの幅狭な河岸段丘上に形成された集落で、勝坂１式～加曽利E２式期の竪穴住居３棟、加曽利E３式末～堀之内２式期の柄鏡形敷石住居７棟、埋設土器15基、集石土坑３基等の他に上位段丘を中心に62基の土坑が存在する。弧状列石は集落南端の最上位斜面に位置し、列石の用材内や周辺からの出土土器により加曽利E３式末～同４式期に比定されている。規模は延長約30mで乱石配列を交えて約１mの幅員を持つが、その最下部には部分的ながらも複列の広口縦列配置が認められ、積み石の崩落や継続的な給石によりその幅員を拡大したことが窺える。この列石内には、0.6～１mの間隔で７基の立石を配置するとされているが、下部には何ら遺構は存在しない。また、この列石の南側５mに近接して小規模弧状列石の６号配石が存在し、走行方向の類似性から両者は併存すると推定される。弧状列石が囲繞する斜面下方には、僅かながら丸石を囲繞する一辺50cmの方形組石状配石の３号配石や、不定形

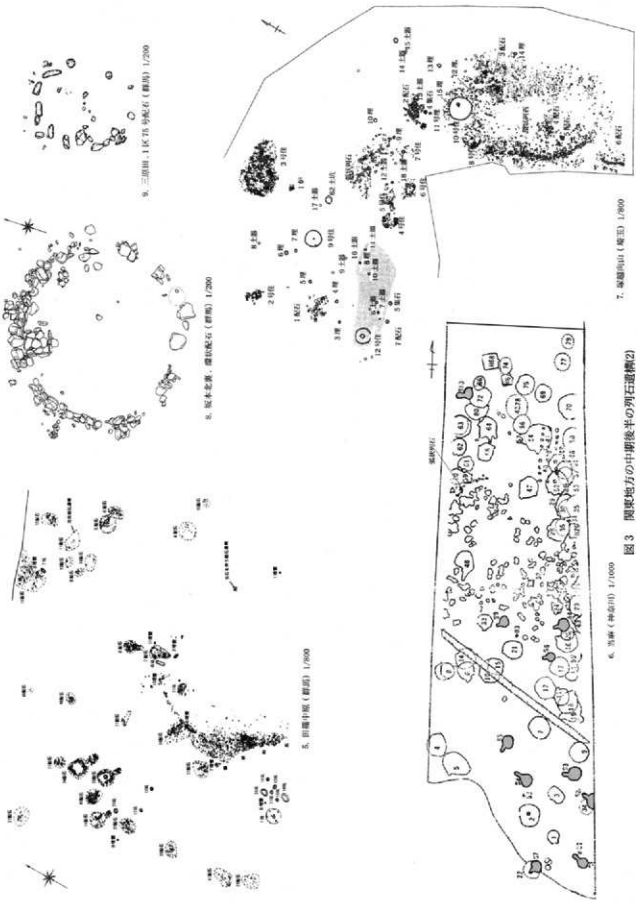


図3　関東地方の中期後半の列石遺構(2)

状の4・5号配石が存在する。また、弧状列石の北端には加曽利E4式期の8号敷石住居が近接し、両者の有機的関係も窺えるが、同時期の柄鏡形敷石住居3棟（2号配石、4・6号住居）はその20m北側に集中している。これに類似するのは、田篠中原遺跡の7号配石とされた柄鏡形敷石住居と弧状列石との関係である。やはり同時期の柄鏡形敷石住居はその西側20mに群在し、また弧状列石の前方部に立石を伴う組石状配石が位置するなど、両遺跡に共通した原理的な存在を窺わせる。尚、塚越向山では、加曽利E4式期の6号住居の炉内に据えられた注口土器内から、黒曜石の石核3点（110～437g）や原石5点（6～20g）と、素材剥片8点の他にチャート剥片2点、磨製石斧10点等が出土している。炉の使用されていない時点でのストックがあるいは儀礼的な埋納とも想定されるが、いずれにしても当遺跡が稀少物資の交易拠点としての機能を担っていた点は重要であろう。

横壁中村・空沢の2遺跡例は、延長30～50mほどの規模を持つ弧状列石であり、基底をなす広口縦列配置の列石上部に給石を繰り返したことにより幅1mほどの積み石塚状を呈し、しかもこうした列石2基が約10mほどの間隔を置いて集落端部の斜面下位に平行配置されている点が特徴的である。両遺跡共に未報告なこともあって詳細は不明だが、中期末葉段階の時期が想定されており、集落の中心部に構築される先の田篠中原の事例とは、機能・性格的にも異なることが推察される。

小規模弧状列石　かなり多数の遺跡でその存在を確認することができるが、代表的なものとして群馬県坪井（富田 2000）・長久保大畑（田村・他 2000）・白川傘松（関根・他 1997）・下鎌田（大賀・他 1997）、神奈川県当麻（鈴木・他 1977）などの6遺跡例がある。これらの弧状列石には、大規模弧状列石に見られるような立石や組石状配石を挟在させる事例はなく、また広口縦列を基本とする列石下部からは、土坑や埋設土器などの遺構は検出されていない。白川傘松・下鎌田・当麻の4遺跡例は、中期後半の拠点的な環状集落地内に形成されるものであるが、ここでは当麻遺跡と白川傘松遺跡を分析する。

当麻遺跡（図3－6）は五領ヶ台式～称名寺Ⅰ式期の集落で、竪穴住居79棟、柄鏡形敷石住居10棟、弧状列石1基、配石遺構9基、埋設土器17基、土坑多数、墓坑5基、集石土坑5基等を検出。道路幅40mでの集落中央部を縦貫する部分的調査であり、その全体規模や構成内容は不明。弧状列石のD・E－6・7区配石遺構は、残存不良であるが、延長約10mにわたって径40～50cm大の河床礫を広口縦列に配置し、下部に遺構を伴わない。時期は遺構構築面から中期後半と推定されているが、それを明示する伴出遺物はない。集落内での構築位置は、住居帯と中央部の土坑群帯との接点付近に挟在し、弧の内側を集落中心部へ向けている。一見すると環状集落の重層構造に規制されるかのようなあり方を呈するが、列石の併行期と思われる加曽利E3式末～同E4式期にかけての柄鏡形敷石住居は南端側に集中・偏在し、当段階の集落形態は非環状にある。また、弧状列石を挟んでこれらの住居群と対向する位置に加曽利E4式期の10号敷石住居が孤立的に存在し、未調査区域にも当該住居の存在する可能性はあるが、極めて散漫な分布状況から前段階のような環状形態をとる可能性は低い。9基の配石遺構は、組石状配石2基の他は全て散在的かつ不定形なものである。時期については、弧状列石と同段階とされているが確証はなく、集石土坑と共に弧状列石の北側や柄鏡形敷石住居の近縁に散在している。

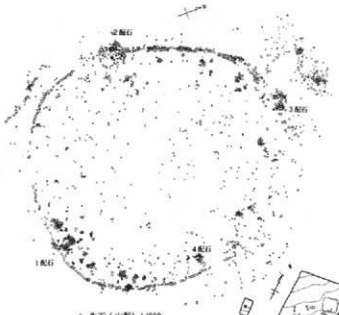
傘松遺跡は、勝坂2式～加曽利E4式期にかけての竪穴住居51棟、柄鏡形敷石住居14棟、弧状列石2基等を検出したが、当麻遺跡と同様に道路幅40mでの集落中央部を縦貫する部分的調査であり、集落全体の規模や構成内容は不明である。弧状列石は、延長20m弱の1・2号配石と約4mの7号配石であり、前者は環状集落の中央部付近に、後者は東側の住居帯中に構築されている。時期的には住居帯の環状配置が崩れた加曽利E4式期と想定され、中央部に位置する1・2号配石の北側に近接して同期の柄鏡形敷石住居（Ⅱ地区1号）も存在することから、前段階の集落規制とは無関係であることがわかる。ただし、弧状列石と柄鏡形敷石住居の構築が、2地点に分散している点は注目される。

(2) 中部地方

a．環状列石の様相

「環状列石」あるいは「環状配石」と呼称される配石遺構の検出された遺跡には、長野県茂沢南石堂（三上・他 1968、上野・他 1983）・円光房（原田・林 1990）・的場門前（木下・他 1995）・大野（百瀬・佐々木 2001）、山梨県牛石（奈良 1986）などの例がある。しかし、これらの中で明確な列状構造を持ち、かつ環状形態を確認できるのは牛石遺跡のみであり、他は弧状列石や環状的に配置された小配石群である[23]。

大規模環状列石　牛石遺跡の「大環状配石遺構」とされた環状列石（図4－1）は、北辺の配列が散在的であるが、構築当初の列石は長径約50mの隅丸方形状に全周していたと想定される[24]。隅丸方形の各コーナー付近には径2～4mの3基の円形状配石（第1～3号配石）が、また各辺内には単位的な径1m前後の組石状小配石が挟在し、これらを連結して列石が構築されている。組石状や定形状の小配石は30数基が検出され、列石の区画内側にも存在するが、いずれも列石に近接して構築されて中央奥部にまで入り込むものはない。またこの下位に曽利Ⅴ式期の埋設土器を伴うものがあり、環状列石の構築時期を示すと推定される。列石の構築状況は、径20～30

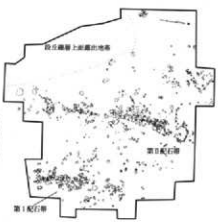


1. 牛石（山梨）1/800

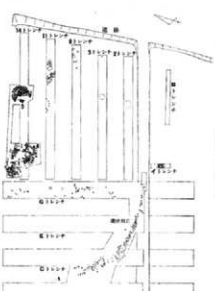
2. 円光原（長野）1/800

3. 円光原．環状列石（長野）1/200

4. 大野（長野）1/800



5. 小林（長野）1/400



6. 茂沢南石堂．第3地点（長野）1/800

7. 的場・門前（長野）1/800

図4　中部地方の中期後半の列石遺構(1)

cmの河床礫を広口縦列配置するが、部分的に西辺で数段に横口積みした状態や複列配置も観察できる。また、南西隅約4mに近接して延長10m強の弧状列石が存在し、同心円状の重層的配置が意識されている。これらの列石下部は未調査であるが、その区画内側エリアを含めて土坑などの遺構は存在しないとされている。環状列石からやや離れたその外側周辺部（第1・2・5配石区）には、同時期の配石遺構が検出され、特に第1・2配石区では加曽利E4式の埋設土器が伴出するなど柄鏡形敷石住居の可能性も窺える。また、列石に組み込まれた先の円形状配石については、敷石住居の可能性も指摘されているが(石井 1998、櫛原 2001)、炉の痕跡は認められないようであり[9]、住居とは機能・性格の異なる遺構と思われる。いずれにしても、1985・1986年の農道改良工事に伴う調査で、環状列石の外縁部に曽利Ⅳ・Ⅴ式期の竪穴住居が検出されており、環状列石の外縁に併行期の集落が存在すると考えられる。

小規模環状列石　長野県円光房遺跡の1例のみであるが、山梨県後田遺跡例（山下 1989）を当地域における列石遺構の遡源的なものとする見解もあり（佐野 1999）、一緒に扱っておきたい。また、円光房遺跡の環状列石（図4－3）は、大規模な弧状列石と併存しているので後段にて一括し、先ず後田遺跡の事例を見ることにする。同遺跡（図5－8・9）は北後田遺跡（山下 1990）の南側に近接して存在し、本来両遺跡は一体のものである。北後田遺跡では、部分的調査ながら曽利Ⅱ式～称名寺Ⅰ式期にかけての竪穴住居15棟を検出し、後田遺跡の3棟を含めその分布状況から環状集落と推定される。後田遺跡の2基の配石遺構は、この集落の東南側外縁部10～30mに近接し、C区1号配石遺構が2号配石遺構の東側15mに位置する。1号配石遺構は、径40～70cm大の扁平な河床礫を主体にその平坦面を天井部として長・短径5.5mの楕円形状に敷設するが、その中央部の直径1.5mの範囲は石敷きが存在せず空間部となっている。各石材相互に明確な列状配置が認められない点で、列石遺構に分類することはできない。配石の下部から勝坂2式・曽利Ⅰ式・曽利Ⅲ式の3点の土器（片）が存在するが、土器の直上に配置された用石との関係から、南東外縁に存在する曽利Ⅲ式土器が伴うとされている。2号配石は、1号と同様の石材を一辺8mの方形状に敷設し、さらにその左右に長さ10mのヒゲ状の配石が付設される。方形状配石の用材には長径80cm前後の棒状礫が存在し、立石の可能性も窺える。その中央部には、1号と同様に4m四方の空間部が存在する。配石の構築は、ヒゲ状の配石部では部分的ながら広口縦列配置による列状構成が認められるが、方形状の石敷き部では不明瞭である。また、この列石的な配石は、径1m前後の不定形な小配石10基ほどの集合体として構成される状況も看取され、その下部から出土した曽利Ⅳ～Ⅴ式の12点の埋設土器により、その構築が数期にわたる継続的なものとする分析もある（佐野 1999）。この埋設土器については、小児の埋葬施設との見解も示されているが(新津 1999、佐野 1999)、人骨等は検出されず断定できない。また、周辺部を含めて土坑などの遺構も存在しない。1・2号ともに、内容的には環状列石や弧状列石との類似点は少なく、方・円形状配石部の敷き石面の状況はむしろ敷石住居に近似すると言えるが、炉や柱穴は存在せず住居としての可能性は低い。いずれにしても、中部地方だけでなく関東地方でも類例が無く、極めて特異な配石遺構と言えよう。

b．弧状列石の様相

大規模弧状列石　長野県円光房（原田・林 1990）・小林（林 1990）・茂沢南石堂（三上・他 1968、上野・他 1983）・的場門前（木下・他 1995）・前田（酒井・他 1984）の5遺跡例があるが、茂沢南石堂遺跡と前田遺跡は中期末葉の可能性があるものの確定的ではない。ここでは残存不良な前田遺跡を除く4例について記述する。

円光房遺跡（図4－2）では、A地区から加曽利E3式末・同E4式・堀之内1式・同2式期などの竪穴住居・柄鏡形敷石住居が18棟と、「立石址・集石址」とされた約100基の配石遺構が検出されている。報文中では、これらの配石遺構は第1～4グループに分割される直径30mの「弧状列石址」と、その中心部の「中央部立石址群」として認識されている。しかし、掲載写真や平面図を見る限り、列状構造をもつ配石遺構は図4－2に示したようにA・Bの2カ所のエリアに限定されており、この2カ所を列石遺構と認定しておきたい。Aグループでは、後世の掘立柱建物との重複もあり断続的な状況だが、南側から北側へと延びる1～28号集石址にかけて広口縦列配置を主体とした列石が認められ、全体的には延長約28mの大規模弧状列石と考えられる。ただし、その東側延長上にも1～13号立石址が点在し、これらをも含めた場合には延長40m近い規模となる。この列石中には立石や組石状配石が存在し、単位的な立石や小配石を連接して弧状列石が構成されている。この北西側約8mに近接する53～66号集石址のBグループは、1号掘立柱建物との重複や未調査部分もあってやや不明瞭だが、径7mの小規模環状列石と推定される。列石内には立石(25号立石址)を含んでおり、先のAグループの弧状列石と同様に単位的な小配石を連接していると考えられる。Cグループは30～35・38号立石址により構成され、位置的には弧状列石Aグループの区画内側約13mの中心部に密集している。これら立石址の巡りには石敷き状の配石が認められ、立石を中心とする組石状配石群が存在していたと推定される。A～Cグループや各配石遺構は、保存措置によりその下部の遺構状況は不明だが、環状列石Bグループの区画内側や弧状列石Aグループに近接したその区画内・

外に、土坑などの集中する状況は認められない。このA地区では後期前葉の住居が混在しており、各配石遺構の時期は確定的ではないが、Cグループの立石群を始めその多くから加曽利E4式期の土器片を出土しており、当該期に比定される可能性が高い。これらの配石遺構が中期末葉段階に同時併存すると仮定すれば、大規模弧状列石Aが囲繞する中央空間部に立石を伴う組石状配石Cが存在し、弧状列石を挟んでそれと対向する位置に小規模環状列石Bが構築されるという構造を想定できよう。これに併行する柄鏡形敷石住居は、弧状列石外縁の東・西・南の3方に散在し、列石区画内部に存在しない点が注意される。一方、加曽利E3式末葉期や堀之内1～2式期の住居は、弧状列石Aとの重複や区画内側および中央部にまで侵出し、先の配置構造を無視したあり方を示している。このような遺構配置や称名寺式期が欠落する状況を考慮すれば、A～Cグループの配石遺構の構築は、加曽利E4式期を中心とした時期と推定され、堀之内1式期まで継続的に行われた可能性は低い。ただし、中期末葉段階の大規模弧状列石において、その区画内側中心部に立石群を伴う例は他になく、これらの遺構組成が妥当なものか否か今後の事例を待っての検証が必要である。

茂沢南石堂遺跡（図4－6）は、加曽利E3式～加曽利B1式期の集落で、竪穴住居4棟、敷石住居11棟、環状列石2基、小配石4基、石棺墓6基、集石土坑2基、土坑3基などを検出。弧状列石は、第3地点で「環状列石」と呼称された遺構であるが、図4－6のように形態的には明らかに弧状であり、掲載写真から不定形な亜角礫を乱石配列した列状構造を持つと判断される。延長約25mの規模で、列石下部や住居以外の遺構状況は不明である。周辺からは、加曽利E4式～加曽利B1式の土器片が混在出土し、時期を特定できる状況にはないが、中期末葉以降の所産であろう。この弧状列石の区画内側へ約30m離れて、後期とされる柄鏡形敷石住居が集中するが、この時期も確定的ではない。両者が同時期とすれば、内容的には集落外縁の斜面下位に構築される事例であろう。

小林遺跡（図4－5）では、約400m²の狭小な調査範囲から、「第I配石帯」と「第II配石帯」と呼称された列石遺構2基を検出。「第I配石帯」は長さ約20m、「第II配石帯」は長さ10mで共に幅1mの規模を持ち、径30～50cmの河床礫を広口縦列配置した列状構造を有する。これらの列石は、弧状に湾曲しつつ相互に7mの間隔を置いて平走し、重層的配置と推定される。調査範囲外にも広がると考えられるが、周辺部は破壊により詳細不明である。内容的には特に取り上げる必要はないが、注目されるのはその帰属時期が中期初頭とされている点である。その根拠となっているのが、「第II配石帯」の列石下に検出された、中期初頭の梨久保式土器を伴出する1号土壙の存在である。しかし、この土坑1基をもって列石の時期比定をすることは、少なからず問題がある。なぜなら、この土坑の形成が列石とは無関係になされ、偶然に重複関係が生じた可能性を否定できないからである。列石周辺の出土土器の中には、梨久保式だけでなく中期後葉第III・IV期が320点も存在し、これらとの関係も当然考慮する必要がある。また、1号土壙と認定されたものも、2.8×2.2mの隅丸方形状を呈し、深さ20cmで底面がフラットな状態を示すなど、内容的には土坑というよりも竪穴住居に近似した遺構である。いずれにしても、これらの列石遺構が確実に梨久保式期に構築されたと断定するには無理があると言えよう。

的場・門前遺跡（図4－7）は、中期中葉～末葉を主体とする拠点的な環状集落で、その東半部を調査して竪穴住居75棟、「環状配石址」3基、集石土坑4基、土坑577基などを検出。住居帯の内側に土坑群帯、配石遺構群などが存在する。「環状配石址I・II・III」の3基の配石遺構は、重層的な3帯構成とその外帯が直径75mの規模とされているが、内容的には「環状配石址II」を除いて極めて散在的である。また、それらの中間に位置する「環状配石址II」も、立石を付随する径1m前後の組石状小配石15基が、相互に3～4mの間隔をあけて直径30mの弧状的に配置されたもので、意図的な配置状況ではあるものの、少なくとも列状構造や環状形態を呈していない。この「環状配石址II」の配石下部には基本的に土坑などが伴わず、区画内部にも数基の組石状配石が存在する以外は、他の遺構は認められない。これら配石遺構の時期は、周辺遺構との関係から中期後葉末とされているが、明確な伴出遺物が無く確定的ではない。仮にその時期が中期後葉IV期とすれば、当該期の竪穴住居5棟（14・21・22・39・55号）は、「環状配石址II」の北側5～10mに散在し、その近縁には上部配石を伴う墓坑（191・358号）などが認められる。集落範囲の約1/2が未調査ではあるが、確認された住居棟数から見て当段階の集落形態が環状を呈する可能性は低い。しかし、住居と配石遺構の配置関係には重層的な状況も看取され、前段階の環状集落の構成原理を踏襲している可能性もある。また、称名寺I式期が柄鏡形敷石住居ではなく、加曽利E4式期の住居も欠落している点は留意を要する。

小規模弧状列石　長野県大野（百瀬・佐々木 2001）・尖石（宮坂 1957）、山梨県星敷添（佐野 1993）・中谷（長沢・他 1996）・中田小学校（山下・他 1985）・大野（笠原・他 2000）・宮久保（村松・他 1999）などの7遺跡に認められる。ここでは比較的内容を把握できる大野・中谷の遺跡例を検討してみよう。大野遺跡は中期中葉～後半（井戸尻III式～唐草文III期）にかけての集落で、竪穴住居6棟、掘立柱建物2棟、直線状列石1基、「環状列石」1基、集石（小配石）1基、屈外堰堤1基（晩期1基を

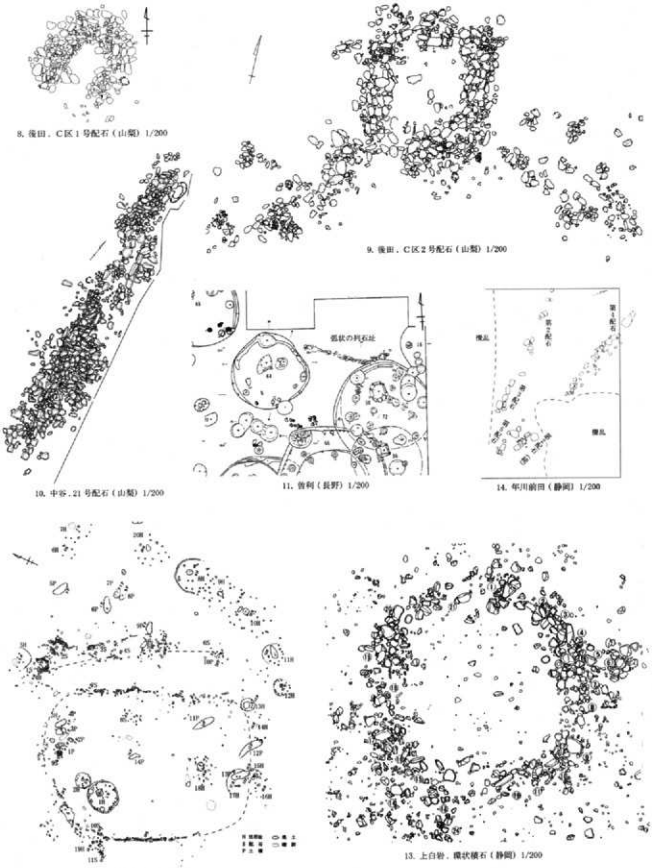


図5　中部・東海地方の中期後半の列石遺構(2)

除く)、土坑多数基を検出したが、保存措置により「環状列石」下部やその周辺に存在する土坑については未調査である。また、部分的調査のために集落の全容は判然としないが、墓域を中心部に置いて掘立柱建物域・住居帯などを同心円状に配置する重環状構造を持つとされている。ただし、一時期の集落規模は1～2棟前後であり、10数棟で構成される中期後半段階の環状集落とは異なる。「直線状列石」については、径30～60cm大の河床礫40個を用いて主に広口緩列配置された明瞭な列状構造を有し、延長13.5mが確認されている。列石内には立石や単位的配石などは存在せず、位置的には住居帯外縁の下位斜面部に、ほぼ等高線に平行する状態で配置されている。このような住居帯の外縁部に構築される状況を、中央部墓域・住居帯・掘立柱建物などの配置と関連させて、集落の重層的構造の中で把握されている。一方、「環状列石」と認定されている遺構は、この列石遺構と同様の河床礫を用いて内径17m、外径22mの隅丸方形状に構築されていると推定されている。しかし、詳細に観察すれば複数の単位的な小配石が住居帯の内側に環状的に配置されるものであり、明瞭な隅丸方形の形態や個々の小配石を相互に連接するような列状構造は認められない。つまり、本稿で設定した環状列石の規定からは逸脱するものであり、むしろ列状構造を持たない小配石群が重層構造の空間規制により環状配置された状態と考えられる。また報文では、この小配石群の下部や周辺に存在する土坑を墓坑群と認定し、住居数に対して多すぎることから、これを「伊奈川水系の同時期の複数の集団・集落群の共同作業によってはじめて建設が可能となった共同墓地であり、共同的な祭祀の場であった」(佐々木 2001) としている。列石下の土坑が同時期かつ墓坑であるとの確証はなく推論の域を出ないが、この見解を踏まえた場合でも、標石的な小配石を伴う墓坑群が環状配置された様態として理解することができよう。これらの直線状列石と「環状列石」は、共に同一時期として「中期中葉の新しい段階～後葉」とされている。未調査に起因して、その時期を明示するような出土土器はなく、周辺の住居や土坑等の時期から見ての状況証拠による推定であるが、中期末葉から後期前半にかけての出土土器は皆無である。現段階では、この直線状列石が明確な列石遺構として関東・中部・東海地方を含めた地域の最古例の可能性があるが、19号住居の綾杉沈線文を地文とする堀設土器は、唐草文系Ⅳ期にまで下る可能性があり、帰属時期については検討すべき余地を残している。

中谷遺跡は、1979年の中央自動車道建設に伴う調査と1993年のリニア建設に伴う調査が行われ、中期後半～晩期初頭にかけての集落が検出されている。列石遺構も複数基存在するが、ここでは1993年の調査内容について検討する。当調査では、曽利Ⅱ・Ⅳ～Ⅴ式期、堀之内1～2式期の竪穴住居と柄鏡形敷石住居が16棟、配石遺構23基、土坑40基、集石土坑15基、埋設土器5基、屋外炉5基などを検出している。23基の配石遺構の中で曽利Ⅳ～Ⅴ式や加曽利E 4式、堀之内1式等の土器を伴出するのは、5・6・12・16・17・20・21・23・24号などであり、12・16・17・20号は組石状配石、21号は直線状列石、他は不定形かつ散在的な配石である。21号配石（図5－10）は長さ19m、幅4mの直線状を呈する。部分的ながら基底の配列に列状構造が認められ、継続的な給石・積み石により幅員の拡散した列石遺構と考えられる。列石中央の下部には埋設土器1基が存在し、また北端に底部穿孔土器1点を伴う墓と想定される楕円形の土坑が近接している。これらの土器から、列石の構築時期は曽利Ⅳ式期に比定されるが、同Ⅴ式期まで継続した可能性が高い。集落との位置関係は、21号配石が住居帯の外縁部に構築され、先の組石状配石や上部に標石状の小配石を施す墓と思われる土坑（6・15・18・37・39・40・42号）が住居周辺に散在している。

(3) 東海地方（静岡）

a．環状列石の様相

大規模環状列石　現在のところ、大規模環状列石と認定し得る事例は、静岡県千居遺跡（小野・他 1975）のみである。千居遺跡（図5－12）では、中期後半～末葉の竪穴住居20棟、配石遺構11基、土坑14基などを検出している。竪穴住居は直径40～50mの環状に配置され、小規模ながら環状集落と考えられる。この住居帯の配置から南西方向に約30mずれて、広口緩列配置による列状構造をもつ第3・4・7・10配石が存在する。各配石遺構の残存状態はあまり良くないが、点線で加筆したように第7・第10配石は長辺42m×短辺32mの大規模な環状列石を構成し、長円形の環状配石とされた第3・4配石は環状列石の外縁部に重層的に配置される2単位の弧状列石と想定される。この環状列石の全体形状は、直線状の配列を含む第7・10配石の走向から隅丸方形を呈すると考えられ、残存良好な南西側部分では2～3列の複列配置や立石も認められる。南西隅には立石を伴う組石状の第11配石が近接するが、元来この環状列石と一体の単位的な配石であった可能性もある。この外縁部にある2単位の弧状列石は、環状列石の北東辺から斜面上位方向へ約8mの距離を置いて第4配石が、さらにその北東約3mに第3配石が存在する。その規模は、第4配石では検出延長が約9mであるが、点在する南北の石材を連結した場合には第1配石から第5配石を結んだ約30mを想定できる。また、第3配石は検出延長約12mであるが、同様に第2配石までを連結した約20mが想定される。これらの弧状列石の端部に位置する第1・2配石は、比較的扁平な礫を径3～4mの円形状に敷き詰めており、炉や

柱穴の痕跡は確認されていないが、敷石住居の可能性も指摘されている（石井 1998）。内容的には、山梨県牛石遺跡の環状列石コーナー付近に組み込まれた円形状配石遺構に類似しており、相互に共通した機能・性格を有する可能性もある。仮にこれらが敷石住居とすれば、第1配石（住居）は弧状列石の第4配石と、第2配石（住居）は弧状列石の第3配石と、それぞれ融合的関係にあると理解することができる。また、やや散在的で残存不良の第5配石については、第4配石の弧状列石を構成する単位的な小配石と考えることもできるが、第1・第2配石と同様に敷石住居の可能性も想定される。これらの環状列石や各遺構の時期は、いずれも曾利Ⅳ～Ⅴ式期の土器が混在し確定できる状況にはないが、環状列石と位置的に重複して曾利Ⅳ～Ⅴ式古段階の土器を伴出する1～3・13～19号住居の様態から見て、当該期には未だ環状列石が構築されていない可能性が高い。また、弧状列石と連接する第1・2配石や周辺での出土土器が曾利Ⅴ式新段階を主体として後期に下るものが無いことを重視すれば、環状・弧状列石を含めた配石遺構の構築は曾利Ⅴ式の新段階という比較的短い時間内で行われたことが推定される。当該期の住居には、第1配石の北側に近接する5号住居を想定できるが、これも確定的ではなく、先の第1・2・5配石を住居に認定したとしても集落規模は2～3棟の小さなものと言えよう。ただし、これらの住居配置が環状列石の上位にある弧状列石の近縁に集中する点は、群馬県久森・野村などの集落とほぼ同一の様相を呈している。環状列石の下位に土坑等の遺構は存在しないが、東側と北側の列石内側に近接して不定形かつ散在的な第8配石と丸石を囲繞する径1.5mの円形状組石の第9配石が存在する。第9配石のような組石状配石が区画内側に位置する例は、山梨県牛石遺跡にも認めることができる。環状列石に随伴する遺構と判断される。また、第9配石に近接する墓坑的な第1～4土壙については、時期的に前出するとされており、環状列石に随伴する可能性は低い。前述のように、これらの環状列石や弧状列石が構築される前段階には、曾利Ⅳ式古段階～同Ⅴ古段階にかけての20棟の竪穴住居による環状集落が存在している。位置的には、環状集落の中心部が環状列石の中心部より20mほど北東方向にずれて、少なくとも両者は同心円的な重層関係にはない。

小規模環状列石　上白岩遺跡（斎藤・他 1979、小野・他 1992）での2例とその一部を検出した修善寺大塚遺跡（小野・他 1982）の例も含めれば3例が存在するが、確実なのは上白岩遺跡だけである。上白岩遺跡は、史跡指定により遺跡全体の詳細な内容は不明であるが、当域の中では拠点的集落に位置付けられている。中期後半から後期中葉にわたる集落で、住居10棟、配石遺構25基、環状列石2基、土坑250基、埋設土器5基などを検出。竪穴住居や敷石住居は、そのほとんどが加曾利Ｅ3～Ｅ4式期および称名寺1式期とされており、配石遺構の時期も当該期に比定されている。第1・9次の調査で加曾利Ｅ4式期とされる小規模な環状列石を各1基検出したが、9次は約1/3程度の部分的検出にとどまる。第1次での環状列石は、直径12.4mの円形状を呈し、単位的な20基の組石状小配石を広口縦列や乱石積みによる列石で連結する。列石の北西側では径50cm大の礫が集中し、扁平状礫を立石状や積み石状に配置している。列石下部や区画内部には、何ら遺構は存在しない。

b．弧状列石の様相

小規模弧状列石　延長が20mを超える大規模な弧状列石の検出例はなく、小規模なもののみが認められる。年川前田（小野・他 1979）・上白岩（前掲）・公蔵面（漆畑・他 1990）の遺跡例があるが、ともに狭小な部分的調査によりその一部を確認したのみである。年川前田遺跡（図5－14）では、B・D地区に集中して配石遺構9基、土坑20基、埋設土器10数基などを検出したが、住居は確認されていない。配石遺構の中で、第2～5配石遺構は列状構造を有する弧状列石と推定されるが、第6～第10配石遺構は下部に楕円形状の墓坑を伴う配石墓の可能性が高い。第2と第3、第4と第5の配石遺構はそれぞれ一体のものと考えられ、相互に2～2.5mの間隔を置いて並走している。部分的調査や攪乱により全体形状等は不明だが、重層構造を持つ列石遺構と言えよう。列石下部には何ら遺構は存在しないが、第4・5弧状列石の区画内側（東側）に、第6～9の配石墓が密集して存在するようであり、時期はその近縁から出土した埋設土器などから、曾利Ⅳ～Ⅴ式に比定されている。

4．各地域における後期前半の列石遺構の様相

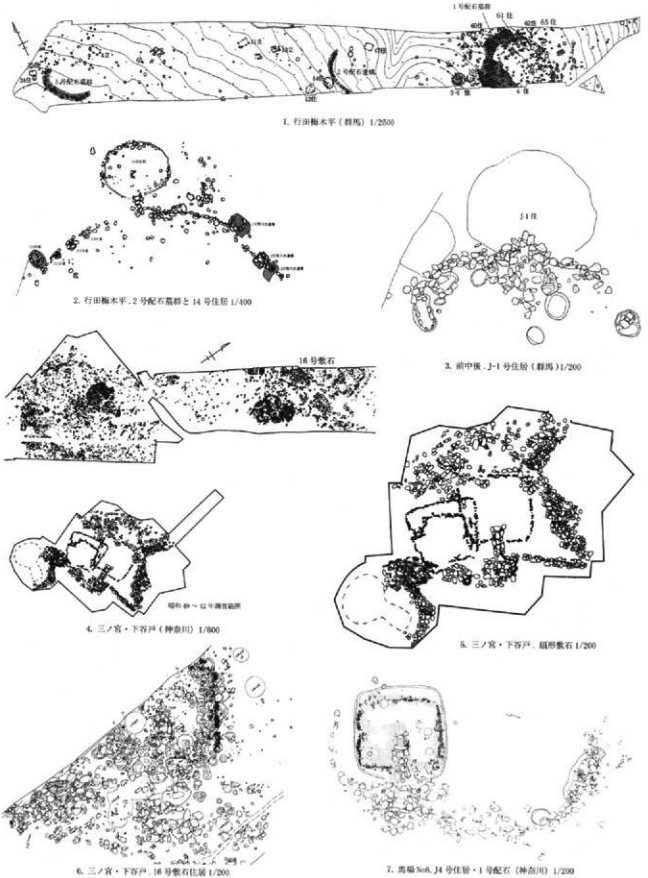
(1) 関東地方

a．列石遺構の様態

中期末葉段階に認められた直径が30mを超える大規模な環状列石は、後期初頭まで継続的に構築されるケースを含めて、現在までのところ全く検出されていない。確認されている列石遺構は、大・小規模の弧状列石を主体に直径10m以下の小規模環状列石が僅かに存在するという状況である。また弧状列石には、規模の違いと共に柄鏡形敷石住居や墓坑・配石墓との融合・一体化という新たな動向が存在し、中期末葉とは異なった展開を見せている。ここでは、柄鏡形敷石住居や墓域との関係性の有無を主体に、列石遺構の様態を探ってみよう。

b．弧状列石の様相

柄鏡形敷石住居と連接する弧状列石　代表的な事例は群馬県横壁中村（前掲）・浅田（石井 2000）・前中後（長谷川 1993）・行田梅木平（間宮 1997）・幕井（大江 1990）、神奈川県下北原（鈴木・他 1997）・三ノ宮下谷戸（小出



1. 行田梅本平（群馬）1/2500

2. 行田梅本平、2号配石墓群と14号住居 1/400

3. 前中原、J-1号住居（群馬）1/200

4. 三ノ宮・下谷戸（神奈川）1/600

5. 三ノ宮・下谷戸、扇形敷石 1/200

6. 三ノ宮・下谷戸、16号敷石伝説 1/200

7. 馬場No.6、J4号住居・1号配石（神奈川）1/200

図6　関東地方の後期前半の列石遺構(1)

1971、宍戸 2000）・曽谷吹上（高山・他 1975）・馬場№6（鈴木・他 1995）等の遺跡がある。この中で、列石下部に土坑墓や配石墓群を伴う例には、前中後・行田梅木平・三ノ宮下谷戸・馬場№6がある。ここでは、行田梅木平・三ノ宮下谷戸と下北原・曽谷吹上について詳述する。

行田梅木平遺跡（図６－１）は、同一丘陵上の約300mの範囲内に、加曽利Ｅ３式末～加曽利Ｂ１式期の竪穴住居や柄鏡形敷石住居14棟、掘立柱建物３棟、弧状列石を伴う配石墓群３基、集石土坑８基、土坑約300基、埋設土器25基などを検出。配石墓群は相互に100～150mの間隔を置いて３地点に分散立地するが、その中間部に位置する２号配石墓群（図６－２）の上部位に延長約14mの弧状列石が存在し、その配列が堀之内２式期の14号柄鏡形敷石住居の張出基部両側に連接している。この２号配石墓群は、墓坑６基と石棺墓１基の７基で構成され、各土坑墓の上位に配置された立石を囲繞する組石状小配石を弧状列石が連接して構築されている。列石には部分的ながら横口積みによる複数段構築が認められ、その西側背面に盛土が存在したことを窺わせる。また、列石の内側前面部は、住居・土坑などの遺構が全く存在しない空間部となっている。これら遺構の構築時期は、14号住居との関係から堀之内２式期の可能性が高いが、弧状列石の南端に近接する石棺墓２－１号の存在を考慮すれば、加曽利Ｂ１式まで継続した可能性もある。

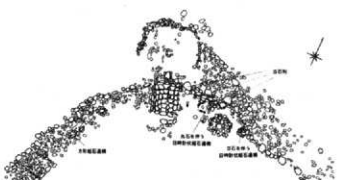
三ノ宮下谷戸遺跡（図６－４）は、1965年と1994年に調査が行われ、中期後半～後期前半を主体とした集落を検出した。竪穴住居14棟、柄鏡形敷石住居16棟、配石遺構５基、集石４基、土坑墓35基、土坑37基、埋設土器３基などが存在し、柄鏡形敷石住居は加曽利Ｅ３式末～加曽利Ｂ１式期まで認められる。1965年の調査で検出した堀之内～加曽利Ｂ式期の柄鏡形敷石住居（同－５）は、複数回の建て替えやその張出基部両側へ連接する弧状列石、主体部外縁を囲繞する周堤礫などが存在する。墓域との関係を含めて詳細は不明だが、その時期は方形の主体部や周堤礫が加曽利Ｂ１式期の16号敷石住居と類似する点を考慮すれば、当該期と近接した時期に比定される。また、16号敷石住居も張出基部付近の左右両側に残存不良ながら弧状列石が存在し、柱穴の状況から複数回の建て替えが窺える。さらに弧状列石の前面部に近接して、上部配石を施した土坑墓（配石墓）群が存在し、列石と墓域との一体の関係が注目される。1965年調査の柄鏡形敷石住居と16号敷石住居との時間的先後関係や当該期集落の様相が問題となるが、部分的調査のために判然としない。

下北原遺跡（図７－８）は、勝坂３式～加曽利Ｂ１式期の竪穴住居や柄鏡形敷石住居26棟、石棺墓を含む配石墓約30基、「環状配石遺構」「組石遺構」「方形配石」と呼称された数十基の配石遺構、埋設土器28基などを検出した。配石遺構の中で、「第３環礫方形配石遺構[9]」と呼称された加曽利Ｂ１式期の柄鏡形敷石住居の張出基部南側に連接して、延長約８ｍの直線状の列石遺構が南走し、さらにこの列石に連接して住居主体部を囲繞する周堤礫も存在する。報文中では、個々に別種の遺構として扱っているが、その配置状況から見て直線状列石や周堤礫を随伴する柄鏡形敷石住居に比定できる。また、当住居北側部分の未調査区域でも、南半部と同様に周堤礫や直線状列石の配置が推定される。この列石下部に土坑等は無いが、前面の東側15mに組石状小配石の10・11・13号が、また南側に30～45m離れた２地点に分かれて20数基の配石墓・石棺墓群が存在する。加曽利Ｂ１式期の柄鏡形敷石住居は、他に「第１・２環礫方形配石遺構」の２棟が15～30mの範囲に近接するが、これらに周堤礫と弧状列石が随伴しない点は注目される。他の配石遺構は不定形かつ小規模なものが主体を占めるが、立石を伴うもの（６・11・13・17・19号組石）や径10mに環状配置されるものもあり、組石状配石遺構も混在している。これらの配石遺構は、遺跡の北側と南側の２地点に分かれて分布するが、北側は柄鏡形敷石住居の「第３環礫方形配石遺構」を囲繞するように存在し、直線状列石や組石状小配石とともに特定住居との密接な関係に留意を要する。

曽谷吹上遺跡（図７－11）は、堀之内１～加曽利Ｂ１式期の柄鏡形敷石住居12棟とそれらの張出基部に連接する東西方向の弧状列石、配石墓群、不定形な集礫群などが存在するが、図録篇だけの報告のためにその詳細は不明点が多い。各時期の柄鏡形敷石住居は、地形変換点に集中して構築され、相互に重複しつつ東西方向に配置されているが、弧状列石の断続状態を基準にすると、１・２・11・12号敷石住居の西グループと４～10号敷石住居の東グループに２分割される。弧状列石の規模は、西側が約25m、東側が約20mの延長を確認できる[10]。西側の弧状列石の場合、「石組」遺構の近縁では、部分的ながらも長径40cm前後の河床礫を少なくとも４段以上に横口積みした状況が認められる。斜面を掘削・盛土造成した法面に石垣状に敷設されていたと推定されるが、同様の石積みは東側の弧状列石にも認められ、かなり大規模な土木作業を窺わせる。弧状列石と各柄鏡形敷石住居との関係は、西側では堀之内１式期の11号住居の主体部上位を通過して西走し、堀之内２式期の２号住居の張出基部に連接する。一方、東側では堀之内２式期の６号住居の張出基部東側を起点として、堀之内１式期の４・５・８号住居の張出部や主体部の上位を通過し、加曽利Ｂ１式期の10号住居の主体部を囲繞した周堤礫に連接する。こうした状況から見て、西側グループでは堀之内２式期の２号住居と、東側グループでは堀之内２～加曽利Ｂ１式期の６号住居および10号住居との密接な関係が想定できる。この東・西両グループが、堀之内２式期において同

8. 下北原，北側配石群（神奈川）1/600

9. 下北原，第3環状形配石 1/200



10. 浅間，14号住居（群馬）1/400

11. 曽谷坎上（神奈川）1/600

12. 曽谷坎上，10号住居 1/200

13. 長野原一本松（群馬）1/400

図7　関東地方の後期前半の列石遺構(2)

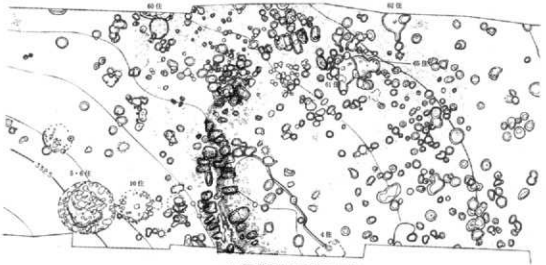
時併存したのか、あるいは西グループから東グループへと時間差をもって段階的に構築されたのかが問題であろう。報告書の本文編が未刊行の現状では、明確な両グループの弧状列石の構築時期を知ることは困難だが、東側の弧状列石では堀之内１式期の５・８号住居などの張出基部を連結するように横断しており、当該期に構築され始めた可能性も窺える。この場合には、８号→５号→６号→10号住居という連続的な建て替えと、それに付合した各住居の張出基部の両側に連接された弧状列石の経年・累積的な構築が想定でき、最終的に周堤礫を伴う10号住居に連接されて長大化したと理解される[7]。この過程で当初の整然とした弧状列石の石垣状配列が崩落したり、その上部に給石行為が継続したために、最終的に乱石積み状に変化した様子も窺える。また、西側の弧状列石でも当初は堀之内１式期の11号住居に付設されていたものが、堀之内２式期にはより西側に移動した１・２号住居の弧状列石と連結・一体化したと考えられる。尚、東・西両グループの中間地点の南側に近接して、堀之内１～加曽利Ｂ１式期の土器を伴う配石墓群が存在している。詳細不明だが、墓坑上位に立石を囲繞する組石状配石を伴うものが多見され、このような配石墓が東・西両グループの弧状列石下部に存在しない点に留意を要する。また、両グループの関係については、①西側グループ→東側グループという時間的変遷を有する、②両グループが同時併存する、という二つのケースが想定できる。②の場合には、一集落内に弧状列石を随伴する柄鏡形敷石住居が２棟併存することになり、その性格が問題となろう。

土坑墓・配石墓を伴う弧状列石　柄鏡形敷石住居とは連接せずに、単独で配石墓群の上部に構築される弧状列石の事例も少数ながら存在する。群馬県長野原一本松（諸田・他 2002）・行田梅木平（前掲）、埼玉県入波沢西（渡辺 2000）の遺跡例があり、ここでは行田梅木平遺跡について詳述する。同遺跡では、前述したように柄鏡形敷石住居に随伴する２号配石墓群の南側と北側に100～150m離れて１号・３号の配石墓群が立地し、各々その上部に弧状列石が存在する。１号配石墓群は残存良好で、石棺墓18基と土坑墓31基が検出され、これらの上面に延長約40mの弧状列石が構築されている。この列石の西側には、約３mの間隔を置いて平行する延長約15mの列石も存在し、２列で構成された重層構造を有する。これらの列石は、広口縦列配置を基本に土坑墓や石棺墓上面の組石状小配石や立石と連接し、石垣状の４～５段の石積み（横口積み）を確認できる。列石の周辺には掘削・盛土整地の痕跡が認められ、列石の西側背面に盛土してその斜面を被覆するように石積みされたと推定される。これらの遺構には良好な伴出遺物が無く、その構築・継続時期を確定することは難しいが、全体的には堀之内２式～加曽利Ｂ１式期のものが主体を占め、当該期に比定される可能性が高い。これと併行期の住居は、列石の外縁部西側に約15m離れて堀之内２式期の多重複の６号住居１棟が存在するのみで、加曽利Ｂ式期のものは皆無である。部分的調査のために集落の全容は不明だが、加曽利Ｂ式期の土坑も少なからず存在することから、これらの配石墓群は集落内に構築されている可能性が高い。尚、１号配石墓群とほぼ同時期の３号配石墓群は、約300mの間隔を置いて立地するが、このような至近距離に２つの配石墓群が共存するとすれば、当遺跡の集団構造を考える上で重要である。またこれらの配石墓や石棺墓には、その頭位方向に双極性が認められる点でも留意を要する。

その他の弧状列石　中期末葉段階と同様に、列石下部に何ら遺構を伴わない延長10m以内の小規模な弧状列石が栃木県真子（渡辺 1976）、埼玉県塚越向山（前掲）、神奈川県三ノ宮下谷戸（前掲）などで検出されている。いずれも時期を特定できる伴出遺物がないために推定の域を出ないが、塚越向山遺跡の事例を検討する。同遺跡では、前述の中期末葉の大規模弧状列石の北側へ20m離れて、残存不良ながら「弧状列石」が検出されている。相互に約1.5mの間隔をあけた２単位の列石が確認できることから、重層構造を持つと判断される。ともに40～50cm大の礫を広口縦列配置し、斜面上位の列石が延長７m、下位のものが延長８mを測るが、その走向はほぼ等高線に沿って湾曲している。周辺の出土土器から称名寺Ⅱ式～堀之内１式期に比定されており、南東に近接する同期の７号住居との関連が注意されるが、その時期に関しては斜面上位に位置する加曽利Ｅ３～同Ｅ４式期の４～６号住居と関係する可能性もあり、確定できない。いずれにしても、集落外縁部に配置される群馬県横壁中村・空沢などとの類似性が指摘できよう。

ｃ．他の列石遺構の様相

僅かに１例のみであるが、直径が10m以内の小規模環状列石が東京都田端遺跡（浅川・他 1969）で検出されている。同遺跡では「環状積石」と呼称された環状列石１基、組石状配石１基、石棺墓７基、土坑墓９基、土坑15基、埋設土器１基などを検出している。環状列石は径20～50cm大の河床礫を用いて、長径９m×短径７m、幅１～1.5mの楕円形状に構築されている。全体的には積み石状を呈するが、最下部では広口縦列配置による列状構造が認められ、これをベースに石材配置が継続した結果、最終的に前記のような様態に至ったと推定される。この列石中には、長径70cmほどの立石が少なくとも10か所に点在し、長さ１m大のものを含む石棒22点の出土と共にその数量的な多さが注目される。保存措置により環状列石下部の遺構は未調査であるが、加曽利Ｂ１～Ｂ３式期の石棺墓や土坑墓の上面にこの列石が構築されており、最終的には墓地から「宗教的祭祀の場」へと推移したと



14. 行田稲荷平. 1号配石墓群 1/600

15. 田端. 環状墓石（東京）1/200

図８　関東地方の後期前半の列石遺構(3)

想定されている。近年の周辺域調査（戸田 1990、山本・他 1998、貴志・他 2003）により、同期の土坑墓・配石墓は若干の広がりを持つものの集落は認められないようであり、墓域が単独立地する事例と推定される。

(2) 中部地方

a．列石遺構の様態

関東地方と同様に、大規模な環状列石は存在せず、また中期末葉までは確認された小規模な環状列石についても、その事例を見出すことができない。その一方で、柄鏡形敷石住居と融合・一体化した弧状列石の存在が顕著であり、さらに配石墓や石棺墓などの集団墓と複合する状況も認められ、後期前半段階の様相を特徴づけている。また、少例ながらそうした遺構との直接的な関係を持たない弧状列石も存在し、多様な状況を窺わせる。

b．弧状列石の様相

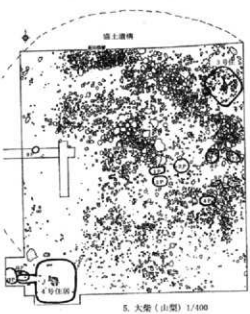
敷石住居・墓域と結合した弧状列石　柄鏡形敷石住居や方形状敷石住居[8]と融合・一体化した弧状列石の下部に、配石墓や石棺墓を伴う事例としては、長野県岩下（宇賀神・他 2000）・北村（平林 1993）・茂沢南石堂（前掲）、山梨県大柴（十菱・他 1998）・金生（新津・他 1989）などの遺跡例がある。ここでは北村・岩下・大柴・金生を中心に、その詳細を述べる。

北村遺跡（図９－１）では、Ｂ～Ｅ区に分かれた調査区から加曽利Ｅ３式～加曽利Ｂ１式期の竪穴住居や柄鏡形敷石住居58棟、上部に配石を伴う墓坑（配石墓）469基と人骨約300体、配石遺構26基、土坑352基、屋外埋設土器13基、掘立柱建物のピット群などを検出。柄鏡形敷石住居は加曽利Ｅ４式期に出現して、加曽利Ｂ１式期までの存続が確認できる。墓坑は、時期の判別できるものが全体の21%の100基にすぎないため、各時期における墓域や柄鏡形敷石住居との関連も明確ではないが、住居と墓坑の構築が時期を隔てながら同一地点を交互に利用している状況が認められる。また、部分的調査のために集落の全容は不明だが、段丘上位面と背後の長峰山地の丘陵斜面とが接する地形変換点に沿って、住居帯が構築されている。最も遺構が密集するＥ区では、人頭大の河床礫を母材とする４つの弧状の配石群 SH506・510・511・1111が最上層にて確認され、墓坑の上部に立石や丸石を囲繞した方・円形状の組石状配石を伴う配石墓群や堀之内２式～加曽利Ｂ１式期の柄鏡形敷石住居張出部（SB566・594・555）などの上位面を被覆するように構築されている。西側の加曽利Ｂ１式期の柄鏡形敷石住居 SB594の上位に位置する配石群 SH1111は、延長16m×幅４mほどの規模を持つが、その南側にも短列の配石が認められ重層構造を有する。また、掲載写真から、広口縁列配置による列状構造を持つことが窺える。東側の同期の柄鏡形

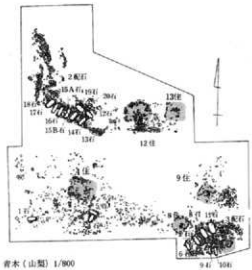
図9　中部地方の後期前半の列石遺構(1)

敷石住居SB555の上位に位置する配石群SH510は、延長13m×幅3mほどの規模とされているが、その東側へと列状に延びる配石墓群までを含めれば延長28mとなる。両者の間に挟在する配石群SH506は、延長16m×幅2mほどの規模で堀之内2式期の柄鏡形敷石住居SB566の上位に構築されており、SH1111と同様に部分的ながら二重の配列が認められる。また、配石群SH506とSH510の周辺では、シカ・イノシシなどの焼獣骨片が散在している。これらの各配石遺構と各柄鏡形敷石住居・配石墓とが、どのような関係性を有していたのかが問題となる。先の柄鏡形敷石住居や配石墓との重複関係から、各配石遺構の構築が加曽利B1式期を最終期とすることは確実だろうが、その開始時期がどの段階なのか、また構築当初の姿がどのようなものであったのかは判然としない。こうした点に関して小杉康は、配石遺構SH1111とSH506が墓坑群→柄鏡形敷石住居→廃屋儀礼配石、配石遺構SH510が柄鏡形敷石住居→廃屋儀礼配石→墓坑群という順序を経て構築されたと想定している（小杉1995）。小杉の想定は、「二列配置の墓坑群」を分析視点としたものだが、墓坑とされた469基の内で時期のほぼ特定できるのは100基に過ぎないことを考えれば、その想定も確定的なものではない。なぜなら、柄鏡形敷石住居との重複・先後係が明確な墓坑は除外するとしても、その左右に配列された配石墓群については、それら柄鏡形敷石住居と時期的に併行しながら構築された可能性を否定できないからである。また、同時にこの配石墓上位の列石状の積み石についても、群馬県行田梅木平遺跡例のように、当初は個々の配石墓を連結する列石をベースにして、その上位に石積みされてゆく過程も想定できる。ところで、柄鏡形敷石住居SB555には、張出基部に連接して左右に延びる長さ3mの弧状列石や主体部東側に周堤礫状の配列が存在するが、これは後述するC・D区の柄鏡形敷石住居SB101に認められる周堤礫と類似し、同様の機能・性格を想定できる。当住居と関係する配石遺構SH510が、この弧状列石と重複する位置に構築されている点や、当住居を含め配石遺構SH1111・566と関係する柄鏡形敷石住居SB594・566が、少なくとも1～2回の建て替えや多重復の状況を呈する点などは、特定の柄鏡形敷石住居に配石墓や張状列石が付随する意味を考える上で、重視すべき要素である。こうした諸点は、柄鏡形敷石住居SB556・594・555が他住居とは異なる性格を保持していたことを示すと考えられるが、問題はこれらがどのような時間的先後・併行関係を持って存在したかであろう。これについても小杉は、4単位の配石遺構をSH1111・506とSH510・511の「2群からなる一つの大規模な直列帯状の配石遺構」として、そこに集団内部の分節構造を想定している。基本的に、2群が同時併存すると見ているわけだが、この点については後段にて触れたいと思う。

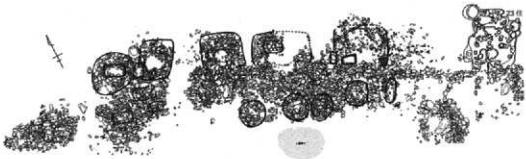
岩下遺跡は（図9－2）、加曽利E3式～加曽利B1式期を中心とした集落であり、竪穴住居や柄鏡形敷石住居24棟、「石列」とされた弧状列石1基、土坑約200基などを検出している。弧状列石は、大形の柄鏡形敷石住居である13号住居の張出基部の左右に連接して、径20～60cm大の礫を広口縦列に配置するが、この構築に際して地山斜面を最大70～80cmカットして平坦面を確保し、その裾部に列石を施している。列石の規模は、西側で延長約13m、東側で9mを測り、幅がともに2m前後と広い。ただし、この幅に関しては、斜面の下方へと散在する状況が看取され、廃絶後の崩落や攪乱により幅員を広げた可能性が高い。実際に、上部の石材を除去した最下部には、広口縦列に単列配置した状況が観察でき、おそらく掘削法面に石垣状に石積みされた様態が構築初期の基本構造と考えられる。この東側の列石下からは、墓坑5基や石棺墓1基が検出され、その東端部に1号石棺墓が位置する。張出部近縁がいずれも土坑墓である点を踏まえれば、土坑墓→石棺墓という時間的変遷と共にその構築が徐々に東側へと及んだことを窺わせる。これと類似したあり方は、群馬県行田梅木平遺跡の2号配石墓群にも認められ、墓域の拡大に伴って弧状列石が順次に附加・延長されていったことも想定される。これら遺構の時期は、13号住居の出土土器や最低1回の建て替え状況、それに1号石棺墓の出土土器などから、堀之内2式後葉～加曽利B1式期にかけた継続的変遷が推定される。また、13号住居は堀之内1式中段階の14号住居と入れ子状態で重複しており、14号→13号へと建て替え・拡張されたことが窺えるが、この14号住居の段階に列石が付設されていたか否かが問題である。さらに、その東・西の両側にあたかも脇土的に存在する15号・16号住居との関係も問題となる。15・16号住居ともに柄鏡形敷石住居であり、出土土器から16号住居は堀之内2式期に比定されるが、15号住居については堀之内1・2式期いずれなのか判然としない。ただし、弧状列石との関係は、両住居の「出入口部では、最低でも7・8段程度の横積みが行われていた」という状況を重視すれば、列石の構築最終段階には両住居ともに廃絶していたことが窺える。しかし、その一方で弧状列石の走行が、両住居の張出基部付近をトレースしている点は、15・16号住居と弧状列石との有機的な関係を示唆しており、可能性としては14→15→16→13号住居という変遷も想定し得る。集落の構造面から13号住居と弧状列石の様態を見ると、それら前面の南側には、遺物出土が希薄で他の遺構も存在しない直径20mほどの広場状の空間が存在し、対面南側へ約25m離れて土坑群が、またその西縁に堀之内1～2式期の多重復住居が複数棟存在する[9]。このような遺構配置は、13号住居に連接する弧状列石が囲繞した空間構造に規制されていることを示



5. 大柴（山梨）1/400



6. 青木（山梨）1/800



7. 金生．1号配石（山梨）1/400

8. 鵜山（長野）1/600

図10　中部地方の後期前半の列石遺構(2)

している。他に注意されるのは、沖積地に望む斜面末端部に構築された延長約5mの小規模な弧状列石である。この列石は、堀之内1式期の28号柄鏡形敷石住居の奥壁上部に位置し、当該期以降に比定されるが、先の13号住居に付随する弧状列石とは大きく異なる。列石の下部には何ら遺構が存在せず、集落外縁部の囲繞を意識した群馬県横壁中村・空沢の事例に類似している。

大柴遺跡（図10－5）は、報告書が未刊行であることや保存措置により詳細内容は不明だが、須玉町史によれば中・後期の住居5棟、「環状配石遺構」2基、土坑12基が存在する。「環状配石遺構」と呼称されたこの遺構は、①外帯と内帯の2帯構成で、幅2～4mの範囲に配置された幾つかの単位配石遺構で構成される、②外帯の外側に接して幅5～8m、高さ0.5mの環状盛土遺構が存在する、③時期は「曽利V期を中心に構築され、加曽利B期まで存続した」、④配石下に土坑（墓）が伴う可能性がある、⑤外帯に「配石祭壇」状の小配石が存在する、⑥「環状配石遺構」を中心にその周囲を住居群が取り巻く環状集落である、等が記されている。しかし、掲載の平面図からは外帯が環状ではなく、屈曲部を持つ延長約30mの弧状形態を呈することが判る。そして、その北東外縁には加曽利B式期の3号住居が近接して存在するが、当住居は敷き石の希薄な柄鏡形敷石住居の可能性が高い。また、3号住居が標高的に遺跡の最上位に位置していることなどを考慮すると、外帯とされる配石遺構は張出基部の左右に展開する弧状列石であり、しかもその下位には④の墓坑が伴うという状況が看取される。内帯は立石・石棒を中心に平石・丸石・自然石が組成した2基の配石から構成されるようであり、図や写真によれば直径6mほどの範囲に円環状に配置されている。この内帯と外帯の帰属時期が同一か否か不明だが、仮に同時期とすれば、柄鏡形敷石住居と融合・一体化した弧状列石の前面部に配石遺構を配置する、いわば内・外帯の重層的構造を有する唯一の事例となるが、果たしてどうだろうか。また、当該遺構の構築・存続時期が、③のように曽利V式～加曽利B式期までの長期にわたるのか否かも問題である。現段階ではいずれとも判断できないが、加曽利B式期の3号住居との融合関係や他の事例を考慮すれば、堀之内式期を遡ることはないだろう。また、⑥のように当遺跡を環状集落とする見解については、周辺域が未調査でもありいささか早計である。外帯の西端に「配石祭壇」とされる遺構が存在するが、これに類似するものは群馬県浅田遺跡にも認められ、こうした弧状列石が単純に石材を並べたものではなく、様々な機能を持つ組石状遺構や小配石が配置されていると判断される。

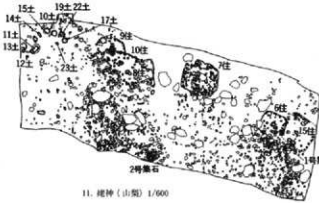
金生遺跡は、後期後半から晩期後半を主体とした集落で、後期中葉11棟、後期後半～晩期前半7棟、晩期前半～後半1棟、不明3棟の計22棟の住居や、配石遺構5基、石棺墓26基、土坑8基などを検出している。ここで取り上げる1号配石（図10－7）は、保存措置により下部の遺構状況は詳細不明だが、延長約60m、幅約6mの弧状列石で、下部には少なくとも11基の石棺墓が確認されている。また、この弧状列石の北側には、「方形石組」と呼称された4基の遺構が連接的に存在する。その大きさは長辺4～6m×短辺3～4mであり、規模・形態的に「方形周石住居」とされた後期後半の4・5・7・23・37号住居や晩期前半～後半の10・11・13・17・18・21・22号住居などに類似する点は重要である。この列石下部は未調査でもあり推測の域を出ないが、その東端には加曽利B2式期の23号住居が連接しており、この4基の「方形石組」も住居の可能性がある。この想定が正しければ、前述の北村遺跡のSB566号住居やSB555号住居のように、特定の住居の出入口部前面やその左右に弧状列石と墓域が随伴する状況を看取することができる。おそらく、1棟の特定住居が列石や石棺墓を随伴しつつ数段階にわたって建て替えを繰り返し、それらが廃絶された段階で住居や石棺墓群を被覆するように、その上面に配石行為が行われたのであろう。構築時期については、先の23号住居をその初現期と見なせば、加曽利B2式期に比定することができよう。また1号配石からは、後期後半と共に晩期前半の土器が出土しており、墓域から祭祀域への転換と晩期前半までの継続が指摘されているが（新津1992）、少なくともこの段階まで祭祀域としての機能・性格が継続していたと考えられる。当事例は、柄鏡形敷石住居が消失した後も、弧状列石と住居との融合・一体化が継続・残存していることを示すものであろう。

尚、上記の4例以外に茂沢南石堂遺跡（図9－4）の事例がある。「第1地点配石遺構域」の「2号遺構」とされたものは、加曽利B1式期の柄鏡形敷石住居の炉とそれに接する床面の部分敷石と考えられ、それらの南側延長線上に位置する「10号遺構」はその張出部に相当する可能性が高い。また、張出部の「10号遺構」の左右両側には配石墓あるいは石棺墓の「1・3～6号遺構」と共に弧状の配石が存在し、状況的には柄鏡形敷石住居の張出部に連接した弧状列石とそれに付随する配石墓群という関係が想定される[10]。また、その東側に近接して、堀之内2式期の柄鏡形敷石住居の「9号遺構」が存在し、この張出部の左右両側にも延長2～3mの配石が連接している。掲載写真や図から、張出部に付設された列状構造を有する弧状列石と判断される。列石下部の遺構の有無は不明だが、こうした堀之内2式期～加曽利B1式期の弧状列石を随伴する特定住居が、その構築位置を若干ずらしつつ同一地点に形成されている点は注目される。

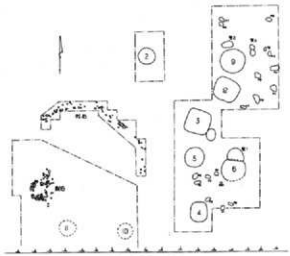
敷石住居と融合した弧状列石　弧状列石と敷石住居との融合関係に墓域が介在しない事例は、長野県三田原（宇賀神・他 2000）・茂沢南石堂（前掲）・伊勢宮（畔上・

9. 三田原．4号住居（長野）1/200

10. 伊勢宮（長野）1/400



11. 縄神（山梨）1/600



12. 堂前（長野）1/800

14. 宮久保．1号列石（山梨）1/200

13. 北村．C・D区（長野）1/400

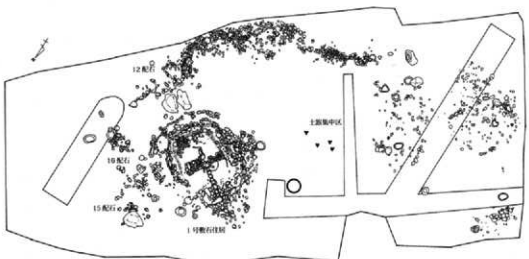
図11　中部地方の後期前半の列石遺構(3)

他 1981)・勝山（小林・他 1994)、山梨県川又（山路 1998)・青木（雨宮・他 1988）などの遺跡例と、その可能性を持つ山梨県蛯神遺跡（柳原 1987）の例がある。ここでは三田原遺跡と勝山遺跡の事例を中心に述べる。

三田原遺跡では、中期後半～後期前半の竪穴住居や柄鏡形敷石住居29棟、弧状列石１基、土坑39基等を検出した。住居の構築は、称名寺Ⅱ式期を欠くものの加曽利Ｅ１式期から堀之内１式新期にかけて認められ、柄鏡形敷石住居の形成は称名寺１式期以降であり、加曽利Ｅ４式期には見あたらない。土坑には墓坑が含まれると想定されるが、詳述無く集落内での位置関係等も不明である。報告では環状集落と認定されているが、１時期の形態として見れば環状を呈する可能性は低く、集落規模も一時期２～３棟と小さい。弧状列石(図11－９)は、径30～50㎝大の河床礫を広口縦列を基本に配置した延長11ｍを検出している。この列石は、堀之内１式末期の４号住居張出基部の東側に連接し、西側にも存在した可能性がある。列石の構築は、斜面部を掘削・平易して配列され、構築当初には岩下遺跡例と同様に複数段の積み石が存在した可能性が高い。また、列石内には立石が組み込まれているが、その下部や前面部南側には土坑等の遺構は何ら存在しない。構築時期は、４号住居との関係から堀之内１式期末葉をその最終段階と見なせるが、その初現期はどうだろうか。４号住居は堀之内１式期中葉の５号住と重複するが、５→４号の順の建て替えが想定できる。また、その東側に隣接する堀之内１式末期の１号住居(柄鏡形)は、主体部・柱穴ともに規模の大きな住居であるが、同期の２・３号とも相互に重複関係にあり、３→２→１号の順での建て替えが考えられる。その構築当初には、４号と同様に張出基部に連接する列石を有していたことが、東側に２ｍほど残る石材配置から窺える。報告では、１号と４号との関係を６号も含めて３棟が同時存在と認定し、「径40m内外の円形サークル」上にこれらが配列されたと想定している。しかし、それら住居の出土土器から見ると、１号住居と４号住居とは次のような関係を想定できる。１号住居を最終期とする３→２→１号の建て替えは、次に地点をやや東側に移して５→４号住居という建て替えに継続したという見方である。１～３号住居が、柄鏡形敷石住居と推定されるにもかかわらず敷石の残存状況が悪いのは、後世の抜石によるだけでなくこうした構築過程の中で再利用されたことも考慮される。この比定が正しければ、当列石は特定の柄鏡形敷石住居と連接関係を持ちつつ、堀之内１式期の前葉～末葉にかけて構築され終焉を迎えたことになる。これら住居や列石の遺跡内での立地は、標高的に最高位ではないが、同一地点での多重複や継続的な構築を行う住居は他になく、その特異性が注目される。

勝山遺跡（図10－８）は、中期後半の竪穴住居70棟、後期前半の住居13棟、土坑1400基、「配石」１基などを検出している。称名寺式期を除いて新道式～堀之内２式期まで各期の住居が存在し、後期の５棟は柄鏡形敷石住居であるが、それらの大半が地形変換点に東中央地域で激しく重複するために残存状態は悪い。「配石」は立石や単位的な小配石を組み込んで延長約40m、最大幅４～５ｍの規模で北東－南西の方向に直線的に走行し、全体形状は「環状ないし馬蹄形を呈する」ことや、堀之内２式期の44号柄鏡形敷石住居の張出部と一体化している可能性が指摘されている。この「配石」の形態については、44号住居の張出部と近接する15～20m部分では弧状形態が看取されるものの、少なくとも環状や馬蹄形の形態を見出すことはできない。ただし、両者の融合関係は、石材の敷設や位置的な状況から見て確実だろう。この列石の構築方法等は不明だが、基本的に列状構造を有すると想定され、その幅員が４～５ｍと広がっている点は、最下部の列石上位に積み上げられたものが崩落したことを窺わせる。この列石の前面部に当たる南東から東側にかけて土坑群が存在するが、後期前半の土坑は全て墓坑であり東側に群在するとされている。全体図中に明記されていないため、その位置を確認することはできないが、列石下部やその前面部に墓坑は存在しないようである。列石の時期は、44号住居の堀之内２式期を当てることができるが、他住居との連接関係が不明なためにその消長は判然としない。44号住居については、壁際を巡る複数列の柱穴の状況から、少なくとも１～２回程度の建て替えが窺える点に注目しておきたい。

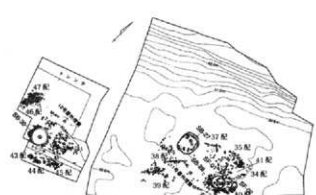
上記２遺跡の他に、伊勢宮・川又・姥神の３遺跡例について、簡単に触れておきたい。伊勢宮遺跡(図11－10)は、Ａ区で堀之内１式期の柄鏡形敷石住居２棟、弧状列石２基、集石遺構４基、配石土坑28基などを検出している。弧状列石の内、明確な列状構造を有するのは弧状列石２号のみであり、径30～70㎝大の河床礫を広口縦列に整然と配置し、延長約８ｍを測る[11]。この列石は部分的に複列配置や立石が認められ、確認段階では「自然の大礫で全部覆われる状態」とされており、複数段の石積みの崩落あるいは継続的給石により、最終的には乱石積み状を呈していたことが窺える。その走向は、１号柄鏡形敷石住居の張出部の1.5m手前で途絶するが、同張出部の反対側へも延長している可能性もある。仮に、両者が融合関係にあるとすれば、列石の走向が張出部前面を囲い込むような他遺跡でのあり方とは逆方向をとる点で、やや異質である。しかし、神奈川県馬場No６遺跡の１号配石とＪ４号敷石住居との関係でも同様の状況が認められ（図６－７)、弧状列石の囲繞する空間が張出部の前面ではなく後方の可能性もある。尚、配石墓と想定される土坑上部に標石状の配石を施した「配石土坑」が、弧状列石２号を挟んでその南・北の２地点に群在するが、弧状



15. 塩瀬下原（山梨）1/400

16. 川又，A区配石（山梨）

17. 破魔射場，C地区（静岡）1/800



18. 破魔射場，B-2 地区（静岡）1/800

図12　中部・東海地方の後期前半の列石遺構(4)

列石下部には存在しないようである。

川又遺跡は、報告書が未刊行のために詳細不明であるが、須玉町史第1巻に掲載された写真（図12－16）により弧状列石を随伴する柄鏡形敷石住居と判断される[12]。この住居は主体部が方形状を呈して壁際を周石が巡り、張出基部の左右に連接して扁平な径20～50cmの河床礫を広口縦列配置した弧状列石が存在する。列石の長さは、少なくとも10m以上に及ぶことが看取でき、径1～2mの小配石や径1m前後の巨礫を多数の小礫で囲繞する組石状遺構などが付設される。さらに、この列石に連接して、住居の主体部外縁を二重に囲繞する周堤礫も存在する。弧状列石や小配石・組石の下部、またそれらの前面部などに墓坑などの遺構は存在しないようである。

姥神遺跡（図11－11）は、中期後半～後期中葉にかけての集落で、堀之内2式～加曽利B2式期の6棟の方形住居の前面部には、不定形かつ散在的な配石群が存在する。後世の攪乱なども加わって残存状態は悪く、明確な列状構造は認められないが、やや集中した分布状況であることから構築当初は弧状列石的な配石遺構が、それら住居の出入口部に連接していた可能性もある。また各住居は相互に重複関係を有し、いわば同一地点での建て替えによる多重複関係ととらえることもできる。この配石遺構については、「半径20mの環、或いは高根町石堂遺跡例のように方形をなす可能性がある」（櫛原 1987）と想定されているが、形態的にはむしろ前述した金生遺跡の「1号配石」のあり方に類似している。方形住居群の前面部に展開する配石遺構や集石遺構の下部には、土坑や配石墓等は存在しないが、周辺には立石や丸石を中心部に配置した組石状配石の「集石遺構」2基や、石棒・多孔石・土偶等の多くの遺物が散在し、祭儀的行為の存在が窺える。また、出土土器から見てこれらの住居と配石遺構との融合関係は、堀之内2式～加曽利B2式期にかけて存続していたと想定される。

土坑墓・配石墓を伴う弧状列石　柄鏡形敷石住居や竪穴住居とは連接しないが、弧状列石の下部に土坑墓や配石墓を伴う事例としては、山梨県青木遺跡（図10－6）がある。加曽利B1～B3式期を中心とした集落であり、住居15棟、配石遺構3基、石棺墓20基、土坑1基等を検出している。各遺構の時期・構造、住居と配石遺構との関係等に関しては、詳細不明である。3基の配石遺構は未調査部分を残すが、1号が延長約20m・幅員2～4m、2号が延長約25mで部分的ながら相互に2～4mの間隔を置いて3列の併行配置が認められる。3号は延長8mで幅員が6mを測るが、2号と同様に複数列の配置によりその幅を広げていると推定される。1号の下部遺構は未調査のために不明だが、2号・3号は石棺墓群の上位に構築されている。2号では北側の配列に列状構造が認められることから、1・3号も基本的に同様の構造をベースにして、最終的に幅広の積み石状となったことが窺える。また、2号が複列の列石となるのは、13～18号石棺墓とは頭位方向を90度違える19・20号石棺墓の配列を意識したものと考えられ、3号も頭位方向は同一ながら石棺墓が複列配置となることから、2号と同様に複列の列石が想定できる。このようなあり方は、群馬県行田梅木平遺跡の1・3号配石墓群や長野県北村遺跡のSH506・SH1111配石群にも認められ、集団構造を反映している可能性が高い。これら配石遺構の構築時期は、加曽利B1～B3式期に比定され、2号配石遺構の東側に近接して堀之内2式期の12号住居が、また3号配石遺構の北側に近接して加曽利B式期の8号住居が存在する[13]。12号住居は、張出部の両側に弧状列石が連接する柄鏡形敷石住居であり、こうした点を含めて住居と配石遺構とが有機的関係を持つことも想定される。尚、周辺部から安行2式土器も出土しており、加曽利B式期以降の最終段階では墓域→祭祀域へと変遷していることも窺える。

この他に、延長8mの弧状列石下部に墓坑と認定された径1m、深さ20～40cmほどの小土坑10数基が伴う山梨県宮久保遺跡（村松・他 1999）の事例がある。しかし、これらの墓坑は深度も浅く出土遺物も存在しないことや、その周辺にも多数の同様の土坑が存在するなど、墓坑と断定できる状況にはない。また、その時期も加曽利E4式期～堀之内2式期までの時間幅が想定され、特定することができない。参考事例にとどめておくが、小規模な弧状列石であることは確実である。

その他の弧状列石　住居や配石墓などとの遺構を伴わない弧状列石単独の事例が、長野県北村（前掲）・堂前（友野・他 1979）・岩下（前掲）と山梨県塩瀬下原（笠原・他 2001）に存在するが、岩下遺跡例は前記を参照されたい。北村遺跡（図11－13）では、前述した配石墓群の検出地点E区から西方へ100m離れたC・D区にSH1配石遺構が存在する。この配石は、径30～60cmの河床礫を広口縦列配置した明瞭な列状構造を持つ弧状列石で、延長約14mで立石を組み込んだり部分的に複列配置も認められる[14]。列石の下部には墓坑などの遺構を伴わず、その一部が堀之内2式期のSB104号住居の上部に配置されることなどから、堀之内2～加曽利B1式期に比定されている。ただし、この方形のSB104住居との関係については、弧状列石がその出入口部を走向しており、融合的な状況も考慮される。弧状列石の前面部には、不定形な配石遺構が5基ほど存在するが、拳大の河床礫を用材とすることや露出した段丘礫層との区別が困難なことから、遺構ではない可能性もある。当調査区には、E区のような墓坑・配石墓は一切存在せず、この弧状列石が墓域と関係する可能性は低いが、E区の配石群とも同時期に共存しているとすれば、地点を違えて機能・性格の異なる配石遺構が構築される事例と言えよう。

塩瀬下原遺跡（図12－15）は、堀之内１式～２式期の柄鏡形敷石住居１棟、配石遺構８基、土坑８基、焼土遺構３基などを検出している。12・13号配石は相互に近接して連続的な弧状の配列を持ち、構築当初は一体のものであったと考えられる。両者を併せた規模は延長25m、幅１～３mを測り、乱石配列状を呈する。しかし、部分的に20～40cm大の河床礫を広口縦列に配置した列状構造が看取され、弧状列石と認定できる。この列石の北側延長上には15・16号配石が存在するが、一連の列石の可能性が高く、これらも含めれば延長35mの規模となる。列石下部に遺構は存在しないが、その区画内側に近接して１号敷石住居が存在しており、この住居を囲繞するかのような様態を見せる点で注目される。１号敷石住居は、主体部での十字状の部分敷石や外縁部に周堤礫を持つ特徴的な柄鏡形敷石住居であり、堀之内１式～２式期の複数期にわたる居住が想定されている。また、列石の西側には上部配石を伴う土坑墓群が存在し、堀之内１式期の注口土器を副葬したものもあるが、基本的に弧状列石とは連接していない。列石の周辺からは堀之内１～２式期の土器片が出土しており、１号敷石住居との関連からも当該期に比定されよう。

堂前遺跡（図11－12）は、中期後半（中期後葉Ⅱ～Ⅳ期）を主体とする集落で、竪穴住居９棟、土坑約170基の他に、堀之内１式期の柄鏡形敷石住居１棟と時期不明の「列石」１基を検出している。「列石」遺構は、残存不良ながら延長約30mが確認され、明確に広口縦列配置の列状構造を有すると共に、部分的に複列配置も認められる。この区画内側の20m南方には、堀之内１式期の柄鏡形敷石住居と推定される「配石」が存在するが、この方向には延長されないことから、弧状列石と考えられる。明確な伴出遺物はないが、周辺から称名寺Ⅰ式～加曽利Ｂ１式期の土器片が出土しており、後期前半に比定される。部分的な調査でもあり、列石下部や区画内部の状況をはじめ集落内の遺構配置も判然としない。

(3) 東海地方（静岡県）

a．列石遺構の様態

大・小規模を問わず、環状列石と認定できるものは皆無であり、また柄鏡形敷石住居の張出基部に連接して融合・一体化するものや、墓域と複合する事例も見出すことができない。中期末葉段階の状況から見て、関東・中部地方とも連動した様相を想定できるが、現状では単独的な弧状列石が確認されるのみである。

b．弧状列石の様相

前述したように、他の遺構と直接的関係を持たない単独的な弧状列石が、破魔射場遺跡（井鍋・他 2001）で認められる。B・C区（図12－17・18）より、中期後半～後期前半の住居29棟、配石遺構47基、配石土坑３基、集礫群、埋設土器10基、土坑などを検出。配石遺構とされたものの中には、柄鏡形敷石住居の残骸と思われる21号配石（称名寺Ⅰ式期）や、加曽利Ｅ４式や称名寺Ⅰ・Ⅱ式の屋外埋設土器も存在することから、全体的には曽利Ⅰ式期から堀之内２式期までの継続的集落と想定できる。ただし、中期の住居はC－１区に、後期はB－２区に集中して互いに立地を違えており、ともに環状の集落形態は持たない。各配石遺構の時期は、１～12・14～16号が中期後半、他は後期前半に比定されているが、中期後半の４～10・12・14・15号には明確な伴出土器がなく、また２・11・16号には堀之内１～２式土器が伴出すること、さらにC－１区の場合には中期後半と後期前半の配石遺構がほぼ完全に重複関係にある状況などを考慮すれば、その大半が後期前半に帰属する可能性もある。いずれにしても確定できない状況であり、ここでは堀之内１～２式土器を伴出している後期前半の配石遺構について、前述のような柄鏡形敷石住居や集石土坑に認定されるものを除き、以下の４つに分類してその様相を述べる。

①明確な列状構造を持つ弧状あるいは直線状の配石遺構
　－18・23・33・37・38・40号
②列状構造を持たない不定形かつ散在的な配石遺構
　－17・19・24～29・36・39号
③下部に土坑を伴う不定形な小配石遺構－20・22・42号
④立石や平石を中心部に置いた組石状の配石遺構－30号

列石遺構と認定されるのは①のみであるが、23号を除いていずれも弧状形態を呈し、径30～50cm大の河床礫や亜角礫の他に石皿・多孔石などを用いて延長４～10mに配置した小規模な弧状列石と言えよう。C－１区18号は、地形変換点の等高線に沿って構築され、集落の外縁部を囲繞する事例と考えられる。同区の33号は、直径７m前後の環状列石と認定されているが、実際には南側部分に断続的ながら延長約10mの弧状列石が存在するのみであり、環状列石と見なすことはできない。当配石からは縁石的な配列や多量の土器・石器類が出土しており、21号配石のように柄鏡形敷石住居の残骸の可能性も考慮される。また、同区の23号は1.5m×4.5mの長方形状の配石とされているが、延長4.5mと2.5mの２基の列石が約1.5mの間隔を置いて平行する状況であり、長方形状に囲繞されるか否か確定的ではない。B－２区の37～40号は共に同一方向に走行しており、重層的な配置も想定されるが、それらは堀之内１～２式期のSB26・27号住居に近接して存在し、両者が有機的関係を持つことが窺える。特に、SB26号住居の前面部に近接する40号は、全体図や写真から延長約６mの積み石された列石遺構であることが看取できるが、その東端の列石下部には径3.5×1.5mの長楕円形状の土坑が存在し、墓坑を伴う可能性もある。③については、標石状の配石を伴う土坑墓の可能性が高く、B－２区42号は弧状列石の39号の下位に存在する点で、先

の40号に伴う墓坑状の土坑とも類似する。当遺跡の列石遺構は残存状況が悪く、全体的なあり方を分析することは難しいが、39・40号のように住居に近接して下部に墓坑を伴う列石と、18号のように集落外縁に構築される列石の2タイプが併存すると思われる。ただし、直径が20mを超えるような大規模な環状列石や、柄鏡形敷石住居に連接するような弧状列石のあり方は認められない。中期末葉の柄鏡形敷石住居が検出されていない点は、当遺跡の列石遺構の形成時期を考える上で、踏まえておく必要があろう。

5．列石遺構の地域的様相と中期から後期への変容

(1) 中期末葉の列石遺構の地域性と普遍性

a．列石遺構の構造

環状列石　先述したように、現在明確な列状構造を持つ大規模環状列石の事例は、群馬県久森遺跡・野村遺跡・東平井寺西遺跡、神奈川県川尻中村遺跡、山梨県牛石遺跡、静岡県千居遺跡の6例にとどまるが、これら相互間にはいくつかの共通要素と共に地域差あるいは個別的差異とが存在している。まず共通要素としては、以下の5点を挙げることができる。

①形態は隅丸方形を基調としている。

②構築方法は広口縦列による単列配置を基本として、特定の箇所には複列配置や石垣状の敷段の積み石が認められる。

③列石の配列内に、複数の単位的な小配石や男・女性原理を象徴する立石・多孔石などを連結あるいは組み込み、単純な石の配列とはならない。

④列石の下部やその区画内部には、住居・貯蔵穴・墓・埋設土器などの遺構形成が皆無であり、土器・石器などの出土遺物も極めて僅少である。

⑤環状列石は、集落内に構築されている。

上記事項を若干補足すれば、②の石垣状の積み石は、野村遺跡に顕著に認められ、整然とした敷段の横口積みが斜面上位側の配列で良好に残存している。また、牛石遺跡や千居遺跡でも外縁部の弧状列石が近接する側の石積みが顕著である。このように、列石の構築において内容的な偏りが斜面上位側や重層配列される側に集中する現象は、環状列石に外見的な正面観が存在したことを示唆している。また、その石積みが強度的に優れた小口積みではなく、「小牧野式」に近似した横口積み（平積み）である点は、装飾的効果を意図したことも想定される。これらの点に関しては、環状列石の機能・性格に関わる問題でもあり、後段にて詳述したい。④に関して墓などの遺構が存在しない点は、環状列石が直接的に死者の埋葬に関わる施設ではなかったことを示している。また、遺物の僅少さは、列石の区画内が生活残滓が入り込むような日常的空間ではなく、清掃等の片付け行為による聖的空間が維持されていたことを物語っており、中央空間部に貯蔵穴や墓坑などが形成される環状集落の様態とは大きく異なる。⑤については、環状列石の外縁部に位置する柄鏡形敷石住居などの存在により明白であるが、同時にそこが祭儀を専らとする場所ではなく、日常的な生産活動が行われていたことも打製石斧や凹み石・磨り石類を主体とした出土石器のあり方から看取される。

一方、相違点には、以下の2点を上げることができる。

イ．規模の面で地域差があり、関東地方の環状列石に比べて、中部・東海地方の方が大きい。

ロ．環状列石の外縁部に1～2単位の弧状列石が同心円状に重層配置されるケースと、配置されない単層構造のケースが存在する。前者の場合には、柄鏡形敷石住居が外縁部弧状列石と同位置に形成される点でも異なる。

イについては、関東地方の久森・野村・東平井寺西・川尻中村の4遺跡例共に長径30～36m×短径26～30mとかなり近似した規模であるのに対して、中部地方の牛石遺跡では長・短径50mを測り、また東海地方の千居遺跡でも長径42m×短径32mとなって後者の地域の方が大規模化している状況にある。ロについては、久森・野村・千居の各遺跡が前者の例であり、後者には川尻中村遺跡を上げることができる。牛石遺跡では、径2～4mの4基の小配石が環状列石の東西南北の四辺に存在し、また千居遺跡でも同様の配石遺構が外縁部の弧状列石と連接して存在しており、久森・野村のような外縁部の弧状列石と連接する柄鏡形敷石住居に比定する見解もある（石井 1998）。牛石遺跡は外縁部が未調査のために確定できないが、この想定が正しければ環状列石には牛石遺跡の例を加えた3タイプが存在することになろう。

一方、小規模な環状列石の事例は、群馬県坂本北裏遺跡と長野県円光房遺跡、静岡県上白岩遺跡の4例が存在する。時期的に中期末葉以降であることは確実だが、後期前半にまで下る可能性もあり、これも確定的ではない。各例ともに正円に近い環状形態を呈し、規模も直径8～12mとかなり斉一的な様態を示している。また、その構築が広口縦列配置を基本として列石中に単位的な立石・小配石を組み込んだり、列石下部や区画内部に何ら遺構を伴わないことや、集落内に構築されることなども共通する要素と言える。規模や形態の側面を除けば、内容的には先の大規模環状列石の縮小版とも言える様相を呈するが、坂本北裏や円光房のように同一遺跡内では大規模な列石遺構の外縁部に付属的に構築されており、基本的に単独では存在しない状況も窺える。

弧状列石　延長が20mを超える大規模弧状列石については、群馬県横壁中村・空沢・田篠中原、埼玉県塚越向山、長野県大野・円光房など6遺跡例を数えるが、形態的な差異を除けば基本的な構造は、先の大規模環状列

石における②～⑤の特徴とほとんど同様である。また、2基の弧状列石が平行配置されるケースが、塚越向山・横壁中村・空沢の3遺跡に認められ、こうした重層的構造を持つ点も環状列石に近似している。他の事例については、部分的調査のために全容不明であるが長野県小林遺跡、静岡県年川前田遺跡なども同様の重層構造をもつ弧状列石の可能性が高い。

ところで、円光房遺跡では、弧状列石の区画内側中心部に立石を主体とする組石状配石群が存在しており、重層的配置の一種と考えられるが、他には認められない極めて特殊な構造を持っている。こうした点は、弧状列石の構造にも少なからず個別的あるいは地域的差異が存在することを示すものであろう。

小規模な弧状列石の場合は、群馬県坪井・長久保大畑・白川傘松・下鎌田、神奈川県当麻など関東地方で5遺跡、長野県曽利・尖石、山梨県屋敷添・大月など中部地方で4遺跡の合計9例が確認できる。列石遺構の中では最多数を占めている。構造的には、列石下部やその周辺に何ら遺構が存在しないなどの点で大規模な環状・弧状列石と大差ないが、列石中に立石や組石状配石が挟在したり石垣状に積み石されたりすることは希薄であり、より簡素な様態を呈している。また、基本的に他の列石遺構と組成することがなく、単独で形成される事例が大半を占めることも特徴の一つである。

b．集落内の空間配置

環状列石　中期の列石遺構が、集落内に形成されていることについては前述したが、その機能・性格を想定する上で集落内での占地場所を確認することは必要不可欠である。先ず、関東地方の大規模環状列石のケースを、久森・野村・東平井寺西・川尻中村の4遺跡で見てみよう。川尻中村遺跡を除く3遺跡では、併行期の柄鏡形敷石住居が斜面上位の外縁部に存在し、環状列石は地形的に平坦な中心的エリアに位置する。詳細に見ると、野村の場合は環状列石が1～2段階古い住居群の上部に構築され、併行期の柄鏡形敷石住居群は前段階とは重複せずに斜面上方に占地替えをしている。久森では、環状列石や柄鏡形敷石住居群は前々段階の住居群とは全く重複関係を持たない。尚、両遺跡ともに柄鏡形敷石住居は、時期が下るに連れてより斜面上方に占地するようになり、特定の柄鏡形敷石住居（野村：J14号住居、久森：1号住居）が弧状列石と連接する状況も認められる。また、環状列石の構築に先行する時期の集落が、環状集落のような大規模なものではなく、両遺跡ともに小規模であることも見逃せない。川尻中村遺跡の場合は、前3例とは異なり大規模な拠点的環状集落の住居帯の内縁側に構築されて、いわば前段階の空間規制を踏襲するかのようなあり方を示す点が特徴的である。しかし、併行期の集落規模は小さく、その住居帯が環状配置される状況は認められない。また、その柄鏡形敷石住居が環状列石よりも斜面上方に構築されている点は、前3例と同様である。

一方、中部・東海地方の牛石遺跡や千居遺跡ではどうだろうか。環状列石外縁部が未調査の牛石遺跡は、集落の形態・規模等が不明であるが、地形的にはその中心部に環状列石が構築されていると考えられる。千居遺跡では、前段階の環状集落の中心部を横断して環状列石や弧状列石が構築されており、野村遺跡のあり方に類似している。併行期の集落構造は不明瞭だが、「第1・2配石」が敷石住居とすれば、関東地方の事例と同様に環状列石よりも斜面上位に住居群が配置される構造となろう。

弧状列石　環状列石に付随しない大規模な弧状列石については、集落内での構築位置により大きくA・Bの2つに分類することができる。A類には、群馬県田篠中原遺跡、長野県円光房遺跡などがあり、集落の中心部に構築されてその斜面下方を囲繞するかのように弧が湾曲・開放し、斜面上位側には柄鏡形敷石住居が配置される傾向を有する。これに対してB類は、群馬県横壁中村・空沢、長野県大野の4遺跡例があるが、住居帯や集落末端の外縁部に構築されるのが特徴的であり、あたかも集落全体と外部とを区画・遮断するかのような全く異なった様相を呈する。また、A類には立石・小配石などが組み込まれる頻度も高く、内容的には複合的様相をもつ環状列石のあり方に近似する点でも、B類との違いは大きい。埼玉県塚越向山遺跡では、斜面の最上位に弧状列石が構築されて併行期の柄鏡形敷石住居は同標高ながらその北側に近接する。先のA・B両類とも様相を異にするが、遺構の構築可能な段丘幅が約30mと狭小なこともあり、基本的にはA類に近似した様態と理解される。集落内におけるA・B類の弧状列石は、関東・中部地方ともに大きな差異は存在しないと言えるが、これまでのところ一遺跡内で両類間土あるいは大規模環状列石と併存する事例は認められず、個々の列石遺構の機能・性格を考える上で注意される。

小規模な環状・弧状列石については、前述したように多数の遺跡で確認されているが、前段階の拠点的な環状集落地内に列石遺構が形成される場合には、こうした小規模なものがほとんどと言って良い。関東地方でのケースを白川傘松・当麻の2遺跡で見ると、これらの遺跡では中期中葉～後葉段階にかけて十数棟の住居から構成された環状の集落形態が維持されているが、柄鏡形敷石住居や弧状列石が出現する加曽利E3式末～同E4式段階では、その環状形態や重層構造は崩壊している。傘松遺跡と当麻遺跡の小規模弧状列石は相似し、環状集落跡地の中央空間部や住居帯内縁部の付近に構築されて、前段階の環状原理や重層構造に規制されたかのような様相を呈する。しかし、傘松遺跡の場合には併行期の柄鏡形敷石住居がその中央空間部へと侵出し、また当麻遺跡の場

合は南側に集中配置されており、総体的に見れば両例共にそうした規制から逸脱していることがわかる。

中部地方では大規模な環状集落内に列石遺構が構築される例として、曽利遺跡と尖石遺跡の２例がある。部分的な調査のために詳細は不明だが、いずれも小規模な弧状列石と考えられる。また、列石遺構の事例ではないが、的場・門前遺跡でも大規模環状集落の住居帯内縁部に立石群が弧状に展開し、前段階の空間規制を踏襲するかの様態を示している。しかし、併行期と想定される中期末葉の住居数棟は斜面上位に存在しており、環状配置されない可能性が高い。墓坑上面の小配石が、小規模環状集落の住居帯内縁部に弧状に展開する立石遺跡の事例も、的場・門前遺跡に近似した様相を呈している。

以上のように、環状集落跡地に立地する大半の列石遺構には、前段階の住居帯や土坑・墓坑群などの遺構配置を規制していた環状原理との直接的関係は希薄と言えよう。しかし、小規模な弧状列石が前段階の環状集落の中心部近くに形成されるケースも少なからず認められる点は、広場的な中央空間部の意識が継承されている可能性も窺える。また、例外的ではあるが大規模環状列石の川尻中村遺跡例の場合も同様であり、必ずしも斉一的ではなく地域的差異があることも考慮する必要があろう。

c．列石遺構周辺の諸遺構

環状・弧状列石の周辺には、必ずといって良いほど柄鏡形敷石住居が併存し、両者の密接不可分な関係が明瞭であるが、それ以外の遺構で目に付くのは、径50～100cm前後の小規模な方・円形の組石状配石と集石土坑や埋設土器などである。立石や丸石などを中心部に置いてその巡りを礫で囲繞する組石状配石は、主に大規模な環状・弧状列石の外縁部に散在しており、関東地方北部の久森・横壁中村・坂本北裏・田篠中原・塚越向山などの遺跡で検出されている。列石遺構を伴わない他の集落遺跡では、検出事例がほとんど見出せないことから、列石遺構と強い相関性を有していることが窺える。

一方、中部地方では立石単独かあるいはそれを囲繞する組石状配石が、大野・小林・円光房などの遺跡で列石遺構の外縁部に併存するが、丸石を囲繞する組石状配石は存在せず、関東域とは異なった様相を呈する。状況的には丸石を伴う組石状配石は、関東地方北部域に限定された地域的な配石遺構の可能性が高い。

集石土坑や埋設土器は、列石遺構の規模や形態の差を問わず各地域の当該期遺跡で検出例があり、かなり普遍的な遺構と考えられるが、通常の集落遺跡に比較すれば列石遺構を伴う集落での数量が多いと言える。集石土坑は「儀礼的炊爨」行為に伴う遺構とも想定されているが（谷口 1986）、少例ながら群馬県坪井・田篠中原、長野県大野、山梨県大月などの遺跡で検出されている焼土痕や被熱痕などとも合わせて、火を用いた儀礼的行為の存在が推定されよう。ただし、焼獣骨片の検出事例がほとんど認められない点は、そうした儀礼が後期段階でのあり方とは異質であったことを示唆している。

この他に、掘立柱建物が列石遺構と共に検出されている事例は、長野県大野遺跡を除いて見当たらず、少なくとも大規模な環状・弧状列石に随伴する可能性は極めて低いと言えよう。

d．列石遺構の構築時期とその消長

列石遺構は、その石材中や下部に土器を伴うことが極めて稀であり、時期を確定することはなかなか困難なことである。多くの場合、住居などの遺構との重複・配置関係や周辺からの出土土器を参考に想定しているのが実状であるが、中期末葉段階で終焉する遺跡も多々認められ、その想定も確度の高いものと言える。

先ず、関東地方での状況を見ると、栃木県佐貫環状列石を除き、他の全ての遺跡から併行期の住居が検出されている。集落の内容を充分に想定できる程度に調査しているのは、群馬県久森・野村・東平井寺西・三原田・田篠中原、埼玉県塚越向山、神奈川県川尻中村・当麻の８遺跡にとどまる。

大規模環状列石の久森・野村の両遺跡例は、斜面上位に構築された弧状列石に近接あるいは連接して加曽利Ｅ３式末～同Ｅ４式期の柄鏡形敷石住居が存在し、環状列石はそれらよりも斜面下位に構築されている。このような柄鏡形敷石住居との配置関係や両遺跡ともに後期の遺構が存在しないこと等から、加曽利Ｅ３式末～同Ｅ４式期にかけて構築され、そして同期内で終焉を迎えたことが想定できる。部分的調査ながら東平井寺西・川尻中村の各事例もこれらと同様の遺構状況が認められ、ほぼ同期に比定し得る。このように、大規模環状列石の場合には、その構築・終焉期は加曽利Ｅ３式末～同Ｅ４式期であり、後期にまで継続する例は皆無である。つまり、中期末葉に出現した大規模環状列石は、後期初頭まで構築され続けることはなく、関東各域においてほぼ斉一的に中期の枠内という短期間で消滅したことが看取できる。

一方、小規模環状列石や大・小規模弧状列石の場合はどうだろうか。やはり明確な伴出土器を持つものはなく、群馬県坂本北裏遺跡の小規模環状列石の場合、加曽利Ｅ３式後半以降であることは確実だが堀之内１式期まで下る可能性もある。大規模弧状列石の田篠中原遺跡や塚越向山遺跡などは、集落の存続時期や住居などの遺構との配置関係から加曽利Ｅ３式末～同Ｅ４式期に比定することができ、他に群馬県横壁中村・空沢などの両遺跡も先と同様のあり方から当該期と考えられる。小規模弧状列石では、群馬県坪井・白川傘松、神奈川県当麻などが同時期に想定できる。

このように、明確に列状構造を有する環状・弧状列石の出現期は、遡ったとしても加曽利Ｅ３式期末段階であ

り、そしてその構築は同Ｅ４式期末までの中で終焉して、確実に後期まで継続する事例は見あたらない。こうした動向は、基本的に先の大規模環状列石と軌を一にするものであり、各列石遺構が中期末葉における祭祀構造の中で相互に連関して存在していたことを示している。また、後期へと継続する事例が存在しないことは、直接的には後期の列石遺構の立地が別地点を選択したことを表示するものであるが、そこには同時期の祭儀を巡る観念の相違が反映されていることを窺わせる。いずれにしても、列石遺構を介在した中期末葉と後期前半との間には、大きな文化的画期が存在したことを示唆するものだろう。

次に、中部地方における列石遺構の出現状況を見てみよう。従来から配石遺構の機能・性格や出現過程を巡って注目されてきたのは、長野県の上原遺跡や阿久遺跡の前期の事例である。上原遺跡例は10数本の立石を直径２～４ｍの円形状に巡らせたもので、阿久遺跡例は単位的な直径１ｍの集石遺構群が環状集落の重層構造に規制されて住居帯の内側に環状配置されたものであり、いずれも列状構造を持たない点で中期後半の列石遺構とは異質なものと言える。また、後述するように、前期後半から中期前半にかけての列石遺構の事例が皆無な状況を重視すれば、阿久遺跡のような事例を中期後半の列石遺構の祖型としてその系統上に置くことはできない。

ところで、当地方の明瞭な列状構造をもつ環状列石や弧状列石の出現時期については、長野県の小林遺跡の事例から中期前葉とする見解（林 1990、阿部 1998）や、大野遺跡の事例から「中期中葉の最新段階～中期後半」とする見解（佐々木 2002）が示されている。これについては、前章の資料分析の中でも触れておいたが、小林遺跡の場合、列石下部から検出された梨久保式土器を伴出する「第１号土壙」が、列石の構築以前のものである可能性を排除できないことや、その周辺部から多量に出土している中期後葉Ⅲ・Ⅳ期の土器片を考慮すれば、時期的には中期後半～末葉段階まで下ると見るのが妥当であろう。また、大野遺跡については、小規模環状集落の住居帯内側に配置された墓坑群上面の小配石群を「環状列石」と認定したものであるが、これらの小配石が相互に連結するような列状構造を持たない点から見ても、「環状列石」ではないことが明白である。基本的には、環状集落の同心円状の重層構造により、墓坑帯・掘立柱建物帯・住居帯などが配置された結果と判断され、このような墓坑上面の小配石群を環状列石の祖型と見なすことはできない。ただし、住居帯外縁部に構築されている「直線状列石」は明確な列状構造を有しており、中期後葉Ⅳ期以降の曾利Ⅴ式や加曾利Ｅ４式併行の出土土器が見あたらないことから、初現期の列石遺構の可能性はある。

また、これらの事例とは異なるが、環状列石の祖型とされているものに山梨県後田遺跡の例がある。佐野隆は、配石下位に曾利Ⅲ～Ⅳ式期の埋設土器を伴う同遺跡Ｃ区１・２号配石を例に引き、「中期末の配石遺構が、埋葬、葬送儀礼に関連して出現した」ことや、関東・中部地方の環状列石が東北地方に先駆けて出現した可能性などを指摘している（佐野 2001ｂ）。列石遺構の機能・性格に関わる点に関しては後段で扱うとして、これらの配石遺構が中期末葉の列石遺構の祖型として認定できるか否かが問題であろう。結論的に言えば、形態や石材配置と列状構造の点で列石遺構の様態とは大きく異なっており、少なくとも環状列石の祖型と見なすことはできない。こうした配石遺構が曾利Ⅲ式段階に出現していることは、当該期の竪穴住居内での石柱・石壇の存在とも併せて、列石遺構の出現・構築に何らかの関係性を有するとも考えられるが、基本的には中部地方の地域性の範疇で捉えるべき内容であろう。

大規模な環状列石の出現期については、牛石遺跡の１例から窺い知るのみであるが、それも列石外縁部の調査が行われていないために確定することは難しい。ただし、列石周辺から出土している土器には、曾利Ⅳ～Ⅴ式と加曾利Ｅ４式が主体的に認められるようであり、当該期を中心とした構築である可能性が極めて高いと言えよう。

同様に、小規模環状列石や弧状列石の出現期も確定的ではないが、長野県円光房遺跡や山梨県中谷遺跡の事例から見て加曾利Ｅ４式期や曾利Ⅳ・Ⅴ式期が想定され、後期まで継続する可能性は低い。

東海地方の列石遺構の出現期も、千居・年川前田・上白岩などの３遺跡例から、曾利Ⅳ・Ⅴ式期を中心とすることが窺える。特に、千居遺跡の大規模環状列石については、後期前半の土器がほとんど存在しない状況から見て、中期終末段階で廃絶していることが想定できる。

以上のように、関東・中部・東海の各地方を通じて、明確な列状構造をもつ環状列石や弧状列石の出現は、加曾利Ｅ３式後半段階であり、曾利式で言えば同Ⅳ式期を遡ることはない。また、環状列石の形成は関東地方で若干先行する可能性も想定されるが、大きく前後することなくほぼパラレルな状態で各地域に構築されたと考えられる。さらに、弧状列石などを含めた中期末葉の列石遺構は、後期前半まで継続して構築・利用されることはなく、同終末期までの短い期間内で終焉を迎えるという、地域を超えた共通の文化事象を確認することができる。

これに関連して、同一遺跡内に中期末葉から後期前半の列石遺構が共存する例が、関東地方の横壁中村・塚越向山・三ノ宮下谷戸、中部地方の円光房などの遺跡で確認されている[15]。しかし、これらの事例でも、中期末葉の列石遺構の上部に後期の列石遺構が連続・累積的に構築されることなく相互に地点を変えていることは、基本的に先の断絶状況と同次元の現象として理解できよう。

(2) 後期前半の列石遺構の地域性と普遍性

a．列石遺構の構造

前章で各地域の事例を検討する中で明確になったように、後期においては大規模な環状列石の構築は認められず、規模の差は存在するものの弧状列石を主体とした列石遺構へと変容している。その様態を基に分類すると、柄鏡形敷石住居の張出基部に連接するⅠタイプと、そのように住居とは融合・一体化することなく単独形成されるⅡタイプとの２つに分類することができ、さらにそれら列石の下部に墓坑や配石墓を随伴するａ類と、随伴しないｂ類との２つに細分される。こうした列石遺構について、各タイプ・地域別にその詳細な構造を見てゆこう。

Ⅰタイプの弧状列石　関東地方では、弧状列石が柄鏡形敷石住居の張出基部に連接し、かつ下部に墓坑・配石墓を伴うⅠａタイプは、群馬県前中後・行田梅本平（２号配石墓群）、神奈川県馬場 No6・三ノ宮下谷戸（16号敷石住居）などの遺跡に、また墓坑・配石墓を伴わないⅠｂタイプは、群馬県浅田・暮井、神奈川県下北原・三ノ宮下谷戸・曽谷吹上の各遺跡に存在する。Ⅰａタイプの弧状列石は、土坑墓・配石墓の上部に広口縦列に配置されるが、構築当初は土坑墓や配石墓の上部配石と連接している状況が観察でき、両者の構築がほぼ併行して行われたことが想定される。行田梅本平遺跡（図６－２）や前中後遺跡（同－３）では、土坑墓の上部配石に立石や丸石を囲繞した組石状配石が配置され、その標石的な用法に中期末葉との質的違いを窺うことができる。また、三ノ宮下谷戸遺跡（同－６）の事例は、厳密には列石下よりも若干ずれて配石墓・石棺墓が配置されているが、意識としては先例に類似するものであろう。前中後遺跡や行田梅本平遺跡の場合、柄鏡形敷石住居張出部に近接する位置では土坑墓や配石墓が主体的だが、列石の端部では石棺墓が存在されており、列石と墓の構築が張出部に近接した場所から開始されて、徐々に外側へと拡大・延長されたことが窺える。Ⅰｂタイプも広口縦列配置を基本的に構築され、列石内に立石を組み込む事例が浅田・下北原・三ノ宮下谷戸・曽谷吹上の各遺跡に認められるが、浅田遺跡（図７－10）では丸石を囲繞した組石状配石や「小牧野式」構築法の採用による敷段の石垣状積み石が存在し、他例との違いが際立っている。また、曽谷吹上遺跡（同－11）でも横に長く延びた列石の一部に横口積みを敷段に施した箇所が認められ、浅田遺跡と共に盛土の法面を被覆するような様態を推定し得るが、中期末葉の野村遺跡のように正面観や外観を意識した構築でもあることが窺える。尚、この曽谷吹上遺跡の弧状列石の場合、複数棟の柄鏡形敷石住居と連接関係にあるが、これは１棟の住居が列石との関係を維持しつつ一定の期間内において同一地点での建て替えを繰り返した結果であり、同時に前段階の列石配置を壊すことなく連接を繰り返したことも長く連続的な配列の形成を促した要因であろう。弧状列石と共に当該住居の機能・性格を考定する上で踏まえなければならない要点であろう。

ところで、このⅠｂタイプの弧状列石と連接関係にある柄鏡形敷石住居には、下北原遺跡第３環礫方形配石遺構（図６－９）、曽谷吹上遺跡10号住居（同－12）、三ノ宮・下谷戸遺跡扇形敷石（同－５）などのように、主体部外縁に周堤礫を持つものがある。これについてはいくつかの解釈が提示されているが、僅少ながら弧状列石を随伴しない柄鏡形敷石住居にも確認されており、先と同様の外観を意識した装飾的要素を窺うこともできる。この点に関しては、後段にて詳述したい。

中部地方におけるⅠａタイプは、長野県の岩下・北村・茂沢南石堂の３遺跡の他に、その可能性のあるものとして山梨県の大柴・青木・金生・殿原の４遺跡がある。後者の４遺跡例は柄鏡形敷石住居とではなく、それに系譜をもつ「方形周石住居」との連接関係であるが、後述するようにこのⅠａタイプの終末的かつ地域的な様態をとどめていると考えられる。各事例の弧状列石は、関東地方の事例と同様に柄鏡形敷石住居の張出基部を中心とした部位に付設され、土坑墓・配石墓上部の立石や組石状配石を連接しながら、やはり張出部前面の斜面下位方向を囲繞するように弧が湾曲している。また、大半の遺跡においての前面部には、無遺構・無遺物の空間部が形成されているが、大柴遺跡（図10－５）では３号住居に連接する弧状列石の前面部に、立石・石棒・丸石などを組成した配石遺構が重層的に配置される点で異なった様相を見せている。岩下遺跡（図９－３）では、列石の構築に際してかなり大規模な掘削・盛土造成を行い、その法面に列石を複数段に横口積み（平積み）した状況が認められる。様相的には、Ⅰｂタイプの神奈川県曽谷吹上遺跡や群馬県浅田遺跡などの事例と類似しており、重壮な装飾的効果が看取される。北村遺跡（図９－１）の３基の弧状列石 SH1111・SH506・SH510は、SB594・SB566・SB555の３棟の柄鏡形敷石住居と各々連接関係を有する点で特徴的である。時間的な先後関係から見て、SH506→SH1111・SH510という構築順序が想定され、先の曽谷吹上遺跡例と同様にその全てが同時併存するわけではないが、配石墓を含めて柄鏡形敷石住居が同一地点に累積的に構築されるあり方は、Ⅰａタイプの中でも際立っている。これらの中で、弧状列石 SH510と連接するSB555号住居は、図13－７のように主体部外縁に周堤礫を配置しており、SB594・SB566号住居と異なる点に注意する必要がある。北村遺跡のような遺構の累積状況をもう少しシンプルにしたのが茂沢南石堂遺跡（図９－４）である。「第２址」とされた柄鏡形敷石住居は、その張出部前面に弧状列石や石棺墓群を随伴するが、この前身は南東側に近接した弧状列石を伴う「第９址」の柄鏡形敷

石住居であり、若干位置をずらしながらも同一地点での構築が継続される良好な事例と言えよう。一見すると脇士的な住居（15・16号）をその両側に持つ岩下遺跡の13号住居の場合も、茂沢南石堂遺跡と類似した時間的先後関係の中で、最終的に14号住居→13号住居へと収斂されたことが想定される。金生遺跡の列石（図10－７）の場合には、東端の23号住居への連接を初現としてその西側の「方形石組」とされた４棟の住居への建て替えに連動しつつ、その長大化が図られたと推定される。これらの住居がいずれも「方形周石住居」である点は、柄鏡形敷石住居が消滅した後においても列石遺構と住居との融合関係がしばらくは継続したことを物語る事例と言えよう。位置的に金生遺跡と近接する青木遺跡でも、弧状列石と「方形周石住居」との融合関係が想定され、こうした構造が八ヶ岳西麓に一定の広がりを持つことが窺える。

墓坑上部に標石状に配置される組石状配石には、規模１ｍ前後の方・円形状のものやそれに立石を伴うものなどいくつかのバリエーションが認められるが、丸石を中心に配置してそれを囲繞するタイプは極めて僅少であり、明確な事例は北村遺跡（例えば SH525配石）のみにとどまる。中部地方の丸石については、中期後半の竪穴住居内で確認されるが、後期段階では住居外の配石・集石遺構に組み込まれてゆくことや、石棒・埋甕と共に生産活動全体に関わる祭祀遺物であることが指摘されており、多数の検出例がある（田代 1989）。しかし、群馬県域で検出されているような丸石を方形石組み弄状に囲繞する例はなく、正確には北村遺跡の事例も同一ではない。両地域では中期末葉段階から丸石祭祀を巡る原理や観念に差異があり、おそらくその違いが後期前半にまで継承されたことを示すものであろう。茂沢南石堂・青木・金生などの各遺跡の列石下部には石棺墓群が存在しており、墓坑や配石墓を主体とする岩下・北村の事例に比べて新しい要素を有している。

また、Ⅰｂタイプには長野県伊勢宮・勝山、山梨県川又・姥神などの４遺跡例の他に、近年調査された長野県塩野目尻（小池 2003）・羽場崎（福島 2003）などの２遺跡例を上げることができる。長野県勝山遺跡（図10－８）の延長約40ｍの列石遺構は、柄鏡形敷石住居の44号との連接関係は明確であるものの他住居との関係は判然としない。しかし、44号住居の存続期内でこの列石が構築されたとは考え難く、おそらく神奈川県曽谷吹上遺跡のようにその構築が特定住居の建て替えに連動することにより、長大化したと推定される。ただし、Ⅰａタイプの北村遺跡や金生遺跡のように列石と墓とが複合する場合には、そうした特定住居が廃絶された後もその場が祖先祭祀的施設に置換されて、配石行為が継続・拡大しているケースもあり、決して一様ではない。

Ⅱタイプの弧状列石　柄鏡形敷石住居と連接しないⅡタイプの中で、下部に集団墓を伴うⅡａタイプの関東地方の事例は、群馬県長野原一本松・行田梅木平（１・３号配石墓群）、東京都田端などの遺跡例がある。行田梅木平遺跡の１号配石墓群（図８－14）では、立石・丸石を囲繞する組石状配石と共に有頭石棒が、頭位方向を双極に違えて整然と並ぶ配石墓・石棺墓の上部に配置され、これらを相互に平行する２基の弧状列石が連接しながら数段に横口積みされている。この列石の構築に際しては、掘削・盛土の整地行為が存在し、先の浅田遺跡や曽谷吹上遺跡での想定と同様の構築状況が看取できる。長野原一本松遺跡（図７－13）の例も平行する２基の弧状列石が配石墓群の上位を連結・走行しており、行田梅木平遺跡と同様の構造を呈する。この重層的な列石配置は、下部の配石墓・石棺墓の配列と対応したものであり、中期末葉段階の野村遺跡に代表される大規模環状列石の外縁部弧状列石の重層配置とは異質である。田端遺跡は円環状の列石が積み石状に墓坑・石棺墓群の上部に構築されているが、当初段階ではやはりそれらの墓を広口縦列を基本とした用石配置で連結しており、その後墓域から祭儀的施設へと変容する中で立石や有頭石棒などを組み込みながら、積み石状の様態となったことが推察される。これらの３遺跡では石棺墓の存在が主体的であり、Ⅱタイプの系譜や後期の列石遺構の変遷を考える上で注意を要する。尚、関東地方では、弧状列石が単独で形成されるⅡｂタイプの良好な事例が無く、その様態についても判然としない。

中部地方では、Ⅱａタイプには山梨県青木遺跡２号配石（図10－６）が認められるのみで事例自体が少ない。複列配置される石棺墓群に対応して平行する列石２基がその上部に構築され、先の行田梅木平遺跡１号配石墓群と類似した様態を示すが、列石内部の構造は詳細不明である。Ⅱｂタイプは、長野県堂前遺跡や北村遺跡 SH １号配石、山梨県塩瀬下原遺跡12号配石、宮久保遺跡、前田遺跡などの事例がある。塩瀬下原遺跡（図12－15）や堂前遺跡（図11－12）では弧状列石の内側に同期と推定される柄鏡形敷石住居が存在し、Ⅰタイプの弧状列石とは異なった空間構造を有している。北村遺跡では列石内に立石を組み込み、また堂前遺跡では石材を部分的に複列配置しているが、組石状小配石などの存在に乏しく、構造的には簡素と言える。

東海地方では、後期前半の列石遺構は破魔射場遺跡（図12－17・18）の事例のみであり、40号配石がⅡａタイプに、18号配石がⅡｂタイプに比定される可能性があるが、残存不良で判然としない。また、柄鏡形敷石住居と連接するⅠタイプも見当たらず、関東・中部地方に比べて列石遺構の存在が希薄な状況にある。

上記のように、関東・中部地方における後期前半の列

石遺構は、柄鏡形敷石住居の張出基部に連接するⅠタイプの弧状列石を主体とするが、それは集団墓を伴うⅠａタイプと伴わないⅠｂタイプの両タイプによって構成されるなど、ともに共通した様相を呈する。また、柄鏡形敷石住居との連接関係を持たないⅡタイプは、下部に集団墓を伴うⅡａタイプが同地域に共通した様相で存在するが、他遺構と直接的関係を持たないⅡｂタイプには地域的様相も認められる。内容的には、ⅠａタイプとⅡａタイプとが、またⅠｂタイプとⅡｂタイプとが相互に類似し、後者の方がより簡素となる傾向を持つが、配石墓や石棺墓の上部配石との区別が困難なこともあり、基本的に両者間にはそう大きな差異がないと言える。構造的な側面で注目されるのは、弧状列石がその前面部の斜面下位を囲繞することや、かなり大規模な掘削・盛土による地表面の整地行為と石垣状の積み石であり、特にⅠタイプやⅡａタイプに多見されることは、それが当該タイプの基本的構成要素の一つであったことを示している。また、これらタイプの弧状列石において乱石積み状の様態を呈するものは、継続的な給石による場合も想定されるが、廃絶後にこのような石垣状の積み石の崩落によって形成されたことも考慮される。こうした石垣状積み石の構築方法には、広口縦列配置を基本にした横口積み（平積み）工法が採用されており、群馬県浅田遺跡に見られる「小牧野式」構築法は皆無と言える状況にある。このことは、関東・中部地方では中期末葉の列石遺構の構築法が後期前半へと継承されたことを示唆すると共に、「小牧野式」を採用する東北地方北部域の列石遺構との明瞭な差異とも言える。ただし、前者の弧状列石下部に埋葬施設が組み込まれている点は、中期末葉の列石遺構とは大きく異なっており、その機能・性格の変質が窺える。

ｂ．集落内の空間配置

柄鏡形敷石住居と連接するⅠタイプの弧状列石は、関東・中部地方の群馬県行田梅木平、神奈川県下北原・曽谷吹上、長野県北村・岩下・勝山、山梨県金生などの各遺跡例から見ると、ともに一集落内では同時期に１基のみが存在する事例が大半を占めており、基本的に１棟の特定住居との融合関係が認定できる。また、これらは集落内の斜面上位や中心部に位置し、しかも弧状列石により囲繞・区画されたその前面の斜面下位は、何らの遺構も存在しない空間部となる場合が多い。このような空間配置について、長野県三田原遺跡・岩下遺跡などでは、弧状列石を延長したエリアを環状と想定し、「環状集落」と呼称・認定している（宇賀神・他 2000）。しかし、実際には両遺跡ともに他の住居や土坑などが、この空間地の外周に環状配置されている訳ではなく、基本的に住居帯が環状構成される中期後半段階の環状集落とは異っている。換言すれば、先の特定住居を中心とする後期前半の集落構造は、中期後半の環状集落に存在した「環原理」とは、異質の原理・観念で構成されていると想定される。

また、堀葬施設を随伴しないⅠｂタイプにおける墓域のあり方を見ると、加曽利Ｂ１式期の神奈川県北原遺跡（図７－８）では当該期住居の東側下位方向へ15～30m離れた２地点に分かれ、また同期の曽谷吹上遺跡（同－11）でも同様に西側下位方向に15m離れて存在するなど、ともに墓域とは直接的に関わらない様相が認められる。こうしたあり方は、埋葬施設を随伴するⅠａタイプとは対照的であり、集団内の葬祭儀礼における関与の度合いの差異を反映していることを示唆するものだろう。

曽谷吹上遺跡や北村遺跡（図９－１）、勝山遺跡（図10－８）などの例は、丘陵斜面の地形変換点に沿って構築された住居帯中に構築され、他の事例とはやや異質な感じを受けるが、詳細に見れば１～２棟の建て替えに伴う新旧の多重複関係により形成されている可能性が高く、基本的に他事例と同様のあり方を有すると考えられる。ただし、曽谷吹上遺跡や北村遺跡では、弧状列石と融合関係を持つ２棟の柄鏡形敷石住居が集落の中心地に同時併存する可能性も窺え、その場合には先の事例とは異なった理解を必要とする。この点に関しては、特定住居の機能・性格を含めて後段にて扱うことにしたい。

また、Ⅱタイプについては明瞭な事例に乏しいが、Ⅱａタイプの行田梅木平遺跡や山梨県青木遺跡（図10－６）では、集落の斜面上位や中心部に占地する顕著な傾向は認められず、Ⅰタイプとは異なった様相を呈する可能性が高い。Ⅱｂタイプに関しては、岩下遺跡において沖積地に望む集落の斜面末端部で検出された弧状列石が注目される。この列石は延長約５ｍの部分的な検出にとどまっているが、集落外縁部の囲繞を意識した中期末葉段階の群馬県横壁中村・空沢の事例に類似し、後期前半段階でも同様の列石遺構が確認できる点は重要であろう。

尚、Ⅰ・Ⅱタイプの各列石遺構と他の定形・不定形状配石遺構との組成については、良好な事例が乏しく判然としないが、三ノ宮・下谷戸遺跡（図６－４）や下北原遺跡などを参照すれば、Ⅰタイプの列石遺構の近縁には少なくとも複数種の配石遺構の存在が確認でき、複合的な状況が窺える。また、先の岩下遺跡の事例も柄鏡形敷石住居と連接するⅠａ・Ⅱｂタイプとが併存すると推定され、当該期の列石遺構の多様さを示している。

ｃ．列石遺構周辺の施遺構

列石遺構の周辺部に存在する住居以外の遺構で比較的多見されるのは、埋設土器、集石土坑、焼土・焚火痕等である。埋設土器や集石土坑は中期末葉の列石遺構の周辺部にも存在し、系統的な変遷を窺わせるが、焼土・焚火痕は柄鏡形敷石住居内での検出例が大半を占めている。これらの遺構はⅡｂタイプの列石遺構では希薄な状況にあるが、Ⅰａ・ｂタイプやⅡａタイプではかなり普遍的な存在である。また、焚火行為に関連して焼獣骨片

の住居内からの検出例も多見され、当該期の特徴的な事象の一つとなっているが、長野県北村・伊勢宮、山梨県大柴・姥神などの遺跡では、列石遺構内からも出土しており、中期末葉の列石遺構とはその周縁部で執行された儀礼内容の差異が顕著である。

これらの遺構以外では掘立柱建物の存在が注視されるが、検出例は群馬県行田梅木平・横壁中村、神奈川県北原№11・馬場№6などの4遺跡にとどまり、かつ多数棟の検出は馬場№6遺跡のみで他は1～2棟程度に過ぎない。この掘立柱建物については、棟持柱を有する馬場№6遺跡の事例を特定住居の「核家屋」と併存する一般的な住居に比定する見解もある（石井 1996）。当該遺構の検出は意識的な調査を必要とすることもあり、断定できる状況にはないが、列石遺構の周辺部ではその存在が希薄であることが窺える。尚、群馬県横壁中村遺跡では、Ⅰbタイプの弧状列石と連接した柄鏡形敷石住居に近接して大規模な1棟が検出されており、倉庫的な性格が想定される（藤巻 2002）。

d．列石遺構の構築時期とその消長

前項で分類したⅠ・Ⅱタイプの列石遺構が、時間的にどのような先後・平行関係を持つのかを確認する必要がある。先ず、関東地方での様相を見ると、Ⅰaタイプの初現は、前中後遺跡・行田梅木平遺跡2号配石墓群・馬場№6遺跡の事例から堀之内2式期であり、下限は三ノ宮下谷戸遺跡16号敷石住居の例から加曽利B1式期までが確認できる。また、Ⅰbタイプの初現は暮井遺跡の例から堀之内1式期、下限は下北原遺跡・曽谷吹上遺跡の例から加曽利B1式期である。一方、Ⅱaタイプの初現は長野原一本松遺跡・行田梅木平遺跡3号配石墓群の例から堀之内2式期であり、下限は行田梅木平遺跡1号配石墓群・田端遺跡の例から加曽利B2式期に比定される。Ⅱbタイプは良好な事例が存在しないが、塚越向山遺跡弧状列石の例から堀之内1式期での存在が確認される。

中部地方での状況は、Ⅰaタイプの初現が北村遺跡SB566住居の例から堀之内2式期、下限が金生遺跡23号住居の例から少なくとも加曽利B2式期にまで下ることが想定される。Ⅰbタイプの初現は三田原遺跡の例から堀之内1式期に、下限は岩下遺跡・北村遺跡SB555住居から加曽利B1式期となる。Ⅱaタイプの初現や下限については、時期の確定できない青木遺跡2号配石の例を参照するしかないが、およそ加曽利B1～B3式期に比定される。ⅡbタイプもⅡaタイプと同様に、時期を確定できる例がないが、岩下遺跡・宮久保遺跡・北村遺跡SH1配石・塩瀬下原遺跡12号配石などの事例から、その消長は堀之内1～2式期の中で収束する可能性が高い。

東海地方では、事例そのものが極めて乏しい状況にあるが、破魔射場遺跡でⅡa・bタイプが認められ、確定的ではないものの堀之内式期にほぼ限定されている。

以上のように、Ⅰaタイプの初現は関東・中部地方共に堀之内2式期であり、Ⅰbタイプが同1式期であるのと比べてやや後出することが窺える。しかし、その下限は関東地方では両タイプともに加曽利B1式期であるのに対して、中部地方ではⅠaタイプが同B2式期まで下る可能性が高く、特定住居と墓域との関係は中部地方の方がその命脈を長く保持したと言える。

Ⅱaタイプについては、関東地方では堀之内2式期に出現して加曽利B2式期までの消長が確認でき、若干確実性に欠けるものの中部地方でもほぼ同じ様相と考えられる。構造的に中期後半の弧状列石と大差が認められないⅡbタイプは、関東・中部・東海地方ともに称名寺式期の事例を見出すことができず、堀之内1式期を初現として同2式期の範疇で消滅する可能性も窺える。

後期前半の列石遺構を総体的に見れば、関東地方と中部地方との差異は極めて僅少であり、両地域ともにほぼ軌を一にした変遷を遂げていると言えよう。内容的には、堀之内1式期にⅠbタイプやⅡbタイプが先行して出現し、そして若干遅れて堀之内2式期にⅠaタイプ・Ⅱaタイプが出現するという状況を看取できる。このことは、列石遺構と柄鏡形敷石住居との融合的関係が先行し、次の段階でそこに墓域が取り込まれてゆくという変遷を指示するものであろう。また、ⅡbタイプもこのⅡaタイプに連動した出現が認められるが、その終焉はⅡaタイプよりも若干遅れると想定され、最終的に特定住居との関係を持たないこのⅡbタイプに収斂されてゆく状況が看取される。後期後半以降には、群馬県域でも居住域と墓域・祭儀域との分離傾向が認められるが、Ⅱbタイプの残存はそうした動向の底流をなすものであろう。

また、後期前半の列石遺構については、中期末葉から継続的に構築される事例が存在しないことも重要であろう[10]。称名寺式期の明瞭な事例が存在しないことを考えれば、両時期の不連続性や断絶状況は歴然としているのであるが、同一遺跡内で両時期の列石・配石遺構が検出されている群馬県横壁中村遺跡や長野県円光房遺跡の場合でも、それらの構築地点は明確に異なっており、こうした理解を裏付けている。

(3) 中期から後期への変容

a．中期末葉の列石遺構の系譜

列石下部に墓坑などの遺構を伴わない中期の大規模な環状列石や弧状列石の出現が、関東地方では加曽利E3式末葉段階を遡ることはなく、中部・東海地方でもそれに近似した時期であることは、先に見てきたとおりである。また、その出現が柄鏡形敷石住居の形成と軌を一にしていることや、両者が敷石・配石行為という類似した観念・原理を基に同一の文化的動向の中で構築されていることも従来から指摘されてきたところであるが（山本

1981、石井 1998)、同時に柄鏡形敷石住居の形成が加曽利E 4式土器の伝播・浸透と密接に関連する状況（柳原 1995、本橋 1995・2003、水沢 2002）を考慮すれば、大規模環状列石の出現・構築も同式土器文化との関連で把握されることになるだろう。実際に、加曽利E 4式系土器の伝播・浸透が希薄な天竜川上流域の的場・門前遺跡では、立石を伴う組石状配石群が前段階の環状集落の中央広場外縁に弧状配置されるなどの独自性を見せており、こうした理解の妥当性を傍証している。換言するならば、中期の大規模な列石遺構は、前期の長野県阿久遺跡に見られる「環状集石群」や上原遺跡の「環状石籬」などとは、系統的な脈絡を持たないことを意味するものであり、新たな契機の基に出現したと見なければならない。しかし、その一方でこの系譜がどこに求められるのかは不明であり、現段階で加曽利E 3式末期および曽利V式初段階に突如出現するという状況を説明することは難しい。

ところでこうした列石遺構の出現の背景には、自然環境の悪化と前段階の拠点的な環状集落の崩壊や小規模かつ散在的な居住形態への移行などの自然的・文化的な諸事象が存在するとされ、社会総体が衰退化へと向う中で呪術的な文化要素を深めた結果が、このような列石遺構や柄鏡形敷石住居の出現・構築に連繋しているという見方が主流をしている。これに対して佐々木藤雄は、「過剰なほどの特異な形状と構造を特徴とする柄鏡形敷石住居址の建設が、通常の堅穴住居址と比べて遙かに多くの「労働力」と高い思弁に裏付けられた「文化力」を必要とする作業」であったとし、これらを支える物質的基盤を等閑視した従来の観点の問題性を指摘している。また、同時に自然的・社会的環境の悪化に伴う資源と人口の急激な不均衡化が、社会の階層化をもたらす契機になったとする北米カルフォルニアの民族誌のモデルを引用する中で、自説でもある階層的矛盾が深化する「変質期」の中期終末から後期後半段階を、階層社会論的な視点から捉え直す必要性を説いている（佐々木 2003）。確かに従来の考え方では、社会的衰退化の中で多くの労働力投下が必要な大規模列石遺構の構築を可能とする背景を整合的に説明することは難しく、傾聴すべき見解である。

その一方で、佐々木が「柄鏡形敷石住居址の出現と密接な関係にある環状列石が、すべてのメンバーが等しく葬られた集団墓であるという定説とは異なり、階層的な性格を色濃く帯びた特定集団墓」であり、「環状列石形成の主要な目的の一つが、従来、縄文集落の中で一体のものとして存在していた住居群と中央広場、日常空間と非日常空間、生者の世界と死者の世界の截然とした区別にあり、またそのことによる中央広場の祭祀的・儀礼的性格の一層の強化・純化にあった」（佐々木 2003）としている点については、前項での検討で列石下部に埋葬施設が何ら存在しないことが明確である以上、首肯することができない。しかし、こうした点を留保したとしても、後期前半に顕在化する特定住居と弧状列石・集団墓との結合関係を視野に入れれば、階層的社会やその矛盾が柄鏡形敷石住居と大規模列石遺構の出現・構築の背景と見る佐々木の想定は、真摯に検討する必要があろう。

ところで、韮崎市後田遺跡のC区2号配石に付随する列状配石下には、曽利Ⅳ～Ⅴ式の埋設土器が12体存在するが、これを埋葬に関わる施設とする見解（新津 1990、佐野 1999）や、こうした配石遺構をベースにして中期末葉の配石遺構が「埋葬、葬送儀礼に関連して出現した」（佐野 1999）とする見解も提示されている。しかし、この埋設土器内から人骨等が検出されたわけではなく、仮にそれが再葬墓的な土器棺墓であったとしても、他には認められない特殊なものであり、これをもって環状列石が埋葬・葬送儀礼との関わりで出現したと見ることはできないだろう。その機能・性格付けについては慎重な検討が必要であるが、中期後半以降に顕在化する列石遺構に埋葬施設が組み込まれていない点を重視すれば、大野遺跡で見られるような配石墓やこの後田遺跡のような配石遺構に、環状・弧状列石との直接的な系譜関係を認めることはできない。

b．中期末葉の列石遺構の機能・性格

筆者は前稿において、群馬県域の中期末葉の大規模列石遺構が、少数かつ特定の集落内に構築されることや、当該集落内の居住者だけでは到底不可能な労働力投下を必要とすることなどから、それら集落が環状集落消滅後の地域集団を新たな祭祀・儀礼で統括する拠点であり、それを随伴する集落と他の集落との間に階層的関係の存在を想定した（石坂 2002）。今回、関東地方全域や中部・東海地方へと分析対象域を拡大したが、やはり構造的な複合社況やその立地動向などから見て、大規模環状列石を頂点としてその下位に大小規模の弧状列石が位置するような祭祀構造の存在を想定することができる。しかし、そこに構築された個々の列石遺構の機能・性格についての分析は、課題として持ち越しており、可能な範囲でその理解を試みてみたい。

先ず、径20mを超える大規模環状列石に関しては、阿部昭典（阿部 1998）と佐野隆（佐野 1999）の見解を検討する必要がある。阿部は、中期末葉の環状列石をⅠ～Ⅲ類に分類し、その機能・性格について「環状に巡る列石は広場の外形を囲むように存在することから、列石の機能は中央広場の区画などの視覚的効果を有していたことが想定される」として、「環状列石＝中央広場」という認識を提示している。また、その一方で出現の契機を「斜面地への中央広場の造成に伴って、土止めなどの広場造成技法の構築材として用いられた礫と考えられ、ここから環状列石が発生した」とも捉えている。この阿部の理

解については、いくつかの問題を含んでいるが、その一つは列状構造を持たない配石遺構（Ⅲ類）を環状列石に分類したり、環状列石と弧状列石とを同一分類内で扱っている点と、もう一つはその出現契機を斜面地の掘削・盛土造成における法面保護の石垣的なものに求めている点である。特に後者については、その石積み方法自体が小口積みではなく、強度に劣る横口積み（平積み）であるという土木技術的な観点と共に、前述したような外観的な装飾効果を意識したものであるという点からも首肯できない。

群馬県野村遺跡のように、段状の造成をしてまでも当地点に固執するあり方は、ランドスケープ的には山岳や天体運行との関係により選地される必然性が説明し得るであろうが、集落構造の面から見れば雛壇状の住居構築面を必要とした結果と考えることができる。祭儀のエリアと想定される斜面下位の環状列石区画内に立った場合、上方の柄鏡形敷石住居群を見上げる状態となるが、こうした構造こそがこの雛壇状造成に込められた背景と言えよう。環状列石や弧状列石の石積みが斜面上位側に複数段敷設されるのは、法面保護の機能も皆無ではないだろうが、見上げた時の正面観や装飾的効果による重荘さなどが求められたためと理解される。つまり、環状列石を頂点とする祭祀構造は、このような柄鏡形敷石住居群を頂点に置くような集落構造を具備していると見なすことができ、さらに一領域内で見れば、他集落との間にこうした環状列石を伴う集落を頂点とする階層的関係の存在を想定することも可能であろう。こうした構造は、弧状列石と特定住居１棟との融合関係を中心とした後期前半の集落構造とは基本的に異なるものであるが、野村遺跡Ｊ-14号住居や久森遺跡１号住居などは環状列石外縁部の弧状列石と連接する傾向を見せており、後期前半と通底する様相も存在する。掘削・盛土による斜面地造成や横口積みによる構築の程度は、他の環状列石を伴う集落例ごとに異なっているが、正面観を意識した配列や集落構造などはほぼ共通して認められる。またＡ類の大規模弧状列石もこれらのあり方と類似している点は、相互に近似した機能・性格を有することを示唆している。

一方、群馬県横壁中村・空沢や長野県大野などの遺跡で見られるＢ類の弧状列石は、先の大規模環状列石やＡ類の弧状列石が比較的限定された狭い範囲を囲繞するのに対して、斜面上方の集落全体という広範囲を区画するような結界的要素が窺える。視点を変えれば、集落の内外とを空間的に分離・弁別する様相を看取することができ、また外観的にも当該集落の特質性を際立たせる効果を有している。晩期の群馬県行沢大竹遺跡（飯田・他 1998）や中栗須滝川Ⅱ遺跡（藤岡市教委 1998）でも、集落の台地部と沖積地との境界に列石遺構を巡らせる事例が存在し、これらなども横壁中村遺跡や空沢遺跡のような例とその機能・性格面で通底していると推察される。

列石遺構における結界的な機能・性格の存在は、従来より指摘されてきたことであるが、特に大規模環状列石やＡ類の弧状列石に囲繞された空間内部に遺構や遺物がほとんど見出せない状況は、当該地点が清掃行為により聖的空間として保持されていた可能性が高く、前段階の環状集落における中央空間部とはその意味を違えていることを示している。ただし、列石内に立石や組石状配石を組み込んでいることなども考慮すれば、単なる結界ではなくその配列そのものにも呪術的性格が付与されていると言えよう。

ｃ．列石遺構・集団墓を伴う「核家屋」の出現

先述のように後期の列石遺構には、柄鏡形敷石住居・墓域と複合するⅠａタイプ、柄鏡形敷石住居と連接するが墓域と複合しないⅠｂタイプ、住居とは連接しないが墓域と複合するⅡａタイプ、住居・墓域と直接的関係を持たない単独的なⅡｂタイプなどの４タイプが認められる。Ⅱｂタイプの中には、特定住居の背面を囲繞する山梨県塩瀬下原遺跡例（図12―15）の他に、集落の斜面末端に配置される長野県岩下遺跡例（図９―２）もあり、さらに分類し得る。

堀之内１式期以降に顕著に認められる、特定の柄鏡形敷石住居と列石遺構との連接・融合関係は、中期末葉段階の群馬県の久森遺跡や野村遺跡において既にその兆候が認められる。また、山梨県牛石遺跡や静岡県千居遺跡で列石に組み込まれた配石遺構を敷石住居と認定すれば、関東・中部・東海地方の広範囲にわたって生起した先行的な現象と言える。こうした中期末葉でのあり方が、堀之内１式期のそれへと系統的に連続したものであるのか否かが問題であろう。結論的に言えば、中期末葉段階の列石遺構と柄鏡形敷石住居との融合は、１棟の特定住居と言うよりも、柄鏡形敷石住居群との関係に主体が置かれていると考えられることや、称名寺式期での事例が欠落している状況からみて、両者間には直接的な系譜関係が存在しないと言える。おそらく、堀之内１式期の段階で葬祭儀礼の統括者の登場を促すような新たな社会的契機を背景として、特定の柄鏡形敷石住居と弧状列石との融合・一体化が開始されたと考えられるが、この出現のプロセスについては後段において再述したい。

Ⅰａ・ｂタイプの弧状列石を随伴する柄鏡形敷石住居には、①複数回の建て替えや多重複、②集落内の高位置に占地する、③斜面掘削などの土木工事や大規模な列石配置に見る多大な労力投下、などが認められる。①②は、当該柄鏡形敷石住居が集落全体を見下ろせるような同一地点において、かなり長期間にわたって存続したことを示している。また、③は当該柄鏡形敷石住居の居住者だけでは不可能であり、集落内・外の同系集団の動員により構築されたことを示している。このようにⅠａ・ｂの

両タイプには共通点がある反面、Ｉｂタイプには集団墓的な埋葬施設を伴わないことから見れば、両タイプの柄鏡形敷石住居の居住者が同質の性格を持っていないことは明らかであろう。おそらく、Ｉａタイプの居住者が保持したと推察される葬祭儀礼の統括などの機能・役割は、Ｉｂタイプの居住者には希薄であるかあるいはより限定的なものであったのではなかろうか。また同時に、この両タイプが同一集落内で共存する明確な事例が無いことを考慮すれば、そうした差異は個別住居にとどまらず集落を単位として存在したことを窺わせる。

これに関連して注目されるのは、約３kmの範囲に近接する長野県の岩下遺跡と三田原遺跡の関係であろう。岩下遺跡例は堀之内１式～加曽利Ｂ１式期にかけての集団墓を伴うＩａタイプであるのに対して、三田原遺跡例は埋葬施設を伴わない堀之内１式期のＩｂタイプである。両遺跡が堀之内１式期段階で併存していたとすれば、先の想定を傍証するものであるが、同時に相互に異なった機能・性格を持つ特定住居を中心にした２つの集落が近接して存在することの意味が問題となろう。このＩａタイプとＩｂタイプの差異は、富樫泰時が東北地方の環状列石について分類した「大湯万座型」と「小牧野型」（富樫 1997）に対応すると考えられ、相互に葬送に関わる観念・儀礼の差を反映している可能性が高い。両遺跡の様相が、縁矢川を挟んで領域を接する異集団間での差異なのか、あるいは同一集団内での差異なのか判然としないが、いずれにしても複雑な社会構造や階層的関係がその背景に存在すると想定される。

ところで、このようなＩａ・ｂタイプの弧状列石と連接する特定の柄鏡形敷石住居については、既に石井寛が集落の「長」が住まう「核家屋」として取り上げ、その住人を「集落全体の祭祀を司る立場にいた人物」と想定している（石井 1994）。また、この住居の性格について佐々木藤雄は、「集落の「長」という次元を超えた存在、共同の祭儀と自らの威信を重ね合わせることも可能な「地域内小集団」や「地域共同体」の指導者（層）」（佐々木 2003）といった視点からの分析の必要性を説いている。関東・中部地方におけるＩａ・ｂタイプの両者を合わせても21例にとどまる現状を考えれば、「核家屋」の居住者が一集落内だけでなく周辺域の複数集落をも統括するような機能・性格を保持していたと見る佐々木の指摘は的を射たものと言えよう。換言すれば、こうした状況は「核家屋」の居住者を頂点とした「地域共同体」社会の階層的構造の存在を示唆するものであろう。

一方、神奈川県曽谷吹上遺跡と長野県北村遺跡では、弧状列石と融合関係を持つ２棟の「核家屋」が集落の中心地に同時併存する可能性もあり、後者例については集団内部の分節構造を反映しているという見解もある（小杉 1995）。曽谷吹上遺跡では遺構の詳細が不明であり、また北村遺跡では同一地点での反復・重複的な遺構構築により断定できる状況ではないが、１つの集落内に複数の「核家屋」が存在する可能性は皆無ではなく、小杉のような視点からの分析・検討の余地を残している[17]。

弧状列石を随伴する「核家屋」の前面部には、中期末葉の大規模環状・弧状列石のケースと同様の空間部が広がっているが、おそらくこうしたエリアは地域内集団の共同的な祭祀や葬送に関わる儀礼を執行する場としての機能・性格を有していた可能性が高いだろう。しかし、それが中期末葉段階と異なるのは、１棟の「核家屋」の居住者を中心としてそうした儀礼の統括・執行がなされていたと推定されることである。

d.「核家屋」の系譜と周堤礫を伴う柄鏡形敷石住居

列石遺構とは直接的な関係を持たないが、先の「核家屋」の系譜を考える上で、主体部外縁をいわゆる周堤礫で囲繞する柄鏡形敷石住居の存在が重要であり、これについて若干検討をしておきたい。

図13は、関東・中部・東海地方の周堤礫をもつ柄鏡形敷石住居を集成したものである。管見に触れた代表的なものを扱っており遺漏もあるが、分布的には神奈川県西部域やハ ヶ岳南麓から西麓にかけた長野・山梨県域、それに犀川や千曲川上流の長野県東部域に多見される傾向にある。また、群馬県西部域でも近年いくつかの検出事例があり、基本的に中期末葉段階の柄鏡形敷石住居の分布域と重複することが窺える。残存状態の良好な図13－１・２・４～７の各住居の周堤礫を見ると、いずれも主体部の掘り込みや敷石範囲から１ｍ前後離れて配置されるが、張出基部からその両側へ弧状に延びる配石とも連接して、両者が一体のものとして構築されていたことが看取される。また、同一２・５・８・９などの事例では、３～４段に積み上げられた周堤礫が主体部方向へ将棋倒し状に崩落した状態が観察できる。こうした周堤礫については、住居に付随する何らかの施設とする見解と、廃屋儀礼に伴う配石遺構という見解に二分されている。後者を代表する山本暉久は、屋内の柱穴と重複する位置に配置された「周礫」や「環礫方形配石」を含めて、「柄鏡形敷石住居を廃絶する過程において、なんらかの儀礼行為として、そうした配石・配礫行為が行われた」と再論している（山本 2002）。これに対して石井寛は、住居構造の見地から張出基部の列石や周堤礫に検討を加え、これらを「住居外部からの視線が意識された施設」（石井 1996）と想定し、併せて「核家屋」に比定している。また石井と同様に、末木健は塩瀬下原遺跡１号敷石住居（図13－９）の奥壁部を中心に検出された周堤礫（上部配石）について、「山側に築いてあった住居外壁の石積みが住居内部に倒壊」したものと解釈し、壁立ち住居の外壁石積みとして想定復元すると共に「核家屋」に比定している（末木 2000）[18]。壁立ち住居の当否は置くとし

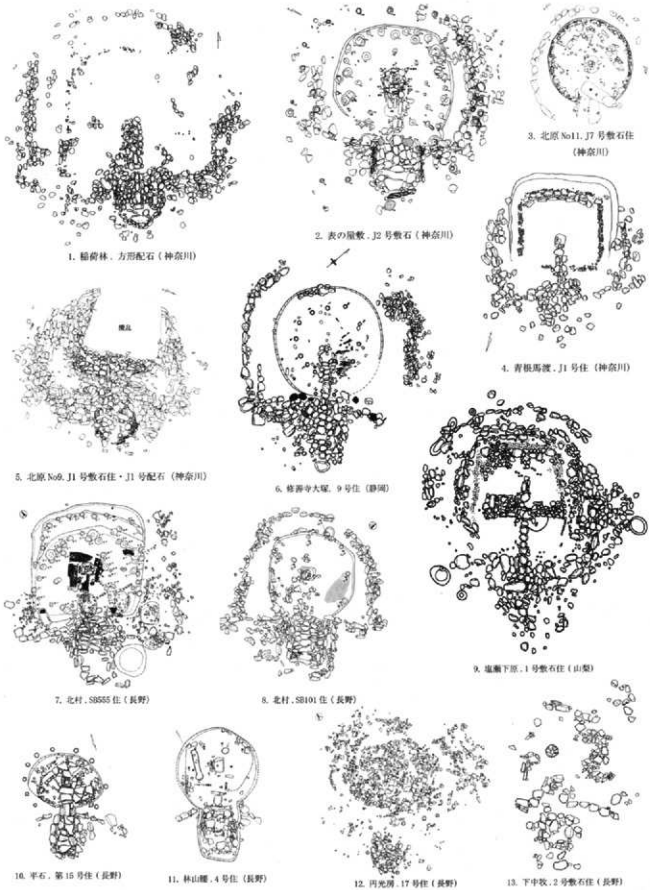


図13　関東・中部・東海地方の周堤礫を持つ柄鏡形敷石住居（1/200）

て、屋根据部に石積み状や葺き石状に配置されていたという理解は、廃屋儀礼によらなくてもそうした上部配石が形成され得ることを示した点で注視されよう。換言すれば、柄鏡形敷石住居に付随する配石遺構の中には、屋外で「施設」的に構築されるものが存在すると考える必要があろう。しかし、そうした屋外施設的な配石が存在したと仮定した場合でも、屋根や外壁の保護を主目的とするような実用的施設に限定することはできない。なぜなら、このような屋外配石を伴う事例は極めて僅少であり、塩瀬下原遺跡や北原遺跡でも各１例の検出を見るにとどまっているからである。つまり、特定の集落内かつ特定の柄鏡形敷石住居にのみ認められるものと言えよう。こうした状況は、先の「核家屋」のあり方とも共通する点が多く、同時期の一般的な住居とは機能・性格を違えることが想定される。この屋外施設的な配石にも呪術的な意味合いが込められていたであろうが、外観的には石積みの装飾的効果による重壮さも附加され、特別な家屋としての識別を容易にしていたと考えられる。Ｉａ・ｂタイプの弧状列石を随伴する「核家屋」とは異なるものの、各事例の集落内では周堤礫を有する同時期の柄鏡形敷石住居が複数併存しないことや、外観的に他住居と明瞭に区別された葺き石状の石積みなどから見て、それに近似した機能・性格を保持していたと理解される。

図13のように、柄鏡形敷石住居に周堤礫が付随する初現期は、北原№９遺跡Ｊ７号敷石住居や北裏№11遺跡Ｊ１号敷石住居の事例から堀之内１式期に比定されるが、他の事例は堀之内２式～加曽利Ｂ１式期にかけて変遷しており、弧状列石や墓域を随伴する柄鏡形敷石住居の消長と軌を一にしていることが窺える。また、先のＩａ・ｂタイプの柄鏡形敷石住居の中にも周堤礫を有するものがあり、神奈川県の下北原遺跡第３環礫方形配石遺構（図７－９）、曽谷吹上遺跡10号住居（図７－12）、三ノ宮・下谷戸遺跡扇形敷石（図６－５）、長野県北村遺跡SB555号住居（図13－７）、山梨県川又遺跡（図12－16）などを挙げることができる。いずれも加曽利Ｂ１式期に比定される点は、当談期に「核家屋」への加飾がより強化されたことを示している。

ここで注目しておきたいのは、周堤礫と連接する張出基部の左右に展開する弧状列石的な配列である。その規模こそ異なるものの、Ｉタイプの弧状列石と類似した様相を呈しており、両者の間で共通した観念の存在を窺うことができる。一歩考えを進めれば、Ｉａ・ｂタイプの弧状列石はこの張出基部の列状配置が、何らかの契機により新たな意味を附加されて拡大・延長されたものと理解することもできよう。前述したように、中期末葉の列石遺構と後期前半のそれとは、直接的な系譜関係を持たない。上記の想定が正しいとすれば、柄鏡形敷石住居と連接する後期前半の弧状列石の形成は、その住居構造に付随した装飾的要素の中から生起したと言えよう。もちろん、そうした装飾的要素は祭祀・呪術的な性格を多分に帯びたものであり、「核家屋」のような特定住居の出現を促す階層的な社会構造がその背景に存在しているのであろう。また、同時にこうしたことは、中期末葉の環状列石が質的転換を遂げて後期の「核家屋」に随伴する弧状列石に置換されたのではなく、環状列石が保有していた基本原理や機能・性格は、直接的には後期の弧状列石に継承されなかったことを意味するものだろう。

ｃ.「核家屋」の消滅と弧状列石の変容

後期前半の列石遺構に見る特徴的な様相は、やはり限定された集落遺跡で特定の柄鏡形敷石住居に付設されるＩタイプの弧状列石の存在であろう。こうした特定の柄鏡形敷石住居＝「核家屋」との融合・一体化は堀之内１式期に始まり、堀之内２式期には弧状列石の下部に集団墓を随伴するＩａタイプが出現して、集団墓を伴わないＩｂタイプと共に２つの系統を構成するが、両タイプともに加曽利Ｂ１式期内で終焉を迎える。こうした動向は、東海地方では事例が乏しいために判然としないものの、関東・中部地方ではほぼ軌を一にして推移していることが確認できる。

このＩタイプの弧状列石の消滅と相前後して、列石下部に集団墓を随伴しつつも「核家屋」とは融合的な関係を持たないⅡａタイプの弧状列石が顕在化し、後期後半以降の列石遺構を象徴するものとなる。つまり、こうした状況は、「核家屋」の居住者によって直接的に統括されていた葬祭儀礼が、その手を放れて別の様態へと変化したことを示唆するものであろう。後期後半以降には、特定住居との関係だけでなく、居住域から分離・独立するものも存在し、葬墓制や社会構造の変質・多様化を窺うことができる。こうした状況の背景について詳述することはできないが、群馬県行田梅本平遺跡（１号配石墓群）・長野原一本松遺跡、長野県北村遺跡、山梨県青木遺跡などに見られる加曽利Ｂ式期の配石墓・石棺墓群の２列構成や頭位方向の二極性の顕在化に象徴されるような、階層的あるいは分節的な社会構造の深化などが、何らかの関連性をもつと推察される。

６、おわりに

関東・中部・東海地方においては、大規模な環状・弧状の形態を呈し、かつ列状構造を有する列石遺構は縄文時代中期末葉段階に出現し、そして後期前半まで継続することなくその段階内という短時間で終焉することを確認することができる。また、それら列石遺構の下部や区画内部には、埋葬施設が構築されることはなく、直接的に墓とは関係しない遺構であったことも確実であろう。そして、後期前半の堀之内１式期においては、「核家屋」の顕在化とその主体部外縁を囲繞する周堤礫に象徴され

る加飾傾向の中から、張出基部に連接する弧状列石が派生し、さらに堀之内２式期にはその下部に配石墓や石棺墓などの集団墓を組み込むという、特定住居＋列石遺構＋墓の関係が明瞭化するようになる。しかし、加曽利Ｂ１式期には特定住居との融合関係も崩壊の兆しを見せ始め、後期後半以降には列石遺構＋墓に分離されると共にその構築が居住域から分立する傾向が認められた。

このような中期末葉から後期前半にかけた列石遺構の動向について、「集落内環状列石」から「集落外環状列石」への変遷を想定し、それを祖先祭祀の特殊化・高次化の過程と捉える見解もある（佐々木 1999）。こうした理解については、あらためて指摘するまでもなく、関東・中部地方の中期末葉の「集落内環状列石」に埋葬施設が伴うことはなく、後期前半において「集落外環状列石」が形成されることもなかった。つまり、関東・中部地方では、東北地方北部域の小牧野・伊勢堂岱・大湯の各遺跡に構築された後期前半の環状列石とは、異なった原理・観念の基に中期末葉および後期前半の列石遺構が存在したと言える。当該域における中期末葉から後期前半における列石遺構の様態は、特定集落から特定住居＝「核家屋」への帰属に収斂してゆく動向が認められ、葬祭儀礼を媒介とした社会構造の階層性と複合性の深化する過程を窺うことができよう。

本稿では、中期末葉～後期前半の明確な列状構造を持つ環状列石や弧状列石などの配石遺構を分析の中心課題としたために、不定形な配石遺構については扱えなかった。数量的には後者の方が前者を凌駕しており、当該期の配石遺構を理解するためには両者を含めての分析が必要なことは言うまでもない。また、筆者が群馬県域で試みたような周辺域に展開する集落動向との関係把握も、列石遺構を伴う集落の機能・性格を考える上で無視することのできない要点であろう。今回の分析は、関東から中部・東海地方までの列石遺構を一瞥したに過ぎず、各地域における個別的・普遍的様相や相互間の関連性を追求するためには、先の諸点を含めた資料分析が必要不可欠であるが、これらの問題については今後の研究課題とし、ひとまず擱筆しておきたい。

（2004年３月５日　稿了）

謝辞

本稿を草するにあたり、関間俊明・氣賀澤　進・小池岳史・佐野　隆・福島　永・百瀬忠幸・山路恭之助の各氏には、資料の実見に際して種々のご配慮をいただき、また阿部昭典・石井　寛・池谷信之・牛丸岳彦・櫛原功一・佐藤雅一・島田哲男・大工原　豊・寺崎祐助・奈良泰史・花岡　弘・平林　彰・藤巻幸男・守矢昌文・山崎克巳・鯨田弘実の各氏には、文献や資料の検索で多大なご教示・協力をいただいた。文末ながら、記して深甚なる感謝の意を表する次第である。

註

1）塚越向山の「環状列石」は、西半部の石材が径40cm大の河床礫や亜角礫を主体として、広口厳列や乱石積みにより明確な列状構造を持って構築されるのに対して、東半部は拳大の小礫で散在的な配列方を示すことや列状構造を持たないことなど、両個のあり方は大きく異なっている。報告書の掲載写真では見る限り、この東半部については段丘礫層が露出しているだけの可能性も窺え、当例は環状列石ではなく延長約30m弱の大規模な弧状列石と認定されよう。これ以外に、１～５・７号配石などが存在するが、２号配石は礫の平担面を揃えた石敷きや埋設土器などのあり方から見て加曽利Ｅ４式期の敷石住居の残骸の可能性が高く、７号配石は中央部に円形板状礫を置いた組石状配石であろう。また、不定形状の１号配石の時期は、下層からの磨弧目式土器により同期とするが、確定できる状況ではない。

2）福田遺跡でも「環状列石」とされる配石遺構が検出されているが、200m²弱の調査によりその一部を調査しただけであり、その形態だけでなく列石遺構か否かも断定できない。なぜなら、第Ｉ～Ｖ址のＳブロックに分割された「環状列石」の第Ⅳ址では、方形の石組炉が存在しており、「Ｉ・Ⅱ号特殊遺構」と同様に敷石住居を誤認している可能性が高いからである。従って、本稿の分析事例からは除外してある。

3）図４－３に掲載した牛石遺跡の環状列石の平面図は、都留市史（奈良 1986）に掲載された原図に基づいているが、それには縮尺が明記されていない。ここでは新津健の作成した「シンポジウム　縄文時代星外配石の変遷－地域的特色とその画期－」の資料集（新津 1990）に準拠して縮尺を記入したことをお断りしておきたい。

4）奈良泰史氏のご教示による。

5）「環礫方形配石遺構」については、主に柄鏡形敷石住居の柱穴配列部に重複して構築されるいわば住居と一体の施設とする見解（秋田 1991、石井 1996）と、廃屋儀礼に伴う配石行為とする見解（山本 2002）に分かれる。未だ決着を見ない問題であるが、筆者は以前に検者の観点からその系譜が中期末葉の柄鏡形敷石住居に求められることを論じたが（石坂 1985）、現在も同様の見地に立っている。

6）東側の弧状列石、６号住居の東側へも約６ｍほど延びていたことが、飛び石状に残された用石のあり方から窺うことができる。

7）これについて石井寛は、「６号及び10号敷石住居址の張出部基部から左右に広がる施設」（石井 1994）としてその前段階の８号や５号住居との関係を考えていないようであり、筆者とは見解が異なる。

8）弧状列石を伴う敷石住居には、柄鏡形を呈するものと方形状の２形態が存在する。方形状の敷石住居については、柄鏡形敷石住居に系譜を持つ「方形周石住居」とも呼称され、後期後半以降に顕在化することが指摘されている（新津 1992）。時期的には、本稿の守備範囲を超える住居と言えるが、弧状列石との関係において後期後半の様相を見極める必要があることから、その事例を含めて扱っておきたい。

9）報告者の宇賀神は、これを「環状集落」と認識しているが、居住等の構成は弧状であって環状形態を持たない。これは、中期後半の環状集落と同様の構成原理に基づくのではなく、13号住居に付随する弧状列石が囲繞した空間構造に規制されていることを示している。

10）これについては、1968年の報告では「この準輪形の配石址群は環状のものが崩れたもの」とされているが、少なくとも環状形態を持たない。また、当遺跡の遺構名については、1968年報告（三上・上野 1968）と1983年報告（上野佳也・佐 1983）とではかなり大きく変更されていが、本稿では後者の報告内容に従った。

11）弧状列石の番号については、調査報告書内の掲図と本文とでは１・２号の扱いが逆になっている。ここでは、掲図中の番号に準拠した。

12）この住居は「集石遺構」とされているが、調査担当者の山路恭之助氏への聞き取り調査により、加曽利Ｂ１式期の柄鏡形敷石住居であることを確認した。

13）12号住居の時期については、櫛原功一氏のご教示を得た。

14）掲載されたＣ・Ｄ区の全体図から判断すると、この弧状列石は南側のSH33配石遺構の方向へと延長している状況も窺えるが、この場合には総延長が約24ｍとなる。

15）山梨県明野町星敷遺跡でも、中期末葉～後期前半の列石遺構を含む配石遺構が検出されているが、担当者の佐野隆氏のご教示によればやはり各時期毎に地点を変えて構築されているとのことである。

16）列石遺構が、中期末葉～後期前半にかけて継続的に構築される事例

に、静岡県の上白岩遺跡や破魔射場遺跡などがある。しかし、上白岩遺跡は保存措置による範囲確認等の部分的調査にとどまっており、確定できる状況にはない。また破魔射場遺跡は、同一地点に中期末葉と後期前半の配石遺構が重層的に存在するとされているが、これについては前章で分析したように根拠が明白ではなく、むしろ共に後期前半に帰属する可能性が高い。

17) これに関連して、北村遺跡のE区配石墓群から西側に100m離れた斜面下位のC・D区に、堀之内2式期の周堤帯を持つSB101住居（図13－8）が存在し、ミニチュア土器や土偶などの伴出を含めて他の一般的住居とは異なっている。当該住居と、弧状列石や配石墓群を隠伏する同期の「核家族」である E区SB568号住居と対比した場合には、SB566号住居の居住者を頂点に一般的住居々住者との中間に位置するサブリーダー的な存在が窺え、複雑な階層的構造の存在も考慮される。

18) 末木曜は、この1号敷石住居の周堤帯に「小枕野式」構築法の存在を指摘しているが、似て非なるものである。基本的に、中期末葉の群馬県野村遺跡で認められる広口縦列配置の列石上位面に複数段を横口積みにする手法と同一であり、中期末葉から後期前半期の関東・中部地方を含めた広域に採用されていたことを示す事例である。

引用資料

【群馬】

赤山容造・他　1980　『三原田遺跡（住居篇）』第一巻　群馬県企業局
石井克巳　2000　『浅田遺跡』子持村教育委員会
大江正行・他　1990　『仁田遺跡　暮井遺跡』群馬県埋文事業団
大賀　健・他　1997　『下諏訪遺跡』下仁田町遺跡調査会
大塚昌彦　1993　「第一章　原始・古代」『渋川市誌　通史編・上　原始～近世』渋川市市誌編さん委員会
金子正人・他　1999　『坂本北裏遺跡』松井田町埋蔵文化財調査会
軽部達也・他　2001　『東平井寺西遺跡』藤岡市教育委員会
菊池　実・他　1990　『田篠中原遺跡』群馬県埋文事業団
関根慎二・他　1997　『白川奈松遺跡』群馬県埋文事業団
千田茂雄　2003　「1 野村遺跡・野村II遺跡」『東上秋間遺跡群発掘調査報告書』群馬県安中市教育委員会
田村公夫・他　2000　『長久保大畑遺跡　新田入口遺跡』群馬埋文事業団
富田孝彦　2000　『坪井遺跡II』群馬県西東都長野原町教育委員会
長谷川福次　1993　『前中後II遺跡』『村内遺跡 I』北橋村教育委員会
藤巻幸男　2000　『横俣中II遺跡』『年報」19　群馬県埋文事業団
藤巻幸男　2002　『横俣中II遺跡』『年報」21　群馬県埋文事業団
藤岡市教育委員会　1998　『C13　中条頭殿川II遺跡』『年報」13
関宮政光　1997　『打田梅本平遺跡』松井田町遺跡調査会
丸山公夫・他　1985　『久森堀状列石遺跡』『上沢渡遺跡群』群馬県吾妻郡中之条町教育委員会
請田康成・他　2002　『長野原一本松遺跡(1)』群馬県埋文事業団

【栃木】

辰巳四郎　1976　『佐賀環状列石』『栃木県史　資料編・考古一』栃木県
渡辺能瑞　1976　『真子遺跡』『栃木県史　資料編・考古一』栃木県

【埼玉】

小林　茂・櫻本康司　1995　『塚越向山遺跡』『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』合角ダム水没地域総合調査会
渡辺清志　2000　『浜平岩陰・入波沢西・入波沢東』埼玉県埋文事業団

【東京】

浅川利一・戸田哲也・他　1969　『田端遺跡調査概報－第1次－』町田市教育委員会

【神奈川】

天野賢一・他　2002　『川尻中村遺跡』かながわ考古学財団
池田　治　1996　『道志導水路遺跡群　青根馬渡遺跡群No.4遺跡』『年報』3　かながわ考古学財団
西川正史・恵田　勇　1994　『宮ヶ瀬遺跡群IV　北原（No.9）遺跡(2)・北原（No.11）遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター
江藤　昭　1981　『福荷林遺跡』相模原市下溝相模台遺跡調査団
恵田　勇・他　1997　『宮ヶ瀬遺跡群XIII　表の屋敷（No.8）遺跡』かながわ考古学財団
小出義治　1971　『神奈川県三の宮配石遺構』『北奥古代文化』第3号
宍戸信悟・松田光太郎　2000　『三ノ宮・下谷戸遺跡（No.14）』かながわ考古学財団
鈴木次郎・近野正幸　1995　『宮ヶ瀬遺跡群V　馬場（No.6）遺跡』かながわ考古学財団
鈴木保彦・大上周三　1997　『下北原遺跡』神奈川県教育委員会
鈴木保彦　他　1977　『当麻遺跡・上佐知遺跡』神奈川県教育委員会
高山　純・他　1975　『曽谷吹上一配石遺構発掘調査報告書一（図録篇）』

【長野】

友野良一・他　1979　『笠前』飯島町教育委員会
畔上秀雄・田川幸生・他　1981　『伊勢宮』山ノ内町教育委員会
今村善興・他　1995　『根塚』『千曲郡阿南町教育委員会
上野佳也・他　1983　『経井沢町茂沢南石堂遺跡』軽井沢町教育委員会
宇賀神誠司・川崎　保・他　2000　『三子塚遺跡群・三田原遺跡群・岩下遺跡・石神遺跡群・郷土遺跡・東丸山遺跡・西丸山遺跡・深沢遺跡群』長野県埋蔵文化財センター
大場俊雄・他　1976　『上原』長野県文化財保護協会
小川喜史・柳川英司　1994　『立石遺跡』茅野市教育委員会
木下平八郎・他　1995　『的場・門前遺跡』駒ヶ根市教育委員　会
小池昌史　2003　『塩之目尻遺跡の発掘調査』『信濃考古』No.171　長野県考古学会
小林深志・武藤雄六　1994　『勝山遺跡』茅野市教育委員会
酒井幸則・桜井弘人　1984　『前田遺跡』松川町教育委員会
佐藤鶴蔵・山下誠一　1987　『殿原遺跡』飯田市教育委員会
林　茂樹　1990　『小林遺跡』『反目・蕨光・殿村・小林遺跡』駒ヶ根市教育委員会
原田政信・森崎　稔　1990　『円光原遺跡』戸倉町教育委員会
平林　彰・他　1993　『北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター
福島　永　2003　『羽場崎遺跡発掘調査概要』『信濃考古』No.174　長野県考古学会
福島邦男　1989　『平石遺跡』望月町教育委員会
松永満夫　1990　『下中牧遺跡』信州新町教育委員会
三上次男・上野佳也　1968　『経井沢町茂沢南石堂遺跡』軽井沢町教育委員会
宮坂英弋　1957　『尖石』茅野町教育委員会
武藤雄六・宮坂光昭・他　1978　『曽利』富士見町教育委員会
百瀬忠幸・佐々木藤雄　2001　『第15次　大夫遺跡』『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－H.8～H.12年度－』大桑村教育委員会

【山梨】

雨宮正樹・山下孝司・櫛原功一　1988　『山梨県高根町青木遺跡調査概報』『山梨県考古学協会誌』2
笠原かゆき・他　2001　『塩瀬下原遺跡（第4次調査）』山梨県教育委員会
櫛原功一　1987　『姥神遺跡』大泉村教育委員会
佐野　隆　1993　『居敷遺跡』明野村教育委員会
笠原かゆき・他　2000　『大月遺跡（第10次調査）』山梨県教育委員会
十菱駿武・他　1968　『大柴遺跡』『須玉町史　考古・古代・中世』北巨摩郡須玉町
長沢宏昌・笠原みゆき　1996　『中谷遺跡』山梨県教育委員会
宗良泰史　1981　『中谷・宮脇遺跡』都留市教育委員会
宗良泰史　1986　『牛石遺跡』『都留市史　資料編　地史・考古』都留市
新津　健・他　1989　『金生遺跡II（縄文時代編）』山梨県教育委員会
村松佳幸・他　1999　『宮久保遺跡』長坂町教育委員会
山下孝司・榎本　勝　1985　『中田小学校遺跡』甲斐市教育委員会
山下孝司　1989　『後田遺跡』甲斐市教育委員会
山下孝司　1990　『北後田遺跡』甲斐市教育委員会
山路恭之助・他　1998　『川又遺跡』『須玉町史　考古・古代・中世』北巨摩郡須玉町

【静岡】

井鳴博之・他　2001　『富士川SA関連遺跡一破魔射場遺跡・谷津原古墳群・北久保遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
藤畑　稔・他　1990　『公園免遺跡発掘調査報告書』静岡県大仁町教育委員会
小野真一・他　1975　『千居』加藤学園考古学研究所
小野真一・他　1979　『年川前田一伊豆における石遺構を伴う縄文時代遺跡一』修善寺町教育委員会
小野真一・他　1982　『修善寺大塚』修善寺町教育委員会
小野真一・他　1992　『上白岩遺跡一第9次調査報告書一』中伊豆町教育委員会

斎藤　忠・平野五郎・他　1979　『上白岩遺跡発掘調査報告書』中伊豆町教育委員会

参考文献

【あ】

秋田かな子　1991　「柄鏡形敷石住居研究の視点」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2
秋元信夫　1999　「遺構研究　縄状列石」『縄文時代』10　縄文時代文化研究会
阿部昭典　1998　「縄文時代の環状列石—新潟県中魚沼郡津南町道尻手遺跡・堂平遺跡を中心として—」『新潟考古学談話会会報』第18号　新潟考古学談話会
阿部昭典　2000　「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動—複式炉を有する住居の消失と柄鏡形敷石住居の波及—」『物質文化』第69号
阿部義平　1968　「配石墓の成立」『考古学雑誌』第54巻第1号
阿部義平　1983　「配石」『縄文文化の研究』9　雄山閣
安斎正人　2002　「序論　縄文社会論へのアプローチ」『縄文社会論(上)』同成社
石井　寛　1994　「縄文時代後期集落の構成に関する一試論—関東地方西部域を中心に—」『縄文時代』5 縄文時代文化研究会
石井　寛　1995　「縄文時代掘立柱建物址に関する予備論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集帝京大学山梨　文化財研究所
石井　寛　1996　「縄文中期最終末期以降の集落と住居址—横浜市港北ニュータウン地域を例に—」『パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」資料集』神奈川県立埋文センター・かながわ考古学財団
石井　寛　1998　「柄鏡形敷石住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』9　縄文時代文化研究会
石井　寛　2001　「関東地方における集落変遷の画期と研究の現状」『第1回研究集会　発表要旨　縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
石井　寛　2003　「東北地方における縄石群帯施設を有する住居址とその評価—中期最終末期以降を対象として—」縄文時代14　縄文時代文化　研究会
石坂　茂　1985　「荒砥二之堰遺跡」群馬県埋文事業団
石坂　茂・大工原　豊　2001　「群馬県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会　基礎資料集列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
石坂　茂　2002　「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現—各時期における拠点的集落形成を視点とした地域的分析—」『研究紀要』20　群馬県埋文事業団

【か】

樋原功一　1995　「柄鏡形住居の柱穴配置」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集
樋原功一　2001　「山梨県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会　基礎資料集　列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
笠原みゆき　2002　「塩瀬下原遺跡出土の敷石住居跡について」『研究紀要』18　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
小杉　康　1991　「縄文時代に階級社会は存在したのか」『考古学研究』第37巻第4号　考古学研究会
小杉　康　1995　「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立—「葬墓祭制」の構造と機能—」『歴台史学』第93号　駒台史学会

【さ】

佐々木藤雄　2001　「1．大野遺跡B地区出土の環状列石について」『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—H.8～H.12年度—』大桑村教育委員会
佐々木藤雄　2002　「環状列石と縄文式階層社会—中・後期の中部・関東・東北—」『縄文社会論（下）』同成社
佐々木藤雄　2003　「柄鏡形敷石住居址と環状列石」『異観』第21号　共同体研究会
佐野　隆　1999　「曽利式土器文化圏における墓域の特徴と変遷についての予察」『山梨考古学論集』IV　山梨県考古学協会
佐野　隆・小宮山　隆　1994　「縄文時代配石研究の一視点」『山梨考古学論集』III　山梨県考古学協会
佐野　隆　2001 a　「全生遺跡と階層性」『山梨県考古學協會誌』第12号　山梨県考古学協会
佐野　隆　2001 b　「縄文時代の信仰と祭祀」『山梨県考古學協會誌』第12号　山梨県考古学協会
佐野　隆　2003　「縄文時代中期の住居内配石について—敷石住居発生以前の住居内祭祀施設の様相—」『山梨県考古學協會誌』第14号　山梨県考古学協会
末木　健　2000　「縄文時代石積みについて（予察）—山梨県塩瀬下原遺跡の敷石住居復元—」『山梨県考古学協会誌』第11号山梨県考古学協会
鈴木保彦　1976　「環礫方形配石遺構の研究」『考古学雑誌』62・1
鈴木保彦　1990　「関東・東海における配石遺構の変遷」『山梨県考古学協会秋期大会資料集　シンポジウム縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—』山梨県考古学協会

【た】

大工原　豊・林　克彦　1995　「配石墓と環状列石—群馬県天神原遺跡の事例を中心として—」『信濃』第47巻第4号
大工原　豊　2004　「配石記念物の生み出す景観と二重二分」『考古学ジャーナル』No513
田川幸生　1995　「山ノ内町伊勢宮遺跡の柄鏡形敷石住居址」『研究紀要』第1号　長野県立歴史館
田代　孝　1989　「縄文時代の丸石について」『山梨考古学論集』II　山梨県考古学協会
塚原正典　1987　「考古学ライブラリー49配石遺構」ニューサイエンス社
塚原正典　1989　「縄文時代の配石遺構と社会組織の復元」『考古学の世界』慶應義塾大学民族学考古学研究室編　新人物往来社

【な】

中村　大　1999　「墓制から読む縄文社会の階層化」『最新縄文学の世界』朝日新聞社
新津　健　1990　「山梨における屋外配石の変遷」『シンポジウム　縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—　山梨県考古学協会秋期大会資料集』山梨県考古学協会
新津　健　1992　「縄文晩期集落の構成と動態—八ヶ岳南麓・金生遺跡を中心に—」『縄文時代』3　縄文時代文化研究会

【は】

平林　彰　1990　「長野県の配石遺構」『山梨県考古学協会秋期大会資料集　シンポジウム縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—』山梨県考古学協会

【ま】

水沢教子　2002　「千曲川水系における柄鏡形敷石住居の成立」『長野県の考古学』II　長野県埋蔵文化財センター
本橋恵美子　1995　「縄文時代の柄鏡形敷石住居の発生について—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集
本橋恵美子　2003　「縄文時代中期後葉の住居構造の分析—洗関山貫周辺における柄鏡形住居の発生について—」『長野県考古学会誌』103・104号

【や】

山崎　丈　1976　「縄文時代配石遺構研究概史(1)・(2)」『New Wave Archaeaology』Vol 2・3　同人新しい考古学の波
山本暉久　1981　「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開—関東・中部地方の配石遺構の分析を通じて—」『信濃』第33巻第4号
山本暉久　1985　「いわゆる「環礫方形配石遺構」の性格をめぐって」『神奈川考古』第20号
山本暉久　1987　「敷石住居終焉のもつ意味(1)～(4)」『古代文化』第39巻第1～4号　古代学協会
山本暉久　1996　「敷石住居址研究の現状と課題」『パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」資料集』神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団
山本暉久　1999　「遺構研究　配石遺構」『縄文時代』10　縄文時代文化研究会
山本暉久　2002　「第3節　柄鏡形（敷石）住居と廃屋儀礼」『敷石住居の研究』六一書房

【わ】

渡辺　仁　1990　「縄文式階層化社会」六興出版

群馬県出土の神ノ木式土器

谷 藤 保 彦

1．はじめに
2．県内の出土事例
3．群馬から見た神ノ木式土器の検討と課題
4．おわりに

―― 論 文 要 旨 ――

長野県茅野市神ノ木遺跡を標識遺跡として型式設定された神ノ木式土器は、長野県内だけではなく周辺地域にまで分布することが知られている。関東地方においても、『関山貝塚』(庄野 1974)の報告の中で神ノ木式の東の縄文の出土が知られ、秋池　武・新井順二の「群馬県における神の木・有尾式土器について」(1983) でもその存在が認知されていた。近年、群馬県内での神ノ木式土器の出土資料は少しづつ増加し、その分布も長野県に隣接する西毛地域から赤城山西麓まで確認されている。その中でも、安中市野村遺跡の調査では関山II式期の集落が検出され、多くの住居内から関山II式土器と共に神ノ木式土器が出土している。

本稿は、群馬県内出土の神ノ木式土器に着目し、共伴土器から土器型式の編年を確認した結果、戸田・澁谷 (1979) が示した編年を追認することができた。また、神ノ木式土器の成立の問題等、検討を要する点も明らかとすることができた。さらに、神ノ木式土器の分布は、関山II式土器を主体とする群馬県内にあって、後出の有尾式土器が主体をなす遺跡の分布に近いものがあることを知り得た。こうした状況は、群馬・長野に跨る土器文化圏の変遷や、縄文時代における地域色等、土器文化が意味する地域変容のあり様を垣間見ることができ、縄文時代研究にとって大きなテーマとなってこよう。

キーワード
対象時代　縄文時代前期
対象地域　群馬県
研究対象　神ノ木式土器

1．はじめに

神ノ木式土器の研究史を振り返ると、神ノ木式土器は長野県茅野市神ノ木遺跡を標識遺跡として、昭和31年に刊行された『信濃考古綜覧上下巻』によって型式設定され、神ノ木式を関東地方の関山式と併行する時期とし、有尾式を関東地方の黒浜式と併行させ、神ノ木式が有尾式に先行する土器型式として編年的位置付けがなされた。翌32年には樋口昇一によって、神ノ木式土器の編年を逆転させる見解が示される経緯をもつ[1]。その後、大野政雄・戸田哲也は岐阜県堂之上遺跡の調査から神ノ木式と東海地方の清水ノ上Ⅱ式が同時期の土器型式であるとし、併せて関山式の組紐と神ノ木式の束の縄文との関係等、関山式と神ノ木式の施文文様の関連を指摘している[2]。戸田哲也・大矢（逸谷）昌彦では、神ノ木式と有尾式の詳細な分析を行うと共に、神ノ木式と東海地方の清水ノ上Ⅱ式・関東地方の関山Ⅱ式に併行する編年を示し、特に神ノ木式土器の分析でその文様の特徴として櫛歯状連続刺突文の施文方法に触れ、刺突した際に少し横位に櫛歯をずらせて引く手法が指摘されている。また、神ノ木式から有尾式への変遷を説くなかで、その細分をも示唆している[3]。

この神ノ木式土器の分布は長野県内にとどまらず、その周辺地域にまで及んでいることが知られている。

関東地方での神ノ木式土器の存在を指摘したのは庄野靖寿が最初であり、『関山貝塚』の報告の中で神ノ木式の束の縄文を抽出すると共に、『宮の原貝塚』でも束の縄文が出土していることを指摘している[4]。群馬県内出土の神ノ木式土器については、秋池　武・新井順二の「群馬県における神の木・有尾式土器について」(1983) で下仁田町吉崎遺跡の資料が紹介され、その分布が西毛地域だけではなく北毛地域にまで広がることを指摘している[5]。なお、この論考に先立つ秋池の「群馬県における有尾式土器」でも、紹介された吉崎遺跡出土資料の中に神ノ木式土器が含まれている[6]。

関東地方で多くの神ノ木式土器の出土報告が知られるところではないが、今日の群馬県内における出土例をみると、その事例はかなり増加した状況にある。特に、住居等の遺構に伴う資料が多く、共伴する他型式土器も明らかとすることができる。そこで、本稿では群馬県内出土の神ノ木式土器を紹介し、共伴する他型式土器とのあり方を確認すると共に、その様相について考察していきたい。

2．県内の出土事例

群馬県内での神ノ木式土器の出土資料は、近年少しづつ増加し、関山Ⅱ式土器に伴って出土することが知られてきた。その分布も、長野県に隣接する西毛地域から赤城山西麓まで確認されている。その中でも特に、安中市野村遺跡では関山Ⅱ式期の集落が検出され、住居内から多くの神ノ木式土器が出土している。

ここでは、各遺跡から出土した資料について確認していく。なお、図示した土器は、神ノ木式土器を中心に抽出し、関山式土器については出土した遺構の時期がわかる主なものを示した。

下仁田町吉崎遺跡（図1　1～28）

図に示した資料は、「群馬県における神の木・有尾式土器について」(秋池・新井 1983) に掲載された資料である。論考では Ⅰ～Ⅳ類分類され、Ⅰ類に連続刺突文域は条線文を有するもの（1～9）、Ⅱ類に連続刺突文以下が縄文または無文のもの(10～16)、Ⅲ類に縄文のみのもの (17～23)、Ⅳ類にその他のもの (24～28) とし、全て神ノ木式土器として扱われている。

再確認すると、明らかに神ノ木式とは異なる型式の土器が含まれている。Ⅳ類とされた28はロッキングによる貝殻復縁文で、浮島式土器である。27は図が不鮮明ではあるが貝殻背圧痕と思われる。25は斜位の条線ということであり、諸磯c式新段階の土器の可能性がある。24・25については不明。さらに、Ⅲ類とされた17についても結束羽状縄文であり、諸磯式土器の可能性が高い。神ノ木式土器とすることのできるものは 1～9・11・13～16 で、櫛歯状連続刺突文（刺突した際に少し横位に櫛歯をずらせて引く）および櫛歯状条線文を組み合わせて文様を描く。10は口縁部に縦位の連点状刺突文を施す土器で、やや新しい傾向をもつ。12については不明。

安中市中原遺跡（図1　29）

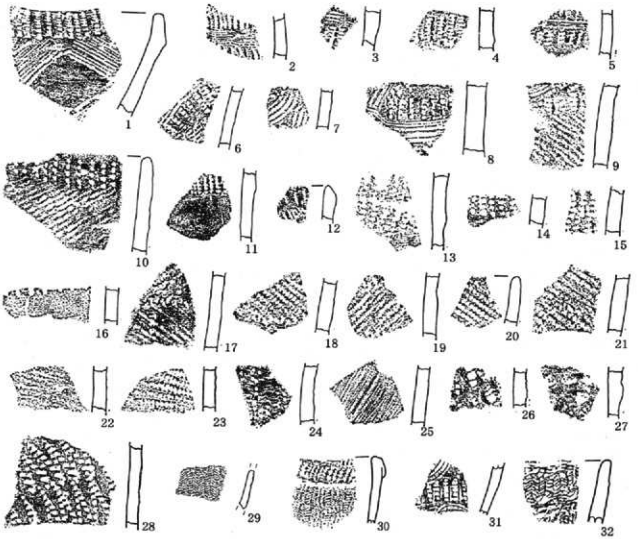
『中野谷地区遺跡群』(大工原・関根 1994) に掲載された資料である。J－1 号住居から、関山Ⅱ式の組紐と共に出土した束の縄文が施される土器。

安中市清水Ⅰ遺跡（図1　30～32）

『清水Ⅰ遺跡』(長井 1996) に掲載された資料である。30はJ－1 号住居、31・32はJ－1 号住居から出土した土器であるが、両住居共に有尾式期の住居で、関山Ⅱ式のコンパス文や組紐と共に混在して出土している。30は口縁部が有段となり、以下の胴部に束の縄文が施されたもの。31は頸部に櫛歯状連続刺突文（刺突した際に少し横位に櫛歯をずらせて引く）、および櫛歯状条線文を組合わせて文様を描くもの。32は口縁部以下に束の縄文を施したものである。

安中市野村遺跡（図2～7　33～101）

『東上秋間遺跡群発掘調査報告書』(千田・関根 2003) に掲載された資料である。この野村遺跡は、縄文時代中期の環状列石・敷石住居でも著名であるが、前期の関山Ⅱ式期の環状集落も存在し、24軒の住居が検出されている。このうち神ノ木式土器が出土しているのは10軒あり、清水ノ上Ⅱ式を出土させている住居が 1 軒存在する。現在のところ、関東で最も良好な資料を出土させた遺跡と



1～28　下仁田町吉崎遺跡
29　安中市中原遺跡J－1号住居
30　安中市清水Ⅰ遺跡J－1号住居
31・32　安中市清水Ⅰ遺跡J－2号住居

図1　群馬県内出土の神ノ木式土器（1～29　S＝1/4　30～32　S＝1/3）

いえる。

J－4号住居からは地文組紐と縦長のコンパス文を施す関山Ⅱ式を主体とし、胴部に束の縄文が施される神ノ木式土器の底部が出土しているが、本稿では図示しなかった。J－5号住居は33～34のように地文組紐とする関山Ⅱ式を主体とし、注口土器を伴う。共伴する神ノ木式土器をみると、36・37は口縁部に縦位の櫛歯状連続刺突文帯を巡らせ、以下に斜位の櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせて文様を描く。38は胴部に櫛歯状連続刺突文をもつ。J－6号住居は39の4単位波状口縁となる注口土器および地文組紐となる関山Ⅱ式土器、40～46といった櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせて菱状等の文様を描く神ノ木式土器、さらには有尾式・諸磯b式土器が混在している。J－35号住居は47～49のような地文組紐や斜行縄文の関山Ⅱ式を主体とし、50のような胴下半に多截竹管具による鋸歯文と刺突帯が巡らされる土器も出土している。神ノ木式土器では51のような波状口縁となるほぼ完形品も出土している。波状口縁の波頂部および波底部に台形状等の小突起を有し、口縁部および胴部に縦位の櫛歯状連続刺突文帯を巡らせて区画し、区画内に櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせて鋸歯状の文様を描いている。ただし、文様全体がかなり雑な感じである。52～55も櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせて文様を描いている土器で、52には垂下する隆帯がみられる。J－40号住居は56のような縦長のコンパス文と地文組紐やループ縄

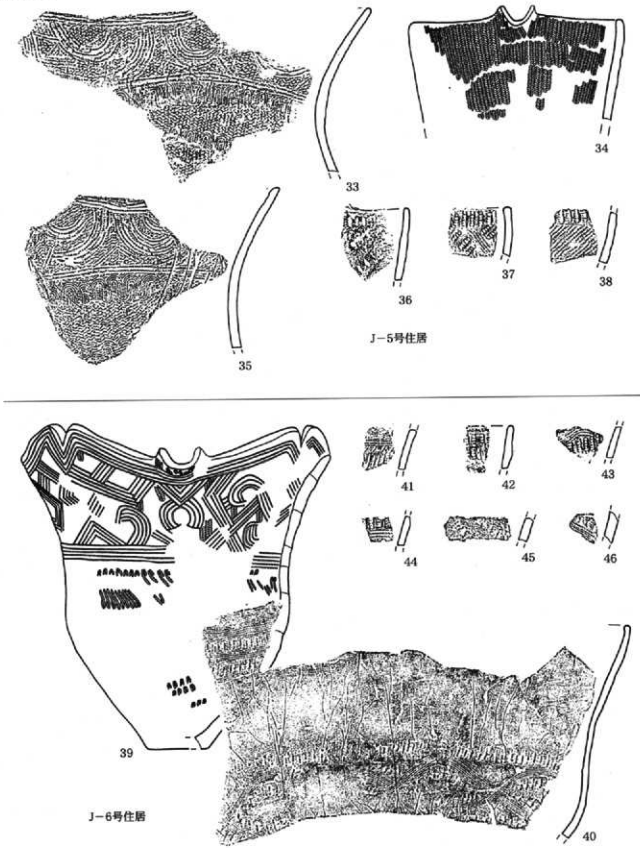


図２　群馬県内出土の神ノ木式土器　安中市野村遺跡(1)（S＝1/4）

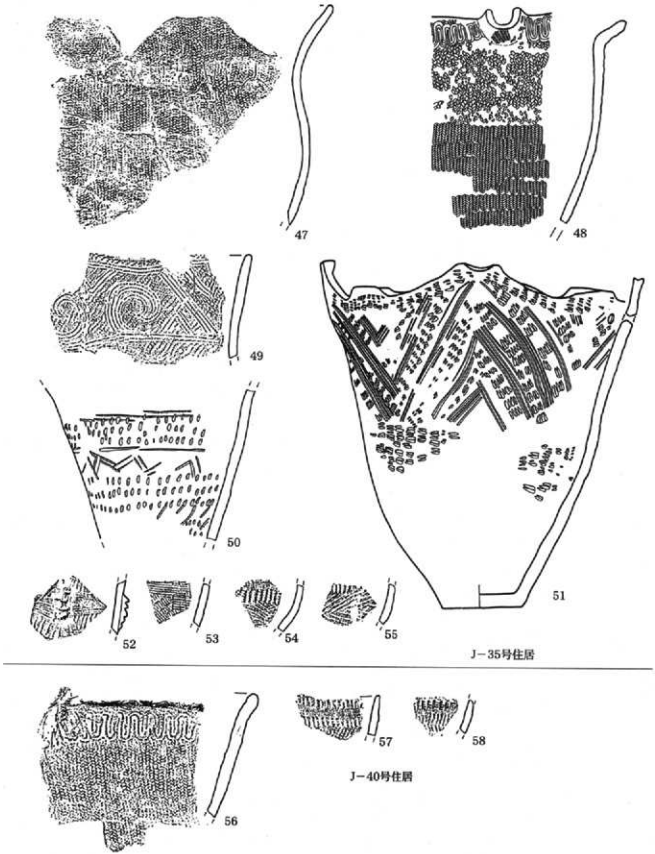


図3　群馬県内出土の神ノ木式土器　安中市野村遺跡(2)（S＝1/4）

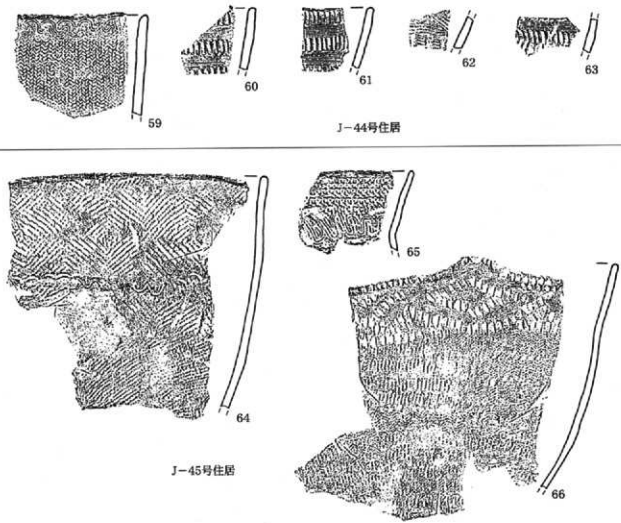


図4　群馬県内出土の神ノ木式土器　安中市野村遺跡(3)（S＝1/4）

文・異条斜縄文といった関山Ⅱ式土器と、57・58の櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせて文様を描く神ノ木式土器が出土している。J－44号住居は59のコンパス文と地文組紐の関山Ⅱ式土器と、60～63の櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせて文様を描く神ノ木式土器が出土しており、さらに諸磯b式土器が多く混在している。J－45号住居は64・65のような縦長のコンパス文と羽状縄文・ループ縄文や地文組紐といった関山Ⅱ式土器と、66の小波状口縁で口縁部に櫛歯状連続刺突文による菱状・鋸歯状の文様を描き、胴部に東の縄文が施される神ノ木式土器が出土している。J－47号住居は67の崩れたコンパス文をもつ深鉢土器や68の注口土器、地文組紐やループ縄文・異条斜縄文といった関山Ⅱ式土器を主体とし、69のような口縁に台形状の突起を有し、口縁部に櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせた鋸歯状の文様を描く神ノ木式土器が出土している。J－48号住居は70・71のようなコンパス文と地文組紐といった関山Ⅱ式土器が出土し、72の櫛歯状条線による鋸歯状等の文様を描く土器や、74の押し引きによる櫛歯状条線で鋸歯状（菱状）の文様とコンパス文を描く土器もある。神ノ木式土器では73の櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせた文様を描く土器が出土している。J－50号住居は75のような平行沈線で菱状・鋸歯状・渦巻き状の文様やコンパス文と地文組紐や異条斜縄文といった関山Ⅱ式土器と、76の口縁以下に羽状縄文を施す大型深鉢土器、77・78の鋸歯状の沈線を重畳させて孔子目状の文様を施文する土器が出土している。さらに、79の波状口縁が有段となり、口縁部に縦位の押し引き様の文様を施し、器厚が薄いといった特徴をもつ清水ノ上Ⅱ式土器が出土している。J－56号住居は80・81のようなコンパス文や地文組紐といった文様を施文する関山Ⅱ式土器と、82の口縁部に櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせた鋸歯状（菱状）の文様を描く神ノ木式土器が出土している。遺構に伴わないグリッド出土の神ノ木式土器には、83・85～98といった口縁部文様に櫛歯状連続刺突文および櫛歯状条線文を組合わせた文様を描く土器や、

84・90・91・99・100の胴部に束の縄文が施される土器がある。86・92は垂下する隆帯をもつ。84は口縁に台形状の突起を有し、口縁部に糸線による菱形構成となる鋸歯状の文様と円文を描く。また、神ノ木式土器とは言い難いが、101の鋸歯状の糸線を重畳させて孔子目状の文様を施文する土器も土している。

この野村遺跡出土の神ノ木式土器の櫛歯状連続刺突文は、そのほとんどが刺突した際に少し横位に櫛歯をずらせて引く手法をとるもので、連点状刺突文を施す土器の出土は見られない。また、神ノ木式土器と共に出土する関山式土器は、組紐盛行期以降の関山Ⅱ式後半が主体であり、関山式の古い段階の土器の出土はほとんど見られない。

北橋村下箱田向山遺跡（図８　102～117）

『下箱田向山遺跡』（飯島・関根 1990）に掲載された資料である。検出された遺構の内、５・８号住居とされた２軒の住居が関山Ⅱ式期の遺構で、関山Ⅱ式土器に神ノ木式土器を伴っている。

102～105は５号住居から出土した土器で、102のように鋸歯文や円形・方形等の文様を施すもの、103のように縦長のコンパス文を施す注口土器、さらには蕨手状の文様を大きく描く土器等、関山Ⅱ式の土器を主体としている。これに104・105の束の縄文を施した神ノ木式土器が出土している。106～109は８号住居から出土した土器で、106や107のように口縁部・胴部に縦長のコンパス文を施すもの、108の波状ないし鋸歯状の文様を平行沈線で描く土器、さらに口縁部に蕨手状の文様を大きく描く注口土器、地文組紐のみの注口土器等、多くの関山Ⅱ式土器が出土している。この中に、109の束の縄文を施した神ノ木式土器が出土している。110～117は遺構外出土の神ノ木式土器で、胴部に束の縄文を施した土器である。

北橋村西ノ平遺跡（図９　118～121）

『西ノ平遺跡』（富澤 1996）として報告されたが、『北橋村村内遺跡Ⅳ』（富澤 1996）で詳細な報告がなされ、その後『北橋村村内遺跡Ⅵ』（長谷川 1998）に一部の資料が再録されている。住居が１軒検出されており、図に示した土器が出土している。118は注口土器で、地文に異条斜縄文が施され、鋸歯文や縦長のコンパス文が描かれる。119は口縁以下に斜縄文が施され、120は口縁以下に格子目状となる斜位の沈線が施されている。これらの関山Ⅱ式土器に、121の清水ノ上Ⅱ式土器が伴って出土している。この121は器厚が極めて薄く、表裏面に指頭圧痕を残す。波状口縁で口縁部がやや内反し、口縁部に縦位の刺突と爪刺突を巡らせ、胴部の屈曲部にも爪刺突を巡らせている。

赤城村勝保沢中ノ山遺跡（図９　122）

『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』（石坂 1988）に掲載された資料である。122は遺構外の出土であるが、口縁部にややずらせ気味な縦位の櫛歯状連続刺突文と、同工具による櫛歯状条線を巡らせる土器である。他の遺構外出土遺物には、二ツ木式土器、関山式土器、有尾式土器等があるものの、関山式土器に伴うものと考えられる。

この他にも、松井田町人見大谷津遺跡でも関山Ⅱ式期の住居が４軒検出されており、その内の３軒からは関山Ⅱ式土器と共に、櫛歯状連続刺突文（刺突した際に少し横位に櫛歯をずらせて引く）・櫛歯状条線文、束の縄文といった文様を施す神ノ木式土器が出土している[6]。

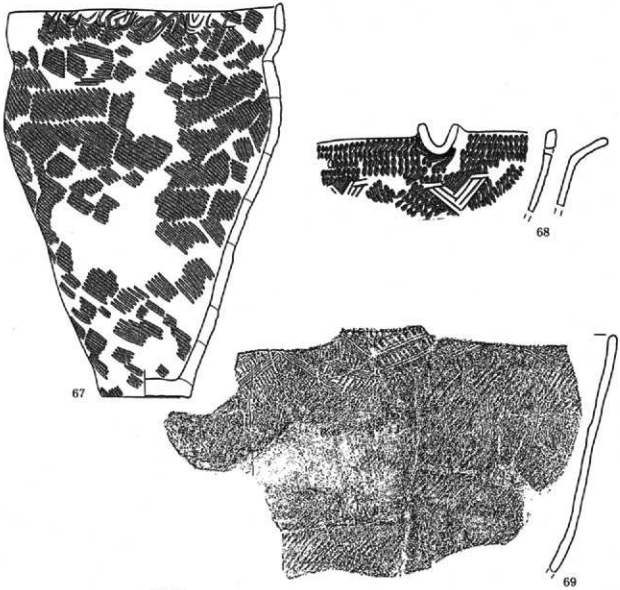
３．群馬から見た神ノ木式土器の検討と課題

以上、群馬県内における神ノ木式土器の出土事例を確認してきた。その結果、長野県に接する西毛地域から赤城山西麓に至る山間部に分布することが確認でき、その出土量も遺跡の主体をなすものではないが、確実に遺構に伴い出土していることが理解できる。次に、神ノ木式土器のもつ問題について、周辺地域である群馬側から見た視点で若干の考察をしてみたい。

a）神ノ木式土器の編年的位置付け

野村遺跡での出土のあり方から神ノ木式土器と伴出する土器をみると、そのほとんどが関山Ⅱ式の中でも組紐盛行期段階以降の土器に共伴していることが明らかである。本来、神之木式土器の口縁部文様帯には地文をもたないはずであるのに、第７図84のように束の縄文が地文として施文される土器等、神之木式土器と関山Ⅱ式土器の両者の要素を併せ持つ土器が存在しており、同時期の土器群であることを如実に物語っている。また、この野村遺跡の出土土器には、関山Ⅰ式やⅡ式の古い段階の土器は見あたらず、後出の有尾式・黒浜式土器は僅かに散見できるのみである。しかも、神之木式土器に施文される土器文様を観察すると、櫛歯状連続刺突文のほとんどが刺突した際に少し横位に櫛歯をずらせて引く手法をとるもので、連点状刺突文を施す土器の出土は見られない。このことは、戸田・澁谷が指摘しているように[7]、神之木式から有尾式への変遷の中で、縦位の連点状刺突文を施す土器群が中間的存在を示すもので、櫛歯状連続刺突文と縦位の連点状刺突文とには時間的差異があることを意味し、その結果として出土の実態があるものと考えられよう。もっとも、縦位の連点状刺突文をもつ一群の土器は、有尾式土器の中でも古い段階に位置付けられると筆者は考えている[8]。

さらに、野村遺跡Ｊ-50号住居や西ノ平遺跡Ｊ１号住居にみられるように、関山Ⅱ式土器に清水ノ上Ⅱ式土器が共伴することも確認できている。つまり、編年的な位置付けとして、関山Ⅱ式後半に神之木式・清水ノ上Ⅱ式が併行関係にあることを検証することができたことになる。ただし、神之木式土器成立にかかわる問題が、今後



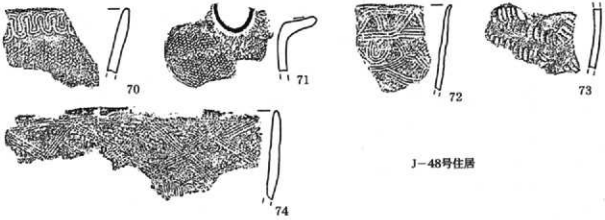
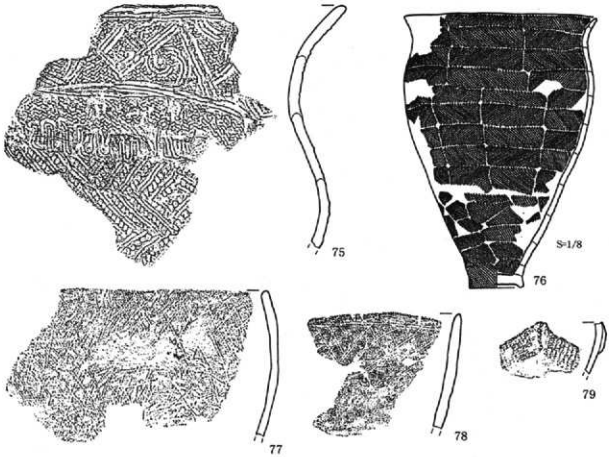
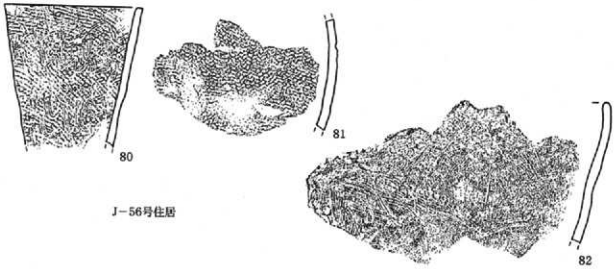


図5　群馬県内出土の神ノ木式土器　安中市野村遺跡(4)（S＝1/4）

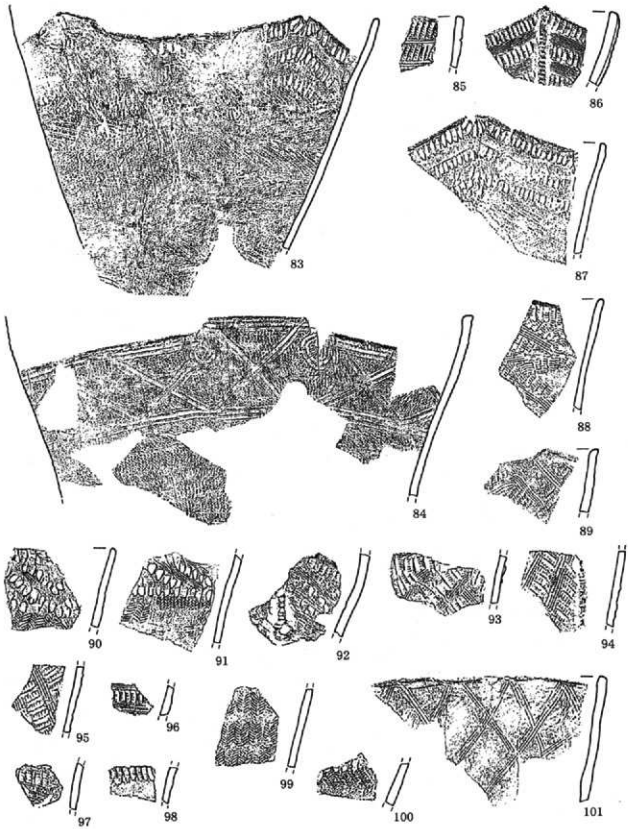


J－50号住居



J－56号住居

図6　群馬県内出土の神ノ木式土器　安中市野村遺跡(5)（S＝1/4）



グリッド出土土器

図7　群馬県内出土の神ノ木式土器　安中市野村遺跡(6)（S＝1/4）

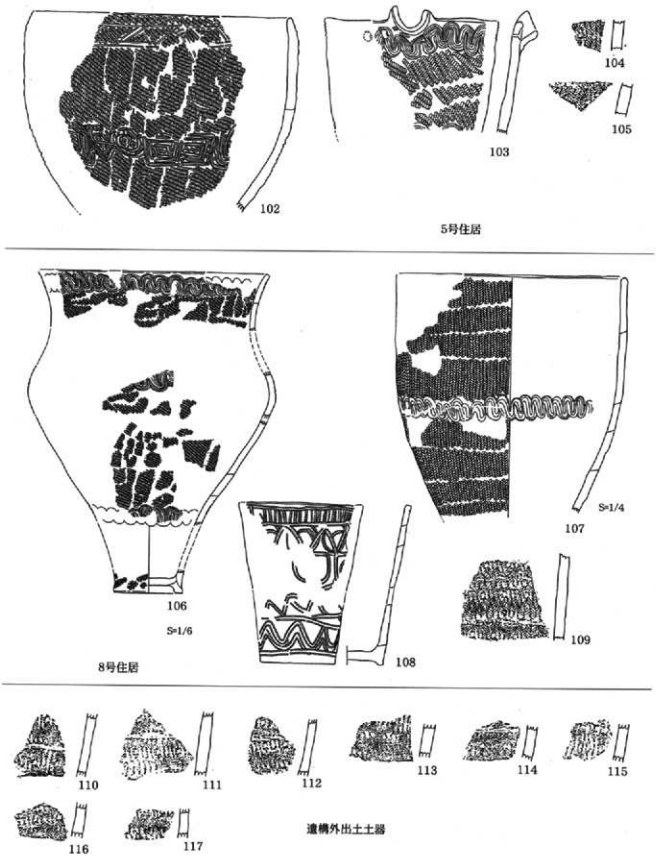
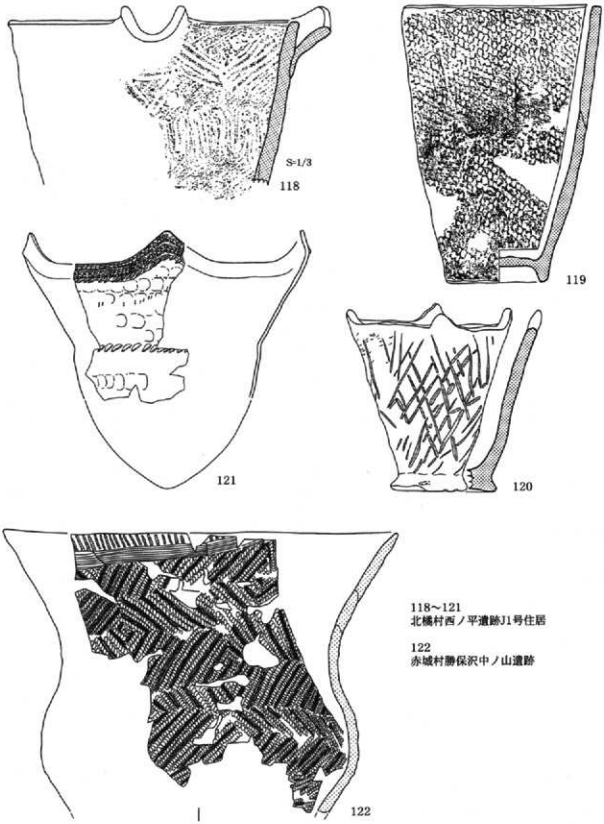


図8　群馬県内出土の神ノ木式土器　北橋村下箱田向山遺跡（S＝1/3）



118～121
北橋村西ノ平遺跡J1号住居

122
赤城村勝保沢中ノ山遺跡

図9　群馬県内出土の神ノ木式土器（S＝1/4）

の課題として残されている。

b）神ノ木式土器の検討課題

先述したように、神ノ木式土器が関山Ⅱ式でも組紐盛行期段階以降に併行する型式で、清水ノ上Ⅱ式とも併行することは理解できたが、神之木式土器の成立の問題が大きくある。神之木式の櫛歯状連続刺突文による幾何学的文様の発生を、縄文施文からの置き換え、施文具の転換といった施文手法の変化との視点がある[9]。問題は、それがいつの段階で起こり始めたのかという点である。現段階での長野編年では、神之木式の前に中越Ⅲ式（関山Ⅰ式に併行）が位置付けられているが[10]、中越式の中から神ノ木式へと変遷する要素があるとは考え難く（中越式土器の変遷は、文様の無文化傾向が強い土器群）、関山Ⅱ式との関連も問われる中で、どこで変化が始まったのか今後の大きな課題である。

もう一つの検討課題として、今日まで群馬県内において目にすることのなかった土器の存在である。第３図50の関山Ⅱ式によく見られる平行沈線での鋸歯文に、爪状の刺突を連続的に施す土器であるが、この爪状の刺突は如何なるものであるのか。関山Ⅱ式に普遍的に施文される文様とは思いがたいが、類例があればご教示頂きたい。また、第６図77・78や第７図101のような、口縁部以下に鋸歯文を重畳させることで格子目状の文様を施文する一群の存在である。鋸歯文を基本としている点では、神ノ木式や関山Ⅱ式と同様である。先出の木島式土器や中越式の有文土器に系譜を求めることができるのであろうか、或いは清水ノ上Ⅱ式の範疇に含まれるのであろうか。

これらの土器は、関山Ⅱ式後半期に伴う土器であることは明らかで、今後検討を要する土器群である。

4．おわりに

群馬県内出土の神ノ木式土器から、その分布、土器型式編年の確認、そして今後の検討課題について触れてきた。共伴土器からする編年の確認では、戸田・澁谷が示した編年[11]を追認することができた。また、課題についても成立の問題等、検討を要する点が明らかとなった。

群馬県内での関山Ⅱ式期の調査事例はそれほど多くない状況ではあるが、関山Ⅱ式土器を主体とする群馬県内にあって、神ノ木式土器の分布は後出の有尾式土器が主体をなす遺跡の分布に近いものがある。このことは、土器を探求する筆者にとって、大きな鍵となり得る。関山Ⅰ式の段階にあっては中部高地的な土器の流入はかなり少なく、関山Ⅱ式期になると主体とはならないが神ノ木式土器が位置を占め、その後の有尾式の時期に至っては長野県から群馬県にかけての地域に強烈な土器文化圏が形成されていく様子が窺える。つまり、土器文様の変遷を追求する中で、群馬・長野に跨る土器文化圏の変遷を知ることができ、縄文時代における地域色、さらには土器文化が意味する地域変容の様を垣間見ることができよう。

文末ではあるが、本稿を草するにあたり、関根慎二、綿田弘実、戸田哲也、澁谷昌彦の各氏からご助言いただいた。記して、感謝申し上げる。

註

1）「上原」（樋口 1957）では、変形刺突文土器（神ノ木式土器）が列点状刺突文土器（有尾式土器）よりも新しいとの見解を示したが、翌年の「長野県西筑摩郡開田村菅沢遺跡調査概報」（樋口 1958）では、神ノ木式から有尾式へとした編年に戻している。

2）大野政雄・戸田哲也 1978 『堂之上遺跡第１次～５次調査概報』

3）戸田哲也・大矢（澁谷）昌彦 1979 「神之木式・有尾式土器の研究（前）―茅野市神之木遺跡採集の資料を中心として―」『長野県考古学会誌』34

4）庄野靖寿 1974 『関山貝塚』埼玉県教育委員会
　吉田 格・今村啓爾 1972 「宮の原貝塚」武蔵野美術大学考古学研究会

5）秋池 武・新井順二 1983 「群馬県における神の木・有尾式土器について」『信濃』第35巻第４号

6）松井田町教育委員会の壁 伸明氏に便宜を図っていただき、実見させていただいた。

7）註３に同じ。

8）谷藤保彦 1988 「北関東における有尾式土器の変遷」『考古学叢考下巻』
　谷藤保彦 1997 「北関東地域における前期中葉土器群の実相」『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』資料集・記録集
　谷藤保彦 1997 「考察」『神保植松遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

9）註２・３に同じ。

10）澁谷昌彦 1991 「中越式土器の研究―中越遺跡、阿久遺跡出土土器を中心として―」『縄文時代』第２号

11）註３に同じ。

資料出典文献

石坂 茂 1988 『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
大工原豊・関根慎二 1994 「中原遺跡」『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
飯島義雄・関根慎二 1990 「下箱田向山遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
富澤敏弘 1996 『北橋村村内遺跡Ⅳ』北橋村教育委員会
長井正悦 1996 「清水Ⅰ遺跡」原市第一県営住宅遺跡調査会
長谷川猛次 1968 『北橋村村内遺跡Ⅵ』北橋村教育委員会
千田茂雄・関根慎二 2003 「東上秋間遺跡群発掘調査報告書」安中市教育委員会

諸磯ｂ式土器に付けられたイノシシ顔

―― 装飾の意味を考える ――

関　根　慎　二

1．はじめに
2．獣面土器の分類と時期分類
3．分布と出土傾向
4．まとめ

―― 論文要旨 ――

縄文時代前期は、それ以前と比較し様々な点で、文化の変革点としてとらえることが出来る。縄文時代の土器文様の大部分は、抽象的な文様である。木葉文形浅鉢といわれる土器は、抽象的な文様装飾を持ち威信財として使われた。しかしこれとは別に、具象的な文様装飾を持つ土器もある。すなわち、諸磯ｂ式土器に付けられるイノシシ顔の突起である。このイノシシの付いた土器は、具象的な文様でありながら、装飾の意味について考察されることは、少なかった。本論では、威信財としての位置づけが確立された浅鉢と対置することで、イノシシの付いた土器解釈を試みる。

イノシシ顔の付いた土器を分析するために次のような方法を採った。

まず、イノシシ顔の分類と時期区分を行い時間差を求める。次に分布域と主な遺跡からの出土量を浅鉢とイノシシ顔の土器について比較する。このことによって、地域差や遺跡間による差異を求める。最後に、遺跡の出土状況を浅鉢との対比の中で確認する。

以上の方法とは別に、黒曜石の流通過程の研究成果を参考にした。これらのことから、イノシシ顔の付いた土器は、諸磯ｂ式土器文化圏における【小地域集団を証明（identity）】するための【威信財（prestige goos）】としての役割を持った土器と位置づけた。

キーワード

対象時代　縄文時代前期後半
対象地域　関東・中部高地
研究対象　土器文様装飾　存在証明　威信財

1．はじめに

縄文時代に獣面把手と呼ばれる突起の付いた土器は、前期以降の深鉢などに付けられる装飾としてみられるものである。縄文土器の文様は、抽象的な文様が多く具象的な文様が少ない。その中で、獣面の装飾は、数少ない具象的な文様であることから、比較的目に付く文様装飾である。本稿では、その具象的な文様の出現期である諸磯ｂ式土器に付けられたイノシシ顔の把手について考察してみたい。

先に、筆者は諸磯式にみられるイノシシ顔の付いた土器について、獣面把手の施文手法の違いから、分類変遷をおこなった。その変遷は、次のようになる。諸磯ｂ３段階のイノシシ顔は、口縁部の文様モチーフから別個に独立して付けられていた。第４段階以降になると、次第に口縁部文様モチーフに組み入れられるようになる。第５段階では、再び口縁部文様とは別個に文様モチーフと独立した形で貼付されるようになった。第５段階以降イノシシ顔は、粘土瘤状の貼付による突起が主体となり、イノシシ顔は消滅する。この第５段階以降になると粘土瘤を貼付した深鉢土器が数多くみられる。諸磯ｂ５段階、諸磯ｂ６段階を経て諸磯ｃに至るところで、イノシシ顔の把手から粘土瘤へと変わっていった。

同じ諸磯ｂ式土器の時期、もう一つの特異な土器がみられる。それは、有孔浅鉢と言われる形が、宇宙 SF に出てくるような「UFO」に似た浅鉢である。この土器については、酒造具説や太鼓説などがある。しかしこの土器の用途については、今ひとつ確定的ではないが、葬送儀礼や廃屋儀礼などの儀式を行う場での威信財に使われていたことを小杉氏（2003）は指摘している。

では、イノシシ顔の突起についても威信財としての役割が考えられないだろうか。現代人にとって、縄文土器に装飾された文様モチーフの意味を解釈するのは難しいことである。しかし、いろいろな文様の意味を解釈する以前に、土器文様の物語を作る行為があったことは遺物を通して理解できることである。縄文人が諸磯ｂ式から諸磯ｃ式へと移行する中で、深鉢に付けられた具象性を持つイノシシ顔の突起から抽象的な粘土瘤突起へと変化させたのは、単に装飾を簡略化させた結果ではないと考える。それは、ある「もの」を入れる特別の容器として使われた深鉢に付けなくてはならないもの―イノシシ顔―から、容器に貼付しなくてはならないもの―粘土瘤―へと装飾の意味を変化させていった。始め、土器に付けられたイノシシ顔把手には、深鉢に付ける意味を持ち所作があった。それが世代を交代するとともに、装飾の意味を理解しつつも形を変え、本来の持っていた意味から離れ、深鉢に粘土瘤を貼付する行為が形だけ残った結果ではないだろうか。浅鉢が諸磯ｂ式から諸磯ｃ式の始めにかけて、比較的長期間安定した使われ方をする状況が認められる。浅鉢が、威信財として確固たる位置づけがされる状況にある中で、イノシシ顔の把手は、変化の度合いが早く出土状況から威信財として認められないでいた。

今回は、この浅鉢の直接的な用途とはいったん離れ、儀式として使用される威信財としての浅鉢をイノシシ顔の把手と比較する材料としてみていくことにしたい。

イノシシ顔の突起と浅鉢の分布状況や出土数、出土状況の具体的例をみながら、イノシシ顔の突起についての物語。もう一つの威信財になりえるか、可能性を考えてみたい。

2．獣面土器の分類と時期分類

本項では、時間軸をまず決めることとして、諸磯ｂ式土器の変遷図に沿って獣面土器を並べてみる。諸磯ｂ式土器の変遷については、第12回縄文セミナーによる変遷過程を使用する。それにあわせて獣面（イノシシ顔）の変遷をみてみたい。土器と獣面の分類変遷については、先に詳細を述べているが、概略を紹介する（図１参照）。

諸磯ａ式土器終末段階（諸磯ｂの前段階）　この段階の土器の主な文様のモチーフは、円形の刺突肋骨文、波状文、木葉文。幅狭な半截竹管で平行沈線、爪形文で肋骨文や波状文、木葉文の文様を描いていく。円形刺突はやや太めの竹管を使用し、円形の刺突を、先に縦に区画し肋骨文、波状文を横につないでいく文様施文の土器。

浅鉢は、ボール型の土器。竹管による円形の刺突を横に沈線でつないでいく。基本的に深鉢に似た模様を浅鉢にも付けていく。

諸磯ｂ１段階（諸磯ｂ初頭段階）　文様構成は、諸磯ａに非常に似ている。大きな違いは、諸磯ａの場合、円形の刺突で縦に区画してから横に波状線をつないでいく、が円形の刺突が先に横に波状を描いてから、後で円形の刺突を付けて縦に区画したようにみせている。また、半截竹管による施文が幅広くなる。土器文様施文方法の違いという所でａとｂを分けた。

諸磯ｂ２段階（諸磯ｂ古段階）　懸架状の入組文。文様モチーフも若干木葉文から発展したような形の模様。幅の広い爪形文。確実に施文具が幅広の爪形文に変わってくる。爪形文の土器と平行沈線文の土器と浮線文の土器が出てくる。この爪形文土器の中に、爪形文と爪形文の間に浮線文を思わせる隆起した線がある。この段階に獣面把手、浮線文土器の発生がみられる。

浅鉢の文様も爪形文で木葉文を描き、諸磯ａ式土器を思わせるモチーフを持つ。

諸磯ｂ３段階（諸磯ｂ中段階）　浮線文と沈線文の施文の土器が主体。文様は口縁部に同心円や渦巻きの文様を描いていく。この段階は、獣面把手が確立してくる段階。胴部文様帯が多段化してくる。口縁部文様帯も前の

段階に比べてやや狭くなり、口縁部以下の文様帯も横の浮線や沈線で多段化されてくる。文様の方も同心円や渦巻文などが入ってくる。

浅鉢は、口縁部がかなり丸くきつくなるような形で、沈線に刺突を加えたようなもので渦巻き、無文も顔料を塗り、彩色して文様を描いていく。

諸磯ｂ４段階（諸磯中段階）　文様は沈線と浮線が主体になる。口縁部の文様に入組の弧線や風車状の弧線が描かれ、波状口縁の突起の下に入組状の文様が描かれる。文様が突起や波頂部のところでぶつ切りになっていくような形が、この時期の特徴である。

浅鉢は、無文化していく。無文の器面に、顔料により文様が描かれる。

諸磯ｂ５段階（諸磯ｂ新段階）　浮線が前の段階では断面が丸く隆起しているのに対して、偏平になってくる。

口縁の器形が靴先状にり、大きく屈曲する。口縁部の文様も大きく屈曲した外反している部分に文様が描かれる。波頂部からつながるように、対の弧線になるような線が描かれていく。くの字に屈曲した上と下の部分に文様を分帯して、上の段と下の段の外反した部分の両方に、同じような文様を描いていく。

浅鉢は、比較的口縁が立ち、肩部の所に屈曲が出来るというような形が多い。

諸磯ｂ式６段階（諸磯ｃ移行段階）　靴先状の口縁が肥大化。口縁部に小さな屈曲を持って粘土紐が縦に付けられる土器。入組状の沈線で描かれているような土器。

浅鉢は、基本的に無文の土器。段がなくなって口縁直下の肩部に円形の刺突が押されてくる。

諸磯ｂ式の獣面について、深鉢に付けられる方法により６類に分類した。これらの分類は、諸磯ｂ式土器の細分型式に緩やかに対応する関係を持っている。

獣面装飾が、諸磯ｂ式土器に装飾される変遷過程と、深鉢の変遷過程についての関係を示すと、次のような変遷が認められる。

１類　獣面は、頭部、目鼻を器面の側面に貼付装飾し、強調する形態。獣面は口縁部文様帯に組み入れられる。口縁部からあまり突出しない。深鉢の器形は、口縁部が大きく開く。口縁部文様帯は、広い一段構成をする。爪形文施文の土器に付けられ獣面土器の初源的なものである。

２類　獣面が把手化し、より具象化する。成形された獣面全体を口唇部の上に載せ、把手化する。本類では、口縁部文様帯の文様モチーフは獣面とは、別個のモチーフを作る。そのため、獣面部をのぞいても口縁部も尿対の文様モチーフは完結している。深鉢口縁部の器形は、緩く内彎。口縁部文様体は、広い一段構成、口唇部に平行線が引かれる。

３類　獣面の半把手化と、口縁部文様モチーフへの組み込み。成形した獣面の頭部を口唇部に貼り付け、目・鼻・口に当たる部分は、口縁部側面に貼付する形態。獣面頭部が、波状口縁の波頂部突起となるようにしている。口縁部文様帯は、獣面土器の貼付が取り入れられたモチーフになる。口縁部は、キャリパー状に内彎。口縁部文様帯は、口唇に沿って幅の狭い文様帯を持つ。多段化の傾向を持つ。

４類　獣面が側面に付けられ、偏平化する。獣面全体を口縁部側面に貼付する形態。頭部は、口縁波頂部の成形と一体になる。顔面部は、ボタン状粘土瘤により目、鼻、口を表現している。獣面の輪郭を浮線や沈線で描くことで、口縁部文様体に取り入れ、一体化されている。キャリパー状の鋭角な口縁。口縁部文様帯が多段化する。

５類　獣面の輪郭喪失。口縁部文様体の文様モチーフのなかに組み込まれた粘土瘤の突起としての認識が強くなる。口縁部文様帯モチーフと遊離したかたちで貼付される。口縁部は、キャリパー状の鋭角な屈曲を持つ。口縁部文様帯は多段化する。

６類　獣面の抽象化と文様モチーフとの隔絶。獣面が完全に退化し、口縁波頂部の側縁に大きめの粘土瘤を貼付する形態。

以上、土器の変遷と獣面土器の分類を主に形態と施文方法とから分けてみた。

１類から４類の獣面土器は、その貼付される深鉢の文様形態からほぼ諸磯ｂ式古段階から中段階への変遷に緩やかに対応している。６類は、深鉢の中段階から新段階にみられる土器に貼付されている。２類や３類の獣面土器と同じ時期の深鉢に６類の獣面土器が貼付される例もある。諸磯ｂ式の新段階では、１類～４類の土器が貼付される例がみあたらないことから、６類はb_3～b_5段階に出現し、これらの深鉢に伴いながら新しい段階にまで残っていったものと考えられる。

３．分布と出土傾向

図２は、諸磯ｂ式土器と、獣面土器、浅鉢の広がりをみるための図で、細かく集成したものではないが、おおよその傾向を示すものと思われる。諸磯ｂ式土器が出土する遺跡のうち、獣面土器と浅鉢の出土する遺跡、浅鉢の出土する遺跡を示した。獣面土器と浅鉢の分布は、ほぼ諸磯ｂ式土器が分布している範囲と重なるが、獣面土器の分布がやや内輪になる。

獣面土器、浅鉢とも筆者の調べた範囲では、東北地方大木式土器文化圏の山形、西日本では北白川式土器文化圏の岐阜にまで広がっている。さらに今後外側に広がる可能性はあると考える。各遺跡の出土状況をみると、獣面土器は確認されないが、浅鉢の出土が確認された遺跡がみられた。特に西日本では、浅鉢の出土遺跡が獣面土器より遠方にあり、遺跡数も多い。また、甲信地方でも、

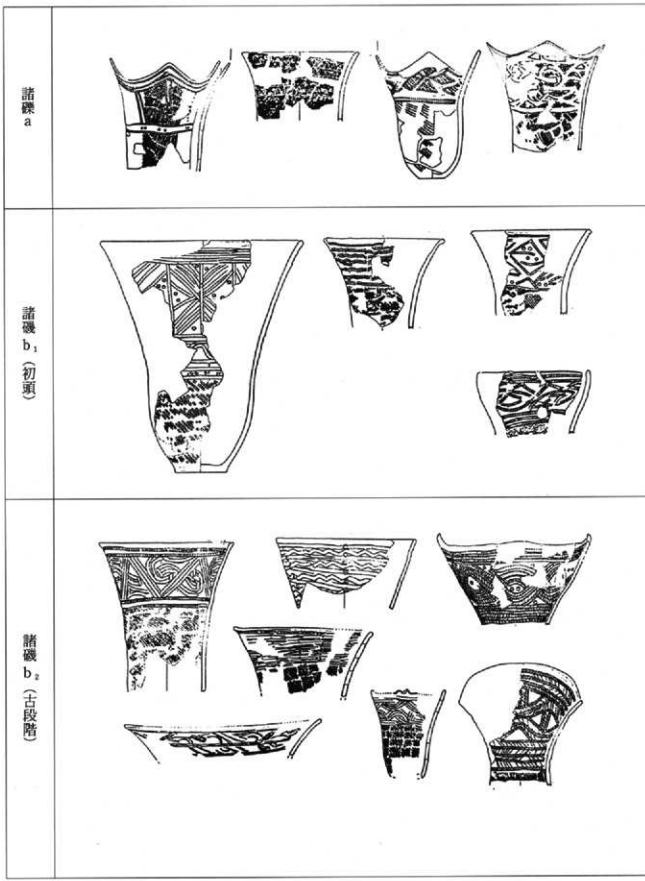


図1－1　諸碗b式土器変遷図

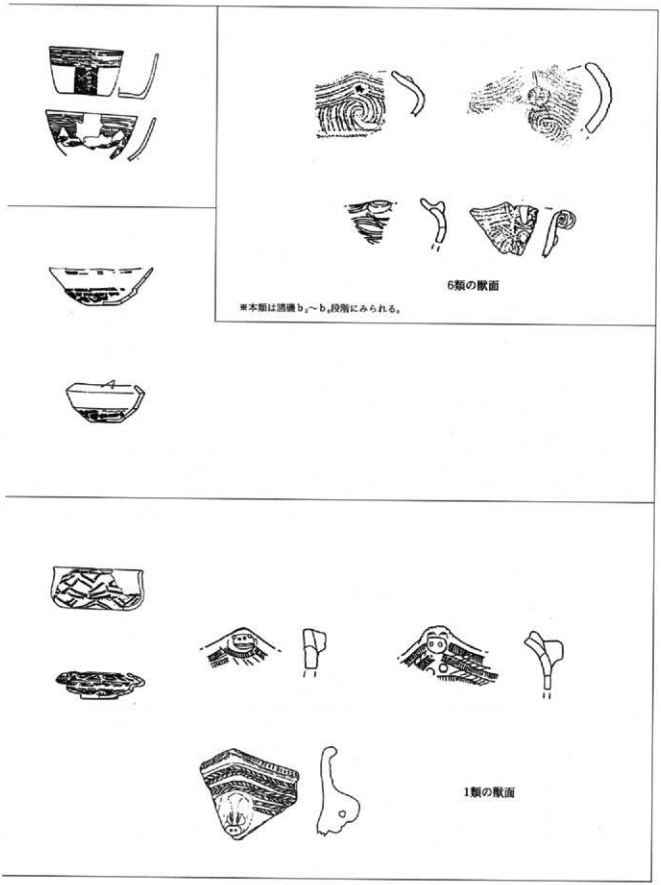


図1－1

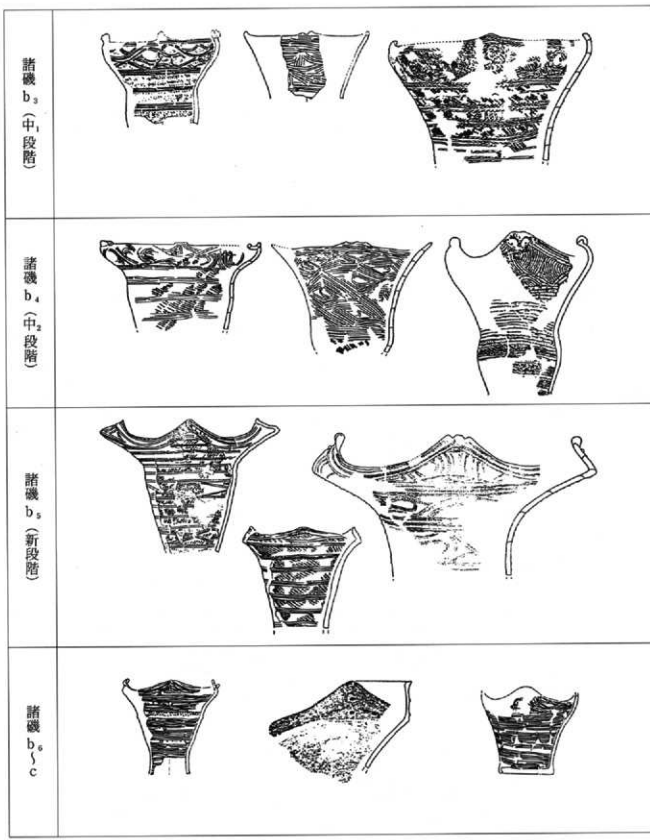


図1－2　諸磯b式土器変遷図

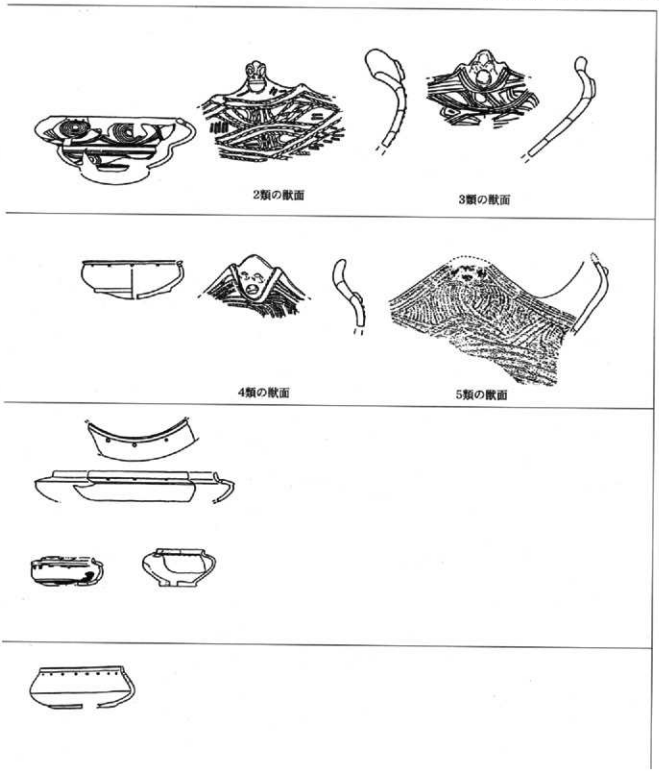


図1－2

浅鉢の出土する遺跡は多いが、獣面土器の出土する遺跡は少ない。関東では、獣面土器と浅鉢の両方出土する遺跡が多いなど、地域的な傾向がみられる。このことは、獣面と浅鉢において、土器の作られた数量的な差異と機能・用途による違いが考えられる。

次にいくつかの遺跡において獣面土器と浅鉢の出土比率をみてみたい。

今回集計した遺跡は、諸磯期の一部の遺跡であるが、ここから獣面土器のおおまかな傾向をみてみたい。

地域的な分類では、諸磯式土器の分布域の北部である群馬地域、中心部の東京・埼玉、浮島系土器と接する東部の千葉、西部の神奈川、西北部に位置する中部高地の山梨・長野、北白川式土器と接する岐阜県の遺跡を取り上げた。

表1・図3は、各報告書の図版に掲載されているものを数えた数量である。数量化した遺構と遺構外の遺物は、報告書中の諸磯b式期前後の遺構である。だいたい本論の諸磯b式土器の変遷図に相当する時期である。獣面土器は、廃棄された状態で出土することが多いので、諸磯b式土器期より古い遺構から出土している場合があるため、実際に獣面土器が制作された時期より幅をとって数えた。

報告書掲載の遺物は、当然のことながら出土遺物の全部を掲載しているわけではない。また、土器片の大小があり、正確な数量とはならないと思われるが、報告書の掲載された土器片全体の中で数量比とすることで、各報告書〔遺跡〕内における獣面と浅鉢の数量比は保証されると考える。

神保植松遺跡　当該期の住居址は4軒確認されている。26号住居址遺構では、3類、4類の獣面土器が8点と比較的多く出土している。この住居址は、他の住居址に比べ出土土器量や規模が大きいものである。その他の遺構からの出土は少ない。遺構外からは、1類から6類の獣面土器が多く出土している。遺構、遺構外を合わせた全体数をみると、獣面土器と浅鉢の出土比率はほぼ同じになる。

中野谷松原遺跡　該当する住居址は、48軒で今回調査した遺跡の中で最も多かった。本遺跡からは、1類から6類の獣面土器の出土がみられた。特に66、80号住居址はまとまって出土している。これらの遺構は、他の遺物についても遺跡全体からみた遺物出土量も多くなっている。また、遺物出土量の多い遺構としては、56、78号住居址がある。これらの遺構からも獣面土器は、出土している。土壙出土の獣面土器と浅鉢の比率をみると浅鉢が多くなっているが、これは、土壙に副葬品として浅鉢が使用された例外が多いからである。中野谷松原遺跡全体での獣面土器と浅鉢との比較では、ほぼ同じ比率になっている。

塚屋遺跡　本遺跡は、諸磯a式期から続く遺跡である。該当する10軒の住居址と土壙、遺構外出土遺物を数えた。2類、3類の獣面土器が21、24号住居址から2点出土している他は、浅鉢の数量が多い。4号土壙から4点出土していることは、特筆される。他に5類、6類の獣面土器の出土があった。塚屋遺跡全体では、獣面土器より浅鉢が多く出土している。

四葉地区遺跡群　該当する住居址10軒について数えた。1号住居址は、遺物の出土量規模とも本遺跡中最大規模のものであった。本住居址からは、2類～4類、6類の獣面土器17点が出土している。他には、10・11号住居址からと遺構外から出土した2点が確認された。1号住居址からは、浅鉢も59点出土しており、他の住居址と比較した場合突出している。遺跡全体から出土した獣面土器と浅鉢の数量比は、浅鉢が多くなっている。

花前遺跡　諸磯期の住居址からは、2類の獣面土器が出土している。獣面土器と浅鉢の比率はほぼ同じである。遺構外から出土している浅鉢の比率は、獣面土器の3倍ほどである。全体では、1：2の割合になる。本遺跡は、浮島式土器文化圏内に入る遺跡であり主体となる土器は浮島式土器である。ちなみに浮島式土器と諸磯式土器の比率は、7号住居では2：3であるが、本住居址の帰属時期は黒浜式期である。諸磯式期の21号住居では、8：1になる。

木戸先遺跡　諸磯期の住居址からは、2類の獣面土器が出土している。7・8号住居址は遺物が一緒に掲載されていたため分離できなかったが、2軒の住居から2類の獣面土器が出土している。浅鉢も出土しており、獣面土器と浅鉢の比率は1：2である。土壙を含めた包含層では、2類～3類の獣面土器が出土している。包含層と土壙出土の遺物は一括して数えた。そのため浅鉢は、土壙に副葬品として出土した物が多いため、数が多くなっている。

細田遺跡　遺構の出土傾向は、図示された数量では獣面土器と浅鉢の数量比はほぼ同じである。報告書には、別に出土土器一覧表が掲載されており、その中に、獣面土器の数量は示されていないが、浅鉢の数量が示されている。これと、図示された獣面土器との比較を行うと浅鉢の比率が圧倒的に多い。5号住居址では図示されたものは獣面土器1片、浅鉢1片であるが、報告書の集計表によると12片出土している。さらに北白川式土器が片側出土している。

お供平遺跡　獣面土器の出土した住居跡は少ない。土壙や遺構外からのものを合わせて浅鉢と数量を比較すると圧倒的に浅鉢の出土比率が多いことがわかる。出土した獣面土器は、5類のものが多い。土壙から3類の獣面土器が出土している。

天神遺跡　報告書の出土遺物図版とは別項に獣面土器

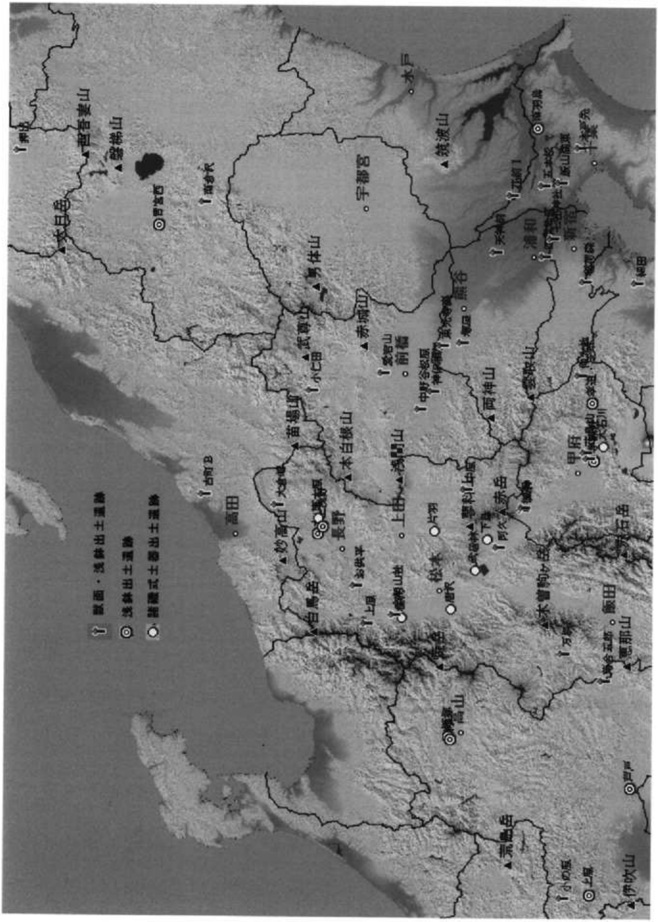

獣面・浅鉢出土遺跡
浅鉢出土遺跡
諸磯式土器出土遺跡
磐梯山
宇都宮
筑波山
水戸
男体山
武尊山
赤城山
前橋
熊谷
浦和
千葉
両神山
雲取山
甲府
赤岳
浅間山
上田
長野
苗場山
妙高山
高田
白馬岳
松本
木曽駒ヶ岳
飯田
恵那山
高山
荒島岳
伊吹山

図2　獣面土器分布図

が掲載されておりそれらを含めて数えた。各遺構の掲載土器量が少ないこともあり比率的には高くなる傾向にあるが、実数では多く出土していない。報告では、2類から6類の獣面土器の出土がみられたが、1類～4類より、5、6類の出土量が多い。獣面土器に比べ、浅鉢の比率が多くなっている。

落合五郎遺跡　北白川式土器の多く分布する地域の遺跡である。遺構内からは、北白川式系土器の出土比率が多いためなのか、獣面土器の出土はみられなかった。遺構外から数点出土している。浅鉢との比率をみてみると10倍以上の差異がみられた。北白川系の土器が多い地域において浅鉢の出土数は、他地域と同じような傾向を示すが、獣面土器の出土比率は少ない傾向にあるといえる。

以上、獣面土器の出土する遺跡を大まかな範囲でとらえた。

獣面土器の出土数では、群馬県西部地域の遺跡に集中してみられた。また、四葉遺跡群や木戸先遺跡などでは獣面土器の多く出土する遺構は、遺跡の中でも規模が大きく遺構内出土の遺物数が多く出土する遺構であるということがみてとれた。

獣面土器の時間的な広がりでは、神保植松遺跡や中野谷松原遺跡では、第一段階から第六段階までの獣面土器が出土しているのに対して、その他の地域の遺跡では、偏った段階のものが出土する傾向にある。

浅鉢との出土量比較では、神保植松遺跡や中野谷松原遺跡ではほぼ同じ比率で出土しているのに対して、他の遺跡では、浅鉢の出土比率が高いことがわかった。

次に獣面土器と浅鉢の出土状況の違いをみてみたい。

図4・写真1は、浅鉢が遺構に伴い出土している例である。

群馬県利根郡昭和村糸井宮前遺跡78号住居では、住居床面に摩滅し凹部に穴のあいた石皿と共に浅鉢が伏せられた状態で出土した。石皿が粉引きの道具であることから、食糧に関する行為を連想させる。あるいは、住居の廃絶時に、その役目の終わった石皿と共に再生を願うために、何らかの儀礼的な行為を行い埋設されたものと考えられる。

安中市中野谷松原遺跡（図5）では、諸磯b式期の集落と共に、多くの土壙墓が発見された。土壙墓は、副葬品を持たないものが大半であるが、副葬品を持つ土壙墓での割合は、装飾品や石器、深鉢などと比較して浅鉢の埋設されている割合が一番多い。また、千葉県木戸先遺跡（図6）では、報告によると墓壙から浅鉢が出土しており、埋葬に伴う副葬品と考えられている。

土壙から出土する浅鉢のこのような出土例をみると、葬られる人の特殊技能、あるいは身分的な関連性から、葬送儀礼用の土器として浅鉢が使われていたことを出土状況が示しているのではないだろうか。

以上の例のように、浅鉢形土器がなんらかの儀礼にともなう場面で使用される性格のものであると考えられる。これは、煮炊きや貯蔵などに用いられた深鉢形土器とは対照的なもので、いわゆる第二の道具という概念で表現されるものである。

一方、獣面土器の出土状況をみると、住居覆土或いは、遺構外から獣面の部分破片が出土することが多い。まれに、獣面の付いたほぼ完形の深鉢が住居址から出土することもあるが、完全に4単位の波状口縁全部に獣面が付いて出土する例は少ない。大概の場合深鉢からもぎ取られたような形で出土している。

中野谷松原遺跡の土壙墓からは、浅鉢を副葬品とする土壙墓の他に、頭部に鉢を被せる「鉢被り」と考えられる形態の土器が出土している。この鉢被りに使用された土器は、諸磯b式土器の一般的な深鉢であるが、あえて獣面土器を使用したものではない。浅鉢が、廃屋儀礼や葬送儀礼の時に威信財として使われる物語性を持つ土器であるのに反して、獣面土器の出土状況は、一般的な深鉢土器と同じように出土している。獣面土器は、遺構の覆土中に他の土器と混じり破片として出土したり、遺構外からひょっこり顔を出す場合もある。総体として、獣面土器は、他の深鉢と同じように遺構の覆土中に廃棄された状況が多い。今回調べた遺跡の中では、獣面土器が特別な形で出土している例は、みられなかった。ただ、獣面部分だけが単独で出土したり、深鉢の獣面部分が欠けている例がみられることから、深鉢から故意に獣面をもぎ取ったような形で廃棄された可能性も視野に入れたい。獣面の付いた深鉢は、その役割を終えたとき、深鉢から獣面が破がされて廃棄された状態で出土しているとは、考えられないだろうか。

獣面土器の大部分の出土状態は、住居址覆土中や遺構外から散発的に出土していることが多い。そのため、出土状況から獣面土器の性格を探ることは難しいことである。それに対して、浅鉢は、糸井宮前遺跡、中野谷松原遺跡、木戸先遺跡のように住居址覆土中に破片で出土することも多いのであるが、住居址床面から単独或いは、石皿等と共伴して出土する例や土壙の副葬品として使われている。

また、土壙内に副葬されるなど葬送儀礼に使用されたような出土状況を示す例もある。浅鉢は、本来の器としての役目とは別な面で、用途を考えさせるような特異な出方をしており、獣面土器と対極的な出土傾向を示す。

以上のような出土状況から浅鉢は、葬送儀礼や廃屋儀礼等の何らかの祭式儀礼に使われたもので安置され、浅鉢の形が壊されない土器。それに対して、獣面土器は容器として存在し、目的が終わると壊され廃棄される土器として、二者を対比してみることが出来るのではないだろうか。

表1　土器数量表

群馬　遺跡名　中野谷松原					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
13住	0	0	39	0	0
15住	0	0	49	0	0
21住	0	0	17	0	0
23住	0	0	12	0	0
24住	1	1	17	5.882	5.882
26住	3	0	33	9.091	0
29住	0	1	1	0	100
30住	0	0	1	0	0
33住	0	0	42	0	0
34住	0	0	2	0	0
40住	2	0	37	5.405	0
41住	2	2	23	8.696	8.696
47住	1	0	2	50	0
51住	0	0	2	0	0
55住	0	0	21	0	0
56住	8	17	152	5.263	11.184
57住	1	0	22	4.545	0
62住	2	0	15	13.333	0
63住	0	0	1	0	0
64住	0	3	25	0	12
66住	18	5	91	19.78	5.495
67住	0	0	3	0	0
68住	2	5	52	3.846	9.615
69住	1	2	18	5.556	11.111
70住	1	4	15	6.667	26.667
75住	0	0	8	0	0
78住	2	6	153	1.307	3.922
79住	1	4	49	2.041	8.163
80住	28	20	144	19.444	13.889
81住	0	0	4	0	0
82住	0	0	3	0	0
83住	3	2	23	13.043	8.696
84住	3	0	21	14.286	0
85住	0	3	52	0	5.769
86住	1	0	65	1.538	0
87住	0	0	8	0	0
91住	0	2	23	0	8.696
94住	0	0	2	0	0
105住	0	0	5	0	0
106住	0	0	17	0	0
108住	0	0	4	0	0
111住	0	4	93	0	4.301
113住	0	3	23	0	13.043
115住	0	2	29	0	6.897
116住	2	1	47	4.255	2.128
118住	0	0	9	0	0
119住	2	1	29	6.897	3.448
120住	0	1	9	0	11.111
土壙	7	20	492	1.423	4.065
遺構外	31	0	62	50	0
合　計	122	109	2066	5.905	5.276

千葉県　遺跡名　木戸先					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
5号住	0	0	65	0	0
6号住	3	0	39	7.692	0
7・8号住	6	12	400	1.5	3
包含層	11	98	381	2.887	25.722
合　計	20	110	885	2.26	12.429

長野　遺跡名　お供平					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
1号住	2	8	47	4.255	17.021
2号住	0	0	15	0	0
3号住	1	0	14	7.143	0
4号住	0	1	10	0	10
遺構外	0	17	64	0	26.563
11号住	0	2	7	0	28.571
12号住	0	3	88	0	3.409
19号住	2	0	19	10.526	0
23号住	0	4	18	0	22.222
土壙・遺構外	3	14	146	2.055	9.589
合　計	8	49	428	1.869	11.449

群馬　遺跡名　神保植松					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
26号住	8	11	644	1.242	1.708
27号住	0	0	45	0	0
28号住	1	0	128	0.781	0
35号住	1	0	32	3.125	0
土壙	4	3	237	1.688	1.266
遺構外	56	59	1845	3.035	3.198
合　計	70	73	2931	2.388	2.491

埼玉　遺跡名　塚屋					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
2号住	0	0	28	0	0
3号住	0	0	29	0	0
4号住	0	0	97	0	0
5号住	0	7	229	0	3.057
8号住	0	3	140	0	2.143
17号住	0	2	61	0	3.279
19号住	0	0	35	0	0
20号住	0	2	327	0	0.612
21号住	2	3	126	1.587	2.381
24号住	1	3	83	1.205	3.614
4号土壙	4	0	8	50	0
15号土壙	0	2	39	0	5.128
65号土壙	1	0	16	6.25	0
グリッド	0	16	16	0	100
合　計	8	38	1234	0.648	3.079

東京　遺跡名　四葉地区遺跡					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
遺構外	1	5	77	1.299	6.494
1号住	17	59	749	2.27	7.877
2号住	0	13	193	0	6.736

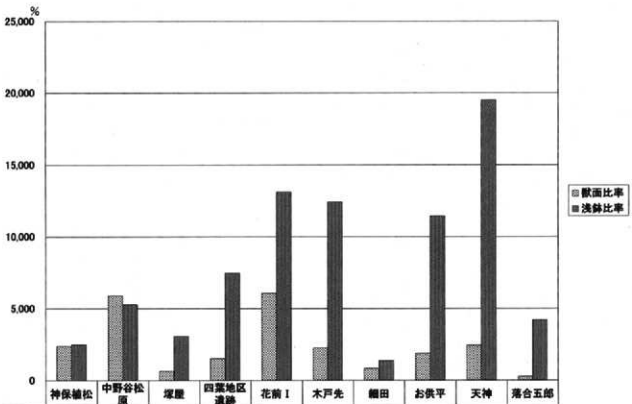
3号住	0	7	101	0	6.931
4号住	0	0	15	0	0
5号住	0	0	8	0	0
6号住	0	1	13	0	7.692
7号住	0	0	17	0	0
8号住	0	0	12	0	0
9号住	0	0	8	0	0
10・11号住	1	8	52	1.923	15.385
合　計	19	93	1245	1.526	7.47

千葉　遺跡名　花前Ⅰ					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
7	1	0	46	2.174	0
21	1	1	37	2.703	2.703
遺構外	4	12	58	6.897	20.69
合　計	6	13	99	6.061	13.131

神奈川　遺跡名　細田					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
5号住	1	1	198	0.505	0.505
7号住	1	0	20	5	0
9号住	2	5	205	0.976	2.439
10号住	0	0	74	0	0
遺構外	5	8	654	0.765	1.223
合　計	8	13	953	0.839	1.364

山梨　遺跡名　天神					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
3号住	0	1	6	0	16.667
4号住	0	4	11	0	36.364
11住	0	0	3	0	0
12住	0	0	5	0	0
18住	0	0	6	0	0
19住	0	1	8	0	12.5
21住	0	2	4	0	50
23住	0	1	5	0	20
25住	2	4	21	9.524	19.048
40住	0	3	13	0	23.077
合　計	2	16	82	2.439	19.512

岐阜　遺跡名　落合五郎					
	獣面	浅鉢	土器合計	獣面比率	浅鉢比率
遺構外	2	15	327	0.612	4.587
2部遺構外	0	16	411	0	3.893
合　計	2	31	738	0.271	4.201



	神保植松	中野谷松原	塚屋	四葉地区遺跡	花前Ⅰ	木戸先	細田	お供平	天神	落合五郎
獣面比率	2388	5905	648	1526	6061	2260	839	1869	2439	271
浅鉢比率	2491	5276	3079	7470	13131	12429	1364	11449	19512	4201

図3　獣面土器と浅鉢の比較

4．まとめ

浅鉢が儀礼の場面で威信財として使用されたのにたいして、イノシシという具象的な装飾を持つ土器は、日常の非儀礼的な場面で使用された土器としてとらえた。では、イノシシ顔の持つ意味はどこにあるのだろうか。手がかりは、先に挙げた変遷と分布、各遺跡からの数量比である。

獣面土器の変遷については、1類から6類に獣面が変遷したかのようにみえる。実際、獣面が貼付されている土器をみると大まかには、1類から5類へと移行するのであるが、6類の粘土瘤の貼付は、諸磯ｂの中段階にみられる手法である。ある完成された形のものが変遷する場合、順を追って変遷するようにみえるが、イノシシ顔の突起の場合必ずしもそうではない。口縁部を4単位に区画し、諸磯ｂ2段階に1類としたイノシシ顔の突起が付けられる。それが6類に順を追って変遷せずに、諸磯ｂ4段階には、6類のような粘土瘤が付けられた土器が他のイノシシ顔と共に出現する。

獣面土器の分布域は、諸磯ｂ式土器圏を中心として、その外側に広がりが現在のところ浅鉢の分布域より内側である。この分布域の中で獣面土器の出土数をみると、群馬西部の神保植松遺跡、中野谷松原遺跡では、獣面土器の出土数が他地域の遺跡より圧倒的に多い。また、浅鉢との比率をみてもほぼ同じ比率なのは、この二遺跡である。このことは、獣面土器の発生、使われ方に何らかの形でこの地域が関与していると考えてよいのではないだろうか。獣面土器は、広範囲に広がることから、浅鉢と同じように交易や流通過程において何らかの役割を持った土器ではないかと考える。しかし、獣面土器は、他の深鉢と同じように覆土中に廃棄される例が多いことなどから、浅鉢ほど儀礼につかわれる威信財としての位置づけを持たない土器である。

以上のことから、獣面土器は群馬西部地域に多くみられる土器で、浅鉢ほど儀礼に使われる土器ではないが、広範囲に分布する土器であるといえる。

大工原（2002）氏は、縄文前期の黒曜石の流通システムを3段階に分け、諸磯ｂ式期を一つの変換点として捉え、交換のシステムを次のように述べている。

「黒曜石流通の第2段階では、原産地地域に拠点集落が形成され、表層採掘を行っていたと推定される。流通量が大幅に増加したことにより、連鎖交換を超えたレベルで黒曜石が流通したと考えられる。群馬の場合、西毛地域に遠隔地拠点集落と呼ぶ交易を司る集落が成立する。ここに居住していた交易集団は、群馬県地域の一般的な集落を対象として初源的な交易活動を行っていたと推定される。この段階の交易は、拠点集落と行った場所へ出向く形で行われていたと推定される。」

黒曜石流通システムの第2段階に、群馬西部では1類のイノシシ土器は成立する。諸磯ｂ式土器古段階である。そして、黒曜石流通システムの2段階は、諸磯ｂ式土器の古段階から中段階に存在した。それは、1類から3類とした獣面土器の存在する期間にほぼ相当する。黒曜石の交易に関連して、イノシシ土器を持った群馬の集団が、長野の黒曜石を持った拠点集落に出かけ交易を行った結果、イノシシ土器が広がったとは考えられないだろうか。

イノシシ土器の出土量をみると、群馬西部の各遺跡に多くみられ、黒曜石原産地周辺では少ない。猪の分布は、森林地帯に多く、積雪30cm以上で積雪日数70を超えるところでは、生息していないという報告がある。縄文時代前期に長野県の黒曜石産地周辺の高山や積雪の多い地域では、猪の生息数が少なく、群馬西部に猪が多くみられる状況であったのではないだろうか。そのため、黒曜石交易に際して、中野谷松原遺跡周辺の集団であることを証明するためにイノシシ顔の突起が付けられた土器が使われたのではないだろうか。

存在証明（identity）としての威信財（prestige goods）としてイノシシ土器が作られ、交易に使用されのではな

図4　糸井宮前遺跡浅鉢出土図

写真1　糸井宮前遺跡浅鉢出土状況
浅鉢と石皿が供伴している。

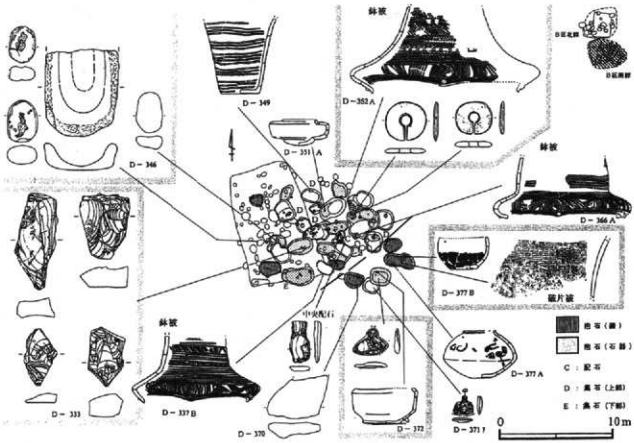


図5　中野谷松原遺跡土壙墓
土壙墓には様々なものが副葬されているが、イノシシ顔は副葬されていない。

いだろうか。

群馬ルートで黒曜石の直接交易が行われた時期に、イノシシ土器は大量に作られ流通した。その後、黒曜石の流通第3段階になると、黒曜石産地周辺の拠点集落で管理運営が行われ、黒曜石流通のルート変化と共に、交易の手段として存在証明する必要性が薄れてきた。存在証明のためのノシシ土器が使われなくなってきたと考える。この時期、黒曜石が山梨ルートに移り、山梨県地域を本拠地とする交易集団が、山梨集団の存在証明としての威信財として天神型石匙が登場した。こうして、イノシシ土器は威信財としての役割を終えたのかも知れない。

黒曜石取得のために、地域集団（中野谷松原遺跡の集団）を証明するために獣面土器という道具を使ったのではないかと推測するのである。

浅鉢が儀礼のための威信財であるなら、獣面土器は、集団証明のための prestige goods（威信財）といえるだろう。その後、諸磯b式土器の終焉に向かって、6類のような獣面が深鉢に付けられるのは、イノシシ顔の突起が付いた土器が特別な「モノ」を入れる容器であったからである。特別な「モノ」が現在のところ何かはわからないが、「モノ」を入れる場合には、イノシシ顔の突起ではなくてはならないという既成概念が作られ、それが諸磯b式土器集団に受け継がれていったからではないだろうか。

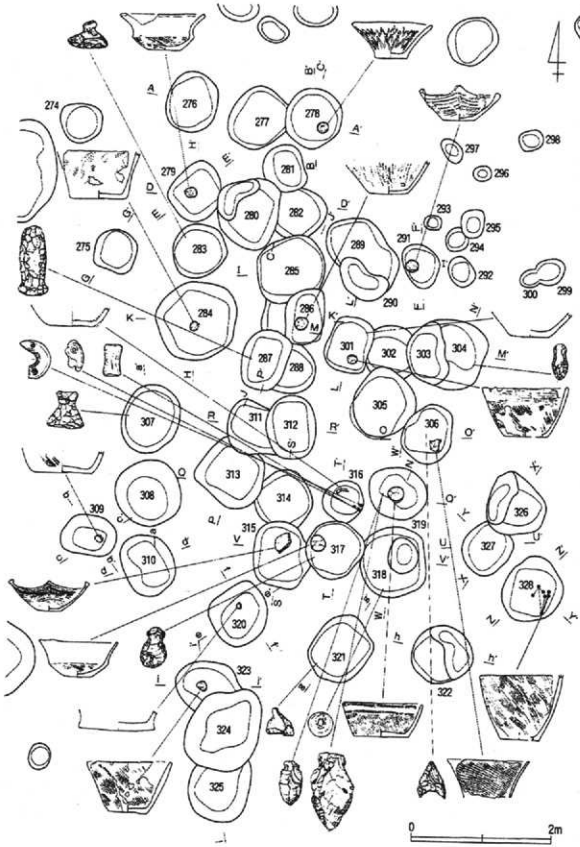


図6　木戸先遺跡浅鉢出土図
威信財として土壙に埋納されている浅鉢の例。

図版引用文献

伊勢塚・東光寺裏上越新幹線埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　埼玉県教育委員会　1980　埼玉県遺跡発掘調査報告書26集

細田遺跡　神奈川県教育委員会　1981　神奈川県埋蔵文化財調査報告23

お供平遺跡Ⅰ　長野県信州新町教育委員会　1982　信州新町町民運動広場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

塚屋・北塚屋　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書25集　一般国道140号埋蔵文化財発掘調査報告塚屋・北塚屋

稲荷丸北遺跡　ニューサイエンス社　1983　稲荷丸北遺跡調査団編

常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　千葉県文化財センター　1984

糸井宮前遺跡Ⅱ　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986

落合五郎遺跡発掘調査報告書　中津川市教育委員会　1988

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅸ　千葉県文化財センター　1989　千葉県文化財センター調査報告164集

お供平遺跡Ⅱ　長野県信州新町教育委員会　1989　長野県屋峡高等学校グランド造成に伴う埋蔵文化財調査報告書

愛宕山遺跡・初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡　群馬県勢多郡富士見村教育委員会　1994　平成２年度営団場整備事業富士見地区に伴う埋蔵文化財調査報告書

木戸先遺跡　印旛郡市文化財センター　1994　印旛郡市文化財センター発掘調査報告書79集

天神遺跡　山梨県教育委員会　1994　山梨県埋蔵文化財センター調査報告97集

神保植松遺跡　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997　関越自動車道（上越線）埋蔵文化財発掘調査報告書41

西葛地区遺跡　板橋区西葛遺跡調査会・東京都建設局　1997　平成９年度縄文時代編

川白田遺跡　川白田遺跡調査会　1998

中野谷松原　中野谷松原遺跡　安中市教育委員会　1998

七社神社前遺跡Ⅱ　東京都北区教育委員会　1998　北区埋蔵文化財調査報告第24集

中山間地総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ、８～Ⅱ、12年度　長野県木曽地方事務所、大桑村教育委員会、木曽広域連合　2002

参考文献

関根慎二　群馬県における諸磯ｂ式土器の細分　第12回縄文セミナー「前期後半の再検討」記録集　1989　縄文セミナーの会

林　克彦　顔と器―縄文時代晩期の『顔つき土器』ついて―　青山史学18　2000　青山学院大学史学研究

関根慎二　諸磯式原形付き土器考　赤城村歴史資料館紀要第３集　2001　赤城村教育委員会

大工原　豊　縄文人の交流　展示レポート６　縄文土器が語る群馬の風土　2002　群馬県埋蔵文化財調査事業団

大工原　豊　黒曜石の流通をめぐる社会―前期の関東・中部地域―縄文社会論（上）　2002　同成社

大工原　豊　ストーンロード―縄文時代の黒曜石交易―　2003　安中市ふるさと学習館

小杉　康　縄文のマツリと暮らし　岩波書店　2003　先史日本を復元する３

小野正文　物語性文様について　土器から探る縄文社会　2002　山梨県考古学協会

新津　健　イノシシのまつり―縄文・弥生そして今―　新世紀の考古学　2003　大塚初重先生喜寿記念論文集

新津　健　上の平遺跡出土の動物装飾付き土器とその周辺　研究紀要19　2003　山梨県立博物館・山梨県埋蔵文化財センター

※図２の地図はカンミール３Ｄ（杉本智彦氏制作ソフト）使用。

嬬恋村今井東平遺跡の紹介

―― 1区縄文時代中期土器資料を主に ――

松島榮治・福田貫之・山口逸弘

はじめに
1．遺跡の概要
2．発掘調査の概要
3．1区1号住居跡概要
4．出土土器
5．所見
5－1．出土土器概観
5－2．「道訓前類型」について
おわりに

―― 論文要旨 ――

本稿は、群馬県吾妻郡嬬恋村今井東平遺跡出土資料の紹介である。今井東平遺跡は、縄文時代中期～後期の大遺跡であり、5年間にわたる発掘調査資料は膨大なものになる。未発表資料ではあるが、数回に分け代表的な資料を紹介することにより、遺跡の意義を深めたい。

今回は、1区調査で得られた住居跡と包含層出土土器を中心に紹介する。出土土器で特筆される例としては、包含層出土土器より抽出した「火焔系土器」である。近年、群馬県勢多郡北橘村道訓前遺跡等でもその存在が注目されている一群である。本稿では、今井東平遺跡における「火焔系土器」を分析し、他の類例と比較を果たした。同時に「火焔系土器」とされる一群に東北地方大木8a式の特徴を見いだし、従来の「火焔型土器」との差を明確にするため、「道訓前類型」と仮称する提案をした。

キーワード
対象時代　縄文時代
対象地域　群馬県
研究対象　中期土器群

はじめに

群馬県における縄文時代中期資料の増加は、近年目を見張るものがある。かつては三原田遺跡や房谷戸遺跡出土資料が中核となり、その土器様相が提示され、群馬県の縄文時代中期が概観されてきたが、新資料が市町村教育委員会等の報告書によって提示され、従来の中期様相をさらに吟味した考えが提出されている。しかしながら、これらの中期資料が群馬県全域を網羅した状態とは、未だ言い難い状況である。今回紹介する今井東平遺跡が所在する嬬恋村も多くの縄文時代資料が包蔵されており、その多くが未発掘であり、故に未発表資料である。さらに、下流の長野原町では、近年八ッ場ダム関連の発掘調査が県事業団によって行われており、当地域の縄文時代資料の充実は将来的に果たされる状況が予想される。その際に嬬恋村等長野県境により近い地域の資料を加味することにより、詳細な縄文時代の様相が把握できるものと期待されている。

2001年秋、筆者らは嬬恋村の縄文時代資料を見学に至り、その際、今井東平遺跡出土資料に接するとともに、その重要性を認識し資料化と問題提起のための分析の必要性を感じた。今井東平遺跡の出土資料は、縄文時代中期前半から後期中葉に至る良好な資料であり、実測図の提示が急務と位置付けられた。幸い、嬬恋郷土資料館館長である松島榮治氏のご厚意を得て、今井東平遺跡資料の実測化と発表をお許しいただき、共同執筆のご快諾までいただくことができた。今回は1区資料に限られるが、その他の調査区の出土資料も実測図の整備に従い、順次公表していく所存である。尚、執筆分担は、1・2が松島、3・4は山口と福田、5－1が山口、5－2が福田、はじめにとおわりにを山口が担当した。

1．遺跡の概要

嬬恋村は群馬県の最西端にあたり、県境を鳥居峠や地蔵峠を経て長野県東部と接する。浅間山北麓の火山性地形特有の雄大な斜面地形上に営まれた村である。著名な遺跡としては、時代は異なるが、天明3年に浅間山噴火に伴う土石なだれに埋まった鎌原遺跡が知られる[1]。

遺跡は吾妻郡嬬恋村大字今井字峯地内に所在する。この地は吾妻川の左岸、今井川とその支流温井川に挟まれた平坦地で、背後（北側）に山並を背負い、南側に吾妻川の流れを眼下にみる。その範囲は、東西（今井川に沿った長さ）約350m、南北（温井川に沿った長さ）約150m

図1　遺跡位置図(1)（国土地理院20万分の1「長野」使用）

の三角形状の平坦地で、その面積はおよそ2.65ａほどである。その標高は西端で788mを測る。全体的に西側に高く東方に低い地形で約４°前後の緩い傾斜がみられる。この傾斜は今井川に沿ったもので、おそらくこの平坦地は今井川によって形成された扇状地状のものと思考される。なお、遺跡地の中央部分と今井川との比高差は約10m、温井川とは５～６mを測る。

このように立地する遺跡地は、今井地区内では一つの地域的まとまりをもつと共に、比較的大きな広がりをもつ所とされ、地元では二の地を、今井集落の東方にあることから「東平」と呼び優良農地として利用してきた。

こうした地は、古くから土器・石器の散布地として知られ、嬬恋村では、保護条例によって、昭和51年「今井地区遺跡群」として、史跡に指定した。

２．発掘調査の概要

この今井地区遺跡群こと今井東平遺跡に対する発掘調査は、平成５年道路改良事業に係わる事前調査として実施され、以来「農村総合整備事業」の事前調査、または嬬恋村単独の学術調査として継続され、平成12年の調査に至るまで８次にわたる発掘調査が実施された。

その主たる成果はくにみる通りであるが、本県における縄文時代の遺跡の中で、稀にみる重要遺跡であることが判明しつつある[7]。

第１次発掘調査（平成５年度）

主な成果　・配石遺構（墓・祭祀場）の検出

・黒色磨研注口土器一対の発見

第２次発掘調査（平成７年度）

主な成果　・縄文中期の再葬墓の検出

第３次発掘調査（平成８年度）

主な成果　・八角形の大型敷石住居跡の検出

第４次発掘調査（平成９年度）

主な成果　・保存状態の良い竪穴住居跡の検出

・平安時代の大型住居跡の検出

第５次発掘調査（平成10年度）

主な成果　・縄文中期の「捨て場」の検出

第６次発掘調査（平成11年度）

主な成果　・重なりあう縄文中期竪穴住居跡の検出

第７・８次発掘調査（平成12年度）

主な成果　・六角形の敷石住居跡の検出

本稿で紹介する資料に関する発掘調査は、「農村基盤整備事業」の農道６号線の造成に伴って、平成10年度第５次発掘調査として実施されたものである。この地は今井東平遺跡の北端部分に位置し、遺跡の所在する小高い丘の北斜面と、遺跡の北方を限る山並の山裾斜面の合わさる所で、西から東方にむかって緩く傾斜する窪地で、畑地帯から温井川への自然排水路的な性格をもった場所であった。したがって、当初遺構や遺物の存在する可能性は少ないものと予想された場所であった。

調査は、旧道路に沿った東西に延びる窪地を、長さ約

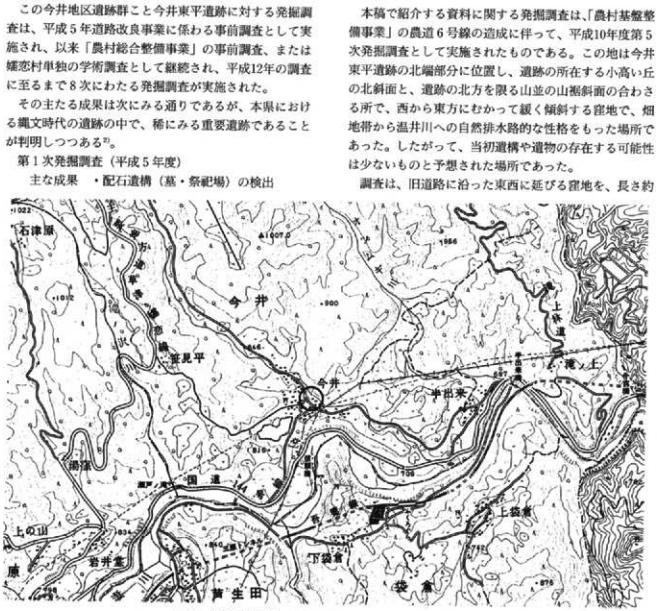


図２　遺跡位置図(2)（国土地理院２万５千分の１「嬬恋村」使用）

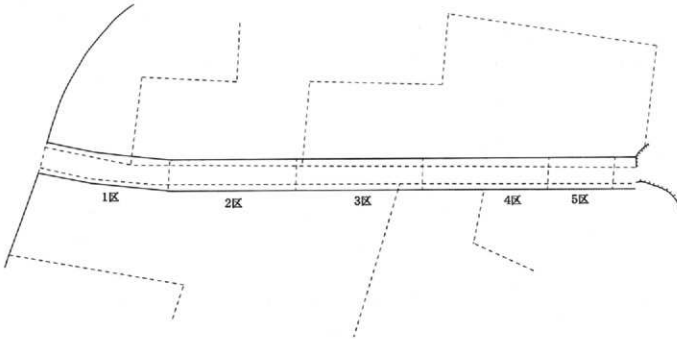


図3　調査区設定図（1：60）

90m、幅は新しく道路幅となる5mを対象と実施したが、便宜上これを4区画に分け、西方より1・2・3・4・5区と命名して行った。各区の範囲は、5区を除く4区画は5×20m、5区は5×10mとし、西側の1区より漸次進められた。

調査の結果、1・2区において縄文時代中期後半の竪穴住居跡5軒が確認された。この内、3軒は調査範囲の南側断面に確認されたもので、その規模・形状については明らかにすることはできなかった。しかしながら2軒の住居跡について、その全貌を知ることができた。その一つは径4.8m前後、他は4.3m前後の円形竪穴住居であった。これらの住居跡はいずれも低い丘の北斜面の住居構築可能の限界の位置に住居の北側部分を貼床の手法を用いるなどしてかなり無理をして、東西方向に並べて構築し、ほぼ同時期に使用されていたものと考えられた。

3区においては、「捨て場」とされる予期されなかった遺構に遭遇した。捨て場遺構は、今井東平遺跡の遺構の集中する小高い丘の北側斜面に、斜面に沿って南端に浅く北方に向かって漸次厚く堆積し、その最も厚い部分は1.5mに達していた。その東方・西方の限界は、明瞭さを欠くが17mにも達していた。

捨て場遺構は、多量の土器片や石器、獣骨片と炭や灰などによってブロック状に構成されていたが、意図的に構築されたものでないだけに、その面的な広がりや遺構の上・下面の確かな把握には困難を極めた。このため、捨て場のほぼ中央部分を選び層位的な検討を試み、その結果、A層とB層の上下2層の確認に成功し、縄文土器の型式的な変遷や地域的な動向などについて、新たな資料を得るに至った。確認されたA・B両層の縄文土器は、なお検討の余地があるが、上層にあたるA層は、縄文時代中期後半を主体的に、部分的に後期初頭、下層であるB層は、その殆どが縄文時代中期前半の土器であり、両者ともに、長野県地域を中心とした土器と関東地方の土器との混在が明らかとなった。すなわち、A層の場合は長野県地域の「焼町土器」、「曽利式」系統の土器を主体に、一部関東地方の加曽利E式土器の影響が見られた。これに対し、B層の場合は、関東地方に隆盛した阿玉台式や勝坂式などと長野県地域の絡沢式などの影響が見られた。

さらに、この捨て場遺構の調査において、注目されるものに、平成5年第1次調査の際に発見された縄文時代後期の「黒色磨研注口土器」に類似した破片の発見があり、今井東平遺跡では黒色磨研の土器が稀有のものではないことが明らかになった。また、B層の低位から、縄文時代中期前半期としては珍しいほぼ完全に復元された「赤色塗彩浅鉢形土器」の発見があった。

なお、以上のほか、2区で発見された1号住居跡の北西に接して埋甕の発見があり、その中に細かい骨片が認められた。甕を使った再葬墓の可能性が高い。

今井東平遺跡の縄文時代資料は、極めて良好で量も多い。残念ながら、正式報告には至っていないが、将来的には遺跡の全容を明らかにしたい。今回は第5次調査によって明らかとなった、1区の中期住居跡資料と包含層出土土器をここに紹介するが、今後、可能な限りその他の調査区で検出された、代表的な資料を紹介していきた

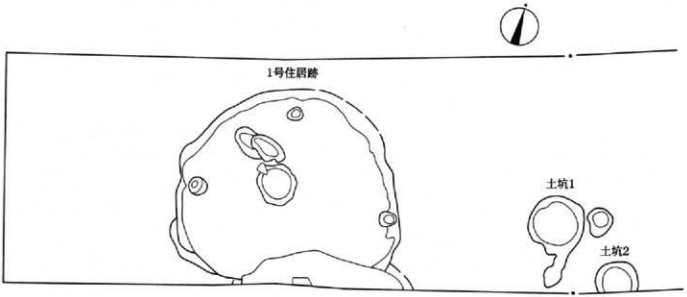


図4　1区遺構配置図

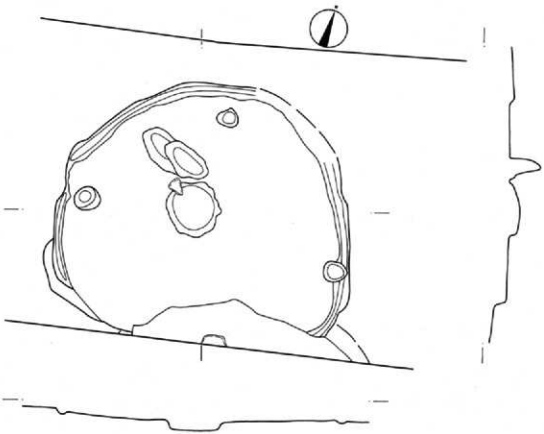


図5　1区1号住居跡（1：60）

い。

3．1区　1号住居跡概要

1区は発掘調査区の西側にあたる。東に2区が接しており、東方に埋没谷が連続する。その地を東から西に調査した状況であり、前述のように1区に2軒、2区に1軒の中期住居跡を検出している。

1区1号住居跡は、調査区西端に占地する[3]。南側に中期住居跡1軒が重複するが、時期は新しい。平面形は円形で、径約4.5m程の中形の住居跡である。深さは約30cmで、やや遺存度は悪い。中央に地床炉を持つが、偏平石が傍らに据えられていた。柱穴は床面上のピット3基を確認した。規則的な配列ではなかったが、規模と深さから柱穴として認定した。床面は平坦面を築き、北側にかけての貼り床が見られた。硬化面は顕著ではないものの、中央部の炉址周辺には焼土や炭化物が散布し、やや硬く締まる傾向が見られた。壁際には壁溝が見られたが、全体的には巡らず断続的であった。

出土遺物は、埋土上層から床面にかけて満遍なく出土した。ただ床面に密着する遺物は極少数で、住居跡に直接的に帰属する遺物は捉えられなかった。住居跡遺物総量として土器片・石器ともコンテナケース3箱程度である。完形土器は見られず、破片資料が主である。住居跡の時期としては、出土土器が阿玉台Ⅱ式から加曽利EⅢ式と幅広く、厳密には特定できない。ただ出土土器の量的な存在から加曽利EⅢ式にその時期を求めておきたい。

尚、1区包含層に関しては、前述の3区捨て場のような性格としては捉えられず、遺構外出土資料としての性格が強い。出土分布傾向も1号住周辺に集中は見られたが、おおよそ、1区全体より満遍なく散布した状態で出土している。層厚も大きくはなく、遺構検出面での出土と考えられる。その中で、図9－24は1号住東でまとまった出土状態を示しており、注目されたが、残念ながら遺構出土ではなく、包含層単独の出土と判断した。

4．出土土器

ここでは、今井東平遺跡第5次調査対象地1区出土土器について述べたい[4]。内訳は1号住出土のもと遺構外・包含層出土の土器に分けられるが、その殆どが中期の所産である。本稿に掲載した資料は、その中でも特徴的な文様を備えた土器を恣意的に抽出したものであり、土器様相全体像を表したものではない。さらに抽出した土器も詳細な分類や細分作業を加えていない。これは、他の調査区の出土土器の接合作業も未着手のためであり、本遺跡出土土器様相の詳細は、ある程度資料化が進んだ段階で提示しておきたい。故に今回の出土土器に関する記述は事実記載を主として、一応型式名を添えるが確定的ではない。その中で1個体であるが、極めて特徴的な「火焔形系土器」に関して、後述する所見として分析を果たす。

また、時間的な都合上、出土石器については資料化が進んでいない。稿を改めて紹介する予定である。

（1号住　出土土器　図6・7）

ここでは、1区1号住居跡出土土器を概観する。1号住は前述のように、1区西側で検出された住居跡であるが、その出土土器は上層から下層にかけて、時間幅のある出土状態であった。古段階のものは阿玉台Ⅱ式段階のものから新相を見せる加曽利EⅢ式の破片が認められた。このため住居跡の比定される時期は断定できず、そのため本稿では、出土した土器のうち各時期を網羅した状態で掲載せざるを得ない状況である。ただ、出土土器の量的な比率としては、雑駁ではあるが加曽利EⅡ式段階のものが多く、住居跡が帰属する時期としては、当段階の時間的な位置が求められよう。しかし、古段階を示す一群に関しても注意をしなければならないだろう。

1　深鉢波状口縁波頂部破片。波頂部を欠損するが渦巻状の突起である。垂下する隆帯には、刻みが施される。隆帯・口唇部の側線として2条の細沈線が沿う。この細沈線は波頂下空白部に弧線状に施される。胎土に雲母を含み暗褐色を呈す。阿玉台Ⅱ式後半に比定したい。

2　深鉢波状口縁波頂部付近。口唇部に刻みを施す。口唇部から派生した隆線が垂下し、区画文を構成する。区画内は平行沈線、結節沈線を波状に施文する。胎土は雲母、白色粒子を含み、褐色を呈す。阿玉台Ⅱ式。

3　深鉢体部。押圧を加えた隆線が垂下する。隆線施文後、爪形文を横位に施文する。雲母を含み、赤褐色を呈する。阿玉台Ⅱ式。

4　内湾する口縁部破片。口唇部内面は内切状で鋭い内稜を持つ。口縁部上位に幅狭の施文域を持ち斜位沈線を充填する。以下隆線による交互三角区画文構成が配される。区画内は沈線を側線としさらに短沈線を載瘤列状に加える。中位は三叉文状に沈線を施している。区画下端に瘤状小突起を付す。胎土に雲母を含み鈍褐色を呈す。類例に乏しい資料だが、図10－3に類似する資料と考える。

5　体部小区画文の一部と捉えた。3条の平行沈線で小区画し、区画内縁を爪形状刻み目が沿う。区画内部は三叉文が配される。勝坂2式と考えた。

6　深鉢体部下半。体部下半に緩やかな膨らみを持たせ、上半が外反気味に開く体部形態を呈す。体部下半に横位隆線を巡らし、上位の刻みを付す低隆線と共に体部中位の文様帯を画す。文様帯内は2条の垂下隆線で分割される。この2条隆線間には縦位刺突文が充填される特徴を有す。縦位隆線で区画文内は縦位沈線を側線

として、三叉文や逆「U」字文が充塡される。隆線の側線として一本描きの沈線が充てられるが体部下半の横位隆線下は平行沈線重複施文による3条の沈線が施される。この沈線以下、体部下半～底部は無文である。胎土は白色粒など粗く、鈍褐色を呈す。おそらく「焼町類型」体部下半と考えられ、勝坂2式平行の所産と考えた。

7　強く内湾する口縁部破片。おそらく波底部と思われるが平縁の可能性もあろう。波底部対応域に上下環状小突起を付し、上位に2帯、下位に2帯の幅狭の文様帯をそれぞれ横位隆線で画す。最上位の口唇部下文様帯は平行沈線を施し交互刺突文を加える。小突起上位には縦位連続刺突文を密接に充填する。小突起下位には平行沈線と交互刺突文が施され、最下位の文様帯には隆線による連弧状文が配され以下に縦位連続刺突文を充填する。この最下位の文様帯には、2条の弧状隆線が嵌入しており、おそらく波頂部直下の渦巻状あるいは円弧状の意匠の一部と見ることができよう。体部上位には横位RL縄文が施される。胎土に小礫を含むが比較的夾雑物は含まず色調も浅黄褐色を呈す。文様構成、色調からもきわめて異質な印象を受ける土器である。

8　深鉢体部下半。直線的に開く体部器形である。体部中位の横位隆線で上下に分帯される。上位は2条の隆線による「U」字状意匠が配される。下位文様帯は「U」字意匠下端より2条の隆線が分岐懸垂する構成を見せる。上下の文様帯とも縦位矢羽状の短沈線文が充填される。さて、体部中位の横位隆線だが、「U」字状意匠及び分岐懸垂文貼付後に施文されている。胎土に雲母・石英等を含む。色調は鈍褐色～鈍橙色を呈す。体部上半の欠損のため、上位の文様が判然としないが、加曽利EⅡ式と捉えられる。

9　波状口縁深鉢波頂部破片。縦位渦巻状意匠を左右に配した波頂部突起。おそらく波頂部にかけても渦巻状意匠が配されるものと捉えた。さらに、突起内面も縦位渦巻状意匠が配される。突起横位さらに内面から縦位に貫孔し、中空あるいは横状把手の効果を見せる。また、口唇部端部に深い沈線が施される。波頂部より派生する隆線により口縁部文様帯が画される。四分割あるいは八分割の区画構成であろう。区画内は、細沈線が充填されるが主に横位矢羽状沈線が埋められる。口頸部には2条の垂下沈線と弧状隆線と側線沈線が看取される。渦巻状の意匠と懸垂文が体部文様構成と捉えられよう。頸部隆線も深い沈線が施され、口唇部端部と同様の効果を見せる。加曽利EⅡ式併行と考えている。

10　波状口縁波頂部突起破片である。隆線貼付による内稜を付す。波頂部に配された隆線による「U」字状意匠以下、横位隆線と「Y」字状懸垂意匠が隆線によって付される。隆線には矢羽状刻み目が連続する。隆線脇の側線も無く、他は無文である。胎土に石英等白色粒が多量に含まれる。色調は暗褐色。加曽利EⅡ式併行と捉えた。

11　深鉢体部上位の破片。2条の隆帯による頸部区画線に渦巻状小突起を付し、2条の隆帯を垂下派生させた懸垂文構成。隆線体部際は沈線を側線とする。体部空白部には浅い斜位沈線による縦位矢羽状文を埋める。胎土は白色粒等細砂粒。暗褐色を呈す。

12　深鉢体部中位の破片。3条の垂下隆線による懸垂文構成。縦位矢羽状沈線を充填する。胎土は白色粒等細砂粒。暗褐色を呈す。加曽利EⅡ式。

13　深鉢体部下半の大破片。約1/3残存。垂下隆線と分岐隆線による懸垂文構成。隆線側線として3状の沈線が沿い、空白部は斜位短沈線を充填する。胎土に少量の雲母・白色粒を含む。色調は褐色。加曽利EⅡ式。

14　深鉢体部上半破片。頸部隆線が付される。おそらく渦巻状あるいは環状の意匠が配されるのであろう。側線として沈線が施される。体部はRL斜位施文する。胎土は粗く白色粒を含む。褐色を呈す。加曽利EⅡ式

15　深鉢体部片。3条の波状沈線が横位に施文される。地文は撚糸。加曽利EⅠ式か

16　深鉢口縁部片。隆線により区画文を構成する。区画内は隆線の側線である沈線がめぐり、斜位沈線を充塡する。胎土は雲母を強く含み、赤褐色を呈する。加曽利EⅡ式。

17　深鉢体部中位破片。低く施文された隆線が垂下する。おそらくこの隆線は逆「U」字状に体部文様を区画するものと思われる。隆線脇に浅い沈線が沿う。胎土は砂粒が目立ち、褐色を呈する。地文はRL縄文。加曽利EⅡ式。

18　深鉢体部中位破片。沈線が垂下し、沈線間は磨り消される。地文はLR縄文。胎土は白色粒子を含み、にぶい褐色を呈する。加曽利EⅢ式。

19　深鉢体部下位破片。垂下する浅い沈線により区画文が構成される。沈線間は磨り消される。地文はRL縄文。胎土は脆弱であり白色粒子を含む。にぶい黄褐色を呈する。加曽利EⅢ式。

20　深鉢体部中位片。地文として縦位のRL縄文を施文する。胎土は雲母、石英を強く含み、赤褐色を呈する。

21　深鉢頸部から体部上半破片。頸部の横位隆線を巡らし頸部区画文とする。体部は沈線により区画され、間に簾手状沈線を配す。区画内はLR縄文を施文する。胎土は白色粒子、雲母を含み褐色を呈する。加曽利EⅢ式。

22　深鉢頸部～体部上半破片。おそらく両耳壺。隆帯による環状区画と楕円状区画文。頸部は無文で外反する。

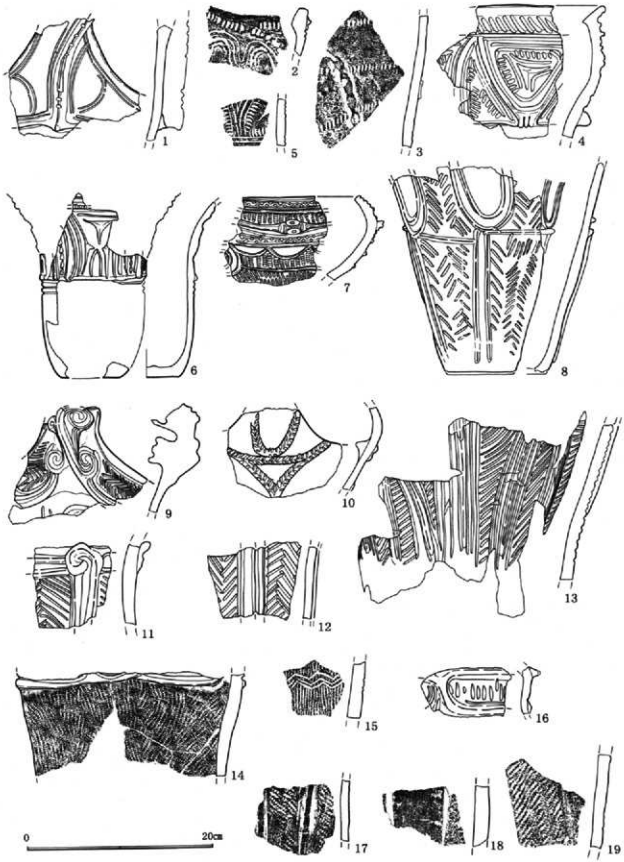


図6　1区1号住居跡出土土器(1)

図7　1区1号住居跡出土土器(2)

区画内は横位RL縄文を充塡施文する。隆帯脇は撫でを加える。胎土は粗く小礫も見られる。色調は暗褐色

23　浅鉢口縁部破片。あるいは緩やかな波状口縁形態か。無文で、比較的幅広の内折口縁を持つ。外面は丁寧な研磨。内面は撫でを施す。赤色塗彩は口唇部と体部の一部に観察できる。胎土は細かい白色粒等を含む。鈍い褐色を呈す。

24　土偶足部破片。右足表現か、やや大型で長軸8.0cm、短軸5.5cmを測る。一本描きの沈線文で、側面には三叉文、背面には交互刺突文が施される。沈線文は縦位施文を主とするが、指表現とは思われない。また、中央に3㎜程度の小孔が貫通する。胎土は比較的細かく白色粒を含む。色調は鈍い橙色。時期は判然としないが、沈線や三叉文の施文手法は4に近い。

（包含層出土土器　図8・9）

1　波状口縁深鉢口縁部破片。波頂部に3ケの刻みを付す。内面は刻みより派生する三叉文と円形刺突文が対称的に配される。口唇部には浅い刻み目が連続し、連続刺突文が沿う。口縁部文様として1本描き沈線とRL細縄文が施される。細砂粒・石英を含み、暗褐色を呈す。五領ヶ台2式。

2　波状口縁深鉢口縁部破片。双波状突起。口縁部形状に沿って、1本描きの太い沈線が施される。波頂部下意匠としては縦位楕円状意匠か。LR縄文が看取される。雲母・白色粒を含み、暗褐色を呈す。中期前半段階に比定したい。

3　深鉢突起部破片。突起部に刻みを施す。突起部から派生した隆線により、区画文を構成する。隆線の背は押捺されている。胎土には小礫が目立ち、褐色を呈す。阿玉台Ⅰb式。

4　深鉢体部。背が押捺された横位隆帯により区画される。区画内、区画下に爪形文を施文する。「U」字状隆帯間に3本の粘土紐を配す。胎土は白色粒子、輝石を含み暗褐色を呈す。阿玉台Ⅱ式。

5　深鉢口縁部から体部はやや円筒状であり、口縁部で外反する器形である。口縁部は無文であり、以下刻みを施した横位隆帯が巡る。横位隆帯に環状突起が貼付され、交点を三叉文状に刻印する。環状突起から発した隆線は斜位に垂下し、側線としてキャタピラ文や平行沈線、相対する三叉文を配する。胎土に雲母、白色粒子を含み赤褐色を呈する。勝坂2式。

6　深鉢体部下半破片。刻みを施した横位隆帯から2条の隆線が垂下し、交互三角区画文を構成する。区画内はペン先状の刺突文が充塡される。勝坂2式。

7　深鉢体部破片。隆帯間に連続する小三角印刻が施される。側線としてキャタピラ文と平行沈線が沿う。胎土に石英を含み、明褐色を呈する。勝坂2式。

8　深鉢体部破片。平行沈線による弧状意匠。沈線は重複施文であろう。沈線に幅広の連続爪形文が蛇行状に施される。胎土に白色粒を含み、黒褐色を呈す。勝坂2式。

9　深鉢口縁部片。口縁部に向かって緩やかに外反し、口唇部で内湾する器形で内稜を持つ。双環状の主突起下位にコイル状突起を配す。口縁部から派生した垂下する隆線がコイル状突起下位で小渦巻文となる。隆線に沿うように、1本引きの沈線が施文される。また、主突起間に眼鏡状の副突起が配される。胎土は白色粒子、輝石を含み暗褐色を呈する。「焼町類型」。11と同一個体。

10　深鉢口縁部片。口縁部で緩やかに外反し、口唇部で内湾する器形である。口唇部に眼鏡状突起、下位にコ

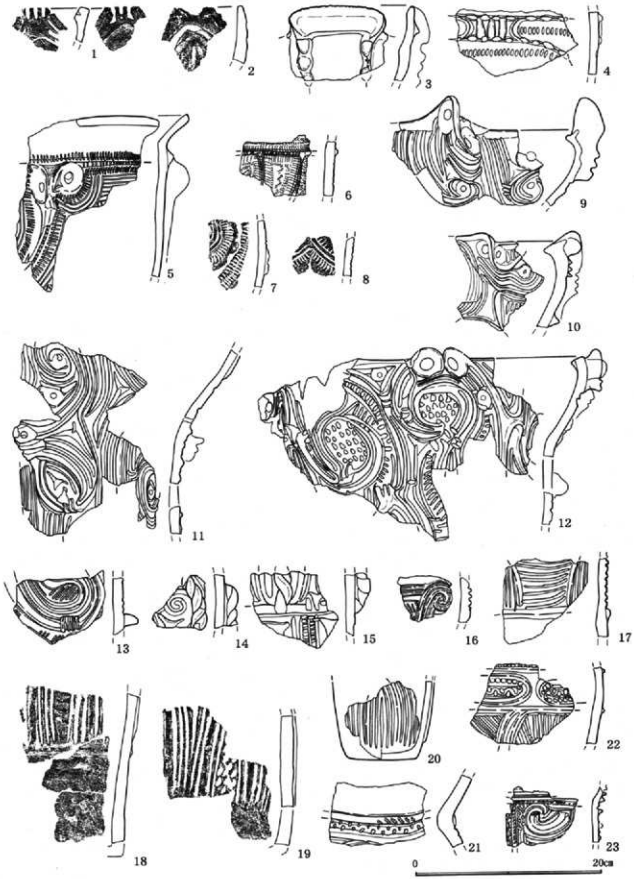


図8　1区包含層出土土器(1)